

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	信國 萌
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 281 号
学位授与の日付	2019 年 10 月 30 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	事象を項に取るドイツ語形容詞と事象を表す語句の統語論的実現と意味的特性—事象のアスペクト的解釈の対立を手掛かりに—

Name	Nobukuni, Moe
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 281
Date	October 30, 2019
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Syntactic realizations and semantic features of German adjectives having event-arguments: From the perspective of the opposition of aspectual interpretations of events

事象を項に取るドイツ語形容詞と

事象を表す語句の統語論的実現と意味的特性

—事象のアスペクト的解釈の対立を手掛かりに—

信國萌

目次

略語表

1. はじめに	1
1.1 研究目的.....	1
1.2 研究対象.....	3
1.3 研究課題.....	4
1.4 論文の構成.....	9
2. 事象とは何か	10
2.1 存在論的カテゴリー.....	10
2.1.1 個体と命題.....	10
2.1.1.1 個体としてのモノ.....	11
2.1.1.2 命題.....	11
2.1.2 個体としての事象.....	12
2.1.2.1 モノと出来事の意味的な並行性.....	12
2.1.2.2 出来事と行為.....	14
2.1.2.3 出来事と状態.....	14
2.1.3 存在論的カテゴリーのまとめ.....	15
2.2 事象の統語的な表現形式.....	16
2.2.1 存在論的カテゴリーと品詞の基本的な対応関係.....	16
2.2.2 命題の表現形式.....	17
2.2.3 モノの表現形式.....	19
2.2.4 事象の表現形式.....	19
2.2.5 モノと事象のどちらも表しうる表現形式.....	22
2.2.6 形容詞が事象を項に取る際の表現形式.....	23
2.3 モノと事象の言語的な共通性・相違性.....	24
2.3.1 Ehrich (1991) による全体的指示作用と累積的指示作用の対立.....	25
2.3.2 Leiss (1992, 2000) による分割可能性と累加性の組み合わせ.....	26
2.3.3 有界性と語彙的アスペクト.....	30
2.3.4 存在論的な出来事・状態の区別と語彙的アスペクト.....	31
2.4 本章のまとめ.....	33
3. 形容詞と、形容詞が項に取る事象の関係	34
3.1 付加語的、述語的な形容詞と事象.....	34

3.1.1	Vendler (1968) による英語形容詞の分類.....	34
3.1.2	指示対象限定と指示内容限定.....	43
3.1.3	「モノ」を表示する名詞に含まれる「事象」.....	45
3.1.4	モノと事象の並行性.....	47
3.1.5	状態の特殊性.....	49
3.2	副詞的な形容詞と事象.....	52
3.2.1	Davidson (1967, 1969) による副詞規定と出来事の関係.....	53
3.2.2	様態を表すドイツ語形容詞の副詞的用法.....	54
3.3	本章のまとめ.....	58
4.	事例調査と分析.....	61
4.1	調査の概要.....	61
4.1.1	調査対象.....	63
4.1.2	調査内容.....	66
4.1.3	調査方法.....	67
4.2	調査結果 1: 形容詞 I (schnell, langsam).....	69
4.2.1	統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布).....	69
4.2.2	意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか).....	71
4.2.3	意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか).....	73
4.2.4	形容詞 I の出現傾向のまとめ.....	78
4.3	調査結果 2: 形容詞 II (leicht, schwer).....	79
4.3.1	統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布).....	79
4.3.2	意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか).....	81
4.3.3	意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか).....	84
4.3.4	形容詞 II の出現傾向のまとめ.....	90
4.4	形容詞 I と形容詞 II の比較.....	90
4.4.1	形容詞が副詞的に用いられる際のモダリティ.....	90
4.4.2	形容詞が副詞的に用いられる際の態.....	95
4.4.3	形容詞と事象のアスペクト、形容詞が出現する環境の関係.....	97
4.5	調査結果 3: 形容詞 III (vorsichtig, leichtsinnig).....	99
4.5.1	統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布).....	99
4.5.2	意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか).....	101
4.5.3	意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか).....	107
4.5.4	形容詞 III の出現傾向のまとめ.....	111
4.6	形容詞 I, II と形容詞 III の比較.....	112
4.6.1	述語対象語として現れるモノの種類.....	112

4.6.2	形容詞と事象のアスペクト、形容詞が出現する環境の関係	114
4.7	調査結果 4: 形容詞 IV (<i>überdrüssig</i> , <i>müde</i> , <i>satt</i>)	117
4.7.1	統語的な出現環境 1 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布)	117
4.7.2	統語的な出現環境 2 (述語動詞と相関詞)	122
4.7.3	意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか)	126
4.7.4	意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか)	131
4.7.5	形容詞 IV の出現傾向のまとめ	137
4.7.6	<i>müde</i> と <i>überdrüssig</i> , <i>satt</i> の比較	139
4.8	形容詞 I, II, III と形容詞 IV の比較	141
5.	考察	143
5.1	事象を項に取る形容詞が表す性質	143
5.1.1	本質的に事象の性質を表す形容詞	143
5.1.2	本質的にはモノ (人) の性質を表す形容詞	145
5.2	事象を項に取る形容詞の統語的分布	148
5.3	形容詞と事象の参与者	150
5.4	形容詞と事象のアスペクト的解釈	154
6.	おわりに	160
	参考文献	162
	謝辞	167

略語表

1	first person	1 人称
2	second person	2 人称
3	third person	3 人称
ACC	accusative	对格
DAT	dative	与格
GEN	genitive	属格
INF	infinitive	不定詞
NOM	nominative	主格
PL	plural	複数
PRF	prefix	前綴り
SG	singular	单数
SUBJ.II	subjunctive II	接続法第 2 式

1 はじめに

1.1 研究目的

ドイツ語の形容詞は、典型的には付加語的に、そして(あるいは)述語的に用いられ、名詞が表示する対象の性質を表すものとされている (Weinrich 1993: 477, Helbig/Buscha 2001: 280, Trost 2006: 4 など)。形容詞が性質を表す対象、すなわち名詞が表示する対象としてはまず、人や物が考えられる。例えば (1) の形容詞 *rot* は、名詞 *Auto* が表示する「車」という物の性質が「赤い」ことを表している。(1a) は形容詞が付加語的に、(1b) は述語的に用いられている例である。

- (1) a. *ein rotes Auto*
a-NOM red-NOM car-NOM
赤い車
- b. *Das Auto ist rot.*
the-NOM car-NOM is-3SG red
この車は赤い。

しかし、形容詞は人や物というモノ的な対象(以下、モノ)だけではなく、事象や命題というコト的な対象(以下、コト)の性質を表すこともありうる。例えば (2) の形容詞 *schnell* は、名詞 *Fahrt* が表示する「走行」という事象の性質が「速い」ことを表している。また (3) の形容詞 *bedauerlich* は、名詞 *Vorfall* が表示する「事件」という命題の性質が「遺憾である」ことを表している。

- (2) a. *eine schnelle Fahrt*
a-NOM fast-NOM drive-NOM
速い走行
- b. *Die Fahrt ist schnell.*
the-NOM drive-NOM is-3SG fast
この走行は速い。
- (3) a. *ein bedauerlicher Vorfall*
a-NOM regrettable-NOM incident-NOM
遺憾な事件
- b. *Der Vorfall ist bedauerlich.*
the-NOM incident-NOM is-3SG regrettable
この事件は遺憾である。

(2) の *Fahrt* (走行) のような事象と (3) の *Vorfall* (事件) のような命題は、日常的にはどちらもモノではなくコトであると捉えられる。しかし、事象と命題は存在論的な位置づけを大きく異にする。「事件」は例えば「この車の走行が事故を起こした」などの内容を持ち、その真偽を問うことができるが、「走行」そのものに真偽を問うことはできない。この点で、事象は命題よりむしろ、(1) の *Auto* (車) のようなモノに近い存在だと位置づけられる。モノと事象はどちらも、命題の中で言及される対象の一つなのである。

モノや事象と命題の意味的な違いは、それぞれを表示する名詞を、「～ということ」を意味する *dass* を用いた副文で置き換えられるかどうかという統語的な違いにも反映される。モノである *Auto* (車) や事象である *Fahrt* (走行) は、(4) や (5) に見られるように、*dass* 文でその内容を書き表すことができない。一方で、命題である *Vorfall* (事件) は、(6) に見られるように、*dass* 文でその内容を説明できる。

(4) *Das Auto ist rot.* (=1b) → **Es ist rot, dass ...*
 it-NOM is-3SG red that

この車は赤い。 → *...ということは赤い

(5) *Die Fahrt ist schnell.* (=2b) → **Es ist schnell, dass ...*
 it-NOM is-3SG fast that

この走行は速い。 → *...ということは速い

(6) *Der Vorfall ist bedauerlich.* (=3b) → *Es ist bedauerlich, dass ...*
 it-NOM is-3SG regrettable that

この事件は遺憾である。 → ...ということは遺憾である

このように、形容詞は人や物といったモノだけではなく、事象や命題といったコトの性質も表しうる。ただしコトの中でも、命題はモノとは存在論的な位置づけが大きく異なり、その違いは統語的な違いにも反映される。一方、事象は命題の中で言及される対象であり、その意味ではむしろモノに近い存在である。しかし従来の形容詞研究では、形容詞がモノの性質を表す場合が中心的に観察されていることが多く、形容詞が事象の性質を表す場合はあまり考慮されていない。¹ そこで本稿では、形容詞が事象の性質を表す場合に着目する。形容詞がモノの性質を表す場合と、モノと存在論的な共通点を持つ事象の性質を表す場合で、形容詞の現れる統語的、意味的環境がどのように共通・相違するのかを明らかにすることが、研究の目的である。

¹ Eisenberg (1976) のように、副文や *zu* 不定詞句を主語とする述語形容詞を研究対象とするものもあるが、そこでまず注目されるのは副文や *zu* 不定詞句が表示するコト全般であり、命題と事象の区別である。

1.2 研究対象

事象の性質を表す形容詞を観察するにあたって、研究対象としてまず考えられるのは、(7) の *schnell* や (8) の *leicht* のように、述語文で事象を表示する語句を主語に取り、その事象の性質を表す形容詞である。(7) の形容詞 *schnell* は主語の *die Fahrt* が表示する「走行」という事象の性質が「速い」ことを、(8) の形容詞 *leicht* は主語の *zu* 不定詞句 *das Problem zu lösen* が表示する「この問題を解決する(こと)」という事象の性質が「容易い」ことを表している。

(7) Die Fahrt ist *schnell*. (=2b)
the-NOM drive-NOM is-3SG fast
この走行は速い。

(8) Das Problem zu lösen ist *leicht*.
the-ACC problem-ACC to solve-INF is-3SG easy
この問題を解決するのは容易い。

ただし、このようにして事象の性質を表す形容詞が、必ずしも事象を表示する語句を主語に取るとは限らない。例えば、(7), (8) で事象を表示する語句を主語に取っていた形容詞 *schnell*, *leicht* は、(9), (10) のようにモノを表示する語句を主語に取ることもある。(9), (10) では、形容詞が少なくとも統語的には *das Auto* (車) や *das Problem* (問題) というモノの性質を表しているように見える。

(9) Das Auto ist *schnell*.
the-NOM car-NOM is-3SG fast
この車は速い。

(10) Das Problem ist *leicht*.
the-NOM problem-NOM is-3SG easy
この問題は容易い。

さらに、形容詞述語文において、事象を表示する語句は主語以外の文成分として現れることもある。例えば、(11), (12) では主語には *die Frau* という人(モノ) が現れ、事象は前置詞句 *beim Kaufen* や属格名詞句 *des Wartens* という形で、主語以外の文成分として現れている。そして、形容詞 *vorsichtig*, *überdrüssig* は、「その女性」が「購入」や「待機」という事象に関して「慎重である」「うんざりしている」ということを表している。なお、一般的に *vorsichtig* は1価の、*überdrüssig* は2価の形容詞とされており、(11) の *beim Kaufen* は添加成分あるいは任意的補足成分、(12) の *des Wartens* は必須的補足成分であ

る。

- (11) Die Frau ist *vorsichtig* beim Kaufen.
the-NOM woman-NOM is-3SG careful during.the-DAT purchase-DAT
その女性は購入の際に慎重である。
- (12) Die Frau ist des Wartens *überdrüssig*.
the-NOM woman-NOM is-3SG the-GEN wait-GEN weary
その女性は待機にうんざりしている。

(11), (12) では、形容詞は事象の性質を表すというよりは、事象に関連して「女性」という人（モノ）の性質を表しているように見える。意味的には事象に関係しつつも、統語的にはモノの性質を表しているように見えるという点で、(11), (12) の形容詞 *vorsichtig*, *überdrüssig* は、(9), (10) の形容詞 *schnell*, *leicht* と共通している。(9), (10) を (11), (12) になぞらえて書き換えると、(13), (14) のようになる。これらの文では、形容詞述語文の主語に現れるモノが、その他の文成分に現れる事象に参与者として関わるといふ点も、共通している。

- (13) Das Auto ist *schnell* bei der Fahrt.
the-NOM car-NOM is-3SG fast during the-DAT drive-DAT
この車は走行の際に速い。
- (14) Das Problem ist *leicht* zum Lösen.
the-NOM problem-NOM is-3SG easy to.the-DAT solution-DAT
この問題は解決に関して容易である。

これらのことから、本稿での調査対象は単に事象を表示する語句を主語として、その事象の性質を表す形容詞だけに限定せず、義務的であれ随意的であれ、広く事象を項に取る形容詞も対象とする。² 具体的には、(7)~(14) までに見られたように、述語的に用いられる際に、主語であれそれ以外であれ、少なくとも一つの文成分に事象を表示する語句を取りうる、*schnell*, *leicht*, *vorsichtig*, *überdrüssig* のような形容詞である。研究対象とする形容詞の選定には、形容詞とその結びつく語句との意味的な関係から英語形容詞を整理した、Vendler (1968) を特に参考とする。

1.3 研究課題

本研究では、1.2 で挙げたような事象を項に取る形容詞について、大規模コーパスか

² ここでの項とは、結合価文法における項、すなわち述語に従属する文成分を意味する。

ら事例を収集し、実例に基づいて統語的・意味的な振る舞いを調査し、形容詞ごとの共通点・相違点を分析する。その際、具体的に明らかにしようとしている問題は、以下の3点である。

- ① 事象を項に取る形容詞の統語的用法（述語的、付加語的、副詞的用法）はどのように分布しているか
- ② 事象を項に取る形容詞は、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）とは意味的にどのように関係するのか
- ③ 事象を項に取る形容詞は、どのようなアスペクトの事象と結びつくのか

① 事象を項に取る形容詞の統語的用法（述語的、付加語的、副詞的用法）はどのように分布しているか

調査の際に具体的に取り組む課題はまず、事象を項に取る形容詞の現れる統語的な環境を明らかにするということである。

事象は典型的には、Fahrt（走行）のような名詞よりもむしろ、fahren（走る）のような動詞で表される。一方で、たいていの形容詞は副詞的に用いられ、述語動詞と関わることができる。例えば、(15)の形容詞 schnell は述語動詞 fährt (fahren) が中心となって表示する「走る」という事象の性質が「速い」ことを表している。

- (15) Das Auto fährt schnell.
the-NOM car-NOM drives-3SG fast
この車は速く走る。

このように、形容詞は述語的、付加語的に用いられる場合だけでなく、副詞的に用いられる際にも、事象の性質を表しうる。しかし、先にも述べたように、従来の形容詞研究では多くの場合、モノの性質を表す形容詞に焦点が当てられている。そのため、副詞的な形容詞の統語的な位置と解釈を論じる Schäfer (2013) などを除き、副詞的に用いられる形容詞の観察はあまりされていない。本稿では事象の性質を表す形容詞を研究対象とするため、形容詞が付加語的、述語的に用いられる場合だけでなく、副詞的に用いられる場合にも注目し、形容詞ごとの用法の分布を確認する。事象を項に取る形容詞が現れる統語環境を精査し、形容詞ごとに現れる統語環境に違いがあるのかどうかを整理するのが、本研究の第一の課題である。

② 事象を項に取る形容詞は、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）とは意味的にどのように関係するのか

二つ目に扱う課題は、事象を項に取る形容詞の意味的な機能の問題である。

1.1 で挙げたように、事象は命題の中で言及される対象であり、その点でモノに近い存在だと位置づけられる。そして、モノを項に取る形容詞と事象を項に取る形容詞は、述語的、付加語的には同じような項の取り方をしうる。例えば、(16) ではモノを項に取る形容詞 *rot* が述語的に用いられ、主語として現れる名詞句 *das Auto* が表示する「車」というモノの性質が「赤い」ことを表している。同じように、(17) では事象を項に取る形容詞 *schnell* が述語的に用いられ、主語として現れる名詞句 *die Fahrt* が表示する「走行」という事象の性質が「速い」ことを示している。

(16) *Das* *Auto* *ist* *rot.* (=1b))
 the-NOM car-NOM is-3SG red
 この車は赤い。

(17) *Die* *Fahrt* *ist* *schnell.* (=2b))
 the-NOM drive-NOM is-3SG fast
 この走行は速い。

それでは、モノを項に取る形容詞と、事象を項に取る形容詞は、意味的にも両者に同じように性質を付与すると考えてもよいのだろうか。つまり、「赤い」を意味する *rot* が (18) のように、*x ist rot.* の形で「*x* が表示するモノの性質は赤い」ことを表すのと同様に、「速い」を意味する *schnell* は (19) のように、*e ist schnell.* の形で「*e* が表示する事象の性質は速い」ことを表すといえるのだろうか。

(18) *x ist rot.* 「*x* が表示するモノの性質は赤い」

(19) *e ist schnell.* 「*e* が表示する事象の性質は速い」

確かに、(17) の例からは、(19) のように事象を項に取る形容詞が、事象の性質を表していると考えられる。しかし、事象を項に取る形容詞は、(20) の *das Auto* (車) のようにモノを表示する語句と統語的に結びつくこともある。

(20) *Das* *Auto* *ist* *schnell.* (=9))
 the-NOM car-NOM is-3SG fast
 この車は速い。

この時の形容詞 *schnell* は (18) の *rot* のように *x ist schnell.* の形でモノの性質を表しているといえるのだろうか。つまり、*schnell* は (17) のように事象を表示する語句と結びつく場合と、(20) のようにモノを表示する語句と結びつく場合で、事象の性質を表す機能と、モノの性質を表す機能という異なる働きを持つと考えるべきなのか。あるいは、

(20) の *schnell* は、表面上はモノを表示する語句と結びついていても、意味的には (19) のように事象の性質を表していると考えられるべきなのか。すなわち、統語的には「この車は速い。」であっても、意味的には「この車の走行は速い。」であり、「速い」は「走行」という事象の性質を表していると考えられるべきなのだろうか。その場合、*schnell* は (17), (20) でどちらも同じように事象の性質を表す機能を持つと考えられるが、形容詞がその性質を表す語句として、統語的には事象ではなく、その参与者であるモノが現れていることはどのように説明されるのだろうか。

- (21) *x ist schnell.* 「x が表示するモノの性質は速い」？
「x が表示するモノが参与する事象の性質は速い」？

本稿では、*rot* のようなモノのみを項に取る形容詞と対比して、*schnell* のような事象を項に取りうる形容詞が、意味的にはどのような機能を持つのかを考察する。また、その機能が、*schnell* のほか、1.2 に挙げた *leicht*, *vorsichtig*, *überdrüssig* のような事象を項に取りうる様々な形容詞の間でどのように共通あるいは相違するのかを考える。

③ 事象を項に取る形容詞は、どのようなアスペクトの事象と結びつくのか

三つ目に扱う課題は、事象を項に取る形容詞が、実際に項に取りうる事象の意味的な性質の問題である。

形容詞が項に取る事象は、存在論的には命題よりもむしろモノに近い存在と位置づけられる。しかし、事象とモノとは時間的な性質の点で大きく異なっている。(22) の *das Auto* (車) や (23) の *das Problem* (問題) といったモノは、具体的であれ、抽象的であれ、本質的に時間経過とは関係なく存在する。つまり、外的な要因がなければ、時間経過の有無を問わず、「車」は「車」、「問題」は「問題」であると規定できる。それに対して、(22) の *die Fahrt* (走行) や (23) の *das Lösen* (解決) などの事象には、時間の経過とともに継続したり、開始あるいは終了したりという変化がある。モノとは異なり、事象は本質的に時間経過を必要とし、時間経過でどのように変化するのかという観点から規定されるのである。³

- (22) *Das Auto ist schnell bei der Fahrt.* (= (13))
the-NOM car-NOM is-3SG fast during the-DAT drive-DAT

この車は走行の際に速い。

- (23) *Das Problem ist leicht zum Lösen.* (= (14))
the-NOM problem-NOM is-3SG easy to.the-DAT solution-DAT

³ この場合の「時間経過」は必ずしも時間がかかることを意味しておらず、「一瞬」も「時間経過」に含まれる。例えば *das Lösen* (解決) は一瞬で完結する事象である。

この問題は解決に関して容易である。

それでは、事象を項に取る形容詞は、このように継続したり、開始あるいは終了したりする様々な事象と一様に結びつくのだろうか。例えば、*Fahrt* (走行) は継続する事象、*Abfahrt* (出発) は開始する事象である。これらは (24), (25) のように、どちらも *schnell* (速い) という形容詞と結びつきうる。この点では、*schnell* は継続的な事象とも完結的な事象とも同じように結びつくといえる。⁴

(24) Die Fahrt ist *schnell*. (=2b)
the-NOM drive-NOM is-3SG fast
この走行は速い。

(25) Die Abfahrt ist *schnell*.
the-NOM departure-NOM is-3SG fast
この発車は速い。

しかしここで、(26) のように *schnell* がモノを主語にとる述語文について、*schnell* が意味的にはそのモノの背後にある事象の性質を表していると考えてみる。ここで *schnell* が性質を表す事象は通常 *Fahrt* であると予想され、*Abfahrt* であるとは考え難い。つまり、(26) は普通、「この車の発車が速い。」ではなく、「この車の走行が速い。」であると解釈される。⁵ このことから、形容詞には事象に優先的に求めるアスペクトがあるのではないかと考えられる。⁶

(26) Das Auto ist *schnell*. (=9)
the-NOM car-NOM is-3SG fast
この車は速い。

⁴ もっとも、ドイツ語ネイティブのインフォーマント (1名) によると、(24) と比べて (25) は不自然であり、„Die Abfahrt erfolgt schnell.“ のように、「～である」を意味する *sein* ではなく、「～が行われる」を意味する *erfolgen* を述語動詞にしたほうが自然である。このため、*Fahrt* と *Abfahrt* はどちらも同じように形容詞述語文で *schnell* と結びつくとは言い難い。

⁵ ただし、「様々な車が発車していく。その中で特に速く発車するのはこの車である。」などの文脈があれば、„Das Auto ist schnell.“ を「この車の発車は速い。」であると解釈することは可能である。

⁶ なお、ドイツ語ネイティブのインフォーマント (1名) によると、(25) においては、*Abfahrt* は「発車」ではなく、(24) の *Fahrt* と同じ「走行」という意味であると判断するという。しかし (26) において、*schnell* が意味的に性質を当てはめている事象 *Fahrt* を、同じ「走行」という意味であるとして *Abfahrt* に置き換えられるとは判断しえない。このことから、形容詞には事象に優先的に求めるアスペクトがあるのではないかと考えられる。

このように、形容詞がどのようなアスペクトの事象と結びつく（あるいは結びつきやすい）のか、そして、それは形容詞ごとに（どのように）異なっているのかということ を明らかにするのが、本稿での第三の課題である。

これらの研究課題に対する議論から、事象を項に取る形容詞の様々な統語的実現の特色が、事象の参与者となるモノ項と、事象のアスペクトに起因することを示す。特に、事象を項に取る様々な形容詞に共通して、事象のアスペクトの対立(有界的 vs. 無界的)が影響を及ぼしており、それが統語的に反映されていることを明らかにする。

1.4 論文の構成

本論文は 6 章から成る。第 1 章（本章）で論文の全体像を紹介した後に、第 2 章では、形容詞の叙述対象となる事象について、その存在論的な位置づけや統語的な実現形式を、モノや命題と比較してまとめる。特に、モノと事象がどのように共通・相違しているのかを明確にする。続く第 3 章では、形容詞に関する先行研究をまとめる。英語やドイツ語の形容詞を対象に、付加語的・述語的に用いられる形容詞、副詞的に用いられる形容詞と事象の関係がどのように説明されているのかを整理する。第 4 章ではまず、本稿での調査対象とする対象を限定し、調査方法を示す。そして事象を項に取る形容詞が、統語的にどのように分布し、意味的にはどのような事象と結びついているかなどの点に関して、大規模コーパスから事例を収集した調査結果を示し、分析する。第 5 章では、個々の形容詞の調査結果をもとに、事象を項に取る形容詞全体の統語的実現に関する考察を行う。第 6 章で本研究の成果をまとめ、それを踏まえた今後の課題と展望を示す。

2 事象とは何か

形容詞は人や物といういわゆるモノも、事象や命題といういわゆるコトも叙述の対象とするが、本論文では、そのうちの事象に着目し、事象を項に取る形容詞を分析の対象とする。本章では、形容詞の叙述対象となる事象について、モノや命題とどのように相違しているのか、柏端 (1997) の記述を中心に、Davidson の存在論的な観点からまとめる (2.1)。そして、Vendler (1968) や Ehrich (1991) などを参考に、事象、モノ、命題がドイツ語では統語的にどのように実現されるのかを整理し、形容詞が事象を項に取る際の表現形式をまとめる (2.2)。さらに、存在論的には同じ個体というカテゴリーに属するモノと事象が、言語的にはどのように共通・相違するのかを Ehrich (1991) や Leiss (1992, 2000) などを引き合いにまとめる。また、事象の下位分類である出来事と状態の区別にも注目する (2.3)。これらにより、形容詞が項に取る対象として、モノと区別して事象を扱うにあたり、とりわけ事象のアスペクトに着目する意義を示す。

2.1 存在論的カテゴリー

本節では、形容詞が項に取る事象が意味論的にはどのようなものであるのかについて、Davidson の存在論的な観点からまとめる。日常的には「モノ」と「コト」のうちの「コト」に属すると考えられている事象が、同じく「コト」に属すると考えられている命題とは存在論的に大きく異なっていることや、事象はむしろ「モノ」と同じカテゴリーに属すると考えられることを説明する。

2.1.1 個体と命題

世界の中には人や物などさまざまな対象があり、それは現実に存在する。このような対象は、言語学的にはよく「個体」と言われる。本稿でいう「モノ」はこの「個体」というカテゴリーに属する。一方で、私たちは世界について様々に思考することができる。世界についての言明あるいは思考内容は「命題」と言われ、命題は現実に照らして真偽が判断できる。例えば、吉田 (2001: 69-72) によれば、(27) の文が表す命題は「トーマスとワインという個体の間に DRINK (飲む) の関係が成り立つ」場合に真になる ((27) は吉田 (2001: 70) による)。⁷

- (27) Thomas trinkt Wein.
Thomas-NOM drinks-3SG wine-ACC
トーマスはワインを飲んでいる。

⁷ さらに吉田 (2001: 72) によれば、trinken (飲む) が二つの個体間の関係を表す述語であることは、(i) のような論理式で表せる。x や y は、実際の項になる個体を代理する。

(i) DRINK (x, y)

本項ではまず、個体としての「モノ」と「命題」が、存在論的にはどのように区別されるのかを確認する。

2.1.1.1 個体としてのモノ

個体とは、柏端 (1997: 3) の言葉を借りれば「この世界の中で個別化される存在者」である。⁸ 物理的な空間に存在し、人間の五感で知覚できる形のある「子ども」「机」などの人や物、いわゆるモノが、その典型である。さらに「精神」のように心理的な空間のみに存在するモノも、個体に含まれる。具体的、抽象的なもののどちらであれ、これらのモノは個別に特定することができる。すなわち、「この子どもとあの子ども」「この机とあの机」「彼の精神と彼女の精神」のように、あるモノを特定し、それを同じ種類の別のモノと区別することができる。

また、あるモノを別のモノと区別できるということは、別個に記述されるモノを同一であると認識できるということでもある。例えば、「椅子に座っている男性」と「チケットを売っている店員」は、両者が同一の時間に同一の空間を占めているのならば、同一の人間であると認識できる。つまり、「椅子に座っている男性」と「チケットを売っている男性」がどちらも「2020年1月1日正午に、東京タワー1階チケットカウンター右端にある椅子の上に存在する」人間を指すのであれば、それは同一の人間を指しているのである。

さらに、あるモノは時間を超えて同一のモノであると認識することができる。例えば、「今日この場所にある椅子」と「明日この場所にある椅子」は、存在する時間が異なっても、別の椅子と取り換えていない限り、同じ椅子であると考えることができる。

2.1.1.2 命題

倉田 (2007: 75-76) によれば、「命題」という語は、伝統的な論理学においては「陳述文」や「言語によって表現された判断」という意味で用いられたものの、現代的な意味では、命題は文でも判断でもない。

倉田 (2007: 76-79) がまとめた Bolzano (1837) による命題概念の特徴によれば、命題は言語的表現としての文から区別される。⁹ つまり、文字や単語の羅列として陳述された文そのものが命題なのではなく、その文により表される意味内容が命題なのである。また、命題は心的作用としての判断からも区別される。真偽を誰かに判断されたかどうか

⁸ 柏端 (1997: 3) は「個体」という言葉は使わず、「人」や「物体」としているが、ここでは本稿での定義に従い、これらを「個体」であるとしてまとめている。

⁹ 倉田 (2007: 75-79) は Bolzano (1837) にならい「命題」ではなく「命題自体」と表記している。これは、「文」とその意味内容である「命題」を、「陳述された命題」あるいは「言語によって表現された命題」と「命題自体」という用語で区別しているためである。ここでは本稿での定義に従い、「命題自体」ではなく「命題」としている。

かとは無関係に、命題は真か偽のいずれかである。

このように真偽の判断が可能であるという命題の特徴は、命題とモノとの区別の上でも重要である。例えば、「この机は小さい。」や「彼の精神は強靱だった。」などの文が表す命題に対しては、その真偽を判断することができる。一方、命題の中で言及される「この机」「彼の精神」などのモノに対しては、その真偽を問うことができない。このことが、命題とモノを区別する大きな違いである。

さらに、命題は現実には存在しない。倉田 (2007: 77) によれば、「命題は時間空間の中にはなく、不変」である。この点でも命題は、物理的あるいは心理的な空間に存在するモノと異なっている。

2.1.2 個体としての事象

前項では、個体としてのモノと命題の区別を確認した。本項では、日常的な用語では命題と同じくコトであると考えられる事象が、意味論的にはモノと同様に個体というカテゴリーに属すると考えられることを、Davidson の存在論的な観点から説明する。事象は大きく出来事と状態に分かれるが、存在論的にはとりわけ出来事とモノの間に並行性が認められている。

2.1.2.1 モノと出来事の意味的な並行性

2.1.1 で確認したように、命題は文により表される意味内容であり、その中で個体について言及される。例えば、(28) で表される命題は、「料理長」という個体 (モノ) が「チーズの塊」という個体 (モノ) を熱したという関係を表している ((28) は柏端 (1997: 14) による)。

(28) 料理長はチーズの塊を熱した。

ここで、出来事について考えると、(28) の文は出来事そのものに対応するのではない。柏端 (1997: 3-4) によれば、「文は出来事そのものについての何かではなく、出来事の生起や不生起、出来事と出来事間の関係の成立や不成立、もしくは出来事によるある性質の所有などをわれわれに教える」のである。このように考えると、(28) は「料理長によるチーズの塊の加熱」という出来事が生起したことに言及しているといえる。

また、命題とは異なり、「料理長」や「チーズの塊」という個体 (モノ) については、真偽の判断ができない。それと同じように、「料理長によるチーズの塊の加熱」という出来事についても、真偽の判断ができない。

このように考えると、出来事は、柏端 (1997: 3) の言葉を借りれば、モノと同じく「こ

の世界の中で個別化される存在者」である。¹⁰ 物理的な空間で、時間軸に沿って起こる「演奏」や「噴火」などが出来事であると考えられる。「演奏」のような人に引き起こされることがその典型であるが、自然に発生する「噴火」なども出来事であると考えられる。これらの出来事はモノと同様の個体として、「この演奏とあの演奏」「この噴火とあの噴火」のように、ある出来事を特定し、それを同じ種類の別の出来事と区別することができる。

また、部分と全体に関する諸概念が、モノと出来事ではかなり並行的に適用できる。まず、ある一つの出来事の一部は別の出来事であり、それは、ある一つのモノの一部が別のモノであることに類比させられる。¹¹ つまり、出来事やモノの部分と全体は、必ずしも一致しない。柏端 (1997: 10) の例を挙げれば、閉会式はそれを含む大会そのものと同じではなく、同様に蠅の触覚はそれを含む蠅そのものと同じではない。一方で、部分と全体が一致するような出来事やモノもある。例えば、ある雨降りの部分、つまり降り始めの 3 分間や降った地域の一か所で起こった出来事は、やはり雨降りであるといえる。ミルクの部分は通常やはりミルクであるのと同様である。

ただし、出来事は、時間との関わりという点においてモノと異なっている。出来事は時間軸を持つ個体であり、その始まりや終わりの時点を問うことができる。しかし、モノに対しては、それがいつ始まり、いつ終わるのかを問うことはできない。「彼による椅子の制作」という出来事には始まり、あるいは終わりの時点があるが、「椅子」そのものには始まりも終わりもないのである。

さらに Ehrich (1991) や柏端 (1997) によれば、出来事は同一性に関してもモノとは異なっている。2.1.1.1 で述べたように、別個に記述されるモノは、両者が同一の時間に同一の空間を占めていれば、同一のモノと認識できる。出来事も同様に、別個に記述される出来事は、両者が同一の時間に同一の空間を占めていれば、同一の出来事と認識できる。例えば、「彼が行う演奏」と「バッハの曲の演奏」がどちらも、「2020年1月1日正午から30分間、東京タワー1階チケットカウンター前に存在する」出来事を指すのであれば、それは同一の出来事を指しているのである。

しかし一方で、モノとは異なり、出来事は時間を超えて同一視することが難しい。例えば「今日この場所で行われる演奏」と「明日この場所で行われる演奏」は、演奏者や演目が同じであっても、同じ出来事であるとは考え難い。さらに、同一の時間に別の空間を占める出来事でも、同一の出来事とみなせることがあるのではないかと、という議論

¹⁰ 言語哲学的に出来事について考える場合、Ehrich (1991: 441, 448-451) によれば、二つの立場がある。一方は、出来事をモノと同様の個体とみなす Davidson の立場で、もう一方は、出来事を時間の性質とみなす Montague の立場である。Ehrich (1991: 450) は、Montague の考え方は言語学的な観点よりも哲学的な観点を優先させているため、言語学的には Davidson の考え方がより有用であるとしている。そのため、本稿でも出来事をモノと同じ個体であると考ええる。

¹¹ 柏端 (1997) の用語では「モノ」ではなく「物体」。

もある。例えば、「ソクラテスの死」と「クサンティッペの未亡人化」は、同一の時間に別の場所で起こりうる出来事である。この二つの出来事は、同一の空間を占めていないこと、主体が異なることなどを理由に、二つの異なる出来事であるとみなす見方と、「ソクラテスの死」と「クサンティッペの未亡人化」は一つの（同一の）出来事を指示する二つの異なる記述であるとする見方がある（Ehrich (1991: 449-450), 柏端 (1993: 112-113)）。本節の目的は、形容詞が叙述対象とする出来事とモノを区別することであり、このことは、個々の出来事には時間軸がある一方、モノにはそれがないという点で説明できると考える。個々の出来事の同一性の問題には、本稿では立ち入らない。

2.1.2.2 出来事と行為

2.1.2.1 では、「演奏」のような人に引き起こされることだけでなく、自然に発生する「噴火」なども出来事であるとした。しかし、「演奏」や「噴火」を同じ出来事とみなすことには異論がある。倉田 (2009: 127-128) によれば、行為者の意図が介在する、何らかの理由により引き起こされる「行為」は、行為者の意図が関与せず、原因によって引き起こされる「出来事」と区別するという考え方があり、これに従えば、「演奏」は「行為」、「噴火」は「出来事」である。ただし、両者の区別はそれほど容易ではない。倉田 (2009: 127-128) の例を挙げれば、A 氏が信号停車中の車に誤って追突し、意図せず他人の車を破損させてしまった場合、A 氏が意図していないからといって、それが A 氏の行為でないことにはならない。これは A 氏の不注意という原因が引き起こした行為である。このように行為と出来事の区別は容易ではないが、両者は「生じる」という点では同じであると考えられることから、一般的に、行為は出来事というカテゴリーに包摂される。本稿でも、「行為」は「出来事」に含まれるとみなし、独自のカテゴリーとして個別には扱わない。

2.1.2.3 出来事と状態

「演奏」のような出来事と同じく時間軸を有する存在論的カテゴリーとして、「欠席」のような状態が挙げられる。影山 (2009: 48-49) は、出来事と状態を、時間軸による展開の有無で区別できるとしている。例えば、「演奏」は時間軸に沿って、手を動かすとか、音が変化するという展開があることから出来事である。一方、「欠席」は時間軸に沿って持続しうるものの、その間ずっと何かに変化するなどの展開がないことから状態であると考えられる。

この意味的な区別は言語的にも有用で、例えば英語の出来事文と状態文での進行形の有無に対応する。(29a) のような出来事文では動詞を進行形にすることが可能だが、(29b) のような状態文では、動詞を進行形にすることが基本的に不可能である ((29) は影山 (2009: 43) による)。ただし、状態文を構成する動詞の多くは、条件次第では進行形にすることが可能である。例えば、状態が一時的であることを強調する場合には進行

形が用いられ、(30a) に比べて (30b) は「いずれ引っ越しますが」というニュアンスが強い ((30) は影山 (2009: 30) による)。

- (29) a. John is playing cards. (ジョンはトランプをしている。)
 b. *John is knowing my father. (ジョンは私の父を知っている。)
- (30) a. I live in Boston. (私はボストンに住んでいます。)
 b. I'm living in Boston. (私はボストンに住んでいます。)

Davidson の存在論的な立場で出来事について論じる時、状態は出来事の因果関係に言い換えられることから、状態にはことさらに焦点が当てられていない。¹² しかし、出来事文と状態文の違いはアスペクトに関係し、それが出来事と状態の存在論的相違の反映であると考えられることや、時制やアスペクトなどの言語学の問題を扱うためには、状態を出来事の因果関係で言い換えて考える態度は適切ではないことなどが、飯田 (2008: 25-26) や柏端 (1997: 18) で示唆されている。これらのことに鑑みて、本稿では、事象の下位分類として出来事と状態を区別する。

2.1.3 存在論的カテゴリーのまとめ

2.1.1 および 2.1.2 で挙げた、本稿で分析対象とする、形容詞が叙述する事象の存在論的位置づけは、図 1 のようにまとめられる。

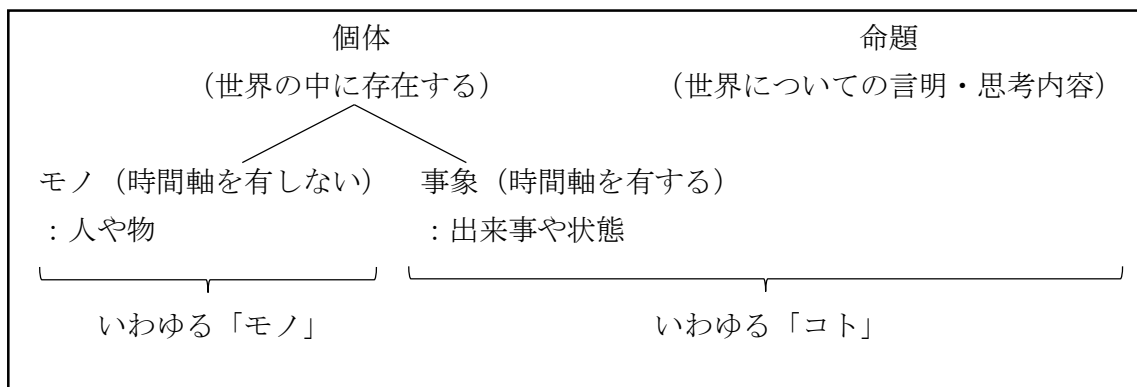


図 1 存在論的に見た事象の位置づけ

「事象」は、世界の中に存在する「個体」の一種である。その点で「モノ」と同じカテゴリーに属するが、時間軸を有するという点で「モノ」とは異なっている。「事象」の中でも、「出来事」には時間軸に沿った展開があり、始まったり終わったりする。一

¹² 柏端 (1997: 13) によれば、例えば「自転車が泥で汚れている」という状態が夕立に引き起こされたのであれば、「泥の付着」と「夕立」という二つの出来事の因果関係を考えればよいのである。

方、「状態」は、時間軸に沿った展開がないという点で出来事とは異なる。状態は時間軸に沿って持続しうるものの、本質的には時間の経過を問題としていない。

私たちが日常的に考えるいわゆる「モノ」は、本論でいうモノと同じであると考えて差し支えないが、いわゆる「コト」とここでいう「事象」は完全に同じではない。いわゆる「コト」は、世界についての言明内容あるいは思考内容である「命題」を含んでいるが、この「命題」は、世界の中に存在する「事象」すなわち「出来事」や「状態」とは全く異なるカテゴリーに属する。¹³

2.2 事象の統語的な表現形式

本節では、形容詞の叙述対象となる事象が、言語的に、特にドイツ語ではどのような形式で表されるのかを、Vendler (1968) や Ehrlich (1991) などを参考に整理する。その際、事象と同じ個体というカテゴリーに属するモノ、これらとは異なるカテゴリーに属する命題がどのような形式で表されるのかも、併せて確認する。最後に、本稿での調査対象となる、形容詞が事象を項に取る際の表現形式をまとめる。

2.2.1 存在論的カテゴリーと品詞の基本的な対応関係

一般に、命題は文の形で表されるとされる。それに対して、命題の中で言及される対象である個体や、個体と個体の関係は、文を構成する単語により表される。どのような品詞の単語が、典型的にはどのような個体を表すのかについて、名詞は「物」、形容詞は「状態」、動詞は「出来事」を表すと説明されることがある。これは、Givón (1984) を引き合いにしているものと思われる。

Givón (1984) によれば、名詞、形容詞、動詞という品詞は時間の安定性 (time stability) という観点でそれぞれ特徴づけられる。典型的には名詞は時間的に最も安定しており (most time-stable)、動詞は時間の経過に伴う変化を表す (rapid change)。その中間に位置する状態を表すのが形容詞である (intermediate states)。これを、本稿でいう個体の分類に当てはめて考えると、名詞が典型的に指示するのは、時間軸を有しない「モノ」であるといえる。同様に、動詞が典型的に指示するのは、時間軸を有し、時間に沿った展開がある「出来事」であり、形容詞が典型的に指示するのは、時間軸を有し、時間に沿った展開がない「状態」であるといえる。

さらに Givón (2001) によれば、形容詞には、green (緑色の) のように比較的時間的に安定している名詞よりのものと、より安定性の低い sad (悲しい) のような動詞よりのものがある。sad が対象の状態を叙述するのに対し、green は対象の属性を叙述する形

¹³ なお、いわゆる「コト」が事象 (出来事や状態) と命題の双方を含んでいるというのは、あくまで日常的な見解である。言語哲学的には、「もの」と「こと」の区別がここでいう個体と命題の区別に相当すると考えられることが、出 (1938) や廣松 (1979) などにより古くから指摘されている。

容詞である。属性とは、影山 (2009: 48-49) によれば、時間の流れを超越して変化なく継続する性質を表す。属性は恒常的であり、そもそも時間軸を認識しないという点で、出来事や状態とは本質的に異なっている。一方、典型的には出来事を指示するとされる動詞にも、know (知っている) のように、対象を一定の時間で持続する状態として叙述する、比較的時間的に安定している形容詞よりのものがある。動詞には対象を出来事として表すものと状態として表すもののどちらもあることから、影山 (2009: 3) にあるとおり、「事象」を表現する典型的な品詞は動詞であるといえる。

most stable	least stable	
tree,	green	sad, know	work, shoot
noun	adj.	adj. verb	verb verb
モノ	属性	事象	
		(状態)	(出来事)

図 2 時間的安全性、品詞、存在論的カテゴリーの対応関係¹⁴

このように、「命題」は文、「モノ」は名詞、「事象」は動詞（特に「出来事」は動詞、「状態」は形容詞）という一定の傾向は見られるものの、存在論的カテゴリーと文法カテゴリーは必ずしも一致はしない。

2.2.2 命題の表現形式

存在論的カテゴリーごとに、文法的にはどのような表現形式がありうるのだろうか。まず、前述のとおり、命題は文で表される。ただし、Vendler (1968: 38-43, 72-73, 85-108) によれば、命題を表す文は従属接続詞 that に導かれ、that he runs the race (彼がレースを走るといふこと) のような that 節の形で表れることもある。¹⁵ このような that 節は、時制や法を含んだ形で表されうる。そのため、動詞句の名詞化や to 不定詞句も、それらを文の形に戻す際に時制や法を復元できるのであれば命題を表しているとみなせる。¹⁶ 例

¹⁴ 図 2 の英語部分（時間的安全性と品詞の対応関係）は Givón (2001: 54) からの引用である。図 2 の日本語部分（品詞と存在論的カテゴリーの対応関係）は筆者による。

¹⁵ Vendler (1968) では、様々な名詞（特に名詞化されたもの）をより名詞らしいものからより文らしいものに段階分けし、形容詞と名詞の関係を分析している。Vendler (1968) ではモノ、事象、命題という用語は用いていないが、本稿では、Vendler (1968) のいう、より名詞らしい名詞を「モノ」、より文らしい名詞を「命題」、その中間にある名詞を「事象」を表現する語句に当てはまると解釈している。

¹⁶ つまり、ここでは命題に時制や法が含まれるものとする。ただし、命題には時制や法が含まれないとする立場もある。例えばフィルモア (1975: 75) によれば、命題に含まれるのは動詞と名詞のみであり、否定や時制、叙法、相のような文全体にかかる法要素は命題には含まれない。また、益岡 (2007: 21-25) のように、文構造を、態や相、時制を含む「命

えば、(31) の *his coming tomorrow* (彼が明日来ること) は、(32) のような時制や法を含む文を名詞化したものであると考えることができるため、命題であるとみなされる ((31), (32) は Vendler (1968: 43) による)。¹⁷

(31) I expect his coming tomorrow. (私は彼が明日来ることを期待している。)

(32) He will come tomorrow. (彼は明日来るはずである。)

ドイツ語でも、命題は時制や法のある文で表される。例えば (33) は命題を表す文である。また、命題を表す文の中に、さらに別の命題を表す文が含まれる場合もある。(34) では、文全体も命題であるが、副文 *dass du gehst* (君が行くということ) のみもまた命題である。¹⁸

(33) Ich bringe Else Blumen.
I-NOM bring-1SG Else-DAT flowers-ACC
私はエルゼに花を届ける。

(34) Er bedauert es, dass du gehst.
he-NOM regrets-3SG it-ACC that you-NOM go-2SG
君が行くことを彼は残念がっている。

さらに、(35) の *dir viel Mühe gemacht zu haben* (君に大変な苦勞をかけたこと) は、

題」と、命題に対する判断や発話態度を含む「モダリティ」の対立を基軸とする見方もある。時制や法などが命題に含まれないとしても、少なくともこれらは世界の中の存在者ではなく、事象ではない。本論文では、あくまで事象と形容詞の関係を論じるため、命題の詳細については立ち入らず、文、ないし文に相当する語句は命題を表しているものとする。

¹⁷ なお本稿では、柏端 (1997: 14-15) にならい、このように英語の *that* 節やドイツ語の *dass* 文に対応するような命題を表現する場合には、日本語で「～こと」という表現を用いている。日本語の「こと」には、「概念的に構築された事態を表す」特性があり、「～こと」という名詞句内に現れる節は命題を表すと考えられる (益岡 (2007: 287) 参照)。

¹⁸ ただし、従属接続詞 *dass* に導かれる副文であれば、必ず命題を表しているとは断言できない。例えば、*geschehen* (起こる) という動詞は *es geschieht, dass...* (…が起こる) という形で *dass* 文と共起するが、そこで *dass* 文が表す内容は、真偽の判断の対象とはならず、命題ではなく事象を表していると考えられる。*geschehen* に導かれる *dass* 文内では時制が示されるが、これは (i) に見られるように、*geschehen* の時制と一致しなければならない。このように、*dass* 文内で示される時制に選択の余地がない場合は、*dass* 文が表しているのは命題であるとは考えられない。一方、(34) の *bedauern* と共起する *dass* 文は、(ii) に見られるように、副文内で時制を選択する余地がある。このように *dass* 文内で示される時制に選択の余地がある場合、*dass* 文が表しているのは命題であると考えられる。

(i) *Es geschieht, dass er kommt* /**kam*. (彼が来る/*来たということ [事象] が起こる。)

(ii) *Er bedauert es, dass du gehst/gingst*. (君が行く/行ったこと [命題] を、彼は残念がっている。)

(36) のような時制を含んだ文を *zu* 不定詞句にしたものであると考えることができる。このように、文の形に戻す際に、時制や法を復元することができるのであれば、その *zu* 不定詞句は命題を表していると考えられる。

(35) Ich bedauere, dir viel Mühe gemacht zu haben.
 I-NOM regret-1SG you-DAT a lot of trouble-ACC made to have-INF
 私は、君に大変な苦勞をかけたことをすまなく思っている。

(36) Ich habe dir viel Mühe gemacht.
 I-NOM have-1SG you-DAT a lot of trouble-ACC made
 私は君に大変な苦勞をかけた。

2.2.3 モノの表現形式

次に、世界の中の存在者である個体の表現形式を確認する。まず、モノは Vendler (1968: 85-108) によれば、英語では *the balloon* (風船) などの本来の名詞で表示される。本来の名詞とは、動詞句の名詞化などによるものではない名詞である。なお、2.1.1.1 に見られるように、あるモノは特定して別のモノと区別できることから、これらの名詞は基本的に冠詞類のついた形で現れる。もちろん、*John* (ジョン) のような、冠詞類のつかない固有名詞がモノを表すこともある。

ドイツ語でも同様に、モノは本来の名詞で表示されることが考えられる。例えば (37) の *der Zug* (列車) や (38) の *ein Kind* (子ども) は冠詞類のついた本来の名詞、(37) の *Frankfurt* (フランクフルト) や (38) の *Maria* (マリア) は固有名詞であり、どれもモノを表示している。

(37) Der Zug kommt durch Frankfurt.
 the-NOM train-NOM comes-3SG through Frankfurt-ACC
 この列車はフランクフルトを經由して来る。

(38) Maria hat ein Kind.
 Maria-NOM has-3SG a-ACC child-ACC
 マリアには子どもが一人いる。

2.2.4 事象の表現形式

一方、モノと同じく世界の中の存在者である事象は、Vendler (1968: 38-43, 72-73, 85-108) によれば、基本的に *the winning of the race* (レースでの勝利) のような動詞句の名詞化で表される。モノと同じく、事象もまた、特定して別の事象と区別できる個体である。従って、事象を表す名詞も基本的に冠詞類のついた形で現れる。さらに、*to win the race* (レースに勝つ (こと)) などの *to* 不定詞句や、*I saw him die.* (私は彼が死ぬのを見

た。)における **him die** (彼が死ぬ (こと)) のような不定詞付き対格でも、事象が表示されるとしている。¹⁹ Vendler (1968: 52) によれば、このような事象はいずれも時制や法を失った形式で表わされている。

ドイツ語でも同様に、事象は動詞句の名詞化や **zu** 不定詞句、そして不定詞付き対格で表わされると考えられる。例えば出来事に関しては、(39) の **das Beobachten des Kindes** (子供を観察する (こと)) や (40) の **die Beobachtung des Kindes** (子供の観察) が動詞句の名詞化、(41) の **stark zu regnen** (激しく雨が降る (こと)) が **zu** 不定詞句、(42) の **ihn kommen** (彼が来る (こと)) が不定詞付き対格の例である ((39),(40) は Ehrich (1991: 442) による)。

- (39) Das Beobachten des Kindes macht Spaß.
 the-NOM observation-NOM the-GEN child-GEN makes-3SG fun-ACC
 子供を観察するのは楽しい。
- (40) Die Beobachtung des Kindes macht Spaß.
 the-NOM observation-NOM the-GEN child-GEN makes-3SG fun-ACC
 子供の観察は楽しい。
- (41) Es hat angefangen, stark zu regnen.
 it-NOM has-3SG started heavy to rain-INF
 雨が激しく降り始めた。
- (42) Ich sah ihn kommen.
 I-NOM saw-1SG him-ACC come-INF
 私は彼が来るのを見た。

なお Ehrich (1991: 441-442, 448) によれば、ドイツ語の動詞の名詞化には不定詞名詞化と派生名詞化の2つのタイプがある。不定詞名詞化は (39) の **Beobachten** (観察する (こと)) のような「動詞語幹 + -en」によるものである。派生名詞化は (40) の **Beobachtung** (観察) のほか **Fahrt** (走行)、**Reise** (旅行)、**Kauf** (購入)、**Plauderei** (お喋り)、**Getue** (気取り) など「動詞語幹 + -ung, -t, -e, -Ø, -erei」や「ge- + 動詞語幹 + -e」によるものである。不定詞名詞は基本的に複数形にはできず、**all** や **viel** などの不定数詞を付けられない。一方、派生名詞は複数形にすることができ、不定数詞についても基本

¹⁹ 本稿では、英語の **that** 節やドイツ語の **dass** 文に対応するような命題を表現する場合には「～こと」という表現を用いるのに対し、英語の **to** 不定詞句やドイツ語の **zu** 不定詞句に対応するような事象を取り上げる場合には「～ (こと)」と表現する。また、事象を表す語句が文中に現れる場合、(39), (42) のように「～の」と表現することもある。ただし、補文標識としての日本語の「こと」と「の」の区別は、単純に「命題」と「事象」の区別に対応するわけではない点には注意が必要である (工藤 (1985), 橋本 (1990) などを参照のこと)。

的に制限はない (例 (43), (44) は Ehrich (1991: 442-443) による)。²⁰

- (43) a. *Die Beobachten des Kindes machen Spaß.
 the-NOM observations-NOM the-GEN child-GEN make-3PL fun-ACC
 *子供を観察するの [複数形] は楽しい。
- b. *Alle Beobachten des Kindes machen Spaß.
 all-NOM observations-NOM the-GEN child-GEN make-3PL fun-ACC
 *すべての子供を観察するの [複数形] は楽しい。
- (44) a. Die Beobachtungen des Kindes machen Spaß.
 the-NOM observations-NOM the-GEN child-GEN make-3PL fun-ACC
 子供の観察 [複数形] は楽しい。
- b. Alle Beobachtungen des Kindes machen Spaß.
 all-NOM observations-NOM the-GEN child-GEN make-3PL fun-ACC
 すべての子供の観察 [複数形] は楽しい。

さらに、Ehrich (1991: 451) によれば、不定詞名詞化と派生名詞化という名詞化の形式の使い分けで、出来事が未完了相的な過程 (Vorgänge) を表すのか、完了相的な生起 (Ereignisse) を表すのかというアスペクトの対立を表現できる。²¹ 例えば、(45) の不定詞名詞 **Reisen** (旅行する (こと)) は未完了相に相当し、ある旅行の過程を、その始まりや終わりという異なる段階を考慮せずに表している。一方、(46) の派生名詞 **Reise** (旅行) は完了相に相当し、旅行という出来事の全体を、始まりと終わりのある時間的に区切られたものとして、中身の経過は考慮せずに表しているとされる。

- (45) Das Reisen ohne Gepäck hat Spaß gemacht.
 the-NOM trip-NOM without baggage-ACC has-3SG fun-ACC made
 荷物を持たずに旅行するのは楽しかった。

²⁰ ただし、「動詞語幹+-erei」「ge+動詞語幹+-e」は反復相を表し、語形としては単数形でも意味的には複数を表していることから、(i) に見られるように、語形的にさらに複数形にすることはできない ((i) は Ehrich (1991: 442) による)。また、不定詞名詞に複数形が許されないのは形態論的な問題だが、「動詞語幹+-erei」「ge+動詞語幹+-e」を除いた派生名詞で複数形が許されるのは、動詞句の語の意味によるものである。例えば (ii) では、ある特定の蓄えを完食するという事は完結的な事象なので、複数形にすることはそぐわない ((ii) は Ehrich (1991: 442) による)。

(i) *Die Gesinge im Ferienlager machen Spaß. (*キャンプ場での歌唱 [複数形] は楽しい。)

(ii) *Die Verzehrungen des Vorrats machen Spaß. (*その蓄えの完食 [複数形] は楽しい。)

²¹ これはあくまで形態的な表現形式である。ドイツ語では、未完了、完了の選択に応じて述語動詞の形態が限定されることはない。そのためドイツ語は (少なくとも狭義の意味では) アスペクト言語とはみなされない。

- (46) Die Reise ohne Gepäck hat Spaß gemacht.
 the-NOM trip-NOM without baggage-ACC has-3SG fun-ACC made
 荷物を持たない旅行は楽しかった。

状態も、出来事と同様に動詞句の名詞化や zu 不定詞句、不定詞付き対格で表せると考えられる。例えば、(47) の *das Leben* (暮らす (こと)) や (48) の *die Ruhe* (静けさ) は動詞句の名詞化、(49) の *Mutter zu sein* (母親である (こと)) は zu 不定詞句、(50) の *Bardo schlafen* (バルドが眠っている (こと)) は不定詞付き対格である ((50) は *Maienborn* (2007: 111) による)。²²

- (47) Das Leben in der Großstadt ist schön.
 the-NOM life-NOM in the-DAT big city-DAT is-3SG nice
 大都会で暮らすのは素敵だ。

- (48) die Ruhe vor dem Sturm
 the-NOM calm-NOM before the-DAT storm-DAT
 嵐の前の静けさ

- (49) Mutter zu sein, macht mich glücklich.
 mother-NOM to be-INF makes-3SG me-ACC happy
 母親であるのは私を幸せにする。

- (50) Ich sah Bardo schlafen.
 I-NOM saw-1SG Bardo-ACC sleep-INF
 私はバルドが眠っているのを見た。

また、2.2.1 にあるように、状態は動詞よりもむしろ形容詞で表されるのが典型的である。このことから状態は、形容詞の名詞化によっても表わされると考えられる。*Pörings/Schmitz* (2003: 71) によれば、-schaft, -heit, -keit という接辞を形容詞に付けることにより、状態を表す事象名詞を作ることができる。例えば *Bereitschaft* (用意ができている状態)、*Klugheit* (思慮深い状態)、*Einsamkeit* (孤独な状態) などである。

2.2.5 モノと事象のどちらも表しうる表現形式

2.2.3 及び 2.2.4 から明らかであるように、品詞としては同じ名詞であっても、本来的

²² ただし、どのような状態でも一律にこのような表現形式が可能になるのではない。例えば *Maienborn* (2007: 110) によれば、(50) の *schlafen* (眠っている) と同じく状態を表す *sein* (～である) を不定詞付き対格で表した (i) は非文である。状態を 2 種類に分ける立場については 3.1.5 でも取り上げるが、詳細は *Maienborn* (2003, 2007, 2011) を参照されたい。
 (i) **Ich sah das Buch auf dem Tisch sein.* (*私はその本が机の上にあるのを見た。)

な名詞はモノを、動詞句の名詞化は事象（特に出来事）を表す傾向がある。ただし、これは絶対的な規則ではない。Ehrich (1991: 448) によれば、ドイツ語では-ung などの動詞句の名詞化は出来事だけでなく、出来事から結果的に生じたモノを表す場合がある。例えば (51) の *die Übersetzung des Textes* や (52) の *Edisons Erfindung* は、「文章を翻訳する（こと）」や「エジソンが発明する（こと）」という出来事ではなく、「文章を翻訳したもの」や「エジソンが発明したもの」というモノを表示しているのが自然である ((51), (52) は Ehrich (1991: 448) による)。²³

- (51) Die Übersetzung des Textes ist fehlerhaft.
 the-NOM translation-NOM the-GEN text-GEN is-3SG faulty
 この文章の翻訳には誤りがある。
- (52) Edisons Erfindung ist praktisch.
 Edison's invention-NOM is-3SG convenient
 エジソンの発明は役に立つ。

不定名詞化も同様に、*das Essen*（「食事(食べること)」あるいは「料理(食べるもの)」）のように、出来事ではなくモノを表しうる。一方で、*die Olympiade*（オリンピック）のように、本来的な名詞であっても、出来事を表す場合がある。

さらに、形容詞の名詞化も同様に、状態ではなくモノを表す場合がある。例えば、先に挙げた形容詞の名詞化 *Bereitschaft* は、「用意ができている状態」ではなく、「機動隊」というモノを表しうる。

このように、名詞は本来的な名詞であれ、動詞句や形容詞の名詞化であれ、モノと事象のどちらも表しうる。

2.2.6 形容詞が事象を項に取る際の表現形式

2.2.4 及び 2.2.5 から、形容詞が事象を項に取る際、以下のような統語関係があると考えられる。ここでの「名詞」は、本来的な名詞も動詞句や形容詞の名詞化も含む。また、ここでの *zu* 不定詞句は、時制や法を含んだ文の形への復元ができないものに限られる。

<付加語として>

- ① (冠詞+) 形容詞+名詞 (53)

²³ なお、動詞句の名詞化は命題を表す可能性もあるが、Ehrich (1991: 447-448) によれば、このような派生名詞は命題に対する態度を表す *glauben*（思う）のような動詞の目的語にはなれない。そのため命題ではなく、出来事やモノ（出来事の結果物）を表していると考えべきである ((i)~(ii) は Ehrich (1991: 448) による)。

(i) *Hans glaubt, dass Paul absagt.* (ハンスはパウルの拒否を拒否すると思う。)

(ii) **Hans glaubt Pauls Absage.* (*ハンスはパウルの拒否を思う。)

<述語内容語として>

② (冠詞+) 名詞+コブラ (に類する動詞) +形容詞 (54)

③ zu 不定詞句+コブラ (に類する動詞) +形容詞 (55)

(53) eine leichte Lösung
a-NOM easy-NOM solution-NOM
簡単な解決

(54) a. Die Lösung des Problems ist leicht.
the-NOM solution-NOM the-GEN problem-GEN is-3SG easy
その問題の解決は簡単だ。<コブラ>

b. Ich finde die Lösung des Problems leicht.
I-NOM find-1SG the-ACC solution-ACC the-GEN problem-GEN easy
私はその問題の解決を簡単だと思う。<コブラに類する動詞>

(55) a. Das Problem zu lösen ist leicht.
the-ACC problem-ACC to solve-INF is-3SG easy
その問題を解決するのは簡単だ。<zu 不定詞句が主語または目的語となる>

b. Es ist leicht, das Problem zu lösen.
it-NOM is-3SG easy the-ACC problem-ACC to solve-INF
その問題を解決するのは簡単だ。<zu 不定詞句の代用形の es が出現する>

ところで、ドイツ語の形容詞の用法には、副詞規定として副詞的に動詞を規定する用法がある。また、2.2.1 で確認したとおり、事象（とりわけ出来事）は典型的には動詞で表される。そこで、形容詞が事象を項に取る際の統語関係として、上記の①～③に加え、次の④が考えられる。

<副詞規定として>

④形容詞+述語動詞 (56)

(56) Er kann das Problem leicht lösen.
he-NOM can-3SG the-ACC problem-ACC easy solve-INF
彼はその問題を簡単に解決できる。

2.3 モノと事象の言語的な共通性・相違性

2.2 で確認したとおり、形容詞が性質を表す対象であるモノと事象は、一般的には異なる品詞で表わされるものと考えられる。すなわち、モノは名詞で、事象は動詞で表わ

される。もちろんこれは絶対的なことではなく、事象は名詞でも表わされうる。しかしその多くは動詞（句）を名詞化したものであり、このことから、事象は本来、動詞が中心となって表すのであると考えられる。

名詞と動詞は文法上の性質が大きく異なる。一方で、名詞と動詞をそれぞれ共通した基準で分類できるということも指摘されている。本節では、モノと事象を表示する名詞と動詞という異なる品詞の二者が、どのように共通し、相違するののかということを確認する。特に Ehrich (1991) と Leiss (1992, 2000) を取り上げ、ドイツ語の名詞と動詞の共通性をまとめる。それにより、名詞と動詞、ひいてはモノと事象は共通して「有界性」という基準で分類できることを確認する。さらに、事象を項に取る形容詞の分析にあたり、事象のアスペクトに注目する意義を示す。

2.3.1 Ehrich (1991) による全体的指示作用と累積的指示作用の対立

2.2.4 でも言及したように、Ehrich (1991: 451) によれば、派生名詞化と不定詞名詞化という動詞の名詞化の形式の使い分けで、出来事の完了相的な生起 (Ereignisse) と未完了相的な過程 (Vorgänge) というアスペクトの対立を表現できる。例えば、reisen (旅行する) を派生名詞化した Reise は、始まりと終わりのある時間的に区切られた「旅行全体」を表す。一方、reisen を不定詞名詞化した Reisen は、始まりや終わりという異なる段階を考慮しない「旅行過程」を表す。両者の違いは、出来事を時間的に区切られたものとして「外側から」見る視点と、出来事の持続的な時間経過を「内側から」見る視点の違いを表している。Ehrich (1991: 451) は、動詞の名詞化における派生名詞と不定詞名詞の対立が、動詞の名詞化でない普通名詞における可算名詞と質量名詞の対立に並行的に当てはめられることを指摘している。

まず、質量名詞は基本的に複数形にはできず、all や viel などの不定数詞を付けられないという点で、不定詞名詞と統語的性質を同じくする。さらに、部分と全体が一致するという点で、質量名詞と不定詞名詞は意味的にも同じ性質を有する。例えば、質量名詞 Wasser が表す一定量の「水」というモノは、そこからどの部分を取り出しても、やはり「水」である。同様に、不定詞名詞 Reisen が表す「旅行過程」という出来事は、どの部分を取り出しても、やはり「旅行過程」であるといえる。このことから、質量名詞と不定詞名詞は共通して、累積的指示作用 (kumulative Referenz) を持つといえる。²⁴ 一方、可算名詞と派生名詞は、部分と全体が一致しないという点で、その意味的性質を同じくする。例えば、可算名詞 Stuhl が表すある一つの「椅子」というモノは、その一部分だけを取り出すと、もはや「椅子」ではない。同様に、派生名詞 Reise が表すある一回の「旅行全体」という出来事の一部は、「旅行全体」ではなく「旅行の一段階」である。このことから、可算名詞と派生名詞は共通して、全体的指示作用 (holistische

²⁴ 質量名詞が累積的指示作用 (kumulative Referenz) を持つという考えは、Ehrich (1991: 451) によれば Quine (1960) に由来する。

Referenz) を持つといえる。

さらに Ehrich (1991: 451) によれば、全体的か累積的かという基準は、動詞の名詞化（派生名詞か不定詞名詞か）という形態的な表現形式における対立だけでなく、個々の動詞の語彙的特徴の対立、すなわち終結相（*terminative Verben*）か非終結相（*nicht-terminative Verben*）かという区別の基準にもなるという。なお、終結相か非終結相かという対立は、出来事のみならず、状態も併せた事象全体のアスペクトの対立である。

状態の変化を表す終結相の動詞（句）は、時間的性質に関していえば、全体的であるといえる。例えば、(57) の *das Problem lösen* が表す「その問題を解決する（こと）」という事象がある一定の期間に当てはまるとき、そのうちの任意の期間に成立する事象は、「その問題を解決する（こと）」ではない。一方、結果を伴わない非終結相すなわち状態や過程の動詞（句）は、累積的な時間的性質を持つ。例えば、(58) の *über das Problem nachdenken* が表す「その問題について考える（こと）」という事象がある一定の期間に当てはまるとき、そのうちの任意の期間に成立する事象は、やはり「その問題について考える（こと）」である（(57), (58) は Ehrich (1991: 451) による）。

(57) Hans löst das Problem.
Hans-NOM solves-3SG the-ACC problem-ACC
ハンスは問題を解決する。

(58) Hans denkt über das Problem nach.
Hans-NOM contemplates-3SG about the-ACC problem-ACC contemplate-PRF
ハンスはその問題について考える。

以上のように、Ehrich (1991) によれば、動詞の名詞化という形態的カテゴリーの対立（派生名詞化／不定詞名詞化）、名詞に内在する語彙的カテゴリーの対立（可算／質量）、動詞に内在する語彙的カテゴリーの対立（終結相／非終結相）を、全体的か累積的かという共通の基準によって、並行的に捉えることができる。

2.3.2 Leiss (1992, 2000) による分割可能性と累加性の組み合わせ

Leiss (1992, 2000) も Ehrich (1991) と同じように、ドイツ語の名詞と動詞の並行性を指摘している。それによれば、名詞は可算名詞と質量名詞に、動詞は完了相の動詞と未完相の動詞に大別されるが、これらは共通して、対象を外側の視点から見るか（*außenperspektivisch*）、内側の視点から見るか（*innenperspektivisch*）という観点の違いで説明できる。

Leiss (1992, 2000) では、対象を外側から見る視点と、内側から見る視点の両者を区別

する基準として、分割可能性 (Teilbarkeit) と累加性 (Additivität) を挙げている。²⁵ 分割可能性は、ある一つの個体を分割した場合に、それぞれの部分が全体との同一性を保てるか否か、ということの意味する。累加性は、ある一つの個体と同種の個体をまとめて、全体として一つの個体をなすことができるか否か、ということの意味する。

Leiss (1992, 2000) によれば、完了相の動詞は分割不可能 (unteilbar) と非累加的 (nonadditiv) という二点で特徴づけられる。finden (見つける) のような完了相の動詞が表す事象は、外側の視点からその事象全体が一つのまとまりとして捉えられる。例えば「見つける」という一つの事象の中から、ある時点の状態を分割して取り出したり、それを積み重ねたりしても、それは「見つける」ということにはならない。この特徴は、Haus (家) のような可算名詞にも当てはまる。一軒の「家」は同質の部分の積み重ねから成り立つのではないので、その性質を保ったまま分割したり増やしたりすることができない。

一方、suchen (探す) のような未完了相の動詞は分割可能 (teilbar) で累加的 (additiv) という特徴を持つ。未完了相の動詞が表示する事象は、内側の視点から事象の一部に焦点を当てて捉えられる。例えば、「探す」という一つの事象の中から、ある時点の状態を分割して取り出したり、それを積み重ねたりしたとき、それらもまた「探す」という事象であるといえる。この特徴は、Wasser (水) のような質量名詞にも当てはまる。つまり、「水」とは同質の部分の積み重ねから成り、その性質を保ったまま分割したり増やしたりすることができる。

また Leiss (1992) は、「分割不可能かつ非累加的」(可算名詞、完了相の動詞) と「分割可能かつ累加的」(質量名詞、未完了相の動詞) という両極の他に、「分割不可能かつ累加的」という組み合わせが成り立つことを指摘している。名詞では Gewässer (水域) のような集合名詞が、動詞では streicheln (撫でさする) のような反復相の動詞がこれにあたる。「水域」とは Wasser (水) という同質のモノの積み重ねから成り、「撫でさする」とは一回一回の streichen (さっと撫でる) という事象の積み重ねから成るので、ともに累加的である。しかし、一部の水だけを指して「水域」と呼ぶことも、一度だけ撫でることを指して「撫でさする」と呼ぶこともできない。つまり、これらは全体の同一性を保ったまま分割することはできないため、分割不可能である。

さらに Leiss (1992, 1994) によれば、ドイツ語の名詞と動詞は、それぞれの品詞において、そのどちらが無標であるかという点で異なっている。名詞では、「分割不可能かつ非累加的」という特徴を持つ可算名詞が無標であり、「分割可能かつ累加的」という

²⁵ Leiss (1992, 2000) はこの基準を、Bach (1981) の基準によるものとしている。すなわち、再分割可能性 (subdivisibility) と累加性 (additivity) である。Bach (1981) によると、build a cabin のような限界的な生起の動詞 (Event (telic) verbs) は、再分割不可能 (antidivisible) かつ非累加的 (nonadditive) であり、この特徴は dog のような可算名詞にも共通する。一方、run のような非限界的な過程の動詞 (Process (atelic) verbs) は、再分割可能 (subdivisible) かつ累加的 (additive) であり、この特徴は water のような質量名詞にも共通する。

特徴を持つ質量名詞が有標である。しかし動詞では、「分割可能かつ累加的」という特徴を持つ未完了相の動詞が無標であり、「分割不可能かつ非累加的」という特徴を持つ完了相の動詞が有標である。ドイツ語動詞の完了相の有標性は、ゴート語には未完了相の動詞に対して完了相の動詞のペアを作る接頭辞 *ge-* が存在していたことなどによって裏付けられる。現代ドイツ語には、完了相と未完了相を文法的に対立させる表現形式がないが、形態論的な表現形式では、接頭辞を用いて未完了相の動詞を完了相にする方法がある。(laufen (走る) -anlaufen (走り出す)、klingen (鳴る) -ausklingen (鳴り止む) など)。

また、ドイツ語で「分割不可能かつ累加的」という特殊な特徴を持つ名詞や動詞は、それらが表す対象を捉える視点が、名詞と動詞で異なっている。分割不可能で累加的な集合名詞は、対象を外側の視点から見る名詞であると理解される。例えば「水域」は、「水」の積み重ねであり、「水」そのものは内側の視点から見られ、その境界が意識されない。しかし、一つの「水域」としては、境界が区切られ、その全体を外側の視点から見るべきものとして理解される。一方で、同じく分類不可能で累加的である反復相の動詞は、対象を内側の視点から見る動詞であると理解される。例えば「撫でさする」は、「さっと撫でる」の積み重ねであり、それ自体は外側の視点から見られる、ひとまとまりの事象である。しかし「撫でさする」という事象になると、開始点や終了点が明確にされない。このように、「分類不可能かつ累加的」な名詞や動詞は、外側の視点から見るか、内側の視点から見るかということが異なっている。ただしこれらは、それぞれの品詞において無標なものに付随するという点では一致している。

Leiss (1992, 2000) による、分割可能性と累加性を基準とした可算名詞／質量名詞あるいは完了相の動詞／未完了相の動詞の対立と集合名詞や反復相の動詞の扱いをまとめると、図 3、4 のように表せる。

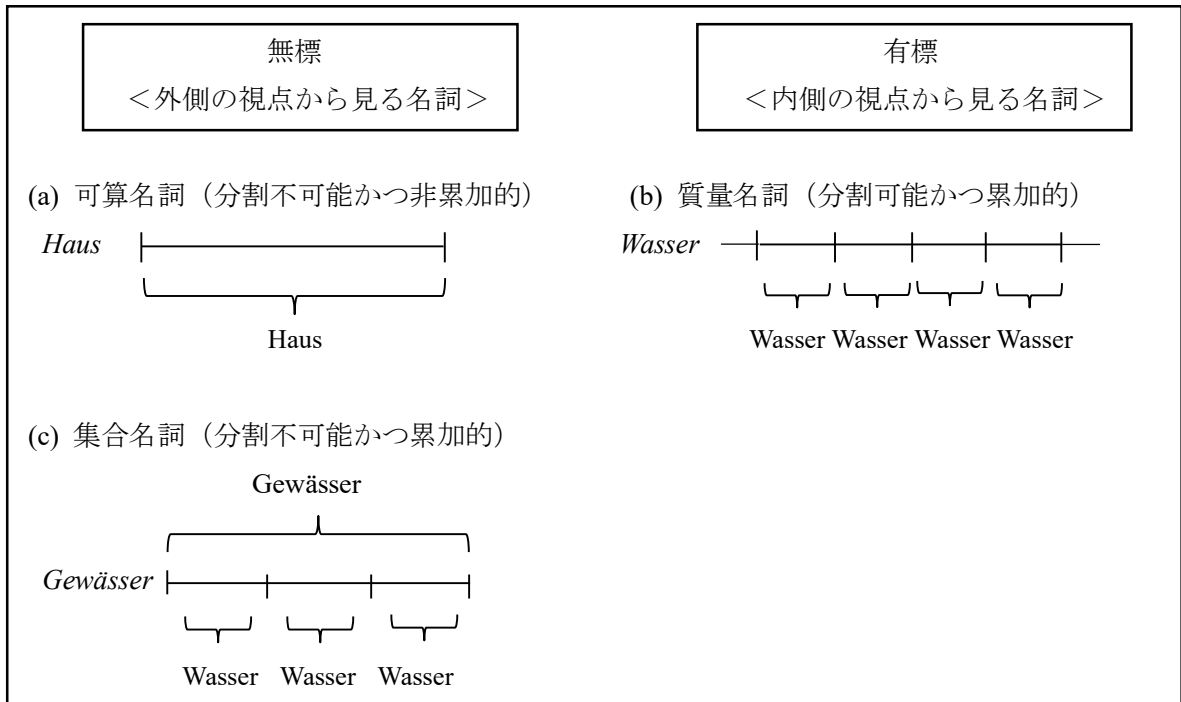


図 3 可算／質量名詞の典型的な認識のイメージ (Leiss 1992: 50, 2000: 245 を参考に)

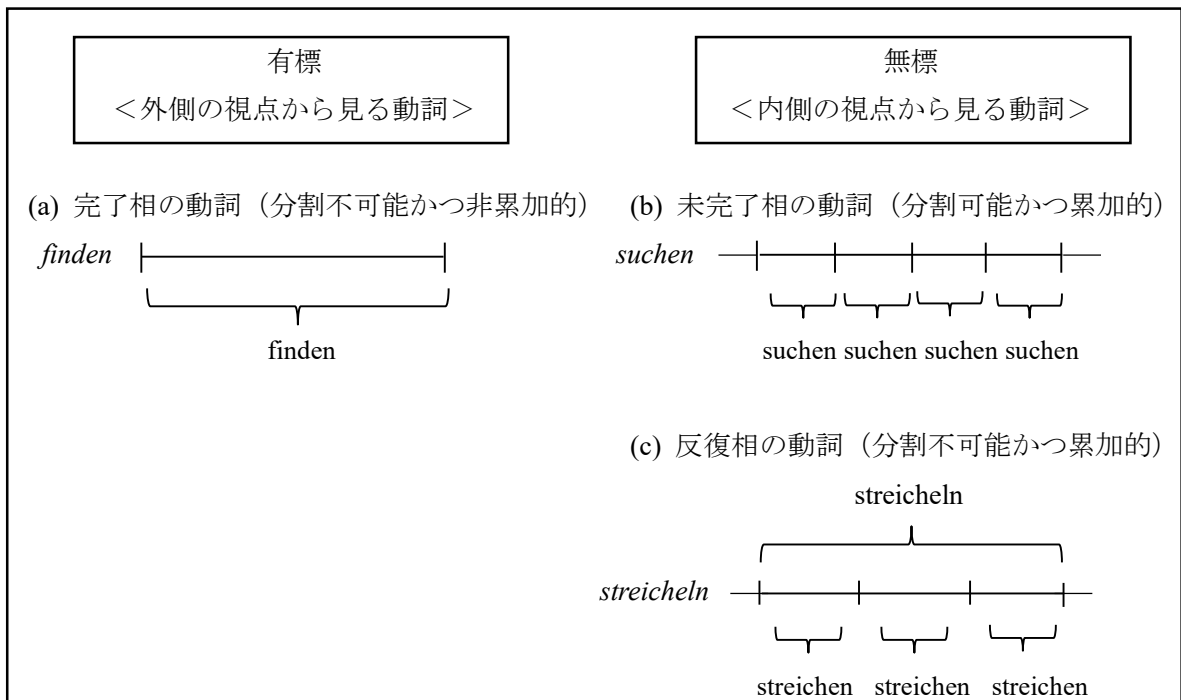


図 4 完了相／未完了相の動詞の典型的な認識のイメージ (Leiss 1992: 48, 2000:245 を参考に)

2.3.3 有界性と語彙的アスペクト

2.3.1 で確認したように、Ehrich (1991) によれば、ドイツ語の名詞には可算／質量という対立が、動詞には終結相／非終結相の対立があり、これらは全体的／累積的かという共通の基準で分類できる。また、2.3.2 で確認したように、Leiss (1992, 2000) によれば、ドイツ語の名詞には可算／質量という対立が、動詞には完了相／未完了相という対立があり、これらは分割可能性と累加性の組み合わせという共通の基準で分類できる。名詞の対立と動詞の対立に共通する基準（全体的／累積的、分割可能性と累加性の組み合わせ）は、Ehrich (1991), Leiss (1992, 2000) のどちらにおいても、対象を外側の視点から見る／内側の視点から見るという観点の違いであると説明されている。対象を外側から見るか内側から見るかという視点の対立を、本稿では以降、池上 (1981, 2006) の用語を借りて有界性の対立（有界的／無界的）と表現する。²⁶

ところで、Ehrich (1991) のいう動詞の対立（終結相／非終結相）と、Leiss (1992, 2006) のいう動詞の対立（完了相／未完了相）はどちらも基本的に、文法的な表現手段によるアスペクトではなく、動詞（句）が表す事象の内的な時間構成に焦点を当てた、語彙的アスペクトの対立である。

語彙的アスペクトの分類に関しては、Vendler (1967) による述語の4分類（状態、活動、達成、到達）がその先駆的研究である。この4分類は、ある事象が静的か否か、つまり時間の経過に伴って状態変化するかどうか（*stative/dynamic*）、持続的か瞬間的か（*durative/punctual*）、内在的な終了点を持つかどうか（*telic/atelic*）という基準から区別される。例えば、*be in Copenhagen*（コペンハーゲンにいる）、*believe in ghosts*（幽霊を信じている）などの動詞（句）で表されるのが状態、*stroll in the park*（公園の中で散歩する）、*laugh*（笑う）などの動詞（句）で表されるのが活動、*build a bridge*（橋を建てる）、*walk to school*（歩いて学校へ行く）などの動詞（句）で表されるのが達成、*leave the house*（家から出る）、*win a race*（レースに勝つ）などの動詞（句）で表されるのが到達である。

²⁶ 有界性の概念は、名詞や動詞の語彙的カテゴリーの対立だけでなく、文法的なカテゴリーの対立や、個別言語の傾向の対立とも関わりを持つことが、Leiss (2000) や池上 (1981, 2006) で示唆されている。例えば池上 (1981, 2006) は、(i), (ii) のような例を挙げ、日本語が「ナル型指向」「過程重視」であるのに対し、英語は「スル型指向」「結果重視」であることから、日本語を英語に直訳すると意味的に矛盾が生じることがあるとしている。日本語の「燃やす」は実際に対象物が燃えたことを含意しない、つまり結果を含意しないので無界的な動詞、英語の *burn* は結果が含意されるので有界的な動詞である ((i), (ii) は池上 (1981: 266) による)。

(i) 燃やしたけれど、燃えなかった。

(ii) *I burned it, but it didn't burn.

Vendler の述語の 4 分類	静的か否か (static)	持続的か (durative)	終了点を持つか否か (telic)
状態 (state)	+	+	-
活動 (activity)	-	+	-
達成 (accomplishment)	-	+	+
到達 (achievement)	-	-	+

表 1 Smith (1997:20) による Vendler の語彙的アスペクトの分類と特徴²⁷

Ehrich (1991: 451) のいう終結相／非終結相の対立は、Vendler (1967) の分類でいう達成・到達／状態・活動の対立に対応する。一方、Leiss (1992, 2000) では、完了相／未完了相の対立と Vendler (1967) の述語の 4 分類との対応は明言されていない。しかし、限界的な生起の動詞 (Event (telic) verbs) と非限界的な過程の動詞 (Process (atelic) verbs) の区別を論じた Bach (1981) の基準を参考に行っていることや、Leiss (1992, 2000) で挙げられている例などから、達成・到達が完了相、状態・活動が未完了相に対応していると判断できる。これらのことから、Ehrich (1991) と Leiss (1992, 2000) のいう動詞の語彙的アスペクトの対立 (終結相／非終結相、完了相／未完了相) は、どちらも同じ対立 (達成・到達／状態・活動) を指していると思われる。この対立は、動詞 (句) が表す事象が内在的な終了点を持つかどうか (telic/atelic) という点で区別される。

以上をまとめると、2.3.1 と 2.3.2 から以下のことが確認できる：有界性という基準によって、ドイツ語の名詞に内在する可算／質量という語彙的カテゴリーの対立と並行して、動詞に内在する達成・到達／状態・活動という語彙的カテゴリーの対立を捉えることができる。²⁸

2.3.4 存在論的な出来事・状態の区別と語彙的アスペクト

ところで、2.1.2 において、本稿でいう「事象」は時間軸に沿った展開のある「出来事」と、時間軸に沿った展開のない「状態」に分かれることが確認された。この区別を表 1

²⁷ Smith (1997) では Vendler の 4 分類に、knock (ノックする)、cough (咳をする) などの単一相 (semelfactive) の事象を加えている。単一相の事象は、[-static], [-durative], [-telic] という特徴を持つ。単一相の事象は、それ単独では終了点があるようにも思えるが、進行形にすると動作が繰り返し行われると解釈され、その際終了点が明確でないことから [-telic] と判断している。

²⁸ また、このような動詞の語彙的なアスペクトの対立は、名詞の文法的な数の対立 (単数／複数) と、相互に作用する。例えば、動詞の項となる名詞が表すモノの数量的限定性が、動詞句全体が表す事象のアスペクト的特徴の決定に関与する。例 (i), (ii) では同じ動詞 smoke (喫煙する) が使われているが、目的語の名詞の有界性の違い (数量的に限定されているか否か) により、動詞句の有界性の違い (終了点のある事象として捉えるか否か) が異なっている。この観点の議論として、Smith (1997), Jackendoff (1991), Verkuyl (1993) なども参照のこと ((i), (ii) は Smith (1997: 4) による)。

(i) Edward smoked cigarettes. (atelic) (エドワードは煙草を吸う。)

(ii) Edward smoked a cigarette. (telic) (エドワードは 1 本の煙草を吸う。)

の Vendler (1967) の述語の 4 分類に当てはめると、stative/dynamic の基準が当てはまり、出来事（活動・達成・到達）と状態が区別される。このことから、語彙的アスペクトの対立は、telic/atelic の対立ではなく、stative/dynamic を考えるべきだとも思われるかもしれない。確かに、状態動詞（stative verbs）と動態動詞（dynamic verbs）の区別は、例えば英語では進行形の可否という統語的な現象や、進行形の意味の違いという意味的な違いに反映されることから有意な分類である（詳しくは Langacker (1991, 2008) を参照のこと）。しかし、進行形がないドイツ語では必ずしもそうとは言いきれない。むしろドイツ語では、アスペクトの語彙的な対立の表現として、schlafen（眠っている）や laufen（走る）のような無標の基礎動詞に接頭辞を付けて、einschlafen（寝入る）や anlaufen（走り出す）のような有標の動詞を派生させる形態論的な方法があることが知られている。そのため、名詞の語彙的カテゴリーの対立との対比という点では、Leiss (1992, 2000) のいう動詞の有標性に従い、無標な動詞（状態・活動）を、有標な動詞（達成・到達）と区別して考えることが適切だと思われる。

一方で、ドイツ語においても状態と活動は、意味的にだけでなく、統語的にも区別が可能である。例えば Maienborn (2003: 59-61) によると、活動動詞から成る文は、(59) のように das geschah während ...（それは…の間に起こった）と前方照応的に参照することができる。一方、状態動詞から成る文は、(60) のように das geschah während ... という文を続けられない ((59), (60) は Maienborn (2003:59-60) による)。²⁹ このようなことから、無界の事象としてまとめられる状態と活動の区別にも注意を払うべきだと思われる。

- (59) Shirin spielte Klavier. Das geschah während ...
 Shirin-NOM played-3SG piano-ACC that-NOM occurred-3SG while
 シリンはピアノを弾いた。それは…の間に起こった。
- (60) a. Jürgen schlief. *Das geschah während ...
 Jürgen -NOM slept-3SG that-NOM occurred-3SG while
 ユルゲンは眠っていた。*それは…の間に起こった。
- b. Cathrine hasste Mozart-Arien. *Das geschah während ...
 Cathrine-NOM hated-3SG Mozart arias-ACC that-NOM occurred-3SG while
 カトリーネはモーツァルトのアリアが嫌いだった。*それは…の間に起こった。

²⁹ 3.1.5 で取り上げるように、(60a) の schlafen（眠っている）と (60b) の hassen（嫌っている）を Maienborn (2003) では性質が異なる状態として区別している。しかしここでは、どちらも (59) の Klavier spielen（ピアノを弾く）という出来事を表す動詞句と統語的に異なる振る舞いをするという点に注目し、(60a, b) をどちらも同じ状態動詞としてまとめて扱っている。

2.4 本章のまとめ

本章では、ドイツ語形容詞が項に取る事象に関して、その存在論的なカテゴリーと統語的な表現形式をまとめた (2.1 及び 2.2)。その際、同じく形容詞が項に取りうる、モノや命題と対比して事象を定義づけた。さらに、「有界性」という基準で名詞と動詞、ひいてはモノと事象が並行して捉えられることが確認された (2.3)。

事象は、存在論的には人や物といったモノと同じく個体として扱われる。日常的に「モノ」と「コト」の違いは「人や物」と「事象や命題」の違いとして捉えられるが、存在論的には「個体すなわちモノ (人や物) や事象」と「命題」の違いとして扱われる。モノと事象は、同じ個体のカテゴリーに属するが、時間との関係が異なっている。事象は時間軸をもつ個体である。さらに、事象は時間軸に沿った展開の有無により、出来事と状態に分けられる。

また、モノと事象は統語的な表現形式の上でも共通点があり、どちらもドイツ語では名詞で表しうる。ただし、モノが主に名詞で表されるのに対し、事象は主に述語 (動詞単体あるいは動詞句) で表される。そのため、事象は動詞 (句) の名詞化や *zu* 不定詞句などによっても表される。これらのことから、ドイツ語形容詞が事象を項に取る際の統語環境や意味環境を調査するにあたって、形容詞がモノを項に取る際と対比することが重要であると考えられる。

さらに、主にモノを表す名詞には、語彙的カテゴリーの対立として、可算名詞／質量名詞の対立がある。これは主に事象を表す動詞 (句) の語彙的カテゴリーの対立である達成相・到達相動詞／状態相・活動相動詞の対立と並行して捉えられる。この際、両者に共通する分類基準として「有界性」が挙げられる。有界性の対立は、対象を外側の視点から限界のあるまとまりとして捉えるか (有界的)、内側の視点から限界のないものとして、あるいは限界に焦点を当てずに捉えるか (無界的) ということである。このことから、形容詞の項となるモノと事象を対比するにあたって、モノとは異なり時間軸を持つ事象に対しては、その時間構成に焦点を当てた語彙的アスペクトの対立 (達成・到達／状態・活動) に注目するべきだと考えられる。さらに、事象の下位分類である出来事と状態に関しては、どちらも無界的な事象である、状態と活動の区別にも注目すべきであると思われる。

3 形容詞と、形容詞が項に取る事象の関係

前章では、形容詞が項に取る対象としての事象を取り上げ、それが存在論的にはモノと同じ個体のカテゴリーに属すること、一方で、モノや個体とは異なるカテゴリーに命題というカテゴリーがあることを確認した。第1章で確認したように、形容詞はモノ、事象、命題のどれも項に取りうる。本章では、特に事象を項に取るドイツ語形容詞にどのようなものがあり、形容詞と事象の間にどのような統語的、意味的關係があるのかを、先行研究を踏まえてまとめる。3.1 では形容詞が付加語的、述語的に用いられている場合について、3.2 では形容詞が副詞的に用いられている場合について取り上げる。

3.1 付加語的、述語的な形容詞と事象

ドイツ語形容詞は典型的には付加語的に、そして（あるいは）述語的に用いられる。形容詞が付加語的、述語的に用いられる際に結びつく語句と形容詞の統語的、意味的な關係から、事象を項に取る形容詞にはどのようなものがあるのかをまとめる。³⁰

3.1.1 Vendler (1968) による英語形容詞の分類

Vendler (1968: 85-108) は、形容詞が付加語的、述語的に結びつく名詞の種類や、その名詞が表示する対象と形容詞の意味關係の違いに応じて、英語形容詞を分類している。

形容詞の分類に先立ち、Vendler (1968: 32-53) は、名詞化を「that 節」「whether 節」「wh...節」「文相当の動名詞」「動詞派生名詞」の5タイプに分類している。³¹ 特に重要なのは「that 節」「文相当の動名詞」「動詞派生名詞」の3タイプである。例を挙げれば、(61) の *that he died* (彼が死んだこと) は「that 節」で、*that* に文が導かれる。(62)

³⁰ なお、ドイツ語で形容詞の付加語的用法と呼ばれるものは、英語では限定用法 (attributive use) と、述語的用法は叙述用法 (predicative use) と訳されるのが一般的だが、本稿では英語の話題であっても、ドイツ語にあわせて付加語的、述語的という用語で表記している。

³¹ 名詞化の名称は筆者による。Vendler (1968) による名詞化の分類形式は以下のとおりである。

(a) NV+ → *that* NV+ (N を主語、V を述語とする文が、*that* NV の形式で名詞化される。例：*He died.* → *that he died*)

(b) NV+ → *whether* NV+ (N を主語、V を述語とする文が、*whether* NV の形式で名詞化される。例：*He died.* → *whether he died*)

(c) S (some...) → n (wh...) (some... を含む文が、wh...節で名詞化される。例：*Someone killed the grocer.* → *who killed the grocer*)

(d) NV+ → N's Ving+ (N を主語、V を述語とする文が、N's Ving の形式で名詞化される。Ving は接尾辞-ing による動名詞を指す。例：*John had won the race.* → *John's having won the race*)

(e) NV → N's Vn など (N を主語、V を述語とする文が、N's Vn の形式で名詞化されるものなど。Vn は動詞派生名詞を指す。例：*He sang the Marseillaise.* → *his singing of the Marseillaise*)

の John's having won the race (ジョンがそのレースに勝ったこと) は「文相当の動名詞」である。動詞に接尾辞-ing を付けた動名詞で、必要であれば the race のような目的語を動名詞に続けて表示できる。さらに、動詞が表す動作の主体が、人称代名詞や固有名詞の所有格で表される。最後に、(63) の his singing of the Marseillaise (彼のマルセイエーズの歌唱) や the singing of the Marseillaise (そのマルセイエーズの歌唱) は「動詞派生名詞」である。このタイプの名詞化には、見かけ上は「文相当の動名詞」と同じ接尾辞-ing による名詞化も含まれるが、「文相当の動名詞」とは異なり、the Marseillaise のような目的語が必要な場合、名詞化した動詞に続けて表示することができず、前置詞 of を伴わなければならない。³² さらに、「文相当の動名詞」とは異なり、「動詞派生名詞」は主体表示の必要がなく、動詞派生名詞の前には冠詞を置くことができる。また、「動詞派生名詞」は元の文から時制や法が失われた名詞化である。

(61) That he died surprised me. (彼が死んだことは私を驚かせた。)

(62) John's having won the race surprised me.
(ジョンがレースに勝ったことは私を驚かせた。)

(63) a. His singing of the Marseillaise was loud.
(彼のマルセイエーズの歌唱はうるさかった。)

b. I heard the singing of the Marseillaise.
(私はそのマルセイエーズの歌唱を聞いた。)

Vendler (1968: 45) によると、この 3 タイプの中で、「that 節」がより文に近い性質を、「動詞派生名詞」がより名詞に近い性質を持っている。なお、2.2 で確認したように、「that 節」「文相当の動名詞」は本稿でいう「命題」に、「動詞派生名詞」は「事象」に相当すると考えられる。

このような「that 節」「文相当の動名詞」「動詞派生名詞」という名詞化の区別を手掛かりに、Vendler (1968: 85-108) は英語形容詞を A₁ から A₉ までの 9 タイプに分類している。以下、このタイプ分類を概観する。

A₁ の形容詞は、the red balloon (その赤い風船) の red のようなもので、付加語的に本来的な名詞の前に置くことができる。この際、形容詞はその名詞が表示するモノの性質を表す。例えば the red balloon (その赤い風船) では、red が balloon の付加語となり、その表示する「風船」が「赤い」ということを表している。このような形容詞と名詞の意味関係は、(64a) のように、「that 節」「文相当の動名詞」「動詞派生名詞」のどのタイプの名詞化も用いずに説明される。the red balloon (その赤い風船) の例でいえば、red と balloon の間の関係は、balloon which is red (赤い風船) なのである。そして、このよう

³² Vendler (1968: 46) には、接尾辞-ing によらない動詞の名詞化の例として、speech (演説)、death (死) などが挙げられている。

な形容詞と名詞の関係は、(64b) のような本来的な名詞を主語にした述語文で表される。英語形容詞の多くは、このタイプに当てはまるとされている。

- (64) a. the *red* balloon ← balloon which is red (その赤い風船←赤い風船)
b. The balloon is *red*. (その風船は赤い。)

A₂の形容詞は尺度形容詞で、*short* に対しては *long* など、対になる形容詞が存在する。A₁と同じく、付加語的に本来的な名詞の前に置かれ、その名詞が表示するモノの性質を表す。ただし、その性質が相対的であるという点で、A₁とは異なる。例えば *the short python* (その短いニシキヘビ) では、*short* が *python* の付加語となり、その表示する「ニシキヘビ」が「短い」ということを表している。しかし、*the short python* が表すのは「ニシキヘビとしては短いヘビ」であり、ニシキヘビそのものは、ヘビとしてはむしろ長い部類である。このような形容詞と名詞の意味関係もまた、(65a) に見られるように、「that節」「文相当の動名詞」「動詞派生名詞」のどのタイプの名詞化も用いずに説明される。*the short python* (その短いニシキヘビ) の例でいえば、*short* と *python* の間の関係は、*python which is short for a snake* (ヘビとしては短いニシキヘビ) なのである。また、A₂の形容詞は尺度を表す名詞によっても特徴づけられる。*the short python* (その短いニシキヘビ) の例でいえば、*short* と *python* の間の関係は、尺度を表す名詞 *length* (長さ) を用いて、(65b) のように説明される。

- (65) a. a *short* python ← python which is short for a snake
(短いニシキヘビ←ヘビとしては短いニシキヘビ)
b. a *short* python ← python whose length is short
(短いニシキヘビ←長さが短いニシキヘビ)

なお、A₁の *the red balloon* (その赤い風船) は *balloon whose color is red* (色の赤い風船) と書き表せる点で、一見 A₂と似ている。しかし *color* (色) は尺度を表す名詞ではない。Vendler (1968: 96) によれば、対になる形容詞のうちで無標なものを取り上げ、「how long?» のように程度を尋ねられるか否かという点で、A₂は A₁と異なっている。

A₃の形容詞は、*the fast horse* (その速い馬) の *fast* のようなもので、付加語的に本来的な名詞の前に置くことができる。ただしこの際、形容詞はその名詞が表示するモノの性質を表すのではなく、それが行う動作や行為といった事象の性質を表す。例えば *the fast horse* (その速い馬) では、馬そのものではなく、馬の走りが速いのである。このような形容詞と名詞の意味関係は、(66a) のように、「動詞派生名詞」を用いて説明される。*the fast horse* (その速い馬) の例でいえば、*fast* と *horse* の間の関係は、*horse whose running is fast* (走りが速い馬) なのである。また、A₃は A₁や A₂とは異なり、「動詞派生名詞」

を主語に、述語的に用いることができる。この際、「動詞派生名詞」によって表される事象の主体は、(66b) の *his* のように、人称代名詞や固有名詞の所有格で現れる。

- (66) a. *the fast horse* ← *horse whose running is fast* (その速い馬←走りが速い馬)
b. *His running of the race is fast.* (彼のそのレースでの走りは速い。)

さらに、A₃の形容詞は (67a) の *careful* (注意深い) のように、付加語的に動詞派生の動作主名詞の前に置くことができる。動作主名詞は人を表すが、もとの動詞が表示する事象の意味も含意している。このような場合、形容詞は事象の性質を表しているというよりも、(67b) のように前置詞 *at* あるいは *in* と結びつく「動詞派生名詞」(-ing に限る) が表示する事象を念頭に置いて、人の性質を表していると考えられる。

- (67) a. *He is a careful observer.* (彼は注意深い観察者だ。)
b. *He is careful in observing.* (彼は観察の際に注意深い。)

A₄の形容詞は、*the easy text* (その簡単な文章) の *easy* のようなもので、付加語的に本来的な名詞の前に置くことができる。ただしこの際、形容詞はその名詞が表示するモノの性質を表すのではなく、それに対して行われる動作や行為といった事象の性質を表す。例えば *the easy text* (その簡単な文章) では、文章そのものではなく、文章を読むことが簡単なのである。このような形容詞と名詞の意味関係は、(68a) のように、「動詞派生名詞」を用いて説明される。*the easy text* (その簡単な文章) の例でいえば、*easy* と *text* の間の関係は、*text whose reading is easy* (読むのが簡単な文章) なのである。またこの関係は、(68b) の *to read* のような *to* 不定詞句を用いても表されうる。さらに、A₄は A₃と同じく、「動詞派生名詞」を主語に、述語的に用いることができる。ただし、A₃とは異なり、「動詞派生名詞」によって表される事象の主体を、人称代名詞や固有名詞の所有格で表すことができない。主体の表示は必須ではなく、必要であれば、(68c) の *for him* のように前置詞 *for* とともに付け加えることができる。さらに、この意味関係は、(68d) の *to read* のような *to* 不定詞句を用いても表されうる。

- (68) a. *the easy text* ← *text whose reading is easy* (読むのが簡単な文章)
b. *the easy text* ← *text which is easy to read* (読むのに簡単な文章)
c. *The reading of the text is easy (for him).* (その文章を読むのは (彼には) 簡単だ。)
d. *(For him) it is easy to read the text.* ((彼には) その文章を読むのは簡単だ。)

A₃と A₄はよく似ているが、(66a), (68a-b) を比べると、形容詞が修飾する名詞が表示するモノが、事象に主体として参与するか、客体として参与するかという点が異なっ

いる。さらに A₃ と A₄ は、A₁ や A₂ とは異なり、事象を表示する「動詞派生名詞」を主語に、述語的に用いられるという点で共通している。しかし、(66b), (68c-d) を比べると、事象の主体の表示が必須か否かという点で、A₃ と A₄ は異なっている。

A₅ タイプの形容詞はあまり多くない。また、この形容詞は付加語的に用いられることが稀である。たいていは (69a) の *eager* (熱心な) のように述語的に用いられ、人を表示する名詞を主語に取る。A₅ の形容詞は、(69a) の *to join the class* (そのクラスに参加する (こと)) のような *to* 不定詞句で表される動作や行為といった事象に関連して、主語が表す人の性質を表している。(69a) では、「彼」はただ熱心なのではなく、そのクラスに参加することに関して熱心なのである。さらに、A₅ タイプの形容詞は、付加語的に本来的な名詞の前に置かれることもある。この際の形容詞と名詞の意味関係は、(69b) の *to succeed* (成功する (こと)) のような *to* 不定詞句を用いて表されうる。例えば (69b) の *an eager man* (熱心な男) は、男がただ熱心なのではなく、成功するなどの行為に対して熱心であることを意味している。

- (69) a. He is *eager* to join the class. (彼はそのクラスに参加するのを熱望している。)
b. *an eager man* ← man who is eager to succeed (熱心な男←成功するのに熱心な男)

A₅ の (69b) は、付加語的用法で本来的な名詞の前に置くことができ、さらにその際の名詞と形容詞の関係を *to* 不定詞句で表すことができるという点で、A₄ の (68b) と似ている。ただし、(68b) と (69b) を比べると、A₅ では付加語的に結びつく名詞が *to* 不定詞句で表される事象の主体であるのに対し、A₄ では形容詞と結びつく名詞が *to* 不定詞句で表される事象の客体であるという点で、両者は異なっている。

ところで、A₃, A₄, A₅ は形容詞と名詞の関係を「動詞派生名詞」を用いて説明されるという点が共通しているが、A₃, A₄ は (66b) や (68c) のように「動詞派生名詞」を主語とした形容詞述語文を作りうるのに対し、A₅ は (69a) のように本来的な名詞を主語とした形容詞述語文しか作れないことから、A₅ の形容詞は事象を項に取りながらも、事象の性質を表す A₃, A₄ とは異なり、あくまで人の性質を表していると考えられる。

A₆, A₇, A₈, A₉ の形容詞は共通して、主に述語的に用いられる。

A₆ の形容詞は、(70a) の *stupid* (馬鹿な) のように述語的に用いられ、人を表示する名詞を主語に取り、*to take that job* (その仕事に就くこと) のような *to* 不定詞句を伴いうる。この点で、A₆ は A₅ とよく似ている。ただし、A₅ とは異なり、A₆ の *to* 不定詞句が表す動作や行為は、すでに行われているものとみなされる。また、A₆ の形容詞は、(70b) の *having taken that job* (その仕事に就いたこと) のような時制を含んだ「文相当の動名詞」や、(70c) の *that he took that job* (彼がその仕事に就いたこと) のような「that

節」を主語とする述語文にも現れる。³³ これらのことから、A₆は、命題の性質を表しているのだと思われる。つまり、形容詞 *stupid* は「ジョンがその仕事に就いた」という命題が「馬鹿である」ということを、その命題が事実であると判断したうえで表しているのだと考えられる。さらに、A₆の形容詞は、(70d) のようにも用いられる。この形式は (68d) (For him) it is easy to read the text. ((彼には) その文章を読むのは簡単だ。) のような A₄ の形式に似ているが、事象の主体が *for* ではなく *of* と結びつく点が A₄ とは異なる。

- (70) a. John is *stupid* to take that job. (その仕事に就くなんてジョンは馬鹿だ。)
 b. Having taken that job was *stupid* of him.
 (その仕事に就いたことは彼にとって馬鹿なことだ。)
 c. That he took that job was *stupid* of him.
 (その仕事に就いたことは彼にとって馬鹿なことだ。)
 d. It is *stupid* of John to take that job.
 (その仕事に就くのはジョンにとって馬鹿なことだ。)

A₇の形容詞は、(71a) の *possible* (可能だ) のように、*his running the race* (彼がそのレースで走ること) のような動名詞に目的語を直接続ける「文相当の動名詞」や、(71b) の *that he runs the race* (彼がそのレースで走ること) のような「*that* 節」を主語とする述語文に現れる。このような「文相当の動名詞」や「*that* 節」は命題を表すため、A₇は A₆の形容詞と同様に、命題の性質を表す形容詞であると考えられる。

- (71) a. His running the race is *possible*. (彼がそのレースで走ることは可能だ。)
 b. That he runs the race is *possible*. (彼がそのレースで走ることは可能だ。)

A₈の形容詞は一般に、A₇と同じく「文相当の動名詞」や「*that* 節」を主語とする述語文に現れる。つまり、A₇と同じく A₈の形容詞も命題の性質を表す。A₇との違いは、形容詞が「誰にとって」当てはまる性質を表しているのかを、(72) のように前置詞 *for* を用いて表すことができるという点にある。

- (72) a. His running the race is *useful* (for me).
 (彼がそのレースで走ることは、(私にとって) 役立つ。)
 b. That he runs the race is *useful* (for me).
 (彼がそのレースで走ることは、(私にとって) 役立つ。)

³³ ただし Vendler (1968: 104) によれば、このように「文相当の動名詞」や「*that* 節」を主語とする例は、A₆の形容詞の現れる構文として典型的なものではない。

さらに A₇ や A₈ は稀に、(73a) のように「動詞派生名詞」を主語とする述語文に現れうるという点で A₄ と似ている。しかし、その文を (73b) のように命題を表す「that 節」の文に書き換えられるという点で、A₄ とは異なっている。例えば A₄ の形容詞 *difficult* は、(74a) のように「動詞派生名詞」を主語とする述語文に現れうるが、その文を (74b) のように命題を表す「that 節」の文に書き換えることはできない。

- (73) a. The solution of the problem is *impossible* (for us).
(その問題の解決は (私たちには) 不可能だ。)
- b. It is *impossible* that we (can) solve the problem.
(私たちがその問題を解く (解ける) ことは不可能だ。)
- (74) a. The solution of the problem is *difficult* (for us).
(その問題の解決は (私たちには) 難しい。)
- b. *It is *difficult* that we (can) solve the problem.
(*私たちがその問題を解く (解ける) ことは難しい。)

最後に A₉ の形容詞は、(75) のように、A₇ と同じく「文相当の動名詞」や「that 節」を主語とする述語文に現れる。つまり、A₇ と同じく A₉ の形容詞も命題の性質を表す。A₉ の形容詞は、(73a) のような「動詞派生名詞」を主語とする述語文に現れないという点で、A₇ と異なっている。

- (75) a. His running the race is *probable*. (彼がそのレースで走ることはありうる。)
- b. That he runs the race is *probable*. (彼がそのレースで走ることはありうる。)

Vendler (1968: 107-108) は以上のように英語形容詞を分類したうえで、形容詞によっては複数のタイプに属すものもあるとしている。例えば *good* は A₁, A₃, A₄, A₆ のどれにも属する形容詞である。このような多義の形容詞は、統語的には同じように付加語的に名詞の前に現れていても、どのタイプの形容詞であるかによって意味の解釈が異なるとされる。例えば *a good dancer* (ある良い踊り手) を考えたとき、*good* は A₁ に属するのであれば (76a) のように「善良な」という意味に解釈される。一方、*good* が A₃ に属する場合には (76b) のように「上手な」という意味に解釈される。

- (76) a. *a good dancer* ← *dancer who is good*
(良い踊り手 ← 善良な踊り手)
- b. *a good dancer* ← *dancer whose dancing is good*
(良い踊り手 ← 踊りが上手な踊り手)

Vendler (1968) による英語形容詞の分類は、述語文で形容詞 (A) が項に取る名詞が、モノを表示する「本来的な名詞 (N)」か、事象を表示する「動詞派生名詞 (a)」か、命題を表示する「文相当の動名詞 (b)」や「that 節 (c)」かという観点から、表 2 のようにまとめられる。A₁, A₂ は (a), (b), (c) のどの名詞化も述語文で項に取らないことから、意味的にはモノを項に取る形容詞だといえる。A₃, A₄ は述語文で事象を表示する (a) を項に取ることはあるが、命題を表示する (b), (c) を項に取ることはないことから、意味的には事象を項に取る形容詞だといえる。A₅ は (a), (b), (c) の名詞化も項に取らないが、to 不定詞句を項に取る。A₅ が項に取る to 不定詞句には時制や法は含まれず、事象を表していると考えられるため、A₃, A₄ と同じく意味的には事象を項に取る形容詞だといえる。A₆, A₇, A₈, A₉ は述語文で命題を表示する (b), (c) を項に取ることから、意味的には命題を項に取る形容詞だといえる。

	形容詞例	述語文での構文		形容詞の項の存在論的カテゴリー
A ₁	red	N is A		モノ
A ₂	short	なし ³⁴		モノ
A ₃	fast	(a) is A N is A at/in (a) ※この際 (a) は-ing に限る		事象
A ₄	easy	(a) is A (for N) (for N) it is A to INF		事象
A ₅	eager	N is A to INF		事象
A ₆	stupid	N is A to INF it is A of N to INF	稀に (b) is A of N (c) is A of N	命題
A ₇	possible	(b) is A (c) is A	稀に (a) is A (for N) it is A (c)	命題
A ₈	useful	(b) is A (for N) (c) is A (for N)	稀に (a) is A (for N) it is A (c)	命題
A ₉	probable	(b) is A (c) is A		命題

表 2 Vendler (1968) による英語形容詞の分類と、対応する存在論的カテゴリー

³⁴ Vendler (1968) は A₂ の形容詞が述語文で取る項に関して、どのような名詞がふさわしいか明言していない。(65b) を参考にすると、(i) のような「尺度名詞 is A」という構文が A₂ の述語文の構文として想定される。少なくとも、命題や事象を表す名詞化を項に取るとは考えられないことから、表 2 では A₂ を「モノを項に取る形容詞」としてまとめた。
(i) The length of the python is *short*. (そのニシキヘビの長さは短い。)

ところで、Vendler (1968) では、(77) のように事象の性質を表している形容詞 *fast* (速い) と (78) のように事象を念頭に人の性質を表している形容詞 *careful* (注意深い) を同じ A₃ に分類しているが、*fast* が (78) のような N is A at/in (a) の構文で用いられるのか、反対に *careful* が (77) のような (a) is A の構文で用いられるのかに関しては言及していない。*fast* と *careful* を同じ種類の形容詞とみなせるかどうか、注意する必要があるように思われる。

(77) His running of the race is *fast*. (=66b) (彼のそのレースでの走りは速い。)

(78) He is *careful* in observing. (=67b) (彼は観察の際に注意深い。)

なお、Vendler (1968) は、A₁, A₃, A₄, A₆ のどれにも属する形容詞として *good* を挙げ、“a *good* dancer” (良い踊り手) の *good* が A₃ として解釈されるなら、それは「踊りが上手な踊り手」を意味するとしている。これは、A₃ の形容詞 *fast* を含む語句 “the *fast* horse” (速い馬) が「走るのが速い馬」を意味するのと同じ意味関係である。一方で、*fast* と同じ A₃ とされる形容詞 *careful* を含む語句 “a *careful* observer” (注意深い観察者) が「観察の際に注意深い」を表すように、*good* も「踊りの際に上手だ」を表すのかどうかにも言及しておらず、定かではない。*good* について、(82a) から (82b) のように書き換えることが可能であるにせよ、少なくとも N is A at/in (a) という構文は A₃ の形容詞の典型例とは考えられていないようである。³⁵

(79) the *fast* horse ← horse whose running is fast (=66a)

(その速い馬←走りが速い馬)

(80) a *good* dancer ← dancer whose dancing is good (=76b)

(ある良い踊り手←踊りが上手な踊り手)

(81) a. He is a *careful* observer. (=67a) (彼は注意深い観察者だ。)

b. He is *careful* in observing. (=67b) (彼は観察の際に注意深い。)

(82) a. He is a *good* dancer. (彼は上手な踊り手だ。)

b. ?He is *good* in dancing. (?彼は踊りの際に上手だ。)

Vendler (1968) が扱っているのは英語形容詞であり、ここで論じられていることがド

³⁵ (82b) の in を an に変えると “He is good at dancing.” (彼は踊るのが上手だ。) という文法的に可能な文になる。しかしこれは “be good at ~” が「～が上手だ」を意味する熟語表現であるためであり、あくまで *good* という形容詞においてはこの構文が可能であるにすぎない。この書き換えが可能であることが、N is A at (a) という構文が A₃ の形容詞全体で可能である、あるいはその典型例であることを意味するわけではない。

ドイツ語形容詞に必ずしも当てはまるとは限らない。この点には注意が必要であるが、英語形容詞を参考に、ドイツ語形容詞でも事象を項に取る形容詞には、おおまかに以下のような傾向があるのではないかと推測される。

- ① 述語的にも付加語的にも用いられうる
- ② 事象を表示する語句だけでなく、モノを表示する語句とも統語的に結びつきうる

①に関しては、A₅ (eager) のように、付加語的には用いられにくい形容詞もありうる。そのため、形容詞ごとの統語的な分布を確認する必要がある。

②に関しては、A₃ の例 *the fast horse* (その速い馬) の *horse* や、A₅ の例 *an eager man* (熱心な男) の *man* のような、ある事象に主体として関わるモノと結びつく形容詞と、A₄ の例 *the easy text* (その簡単な文章) の *text* のような、ある主体に客体として関わるモノと結びつく形容詞の区別がありうる。

さらに、A₃ (*fast*) は (a) is A の構文、A₄ (*easy*) は (a) is A (for N) の構文に現れる、事象に焦点を当てた形容詞である。一方、A₃ (*careful*) は N is A at/in (a) の構文、A₅ (*eager*) は N is A to INF の構文に現れるという、事象に主体として関わる「人」に焦点を当てた形容詞である。ドイツ語でも、事象を項に取る形容詞に、このような二つのタイプの形容詞があると思われる。あるいは、様々なタイプに属しうるとされた *good* のように、「事象」と「人」のどちらにも焦点を当てられる形容詞もあると思われる。

3.1.2 指示対象限定と指示内容限定

形容詞の付加語的用法と述語的用法には意味機能上の違いがあることが、Bolinger (1967), Quirk et al (1985) などによって指摘されている。Bolinger (1967) は付加語的用法の英語形容詞に関して、形容詞が関連する語の指示対象を限定する (*referent modification*) 機能と、指示内容を限定する (*reference modification*) 機能があるとしている。³⁶ 例えば (83a) の *drowsy* は *policeman* が指示する対象である人 (個体) としての「警察官」に言及し、その警察官が「眠たがっている」と述べている。つまり、*drowsy* は指示対象を限定する形容詞であり、具体的には「ヘンリー」が眠たがっていることを表している。一方、(83b) の *rural* は *policeman* が指示する「警察官である」という内容に言及し、その種類を「田舎の警察官である」と特定している。つまり *rural* は指示内容を限定する形

³⁶ Bolinger (1967) は *modification* という用語を用いているので、「限定」ではなく「修飾」とすべきかもしれない。しかし、形容詞による「修飾 (*modification*)」という用語はたいがい付加語的な形容詞の機能を指し、述語的な形容詞の機能は「叙述 (*predication*)」という用語で表されることが多い (例えば Croft (2001))。このような統語的な用法と、Bolinger (1967) のいう意味的な機能の混同を避けるため、本稿では *referent/reference modification* を「指示対象/指示内容の限定」と表記している。

容詞であり、「ヘンリー」が田舎の人であることを表しているわけではない。付加語的用法は指示対象の限定と指示内容の限定の双方の機能を持つのに対し、述語的用法は指示対象を限定する機能しかない。そのため、*drowsy* のような指示対象を限定する形容詞は、(83a) から (84a) のように、述語的に書き換えて同じ内容を表すことができるが、*rural* のような指示内容を限定する形容詞は、(83b) から (84b) のように書き換えることができない ((83), (84) は Bolinger (1967: 15, 22) による)。

- (83) a. Henry is a *drowsy* policeman. (ヘンリーは眠たがっている警察官だ。)
b. Henry is a *rural* policeman. (ヘンリーは田舎の警察官だ。)
- (84) a. The policeman is *drowsy*. (その警察官は眠たがっている。)
b. *The policeman is *rural*. (*その警察官は田舎の。)

形容詞そのものの意味により、指示対象あるいは指示内容の限定しかできないということは稀で、多くの形容詞は両方の機能で使用できる。ただし、付加語的に用いられる場合と述語的に用いられる場合では、異なった意味で解釈される形容詞も多い。(85a) の付加語的な *criminal* は指示内容を限定する機能で用いられ、*lawyer* が指示する「弁護士である」という内容に言及し、その種類を「刑事事件専門の弁護士である」と特定している。一方で、(85b) の述語的な *criminal* は指示対象を限定する機能で用いられ、*lawyer* が指示する対象である人（個体）としての「弁護士」（例えばジョンなど、特定の人）が犯罪者であることを表している ((85) は Bolinger (1967: 16) による)。

- (85) a. John is a *criminal lawyer*. (ジョンは刑事専門弁護士である。)
b. The lawyer is *criminal*. (その弁護士は犯罪者である。)

また、Bickes (1984) によれば、ドイツ語でも付加語的用法と述語的用法の間に同様の違いがある。つまり、ドイツ語形容詞も付加語的には指示対象限定と指示内容限定の両方の機能があり、かつ多くの形容詞はその両方の機能で使用できる。³⁷ 一方、述語的用法には指示対象を限定する機能しかない。従って、形容詞が付加語的に用いられている (86a) では、*stark* (強い) は *Raucher* が指示する特定の個体 (*das Individuum*)、つまりその語が指す特定の人という指示対象を限定して「力の強い喫煙者」を意味しているとも、「喫煙者であること」 („*ist Raucher*“) という指示内容を限定して「煙草をたくさん吸う人」を意味しているとも解釈できる。一方、述語的用法の (86b) は *stark* が指示対象を限定する、つまり「力の強い喫煙者」を意味しているとしか解釈できない。ただし Bickes (1984) は、付加語的用法では普通、指示内容を限定する機能での読み方 ((86a) では「煙

³⁷ Bickes (1984) は「指示対象」ではなく *Eigenschaftsträger* (性質の担い手)、「指示内容」ではなく *charakteristische Eigenschaft* (本質的性質) という用語を用いている。

草をたくさん吸う人」という解釈) が優先されるとしている ((86) は Bickes (1984: 89) による)。

- (86) a. *der starke Raucher*
 the-NOM strong-NOM smoker-NOM
 強い喫煙者 (←力の強い喫煙者/煙草をたくさん吸う人 (優先される解釈))
- b. *Der Raucher ist stark.*
 the-NOM smoker-NOM is-3SG strong
 その喫煙者は強い。(←その喫煙者は力が強い。)

3.1.3 「モノ」を表示する名詞に含まれる「事象」

3.1.2 で指摘されたような形容詞の意味解釈の違いは、近年では形容詞の統語的用法の違いの問題ではなく、形容詞と名詞の意味構造の問題として扱われている。

Larson (1998) は、Davidson の存在論的な「出来事」という概念を導入し、形容詞は、統語的に結びつく名詞が表す「モノ」と「事象 (出来事や状態)」のどちらの性質も表しうるとしている。例えば (87) の *dancer* は「踊り手」という人を意味するだけでなく、その人が行う「踊り」という出来事も意味しうる。そして、*beautiful* が意味的に「モノ」を叙述するのであれば (88a) のように、「出来事」を叙述するのであれば (88b) のように解釈される。(89) も同様に、*old* が意味的にピーターという「モノ」を叙述するのであれば (90a) の解釈が、友情という「状態」を叙述するのであれば (90b) の解釈が得られる ((87)~(90) は Larson (1998: 152) による)。³⁸

- (87) *Olga is a beautiful dancer.* (オルガは美しい踊り手だ。)
- (88) a. “*Olga is beautiful*” (“オルガは美しい”)
 b. “*Dancing is beautiful*” (“踊りは美しい”)
- (89) *Peter is an old friend.* (ピーターは老いた/古い友人だ。)
- (90) a. “*Peter is old*” (“ピーターは年寄りだ”)
 b. “*The friendship is old*” (“その友情は年月を経ている”)

³⁸ Larson (1998: 152) では、(88a, b) の解釈を (i a, b) の論理式で、(90a, b) の解釈を (ii a, b) の論理式で表している。Q は量化子、e は事象、C は形容詞が当てはまる範囲の対象の集合を指す (ただし論理式について、綴りの書き間違いだと思われる点は、筆者が書き換えている)。

- (i) a. $Qe[\text{dancing}(e, \text{olga}) \dots \text{beautiful}(\text{olga}, C)]$
 b. $Qe[\text{dancing}(e, \text{olga}) \dots \text{beautiful}(e, C)]$
 (ii) a. $Qe[\text{friendship}(e, \text{peter}) \dots \text{old}(\text{peter}, C)]$
 b. $Qe[\text{friendship}(e, \text{peter}) \dots \text{old}(e, C)]$

このように複数の解釈が可能であることは、3.1.1 で確認した Vendler (1968) の a good dancer の good が A₁ に属し「(人として) 善良な」を意味するとも、A₃ に属し「(踊りが) 上手な」を意味するとも解釈できることと、ほぼ同じである。ただし、Vendler (1968) の解釈では、形容詞が「事象」を叙述する際は“Dancing is beautiful”ではなく“Olga’s dancing is beautiful”のように、「事象」に主体として関わる動作主の表示が必要だと考えられている。形容詞が「事象」を叙述する際に、その事象に「モノ」が参与者として関わる必要があるのだろうか。例えば、「噴火」のような動作主に引き起こされるのではない事象に対して、それに fast や beautiful という性質を当てはめることはできるのだろうか。

ところで、(87)~(90) の英語形容詞の例は必ずしもドイツ語に同じように当てはまらない。Geuder (2000: 53) によれば、英語の beautiful dancer (美しい踊り手) で形容詞が「モノ」と「事象」のどちらの性質も表していると解釈されうるのに対し、ドイツ語の schöner Tänzer (美しい踊り手) では、普通は (91b) のように「モノ」の性質を表すのみ解釈され、「事象」の性質を表している、すなわち「美しく踊る踊り手」とは解釈され難い。このことは、Bickes (1984) が主張する「付加語的用法では普通、指示対象ではなく指示内容を限定する機能での読み方が優先される」という、形容詞の統語的機能に反している。さらに、ドイツ語でも形容詞によっては、付加語的用法で形容詞の意味が多義に取れるものもある。例えば (92b) のように、eleganten Tänzer (優雅な踊り手) では、形容詞が「モノ」と「事象」のどちらの性質を表しているとも解釈可能である ((91), (92) は Geuder (2000: 53) による)。³⁹ このことから、形容詞の意味解釈の限定やその有無は、形容詞の統語的な用法によって引き起こされるとは考え難い。

(91) a. *beautiful dancer*

b. ?*schöner Tänzer* (事象としては解釈し難く、モノとしては解釈が可能)

(92) a. *elegant dancer*

b. *eleganten Tänzer* (事象としてもモノとしても解釈が可能)

さらに、Larson (1998: 160-161) は (93) の例を挙げて、形容詞が「モノ」と「事象」のどちらの性質を表すのかが、名詞との関係だけでは捉えられず、主文の述語動詞との関係が重要になる場合があることを指摘している。例えば、(93a) の beautiful が餌箱として「役立つ」という事象の見事さを表しているとも「餌箱」というモノの美しさを表

³⁹ Geuder (2000) では Qualia Structure (特質構造) の概念を取り入れている。それによれば、Tänzer (踊り手) という語は「形式特質: x (モノ)、目的特質: dance (e)(x) (モノ x が踊るという事象 e)」という情報を持ち、形容詞によってふさわしい特質が選択される。形容詞の意味を名詞の特質構造との関係から説明する立場については Pustejovsky (1995) を参照のこと。

しているとも解釈が可能であるのに対し、(93b) では「餌箱」というモノの美しさを表しているとしか考え難い ((93) は Larson (1998: 160, 164) による)。

(93) a. That will make a *beautiful* birdfeeder.

(それは見事な鳥の餌箱を作るだろう。)

(それは鳥の餌箱として見事に役立つものを作るだろう。)

b. Max bought a *beautiful* birdfeeder. (マックスは見事な鳥の餌箱を買った。)

なお、birdfeeder は (87) の dancer と同じく動詞から派生した名詞である。しかし Larson (1998: 160) は、(87) の a beautiful dancer で beautiful が(88b) のように Dancing という事象と結びつくことと比べ、(93a) の a beautiful birdfeeder で beautiful が Feeding という事象と結びつくことと解釈できることに関しては懐疑的である。(93a) の意味解釈には to constitute something that will serve beautifully as a birdfeeder (鳥の巣箱として見事に役立つものを作る) という説明を示している。このように、形容詞と統語的に結びつく「モノ」を表す名詞にどのような「事象」が含まれていると考えられるかは、名詞のみから判断できるのではなく、時として判断が難しいものもある。

以上のことから、形容詞が「モノ」と「事象」のどちらの性質を表すのか (あるいはどちらの性質を表すと解釈されやすいのか) ということは、形容詞だけでなく、形容詞が結びつく名詞の意味、さらには文全体の意味を確認することが必要である。

3.1.4 モノと事象の並行性

2.3 では、モノの分類と事象の分類に共通する基準として、有界性が取り上げられた。有界性によるモノの分類 (語彙的な数の対立: 可算/質量) や事象の分類 (語彙的なアスペクトの対立: 達成・到達/状態・活動) は、形容詞が名詞を修飾ないし叙述する際の名詞の選択や意味解釈の決定に何か寄与するところがあるのだろうか。

Eisenberg (1976: 106-117, 205) によれば、文脈とは無関係に形容詞が叙述する範囲が決定する絶対形容詞 (absolute Adjektive) には、可算/質量 (COUNT/MASS) タイプの区別がある。可算タイプの形容詞としては eckig (角のある)、kurzsichtig (近視の) などが、質量タイプの形容詞としては blau (青い)、flüssig (液体の) などが挙げられている。可算タイプの形容詞は、典型的には (94) の kurzsichtig のように、述語的に Elefant (象) のような可算名詞と共起して、その名詞が指示する特定のモノの性質を表す。質量タイプの形容詞も可算タイプの形容詞と同じような統語環境に現れうるが、その際には名詞が指示する対象が物質として解釈されやすくなる。例えば (95) の der Elefant は das Bier (そのビール) や der Dieselkraftstoff (そのディーゼル機関用燃料) に類する物質であるとみなされる。

- (94) Der Elefant ist *kurzsichtig*.
 the-NOM elephant-NOM is-3SG shortsighted
 その象（モノ）は近視だ。
- (95) Der Elefant ist *flüssig*.
 the-NOM elephant-NOM is-3SG liquid
 その象（物質）は液体だ。⁴⁰

また、Eisenberg (1976: 114) によれば、これは述語的用法に限られたことではなく、形容詞が付加語的に用いられた場合も、同様の効果が得られる。つまり、*flüssiger Elefant*（液体の象）は物質としての象の性質を表していると解釈されるが、*kurzsichtiger Elefant*（近視の象）は物質ではなく、特定のモノとしての象の性質であると解釈される。

ところで、Eisenberg (1976: 114) はこのような形容詞の対立の例として絶対形容詞を挙げているが、それ以外の形容詞にも、同様の対立は当てはまるように思われる。例えば、*groß*（大きい）、*klein*（小さい）のような相対的に比較可能な寸法を表す形容詞は、(96) のように *Haus*（家）などの可算名詞とは結びついても、*Wasser*（水）のような質量名詞と結びつくとは考えにくい。そして、形容詞と結びつく質量名詞が冠詞を伴って現れる場合、それは (97) のように個別的に数えられる「ペットボトル一本」や「コップ一杯」の水などといったモノとして解釈される。

- (96) ein großes Haus
 a-NOM big-NOM house-NOM
 一軒の大きな家
- (97) ein großes Wasser trinken
 a-ACC big-ACC water-ACC drink-INF
 大きな（コップ）一杯の水を飲む

なお、ドイツ語ネイティブのインフォーマント（1名）によると、(97) のように *trinken* の目的語であることを前提とせず、*ein großes Wasser* という単語だけを見ると、*Wasser* は水ではなく *Gewässer*（水域）と同じ意味で用いられているとみなせる。つまり、*ein großes Wasser* は「一本の大きな川」であるとも解釈できる。無界的な質量名詞 *Wasser* とは異なり、*Gewässer* は集合名詞である。2.3.2 でも確認したとおり、名詞を有界性という基準で分類すると、集合名詞は可算名詞と同じ有界的な名詞に分類される。このことから、形容詞 *groß* は基本的

⁴⁰ Eisenberg (1976) が (95) で具体的にどのような状況を想定していたのかは定かではない。ドイツ語ネイティブのインフォーマント（2名）によれば、(95) の *der Elefant* に関しては、「水の入った象型の容器」「水で構成される象という生物」という解釈があり得るほか、ドイツ産の蒸留酒である *Elephant Gin* を指している可能性が指摘された。

に有界的な名詞と結びつき、無界的な名詞と結びつくと、その名詞が指示する対象は有界的に解釈されるといえるのではないか。

一方で、*viel* (多い) や *wenig* (少ない) のような相対的に比較可能な数量を表す形容詞は、(98a) のように個別のモノを表す可算名詞の単数形とは結びつかないが、(99) のように質量名詞とは問題なく共起できる。ただし、可算名詞と結びつく場合、(98b) のように複数形であれば問題がなくなる。これは、複数形にすることで、*Häuser* (家々) の明確な限界に焦点が当たらなくなり、名詞が表す対象が無界的に解釈されるのだと思われる。⁴¹ つまり、*viel* は基本的に無界的なモノを指示する名詞と結びつくと考えられる。

- (98) a. **ein* *vieles* *Haus*
 a-NOM many-NOM house-NOM
 *一軒の多くの家
- b. *viele* *Häuser*
 many-NOM houses-NOM
 多くの家々
- (99) *viel* *Wasser*
 much-NOM water-NOM
 多くの水

このように、形容詞によって、モノを指示する名詞が可算／質量名詞のどちらである場合と結びつきやすいかということが異なっており、また結びつきにくい名詞と共起すると、名詞が指示する対象の意味が通常とは異なって解釈されることがある。有界性という基準で「モノ」と並行的に捉えられる「事象」を表す動詞に関しても、形容詞によって、有界的な動詞 (達成・到達) と無界的な動詞 (状態・活動) のどちらと結びつきやすいかが異なっており、また形容詞と共起することで動詞の意味が異なって解釈されることがあるのではないかと仮定できる。

3.1.5 状態の特殊性

3.1.3 では、形容詞と名詞の意味構造を捉える際に、Davidson の存在論的な「出来事」という概念を導入する方法があることを確認した。しかし、Davidson の存在論的な「出来事」という概念を導入するに際し、(87), (90) のように「出来事」と「状態」を「事象」として同列に扱えるとする考え方については、異論もある。

2.3.4 ですすでに取り上げたとおり、本稿でいう無界的な動詞 (状態・活動) は、時間軸

⁴¹ 名詞の文法的な数の対立 (単数／複数) については、Jackendoff (1991), Verkuyl (1993) なども確認のこと。

に沿った展開の有無という点で存在論的に異なる性質を持つだけでなく、統語的な用いられ方にも違いがある。例えば、Maienborn (2003: 59-61) によると、(100), (101) に見られるように、活動動詞とは異なり、状態動詞から成る文は、*das geschah während ...* (それは…の間に起こった) という文で前方照応的に参照することができない ((100), (101) は Maienborn (2003:59-60) による (59), (60) の再掲)。

- (100) Shirin spielte Klavier. Das geschah während ...
 Shirin-NOM played-3SG piano-ACC that-NOM occurred-3SG while
 シリンはピアノを弾いた。それは…の間に起こった。
- (101) a. Jürgen schlief. *Das geschah während ...
 Jürgen -NOM slept-3SG that-NOM occurred-3SG while
 ユルゲンは眠っていた。*それは…の間に起こった。
- b. Cathrine hasste Mozart-Arien. *Das geschah während ...
 Cathrine-NOM hated-3SG Mozart arias-ACC that-NOM occurred-3SG while
 カトリーネはモーツァルトのアリアが嫌いだっった。
 *それは…の間に起こった。

さらに、Maienborn (2003: 54-55) では (101a), (101b) のように状態を表す動詞を区別している。(101a) の *schlafen* (眠っている) は *sitzen* (座っている)、*hängen* (掛かっている)、*warten* (待っている)、*ankern* (停泊している) などとともに状態動詞 I に属するとされる。状態動詞 I が表す状態は、時間的・空間的に位置付けられ、時間軸に沿って持続しうる。例えば「ユルゲンが眠っている」という状態は、いつ、どこで起こり、それがいつまで続くのかを問題にしうる。一方、(101b) の *hassen* (嫌っている) は *lieben* (愛している)、*wissen* (知っている)、*kosten* (…の値段がかかる)、*entsprechen* (…に相当する) などとともに状態動詞 II に属する。状態動詞 II が表す状態は、時間的・空間的に位置付けられない、恒常的あるいは内在的な属性である。⁴² 例えば「カトリーネがアリアを嫌っている」という状態は、特定の時間や場所で起こることではなく、述語動詞が表す時点でカトリーネが備えている性質である。この種の状態は、状態動詞 I が表す状態と異なり、本質的には時間の経過を問題としない。

このような状態動詞の区別は、様々な統語的な用いられ方の違いに現れる。例えば、状態動詞 I は (102) の *schlafen* のように不定詞付き対格として知覚動詞の目的語になりうるが、(103) の *wiegen* (...の重さがある) のような状態動詞 II はそうではない ((102), (103) は Maienborn (2007: 111) による)。

⁴² Maienborn (2003) では、それぞれの状態を規定した基盤的な立場から、状態動詞 I を Davidson 的動詞、状態動詞 II を Kim 的動詞としている (それぞれの立場における状態の取り扱いの詳細は Davidson (1967, 1969), Kim (1969, 1976) を参照のこと)。

(102) Ich sah Bardo schlafen. (=50))

I-NOM saw-1SG Bardo-ACC sleep-INF

私はバルドが眠っているのを見た。

(103) *Ich sah die Tomaten 1 Kg wiegen.

I-NOM saw-1SG die-ACC tomatoes-ACC 1 kg weigh-INF

私はトマトが1キログラムの重さであるのを見た。

状態動詞 I と状態動詞 II の区別は Milsark (1974, 1977) や Carlson (1977) のいう、いわゆる *stage-level predicate* (場面レベル述語) と *individual-level predicate* (個体レベル述語) の区別に相当する。場面レベル述語と個体レベル述語の区別は動詞だけでなく形容詞にも当てはまり、場面レベル述語は (104a) の *betrunken* (酔っている) のように、知覚動詞とともに用いられる。一方、個体レベル述語は (104b) の *kaputt* (壊れている) のように、知覚動詞とは用いられない ((104) は Maienborn (2003: 74) による)。このような違いから Kratzer (1995) は、場面レベル述語は出来事と同じく事象を叙述し、個体レベル述語は属性を叙述するとしている。⁴³ 両者は、時間軸を認識するかしらないかという点で、大きく異なっている。

(104) a. Angela sah den Kanzler *betrunken*.

Angela-NOM saw-3SG the-ACC chancellor-ACC drunk

アンゲラは長官が酔っているのを見た。

b. *Angela sah das Glas *kaputt*.

Angela-NOM saw-3SG the-ACC glass-ACC broken

*アンゲラはグラスが壊れているのを見た。

ところで、(104) の *den Kanzler betrunken* や *das Glas kaputt* を述語文に書き換える場合、*„Der Kanzler ist betrunken.“* や *„Das Glas ist kaputt.“* のように動詞 (コプラ) が必要である。このため、(104) の *den Kanzler betrunken* や *das Glas kaputt* は (102) *„Ich sah Bardo schlafen.“* のように動詞の不定詞付き対格として表されるべきであるように思われる。しかし Maienborn (2003, 2007) によれば、(104) の文にコプラの不定詞 *sein* を挿入すると、場面レベル述語の形容詞であれ、個別レベルの形容詞であれ、(105) のように非文になる ((105) は Maienborn (2003: 74) による)。このため、Maienborn (2003, 2007)

⁴³ Kratzer (1995) の分析方法に従って表現すれば、場面レベル述語は、主語や目的語などの統語的に要する項のほか、抽象的な事象項を取り、個体レベル述語は事象項を取らない。この意味的な項構造の違いが、統語的な振る舞いの違いに反映される。Maienborn (2003, 2007) も同様に、述語に事象項を想定できるか否かという意味的な項構造を分析している。

に従えば、状態動詞 I で叙述されるのは、時間的・空間的に位置付けられる「状態」で、これは出来事と同じく事象であるといえる。一方で、状態動詞 II やコプラの文で叙述されるのは、時間的・空間的には位置づけられない「属性」であり、これは事象とはみなせない。

- (105) a. *Angela sah den Kanzler betrunken sein.
 Angela-NOM saw-3SG the-ACC chancellor-ACC drunk be-INF
 *アンゲラは長官が酔っているのを見た。
- b. *Angela sah das Glas kaputt sein.
 Angela-NOM saw-3SG the-ACC glass-ACC broken be-INF
 *アンゲラはグラスが壊れているのを見た。

本稿では、コプラを伴う述語的な形容詞だけでなく、コプラを伴わない付加語的・副詞的用法を含めた形容詞も分析の対象とする。コプラがない場合、形容詞に叙述されるのが状態動詞 I が表すような場面レベルの状態なのか、状態動詞 II が表すような個体レベルの状態（属性）なのか、つまり形容詞に叙述されているのが事象であるか否かということは、(104), (105) の例に見られるように、判断が難しい。しかしながら、いずれにせよ事象の中でも、出来事と状態は大きく異なっているといえる。第 4 章で形容詞が叙述する対象としての事象を分析する際には、事象を有界的（達成・到達）か無界的か（状態・活動）という点だけでなく、無界的であっても、状態か活動かという点には注意を払うべきだと思われる。⁴⁴

3.2 副詞的な形容詞と事象

ドイツ語形容詞には、付加語的、述語的用法に加えて、副詞的用法がある。⁴⁵ 形容詞が副詞的に用いられる際に結びつく語句と形容詞の統語的、意味的な関係から、事象を項に取る形容詞にはどのようなものがあるのかをまとめる。

⁴⁴ なお、有界的な事象が達成か到達かという違いは、状態と活動の違いほどには大きくないと思われる。そもそも、動詞の分類に到達動詞という区分が必要であるとみなすか否かについては異論もあり、Bach (1981) や Pustejovsky (1995) のように、到達動詞と達成動詞を同じカテゴリーとして扱う立場もある。

⁴⁵ Helbig/Buscha (2001) のように、形容詞と名詞の間に依存関係がある付加語的・述語的用法のみを形容詞の用法と認め、述語動詞や他の形容詞、文など名詞以外の語句との間に依存関係がある、副詞規定としての形容詞を、品詞的に形容詞ではなく副詞とみなす考え方もある。しかし本稿では、副詞規定としての形容詞は、(少なくとも本稿で取り上げる形容詞に関しては) あくまで形容詞として扱う。

3.2.1 Davidson (1967, 1969) による副詞規定と出来事の関係

Davidson は出来事をモノと同様に個別化できる個体として扱うことを提案した。行為や変化といった出来事を表すあらゆる動詞が、出来事目的語 (event-object) を取ると解釈することで、副詞規定が修飾するものは動詞ではなく、ある種の動詞が導入する出来事である、とみなした (デイヴィドソン (1990: 236))。例を挙げれば、(106) のような出来事に言及する文において、**butter** (バターを塗る) という述語は、統語的には **John** (ジョン) と **the toast** (トースト) という項を取る二項述語とみなされる。Davidson はこれに出来事 (e) という抽象的な項を加え、意味的には三項述語とみなすことを提案する。これにより、(106) は「ある出来事 e があり、それは “ジョンがトーストにバターを塗る出来事” であり、かつ “ナイフによる出来事” であり、かつ “風呂場における出来事” である」という出来事の連言文として表される。⁴⁶ そして、「ナイフで」「風呂場で」といった副詞規定が、出来事に適用される述語となりうる ((106) は Ehrich (1991: 449) による)。

(106) **John buttered the toast with a knife in the bathroom.**

(ジョンはトーストにナイフで風呂場でバターを塗った。)

ところで、デイヴィドソン (1990: 130-132) や柏端 (1997: 45-47) によれば、(106) の **with a knife** (ナイフで) や **in the bathroom** (風呂場で) のような語句とは異なり、形容詞から派生した副詞 **deliberately** (わざと) や **slowly** (ゆっくりと) は出来事に関する述語としての性質が異なる。⁴⁷

まず、**deliberately** のようなタイプの副詞規定は主語の人に意図を帰しているに過ぎない。つまり、(106) に **deliberately** を挿入したときに、**deliberately** が表すのは「ジョンがトーストにナイフで風呂場でバターを塗った」際の「ジョン」の意図である。一方、**slowly** のようなタイプの副詞規定は、使用が動詞に依存している。つまり、(106) に **slowly** を

⁴⁶ (106) は (i) のような論理式で表される。また、Davidson の考えを発展させた新デイヴィドソン主義では、主題役割を表示させた (ii) のような論理式を用いている ((i) は Ehrich (1991: 449)、(ii) は Maienborn (2011:1202) による。ただし (ii) は (i) に合わせて記号などを多少書き換えている)。

(i) (∃e) (Butter (John, the toast, e) & With a knife (e) & In the bathroom (e))

(ii) (∃e) (Butter (e) & Agent (e, John) & Patient (e, the toast) & Instr (e, the knife) & In (e, the bathroom))

⁴⁷ 柏端 (1997: 46-47, 51-56) によれば、そもそも Davidson は **deliberately** や **slowly** といった形容詞派生の副詞を出来事に適用される述語とはみなさず、説明の対象から除外している。しかし、副詞規定が出来事に適用される述語となるという考え方は、特に言語学的には、**deliberately** や **slowly** も含めた統語論的レベルにおける品詞としての副詞全般に当てはめられて考えられている。これは、Davidson の存在論的アプローチと、言語学のアプローチの違いによるものである。本稿では、言語学的立場に則り、**deliberately** や **slowly** を出来事に適用される述語とみなしている。

挿入したときに、*slowly* が表すのは「ジョンの行為」がゆっくりなことである。⁴⁸

このことはつまり、英語で形容詞から派生した副詞は、出来事の述語となるが、その性質がモノと出来事のどちらに当てはめられるかが、副詞により異なるということを表しているのだと思われる。*deliberately* であれば、それが性質を表す対象は「ジョン」というモノ（人）であるし、*slowly* であれば、性質を表す対象は「ジョンのトーストへのナイフによる風呂場におけるバター塗り」という出来事なのである。またこの違いは、3.1.1 で取り上げた Vendler (1968) の英語形容詞の分類における疑問点、*fast* と *careful* は同じ A₃ というカテゴリーに分類するのがふさわしいのかという点にも関係する。Davidson (1967, 1969) 的な捉え方では、述語文で出来事を表す名詞を主語に取る *fast* と、人を表す名詞を主語に取る *careful* は、性質が異なる形容詞だといえるだろう。

3.1.3 や 3.1.5 でも取り上げたように、述語動詞が意味的には出来事という抽象的な項を取るという考え方は、(少なくとも一部の) 状態を含む事象を表す述語全体に適用され、様々な事象の内部構造の分析に用いられている。そして、事象という抽象的な項を取り入れることにより、副詞規定もまた事象の述語として捉えられるようになる。ドイツ語では、*slowly* や *deliberately* のような副詞規定にあたるものは、形容詞の副詞的用法で表せる。このことから、ドイツ語形容詞は、付加語的あるいは述語的用法で事象を項に取るのと同様に、副詞的用法でも事象を項に取るといえるのではないだろうか。そして、形容詞によって、事象を項に取りつつも、その性質が事象に当てはめられるのか、むしろモノに当てはめられるのかが異なるのではないだろうか。

3.2.2 様態を表すドイツ語形容詞の副詞的用法

ドイツ語では、形容詞の多くは副詞的に用いられ、述語動詞（句）が表す動作や行為といった事象の様態を表すことができる。⁴⁹ このようないわゆる様態を表す副詞規定とされるドイツ語形容詞が、様々な意味関係を表しうることを Maienborn (2003), Schäfer (2013) などが指摘している。Schäfer (2013: 53-55) の例によれば、様態を表す副詞的用法

⁴⁸ Davidson は *slowly* が表すのは絶対的な性質ではないという点にも注目している。例えば、何時間もかかるようなある「ゆっくりした海峡横断」は、実は船に乗らずに身一つで行った「速い遊泳」であるかもしれない。これは出来事に関する話題に特有な問題ではなく、「グランディは背の低いバスケットボールの選手であったが、背の高い男であった」というような、モノに関する話題にも共通する（デイヴィドソン (1990: 131-132)）。このことから、モノと出来事は個体という同じカテゴリーに属するものとして並行的に捉えられることがうかがえる。

⁴⁹ 副詞的な形容詞の作用域は動詞だけではなく、(i)~(iii) のように文全体、他の形容詞、副詞規定など様々である（Weinrich (1993), Duden (2005) など）。動詞以外を作用域とする形容詞は、意味的に事象とは関わらないと思われるので、本稿では取り扱わない。

(i) Rita kommt *sicher* noch. (リタはきっとこれから来る。) <文全体>

(ii) Das ist *typisch* niederdeutsch. (これは典型的に低地ドイツ語らしい。) <他の形容詞>

(iii) Das Dorf liegt *tief* unten. (その村はずっと下にある。) <副詞規定>

法の形容詞は、主に「純粋な様態 (pure manner)」を表す形容詞と、「動作主指向の様態 (agent-oriented manner)」を表す形容詞に二分される。

純粋な様態を表す形容詞は *wunderbar* (素晴らしい) や *schnell* (速い) のような形容詞である。この形容詞が副詞的に用いられている(107a), (108a) のような文は、(107b), (108b) のように、ある事象が「どのように」行われるかという点に焦点を当てた「*wie* 主語 動詞, *das ist* 形容詞」という形式で書き換えることができる ((107), (108) は Schäfer (2013: 53, 55) による)。

- (107) a. Petra tanzt *wunderbar*.
 Petra-NOM dances-3SG wonderfully
 ペトラは素晴らしく踊る。
- b. Wie Petra tanzt, das ist *wunderbar*.
 how Petra-NOM dances-3SG that-NOM is-3SG wonderful
 どのようにペトラが踊るかという点、それは素晴らしい。
- (108) a. Kord ist *schnell* gelaufen.
 Kord-NOM is-3SG fast ran
 コルトは速く走った。
- b. Wie Kord gelaufen ist, das war *schnell*.
 how Kord-NOM ran is-3SG that-NOM was-3SG fast
 どのようにコルトが走ったかという点、それは速かった。

wunderbar (素晴らしい) はさらに、(109b) のように „auf ...Art und Weise“ (...の方法で) という書き換えができる。一方 *schnell* (速い) は、(110b) のように „auf ...Art und Weise“ という書き換えが疑問視される。この違いは、形容詞が事象に多面的に焦点を当てているか、一面的に焦点を当てているかの違いである。例えば、*wunderbar* は「踊り」の色々な面に総合的に「素晴らしい」という性質を付与しているのに対し、*schnell* は「走り」の「速度」という面のみ「速い」という性質を当てはめている。このような違いはあるが、どちらも事象そのものの様態を表すという点では共通している ((109), (110) は Schäfer (2013: 54, 55) による)。

- (109) a. Petra tanzt *wunderbar*. (=107a)
 Petra-NOM dances-3SG wonderfully
 ペトラは素晴らしく踊る。
- b. Petra tanzt auf *wunderbare* Art und Weise.
 Petra-NOM dances-3SG on wonderful-ACC manner-ACC
 ペトラは素晴らしい方法で踊る。

- (110) a. Kord ist *schnell* gelaufen. (= (108a))
 Kord-NOM is-3SG fast ran
 コルトは速く走った。
- b. ?Kord ist auf *schnelle* Art und Weise gelaufen.
 Kord-NOM is-3SG on fast-ACC manner-ACC ran
 ?コルトは速い方法で走った。

一方、動作主指向の様態を表す形容詞は、例えば (111) の *intelligent* (聡明な) である。*intelligent* は (111) のように動作主の関与する文には現れるが、(112a) のように動作主の関与しない文では用いられない。この点で、*intelligent* は (112b) の *schnell* のような、純粋な様態を表す形容詞とは異なる。((111), (112) は Schäfer (2013: 58) による)。

- (111) Petra löst das Problem *intelligent*.
 Petra-NOM solves-3SG the-ACC problem-ACC intelligently
 ペトラはその問題を聡明に解く。
- (112) a. *Der Stein rollte *intelligent* den Abhang runter.
 the-NOM stone-NOM rolled-3SG intelligently the-ACC hill-ACC down
 *石は聡明に斜面を転がり落ちた。
- b. Der Stein rollte *schnell* den Abhang runter.
 the-NOM stone-NOM rolled-3SG fast the-ACC hill-ACC down
 石は速く斜面を転がり落ちた。

この違いは、3.1.1 で取り上げた Vendler (1968) の英語形容詞の分類における疑問点、*fast* と *careful* は同じ A₃ というカテゴリーに分類するのがふさわしいのかという点にも関係すると思われる。Schäfer (2013) の捉え方では、Vendler (1968) の英語形容詞の分類で同じカテゴリーにまとめられていた *fast* と *careful* は、動作主が関与する文のみに現れるか否かという性質が異なる形容詞であり、少なくともドイツ語では、その性質の違いが、統語的な用いられ方の違いにも反映される。

ところで Maienborn (2003), Schäfer (2013) によれば、*schnell* には様態を表すのではなく、事象を外側から規定する機能もある。例えば、Maienborn (2003: 93-94) によれば、(113a) の *schnell* は事象全体に焦点を当て、それにかかった時間が短いことを表していると解釈される。⁵⁰ 一方、形容詞が様態を表すということは、事象を内側から規定するということである。(113b) の *schnell* は事象の内部にある個々の過程 (Prozessen) と達

⁵⁰ なお、Maienborn (2003: 93) によれば、(113a) では事象の開始の時点に焦点を当てた解釈 (クリスマスツリーを飾り付け始めるまでの時間が短い) も可能である。いずれにせよ、(113a) の *schnell* は事象を外側から捉えていると解釈される。

成 (*accomplishments*) が速く実行されることを表していると解釈される ((113) は Maienborn (2003: 94) による)。このように、*schnell* が「ヨッヘンのクリスマスツリーの飾りつけ」という事象全体を作用域とするのか、それともその事象の内部にある「個々の作業」に作用するのかという違いは、事象を有界的に捉えているか、無界的に捉えているかという違いであるとも言い換えられるだろう。

- (113) a. Jochen schmückte *schnell* den Weihnachtsbaum.
 Jochen-NOM decorated-3SG fast the-ACC Christmas tree-ACC
 ヨッヘンは速く [=すぐに] クリスマスツリーを飾り付けた。
- b. Jochen schmückte den Weihnachtsbaum *schnell*.
 Jochen-NOM decorated-3SG the-ACC Christmas tree-ACC fast
 ヨッヘンはクリスマスツリーを速く [=速い速度で] 飾り付けた。

さらに Maienborn (2003), Schäfer (2013) によれば、このような *schnell* の意味の解釈の違いは、形容詞が統語的に出現する位置の違いでも表される。形容詞が事象を外側から規定する場合は、(114a) のように、形容詞は動詞句 *den Weihnachtsbaum schmückte* の外側に置かれる。一方で、事象を内側から規定する場合は、(114b) のように、形容詞は動詞句の内側に置かれる。

- (114) a. (dass) Jochen *schnell* den Weihnachtsbaum schmückte
 that Jochen-NOM fast the-ACC Christmas tree-ACC decorated-3SG
 ヨッヘンが速く [=すぐに] クリスマスツリーを飾り付けた (こと)
- b. (dass) Jochen den Weihnachtsbaum *schnell* schmückte
 that Jochen-NOM the-ACC Christmas tree-ACC fast decorated-3SG
 ヨッヘンがクリスマスツリーを速く [=速い速度で] 飾り付けた (こと)

また Maienborn (2003: 93-94) は、*schnell* と同じく速度に関する形容詞 *langsam* (遅い) を取り上げ、*langsam* には様態を表す形容詞としての解釈しか許されないとしている。つまり、事象全体に焦点を当てて、それにかかった時間が長いことは表さない。この違いは、(115) のような形容詞の出現位置の違いに反映される。⁵¹

⁵¹ Schäfer (2013: 105) によれば、*langsam* にも „Mach *langsam* die Tür zu!“ (そろそろドアを閉めなさい!) のように事象を外側から規定する機能がある。ただし Schäfer によれば、この「そろそろ」は特異な解釈である。*schnell* の意味解釈「すぐに」(事象を外側から規定) と「速度が速い」(事象を内側から規定) が意味的に密接に関係しているのとは異なり、*langsam* の意味解釈「そろそろ」(事象を外側から規定) と「速度が遅い」(事象を内側から規定) は意味的に密接には関係していないという。

- (115) a. *Jochen schmückte *langsam* den Weihnachtsbaum.
 Jochen-NOM decorated-3SG slowly the-ACC Christmas tree-ACC
 *ヨッヘンは遅く [=時間をかけて] クリスマスツリーを飾り付けた。
- b. Jochen schmückte den Weihnachtsbaum *langsam*.
 Jochen-NOM decorated-3SG the-ACC Christmas tree-ACC slowly
 ヨッヘンはクリスマスツリーを遅く [=遅い速度で] 飾り付けた。

さらに Maiborn (2003: 93) は、*schnell* が事象を外から規定しようということが、述語的用法における起動相の再解釈につながるとしている。(116) と (117) は形容詞を除くと「ハイディが町の中にいた」という状態を表す述語文であるため、形容詞が動作の様態を表していると解釈すると非文である。しかし *schnell* を用いた (116) では、その状態に至るまでの時間が短いと、起動相的に再解釈されうるのである。

- (116) #Heidi war *schnell* in der Stadt.
 Heidi-NOM was-3SG fast in the-DAT city-DAT
 ハイディは速く町の中にいた。→すぐに町に着いた。
- (117) *Heidi war *langsam* in der Stadt.
 Heidi-NOM was-3SG slowly in the-DAT city-DAT
 *ハイディは遅く町の中にいた。→*時間をかけて町に着いた。

このように、Maiborn (2003), Schäfer (2013) からは、同じ形容詞でも事象を有界的に捉えるか、無界的に捉えるかが異なりうること、その意味解釈の違いは形容詞の統語的な環境の違いにも反映されること、さらに、*schnell/langsam* のような対義語でも、形容詞と事象の意味関係が異なりうるということが主張されている。

3.3 本章のまとめ

本章では、事象に関連するドイツ語形容詞、英語形容詞の先行研究をまとめた。

3.1.1 から 3.1.3 に挙げた先行研究から、ある名詞が一つの対象を表示するとき、実はその名詞が持つ意味は多面的であることが確認された。そして、形容詞が付加語的あるいは述語的に名詞と結びつく際に、形容詞が名詞のどの側面に焦点を当てるかによって意味が異なって解釈されることが確認された。

しかし、これまでの先行研究で形容詞と共に起する名詞として挙げられていたのは、基本的に第一義として「モノ」を表す名詞である。例えば *Raucher* (喫煙者) には「喫煙」という事象が含意されてはいるが、この語が指す対象はあくまでも「人」である。第一義に「事象」を表す名詞と、それを付加語的に修飾ないし述語的に叙述する形容詞の関係に関しては、これまであまり論じられていない。

また、3.1.4 では、形容詞と名詞が表すモノの関係について、名詞の「有界性」を基準とした可算／質量の区別が、形容詞が付加語的ないし述語的にモノ名詞を伴う際の語の選択の制限や意味の解釈に関係することが確認された。しかし、名詞と並行して「有界性」の基準が適用される動詞の達成・到達／状態・活動という相の区別が、同様に形容詞と事象名詞が共起する際の語の選択の制限や意味の解釈に関係するかどうかに関しては、あまり論じられていない。⁵²

3.1.5 では、時間軸に沿って展開がある出来事である「達成・到達・活動」と時間軸に沿った展開がない「状態」の区別が確認された。さらに、状態の中にも、時間軸をそもそも認識しない「属性」があり、状態と出来事を同じ事象としてひとまとめに扱うことに関しては先行研究でも異論がある。このことから、本稿での分析の際には、事象を有界的（達成・到達）か無界的か（状態・活動）という点だけでなく、無界的であっても、状態か活動かという点には注意を払うべきであることを確認した。

さらに、3.2.1 では副詞的に用いられる英語形容詞に関する先行研究として、Davidson (1967, 1969) を取り上げた。Davidson 的な事象の捉え方を導入することで、副詞的な形容詞を、述語的・付加語的な形容詞と同じように、事象を叙述する述語として扱うことができることを確認した。また、副詞的な形容詞は、述語的・付加語的な形容詞と同様に、事象に一律に関わる訳ではないことが確認された。統語的には事象を項に取っていても、意味的には事象の性質を表していると思われる形容詞もあれば、動作主の性質を表していると思われる形容詞もある。

3.2.2 では、ドイツ語でも、副詞的に事象の性質を表す形容詞もあれば、動作主の性質を表す形容詞もあることが確認された。この違いは、形容詞の統語的な出現環境の違いにも反映される。さらに、意味的に事象の性質を表す形容詞でも、事象を有界的に捉えるか、無界的に捉えるかが異なることがあり、それが統語的な語順の違いに反映されることを確認した。

ドイツ語形容詞には付加語的・述語的・副詞的の3用法があるが、Schäfer (2013) のように形容詞の副詞的用法に焦点を当てた先行研究は、あまり多くない。さらに、同じ形容詞が副詞的に用いられる場合と、付加語的あるいは述語的形容詞に用いられる場合の形容詞の働きについて、その意味的な機能がどのように共通あるいは相違するのかといったことに関しては、Maienborn (2003) などを除いてあまり論じられていない。

そこで本稿では、事象を項に取る形容詞に注目し、付加語的、述語的、副詞的用法と

⁵² なお、形容詞が述語的に用いられる際、形容詞は一般的に述語動詞 *sein* とともに状態（一時的な状態や恒常的な属性）を表すと考えられている。しかし Dölling (1999: 113-114) は „Die Fahrt war schnell.“（その走行は速かった。）のような事象名詞を主語に取る形容詞の述語文について、形容詞 *schnell*（速い）は状態ではなく、*die Fahrt*（走行）が表す出来事や過程を叙述するとしている。このことから、事象を項に取る形容詞が述語文で一律に状態を表すということではなく、事象名詞が表す事象構造が文全体の意味の解釈に関わることが予想される。

いう統語的用法全体を通して、形容詞がどのように事象や、その事象の参与者（特に動作主）と意味的に関係するかを調査する。

4 事例調査と分析

本章では、事象を項に取る形容詞を対象に、大規模コーパスから事例を収集し、形容詞の統語的・意味的な振る舞いについて調査を行う。調査の際には、形容詞が叙述する事象の語彙的アスペクトの区別に注目する。特に、述語的・付加語的に用いられる形容詞と事象名詞、副詞的に用いられる形容詞と事象を表す述語全体で、事象のアスペクトがどのように解釈されるかという点に注目して分析する。

まず4.1で調査の概要をまとめる。調査対象となるI~IVのタイプの形容詞を紹介し、調査内容や調査方法を説明する。4.2で形容詞Iの調査結果を、4.3で形容詞IIの調査結果を示す。4.4では4.2と4.3の調査結果をもとに、形容詞Iと形容詞IIを比較する。4.5では形容詞IIIの調査結果を示し、4.6ではそれを形容詞I及びIIと比較する。4.7では形容詞IVの調査結果を示し、最後に4.8で、形容詞I, II, III及びIVを比較する。

4.1 調査の概要

本稿での調査課題は、第1章にも挙げたとおり、以下の3点である。

- ① 事象を項に取る形容詞の統語的用法（述語的、付加語的、副詞的用法）はどのように分布しているか
- ② 事象を項に取る形容詞は、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）とは意味的にどのように関係するのか
- ③ 事象を項に取る形容詞は、どのようなアスペクトの事象と結びつくのか

① 事象を項に取る形容詞の統語的用法（述語的、付加語的、副詞的用法）はどのように分布しているか

これまでドイツ語形容詞は述語的用法と付加語的用法を中心に分析されてきた。しかし、3.2.2で確認したように、様態を表す副詞規定として、多くの副詞的用法の形容詞が用いられることから、事象を項に取る形容詞に関しては、述語的・付加語的用法のみならず、副詞的にも多く用いられることが予想される。また、3.1.1のVendler(1968)の英語形容詞の分類から、ドイツ語でも、述語的・付加語的用法の分布が形容詞によって異なると考えられる。そのため、まずは事象を項に取るドイツ語形容詞の実際の用例から、これらの形容詞に典型的な用法や用いられにくい用法などの分布を調べる。

② 事象を項に取る形容詞は、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）とは意味的にどのように関係するのか

3.1.1のVendler(1968)の英語形容詞の分類から、事象を項に取る形容詞は、事象の参与者（主体あるいは客体）と統語的に結びつくことが確認されている。さらに、事象に

主体として参与するモノと統語的に結びつく形容詞には、形容詞が本質的には事象の性質を表しているものと、人の性質を表しているものがあるのではないかということが示唆された。

また、3.2.2 で取り上げた Schäfer (2013) から、ドイツ語で動詞が表す動作の様態を副詞的に表す形容詞にも、純粋な様態を表すものと、動作主指向の様態を表すものがあることが確認された。これらのことから、形容詞と事象の関係だけでなく、事象の参与者の関係も注目に値する。ドイツ語で事象を項に取る形容詞に関して、述語的・付加語的・副詞的の3用法を通じて、統語的に結びつく形容詞と事象の参与者としてのモノが、意味的にはどのように関係するのかを調べる。

③ 事象を項に取る形容詞は、どのようなアスペクトの事象と結びつくのか

3.1 では先行研究の整理を通して、形容詞が述語的・付加語的にモノ名詞と結びつく際に、形容詞によって結びつきうるモノの種類が異なったり、意味の解釈が異なったりすることを明らかにした。

形容詞はモノ名詞だけでなく、事象名詞と結びつくこともある。そこで、モノ名詞と結びつく際と同様に、形容詞が事象名詞と結びつく際に、形容詞によって結びつきうる事象の種類が異なったり、意味が異なったりするのかどうかを調査する。

モノと事象は同じ「有界性」という基準で並行して分類できる。そのため、本稿では事象の種類を、「有界性」によって区別される語彙的なアスペクトの別として捉える。有界的な事象とは、Vendler (1967) による動詞句の語彙的なアスペクトでいう達成・到達であり、無界的な事象とは、状態・活動である。2.1 より、状態は事象の中でも特殊であり、達成・到達・活動という動的な出来事とは、時間幅における展開の有無の点で大きく異なる。この違いが形容詞と事象の関係に関与する可能性を考慮し、調査の際には、無界的な事象の中でも、状態と活動のどちらであるかには注意を払う。

Vendler (1968) などの先行研究から、事象を項に取る形容詞が述語的・付加語的に用いられる際、統語的に結びつくモノ名詞と事象の関係（モノが事象の主体か客体か）は形容詞により異なることが予想される。また、述語的には、事象名詞とモノ名詞のどちらと統語的に結びつくか、どちらとも結びつく場合、どの文成分に、どちらの名詞が現れるかなどという構文が、形容詞により異なることも予想される。

一方で、Maierborn (2003), Schäfer (2013) などから、形容詞が副詞的に用いられ、事象の様態を表す際、形容詞が事象を有界的に捉えるか、無界的に捉えるかによって、形容詞の意味の解釈が異なり、その違いが形容詞の統語的な出現環境の違いにも反映されることが確認された。

本稿では、副詞的用法の形容詞に見られた、形容詞による事象のアスペクトの捉え方の統語環境への反映が、形容詞が述語的・付加語的に用いられる際にも適応されるので

はないかと考える。先行研究では明らかにされていなかった、事象を項に取る形容詞の様々な統語的実現の特色の要因を考察し、形容詞ごとの統語的実現の違いが、事象の参与者となるモノ項と、事象のアスペクトに起因することを示すことが、本稿の調査の最終的な研究目的である。

4.1.1 調査対象

調査対象は、主に Vendler (1968) で事象を項に取る形容詞であると考えられた英語形容詞に対応するドイツ語形容詞とする。具体的には、Vendler (1968) における A₃ (fast など)、A₄ (easy など)、A₅ (eager など) にあたるドイツ語形容詞である。

まず、A₃ (fast など) にあたるドイツ語形容詞には schnell (速い) があると考えられる。3.2.2 で確認したとおり、schnell の対義語である langsam (遅い) は schnell と必ずしも統語的・意味的な使われ方が一致しないことから、schnell に加えて langsam も調査対象とする (形容詞 I)。⁵³

次に、A₄ (easy など) にあたるドイツ語形容詞には leicht (容易な) があると考えられる。schnell, langsam という対義語を調査対象とするのに合わせ、leicht だけでなくその対義語である schwer (難しい) も調査対象とする (形容詞 II)。⁵⁴

なお、Vendler (1968) では fast とともに A₃ に属するとされている形容詞 careful (注意深い) は、Vendler (1968) の記述やデイヴィッドソン (1990)、Maienborn (2003) そして Schäfer (2013) などから、必ずしも同じカテゴリーには属さないのではないかとと思われる。そのため、英語形容詞 careful に対応すると思われるドイツ語形容詞 vorsichtig (慎重な) とその対義語 leichtsinnig (軽率な) を、形容詞 I とは別に調査する (形容詞 III)。

最後に、A₅ (eager など) にあたるドイツ語形容詞として、意味の上では eifrig (熱心な) が考えられる。しかし、Vendler (1968) で取り上げられた英語形容詞に対応するドイツ語形容詞に典型的な構文を、Duden (1988) の用例をもとに整理した信國 (2010) の結果、eifrig は vorsichtig (形容詞 III) と同じような構文で用いられるとみなされる。⁵⁵ また、A₅ の特徴は、A₃, A₄ とは異なり、人を表す主語と、事象を表す補足成分を伴う 2 価の述語文に多く現れるという点にある。しかし、予備調査として eifrig を含む事例を DWDS の Kernkorpus で 100 例集めたところ、49 例が副詞的用法、46 例が付加語的用法で、述語的用法はわずか 5 例にとどまり、主語以外の補足成分を伴う事例はそのうちの 1 例のみであった。⁵⁶ このように、典型的な 2 価の形容詞とは言い難いことから、ド

⁵³ langsam は副詞的に「だんだん、そろそろ」という意味で用いられる可能性があるが、この意味で用いられている場合は、今回の調査対象とはしない。

⁵⁴ leicht/schwer は「軽い/重い」という意味で用いられる可能性があるが、この意味で用いられている場合は、今回の調査対象とはしない。

⁵⁵ Duden (1988) は、ドイツ語の単語が使われる典型的な句や文の例を多く挙げた辞書である。

⁵⁶ DWDS (Digitales Wörterbuch der Deutschen Sprache: ドイツ語電子辞書) の Kernkorpus (中

ドイツ語では *eifrig* を形容詞 I, II, III とは異なるカテゴリーの形容詞として調べるには不足であると思われる。ドイツ語では、人を表す主語と、事象を表す補足成分を伴う述語文に多く現れる形容詞として、例えば *überdrüssig, müde* (どちらも「うんざりしている」を意味する) が考えられる。⁵⁷ そのため、本稿ではこの *überdrüssig, müde* を調査対象とする。なお *überdrüssig, müde* は類義語であり、さらに *satt* も同様の意味で用いられるが、これらが統語的にも意味的にも一律に使用されるかどうかは定かではない。そのため、3 語とも調査対象とする (形容詞 IV)。⁵⁸

以上の 4 種類、計 9 語の形容詞が調査対象である。これらの形容詞は Vendler (1968) に見られるような様々な違いがあると予想される一方で、(118)~(121) のように述語的に用いられる際、その主語となるモノが何らかの事象の参与者である、2 価の形容詞として用いられうる点で共通している。ただし、(118)~(121) のように主語に現れるモノが参与する事象が、実例でも補足成分として明示されるかどうかは、形容詞ごとに確認する必要がある。

<調査対象の形容詞>

I. *schnell, langsam*

II. *leicht, schwer*

III. *vorsichtig, leichtsinnig*

IV. *überdrüssig, müde, satt*

(118) Das Auto ist *schnell* bei der Fahrt. (=13))
 the-NOM car-NOM is-3SG fast during the-DAT drive-DAT
 この車は走行の際に速い。

(119) Das Problem ist *leicht* zum Lösen. (=14))
 the-NOM problem-NOM is-3SG easy to.the-DAT solution-DAT
 この問題は解決に関して容易である。

核コーパス) は、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーがインターネットで公開しているドイツ語コーパスの一つである。1 億語規模のコーパスで、20 世紀ドイツ語の、年代やカテゴリー配分のバランスが取れた、DWDS の代表的なコーパスとされている。

⁵⁷ Sommerfeldt (1971: 115) には、2 価で心身の状態 (*ein psychischer und physischer Zustand*) を表す属格目的語を取る形容詞の例として、(i), (ii) が挙げられている。

(i) *Er ist des Wartens müde.* (彼は待つのにうんざりしている。)

(ii) *Er ist des Wanderns überdrüssig.* (彼はハイキングにうんざりしている。)

⁵⁸ 事象を表示する語句を伴わない場合、*müde* は「疲れている」、*satt* は「満腹の」という意味で用いられる可能性があるが、この意味で用いられている場合は、今回の調査対象とはしない。また、「うんざりしている」を表す形容詞にはほかに *leid* もある。しかし *leid* には事象名詞を主語に、人を表す名詞を与格の補足成分とする用法 (例えば „*Das Geschwätz war ihm schon leid.*“ (そのおしゃべりが彼にとってすでにうんざりである。)) があり、その点で *überdrüssig, müde, satt* とは大きく異なるので、今回の調査対象とはしない。

- (120) Die Frau ist *vorsichtig* beim Kaufen. (=11)
 the-NOM woman-NOM is-3SG careful during.the-DAT purchase-DAT
 その女性は購入の際に慎重である。
- (121) Die Frau ist des Wartens *überdrüssig*. (=12)
 the-NOM woman-NOM is-3SG the-GEN wait-GEN weary
 その女性は待機にうんざりしている。

なお、調査に先立ち、Duden (1988) の新版である Duden (2010) において 2 価の形容詞としての用例が見られない *schnell*, *leicht*, *schwer*, *leichtsinnig* に関して Google を用いて事例を検索したところ、*leicht*, *schwer*, *leichtsinnig* については、(122)~(124) のような 2 価の形容詞としての事例があることが確認された。⁵⁹

- (122) Der Carport ist [...] *leicht* bei der Reinigung.
 the-NOM carport-NOM is-3SG easy during the-DAT cleansing-DAT
 その車庫は [...] 洗浄の際に簡単だ。
- (123) Aber er [= der Spiegel] ist *schwer* zum Einbauen!
 but he the-NOM mirror-NOM is-3SG difficult to.the-DAT installation-DAT
 でもそれ [=その鏡] は取り付けるのが難しい!
- (124) Ich dachte, ich wäre *leichtsinnig* beim
 I-NOM thought-1SG I-NOM were-SUBJ.II-1SG careless during.the-DAT
 Kauf dieses Artikels, aber [...]
 purchase-DAT this-GEN article-GEN but
 私は、この商品を買う際に軽率かもしれないと思ったが、 [...]

しかし、*schnell* に関しては、Google では 2 価の形容詞としての使用例が確認できなかった。また、*schnell* を 2 価の形容詞として扱った本稿での作例 (125a) は、ドイツ語ネイティブのインフォーマント (1 名) によると不自然であり、副詞的に (125b) のように書くほうが自然であるという。これは、*schnell* の対義語である *langsam* に関しても同様で、Duden (2010) にある用例 (126a) は、(126b) のように形容詞を副詞的に用いた文で書くほうが自然であるという ((126a) は Duden (2010: 546) による)。このことから、*schnell*, *langsam* が述語文で主語以外の文成分を伴うことは稀であると予想される。

⁵⁹ (122)~(124) の出典は以下のとおりである。

(122) <https://fencesworld.eu/produkt/einzelcarport-dekormur-30/>

(123) <https://www.amazon.de/ATBreuer-Auto-Breuer-3026-Au%C3%9Fenspiegel/dp/B007C2G7BK>

(124) <https://swanson.co.nz/de/p/Swanson-Vollspektrum-Kakao-roher-Kakao-400mg-60-Kapseln/Bewertungen/>

- (125) a. Das Auto ist *schnell* bei der Fahrt. (=13)
 the-NOM car-NOM is-3SG fast during the-DAT drive-DAT
 この車は走行の際に速い。
- b. Das Auto fährt *schnell*. (=15)
 the-NOM car-NOM drives-3SG fast
 この車は速く走る。
- (126) a. Sie ist *langsam* bei der Arbeit.
 she-NOM is-3SG slow during the-DAT work
 彼女は仕事の際に動きが鈍い。
- b. Sie arbeitet *langsam*.
 she-NOM works-3SG slow.
 彼女はゆっくりと仕事をする。

ところで、Vendler (1968) によれば、good のように A₁ ~ A₉ までの様々なカテゴリーにまたがって属する形容詞もある。しかし、このような形容詞は、モノを表示する名詞と統語的に結びつく際に、意味的には事象を項に取る形容詞として用いられているかどうか判断しづらい。例えば英語の good にあたるドイツ語の gut (良い) が Tänzer (踊り手) と結びついたとき、それは Tänzer が参与する事象とは何の関係もなく、ただその人の人柄の良さを表しているのかもしれない。本稿での調査は、事象を項に取る形容詞を比較することを目的としているため、このように多義で、事象と必ずしも意味的に関係しなくても使用されうる形容詞は、調査対象とはしない。

4.1.2 調査内容

具体的な調査内容は、以下の2点である。

- ① 事象を項に取る形容詞が現れる統語的環境を明らかにする
- ② 事象を項に取る形容詞が現れる意味的環境を明らかにする

まず①では、調査対象の形容詞が述語的、付加語的、副詞的用法のうちどの用法で用いられうるのか、またその出現頻度は形容詞ごとに異なっているのか、あるいは事象を項に取る形容詞全体に認められる傾向があるのかということ調べる。

次に②では、調査対象の形容詞が述語的あるいは付加語的に結びつく語句が、意味的に事象を表すのか、それ以外のモノや命題を表すのかを調べる。述語的用法で (118) ~ (121) のように主語以外にもう一つの文成分を伴う文においては、主語以外の文成分がモノ、事象、命題のどれを表すのかに関しても併せて調べる。さらに、述語的用法や付加語的用法で形容詞が結びつく語句が事象を表している場合と、副詞的用法で形容詞が

性質を表す対象が動詞句を中心とした事象である場合には、その事象の種類が状態、活動、到達、達成のどれであるかについても確認する。

本章の調査で、事象を項に取る形容詞の実際の統語的・意味的な出現環境を明らかにした後に、第5章で形容詞の出現環境の傾向が何に起因して決まっているのかを考察する。

4.1.3 調査方法

調査には、IDS (Institut für Deutsche Sprache: ドイツ語研究所) の大規模コーパス COSMAS II の DeReKo (das deutsche Referenzkorpus: ドイツ語代表コーパス) を使用する。COSMAS II は、コーパス調査・分析システム COSMAS (Corpus Search, Management and Analysis System) の第二世代で、オンライン上で公開されている。使用するコーパスは、公開されている Wikipedia の記事を除いたすべての現代書き言葉コーパス W-ohneWikipedia-offentlich - alle offentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen, ohne Wikipedia) である。2018年8月現在で約90億語が収録されており、文学作品、学術書など様々なテキストが収録されているが、圧倒的に新聞記事の事例が多いため、検索結果は、ほとんど新聞記事を出典とするものになる。形容詞と共起する語句の種類が偏ることを防ぐために、新聞記事であっても記事の内容が偏らないよう、以下の10のテキストのテーマごとに30例ずつ、一つの形容詞につき300例を収集する。⁶⁰

- Freizeit/Unterhaltung (余暇／娯楽)
- Gesundheit/Ernährung (健康／栄養)
- Kultur (文化)
- Natur/Umwelt (自然／環境)
- Politik (政治)
- Sport (スポーツ)
- Staat/Gesellschaft (国家／社会)
- Technik/Industrie (技術／産業)
- Wirtschaft (経済)
- Wissenschaft (学問)

収集した事例は、主に以下の基準により分類する。

⁶⁰ 分類されているテキストの種類は以下のウェブページを参照 (<https://www.ids-mannheim.de/cosmas2/projekt/referenz/textklassifikation.html>)。なお、COSMAS II での分類には上記の10種類の他に Fiktion (フィクション) 及び Rest (その他) があるが、これらに振り分けられる事例には1950年代の小説など年代の古いものが多く見られる、あるいはそもそも事例数が少ないといったことから、収集対象から除外する。

- (a) 形容詞の統語的な出現環境（述語的、付加語的、副詞的）
- (b) 述語的・付加語的用法で形容詞が統語的に結びつく語句の存在論的カテゴリー（モノ、事象、命題）
- (c) 述語的・付加語的形容詞が統語的に結びつく語句が事象である場合や、形容詞が副詞的に用いられる際に、動詞句が中心となって文が表示する事象の種類（状態、活動、到達、達成）

なお (a) に関して、形容詞の述語的用法には、sein などのコプラ動詞と共起して主語が表示する対象の性質を表す (127) のような構文のほかに、対格目的語を取る動詞と共起して、その目的語が表示する対象に対する評価や、動詞が引き起こす行為による結果を表す (128), (129) のような構文も含まれる。このように形容詞が性質を付与する対象を表示する主語（例えば (127) で「彼女」を表す *sie*）や、対格目的語（例えば (128) で「それ」を表す *es* と (129) で「壁」を表す *die Wand*）をまとめて述語対象語と呼ぶ。本稿ではこれ以降、形容詞が述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語には下線を引いてある。

- (127) Sie ist jung.
she-NOM is-3SG young
彼女は若い。
- (128) Ich betrachte es als richtig.
I-NOM regard-1SG it-ACC as right
私はそれを正しいと思う。
- (129) Sie färbten die Wand rot.
they-NOM coloured-3PL the-ACC wall-ACC red
彼らは壁を赤く塗った。

また、(130) のような「形容詞+zu 不定詞+sein」の構文内の形容詞は、述語的用法とみなすか副詞的用法とみなすかに異論があるが、これを副詞的な形容詞とみなせるといふ Demske-Neumann (1994) の分析に従い、本稿では副詞的用法の形容詞として扱う。⁶¹

⁶¹ Demske-Neumann (1994: 225-226, 275-276) によれば、中英語においては、to 不定詞を伴う形容詞には (i) に見られるように述語的・副詞的の両方の解釈がありえた。初期近代英語の時代以降、副詞的な形容詞には、(ii) の *easye* のようにそれを示す接辞がつくようになり、さらにそれは (iii) の *easily* のような形容詞派生副詞に取って代わられる。同時に、このような副詞はコプラと受動的な to 不定詞と組み合わせて用いられるようになる。しかし、この「be+形容詞派生副詞+to+受動」という組み合わせは衰退し、「be+形容詞+to 不定詞」という組み合わせの、いわゆる形容詞の *tough* 構文が、副詞的な形容詞と受動的な動詞の組み合わせとして再解釈されるようになる。さらには、モダリティの意味を読み込

- (130) Die Frage ist leicht zu beantworten.
 the-NOM question-NOM is-3SG easy to answer-INF
 この質問は容易に答えられる。

また (c) に関して、述語的用法や付加語的用法で事象の種類を確認するのは、当該の名詞句が事象を表示する場合に限る。調査対象の形容詞が述語的あるいは付加語的に用いられ、その述語対象語や被修飾語がモノを表す語句である場合、それらは何らかの事象の参与者であると考えられうる。しかし、その「何らかの出来事」は (118)~(121) のように同じ文の中で明示されない限りは、あくまで推測に過ぎず、明確ではない。例えば (131) では、ドイツ語の文法を「学ぶこと (lernen)」が難しいとも「習得すること (erlernen)」が難しいとも考えられる。背後にある出来事が「学ぶこと」であれば、それは時間幅があり、明示的な終了点がなく継続しうる行為であるため「活動」に分類される。しかし背後にある出来事が「習得すること」であれば、それは「学ぶ」が「覚える」という終了点まで継続する行為であるため「達成」に分類される。このように、述語対象語や被修飾語がモノを表す語句である場合に、その背後にあると考えられる事象は、そのアスペクトの判断が困難であるため、分類しない。

- (131) Die deutsche Grammatik ist schwer.
 the-NOM German-NOM grammar-NOM is-3SG difficult
 ドイツ語の文法は難しい。

4.2 調査結果 1: 形容詞 I (schnell, langsam)

本節では、速度を表す形容詞 *schnell* (速い) と *langsam* (遅い) の調査結果をまとめる。なお、煩雑になるのを防ぐため、調査結果の事例にはグロスを付けていない。

4.2.1 統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布)

まず、形容詞が統語的にどのような用法で出現するのか、事例を概観する。

む不定詞構文の派生から、この構文はモダリティの解釈も組み込まれるようになった。このような経緯から、現代ドイツ語の「形容詞+zu 不定詞+sein」における形容詞も副詞的な形容詞とみなせると Demske-Neumann は分析している。(i)~(iii) は Demske-Neumann (1994) を整理した Haumann (2018: 284) の例示を、筆者がさらに簡略化したもの。

- (i) a. Elephants lerneþ wel and beþ esy to teche. (1398, Trev. Bart, 284a/b)
 b. Elephants beþ ... [esy [to teche]] (= are easy to teach)
 c. Elephants; beþ ... [esy to teche] (= are easily taught)
 (ii) nothing is [more easye to be founde] (1551: Robinson's *Utopia* 32)
 (iii) There were many more strange and monstrous Apperances, not easily to be remember'd, much less to be describ'd; (1726, J. Barker, *The Lining of the Patch-Work Screen*)

schnell に関しては、(132) のように述語的用法で用いられているものが 11 例、(133) のような付加語的用法が 53 例、(134) のような副詞的用法が 236 例である。なお、述語的用法で zu 不定詞句が述語対象語となる事例は見られなかった。

- (132) Fernando ist *schneller* als du. (Nordkurier, 16.11.2010) < schnell, 述語的 >
(フェルナンドは君よりも速い。⁶²)
- (133) *Schnelle* und harte Ballwechsel [...] prägen ihr Spiel. (Braunschweiger Zeitung, 15.10.2007) < schnell, 付加語的 >
(速く強烈な球の打ち合いが [...] 彼らの試合を特徴づけた。)
- (134) Nach Angaben von Zeugen ist der junge Mann nicht zu *schnell* gefahren. (Rhein-Zeitung, 28.10.2000) < schnell, 副詞的 >
(証人の説明によれば、その若い男はスピードを出しすぎてはいなかった。)

次に langsam に関しては、(135) のように述語的用法で用いられているものが 20 例、(136) のような付加語的用法が 30 例、(137) のような副詞的用法が 250 例である。schnell と同じく、述語的用法で zu 不定詞句が述語対象語となる事例は見られない。

- (135) Hakkinen wurde *langsamer*, [...] (Neue Kronen-Zeitung, 27.03.2000) < langsam, 述語的 >
(ハッキネンはより遅くなって、[...] ⁶³)
- (136) Doch das war glücklicherweise bei *langsamer* Fahrt. (Mannheimer Morgen, 02.03.2002) < langsam, 付加語的 >
(しかしそれは幸運なことに遅い走行の際であった。)
- (137) „Sprechen Sie *langsam* und deutlich.“ (Die Presse, 26.11.2016) < langsam, 副詞的 >
(「ゆっくりそして明瞭に話してください。」)

このような形容詞 I の統語的な分布は、以下の表 3 にまとめられる。schnell, langsam のどちらも、副詞的に用いられることが最も多く、全体の 8 割近くを占める。一方、これらの形容詞が述語的に用いられることは少なく、全体の 1 割にも満たない。

⁶² Fernando Alonso はスペインのレーシングドライバーである。

⁶³ Mika Häkkinen はフィンランドのレーシングドライバーである。(135) の „Hakkinen“ の綴りは原文のまま挙げている。

	schnell	langsam
述語的	11	20
付加語的	53	30
副詞的	236	250
合計	300	300

表 3 形容詞 I の統語的分布

なお、調査前に想定していた (138) のような、述語的用法で主語のほかにもう一つの文成分を伴う事例は見られなかった。

(138) Das Auto ist *schnell* bei der Fahrt. (この車は走行の際に速い。) (=13))

4.2.2 意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的、副詞的に用いられる際に、どのような個体名詞と共起しているのかを確認する。

まず、*schnell* が述語的用法で用いられる 11 例はすべて、(139) の *Fernando* (フェルナンド) のようなモノが述語対象語であり、事象を述語対象語とする例は見られない。⁶⁴ これらのモノはすべて、何らかの事象に主体として参与する。ただし、その事象は文脈から推測されうるものであり、上記 (138) のように事象を表す項が同じ文の中で具体的に表示されている事例は見られない。例えば (139) は、あるレーシングドライバーが自動車レース中に無線で知らされた内容である。このことから、*Fernando* は「レースでの走行」という事象に主体として参与しているモノであると判断できる。

(139) *Fernando* ist *schneller* als du. (=132) < *schnell*, 述語対象語がモノ (主体) >
(フェルナンドは君よりも速い。)

また、*schnell* が付加語的に用いられる 53 例では、16 例が (140), (141) の *Karusell der Korruption* (腐敗の回転木馬) や *Profite* (利益) のようなモノを、37 例が (142) の *Ballwechsel* (球の打ち合い) のような事象を被修飾語としている。モノが被修飾語となる例では、16 例中 14 例は (140) の *Karusell der Korruption* のように何らかの事象に主体として参与するものであると思われるが、(141) の *Profite* のように事象に主体以外として参与すると考えられる事例も 2 例のみであるが存在した。例えば (140) では回転

⁶⁴ ただし、Nobukuni (2013a) で *schnell* の事例を 100 例集めた際には、以下のような事象を表す語句を述語対象語とする事例が 1 例のみ見られた。そのため、事象名詞を述語対象語とする構文が不可能とはいえない。

(i) Mal wird einer [=ein Rhythmus] *schneller*, mal der andere leiser. (Neue Kronenzeitung, 02.08.1996)

木馬が主体となり速く「回る」ことを、(141) では利益が客体となり、それを誰かがすぐに「得る」ことを表していると考えられる。

(140) Die Figuren von Hudson City bewegen sich auf einem höllisch *schnellen* Karussell der Korruption. (Süddeutsche Zeitung, 29.10.1992) < schnell, 被修飾語がモノ (主体) > (ハドソン市の人物たちは恐ろしく速い、腐敗の回転木馬に乗って動いている。)

(141) [...] dass die handelnden Personen von damals auf „der Suche nach *schnellen* Profiten“ illegal handelten. (Nordkurier, 16.03.2016) < schnell, 被修飾語がモノ (主体以外) >

(当時の登場人物たちが「手っ取り早い利益を探して」違法な行動をしたことを[...])

(142) *Schnelle* und harte Ballwechsel [...] prägten ihr Spiel. (=133) < schnell, 被修飾語が事象 >

(速く強烈な球の打ち合いが [...] 彼らの試合を特徴づけた。)

一方、*langsam* が述語的用法で用いられている 20 例のうち、16 例が (143) の Hakkinen (ハッキネン) のようなモノが述語対象語の例、4 例が (144) の der Fortschritt (進歩) のような事象が述語対象語の例である。⁶⁵ 述語対象語がモノである場合、これらのモノはすべて、何らかの事象に主体として参与する。その事象は *schnell* と同様、文脈から推測されうるものであり、明示はされていない。例えば (143) はある自動車レースでのレーシングドライバー Hakkinen の様子を描写する文であることから、Hakkinen は「レースでの走行」という事象に主体として参与しているモノであると判断できる。

(143) Hakkinen wurde *langsamer*, [...] (=135) < langsam, 述語対象語がモノ (主体) > (ハッキネンはより遅くなって、[...])

(144) Darum ist der Fortschritt auch relativ *langsam*. (Sonntagsblick, 03.04.2011) < langsam, 述語対象語が事象 >

(そのために進歩もまた比較的遅いのである。)

また、*langsam* が付加語的に用いられる 30 例では、8 例が (145), (146) の Partikel (素粒子) や Amerikanisch (アメリカ英語) のようなモノを、22 例が (147) の Fahrt (走行) のような事象を被修飾語としている。モノが被修飾語となる例では、8 例中 7 例は (145) の Partikel のように何らかの事象に主体として参与するものであると思われるが、(146)

⁶⁵ なお、事象を表示する語句には、Fahrweise (走行方法) のような方法を表す語句も含まれる。「走行方法」は事象そのものを表示しているわけではない。しかし形容詞 *langsam* が Fahrweise と共起するとき、形容詞が性質を表している対象は「方法 (Weise)」ではなく「走行 (Fahr-)」であると考えられる。そのため、この語は事象に属しているとみなす。

の *Amerikanisch* のように事象に主体以外として参与すると考えられる事例も 1 例のみであるが存在した。例えば (145) では素粒子が主体となりゆっくりと「動く」ことを、(146) ではアメリカ英語が客体となり、それを誰かがゆっくりと「話す」ことを表していると考えられる。

(145) [...] *die langsamen Partikel* können dem Schwerfeld des Mondes nicht entkommen und [...] (Süddeutsche Zeitung, 02.06.2010) <langsam, 被修飾語がモノ (主体) >
(遅い素粒子は月の重力加速度から逃れられず [...])

(146) Wenn Nasa-Leute Auskunft über ihre Arbeit geben, dann sagen sie in *langsamem, breitem Amerikanisch* Sätze wie [...] (die tageszeitung, 31.12.2003) <langsam, 被修飾語がモノ (主体以外) >
(NASA の人々が自分たちの仕事に関する情報を提供する場合、彼らはゆっくりした冗長なアメリカ英語で以下の [...] という文を述べる。)

(147) Doch das war glücklicherweise bei *langsamer Fahrt*. (= (136)) <langsam, 被修飾語が事象 >
(しかしそれは幸運なことに遅い走行の際であった。)

以上の結果は表 4 のようにまとめられる。I の形容詞 *schnell, langsam* はともに、述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語にモノや事象を表示する語句を取る事例が認められた。この際のモノは基本的に、何らかの事象に主体として参与していると考えられる。一方、事象については、(142) の「球の打ち合い」(147) の「走行」など、動作主による行為であるように思えるものの、必ずしも動作主が明示されている必要はない。また、述語的用法では事象よりもモノが、付加語的用法ではモノよりも事象が現れやすい傾向があるのではないと思われるが、これに関しては事例数が少ないので明言は出来ない。

		schnell		langsam	
述語的	モノ (主体)	11	11	20	16
	モノ (主体以外)		0		0
	事象		0		4
付加語的	モノ (主体)	53	14	30	7
	モノ (主体以外)		2		1
	事象		37		22

表 4 形容詞 I が共起する個体の種類

4.2.3 意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的・付加語的・副詞的に用いられ、事象を表す語句と共起す

る際に、それが状態、活動、到達、達成のどのタイプに属するかを観察する。

まず、*schnell* は収集した 300 例の中で、述語的用法で事象を表す語句を述語対象語に取る例が見られなかった。⁶⁶

付加語的用法では、事象を表す語句を被修飾語に取る例が 37 例確認された。そのうち 1 例は (148) の *0:3-Rückstand* (0 対 3 の劣勢) のような状態、18 例は (149) の *Ballwechsel* (球の打ち合い) のような活動、17 例は (150) の *Entscheidung des Vatikan* (教皇庁の決定) のような到達、1 例は (151) の *Regierungsbildung* (組閣) のような達成タイプの事象を表す。

(148) Nach einem *schnellen* 0:3-Rückstand hatte sein Team im Finale einen schweren Stand. (Mannheimer Morgen, 29.01.2001) <*schnell*, 付加語的、状態>

(すぐに 0 対 3 の劣勢になった後、彼のチームは決勝戦で形勢困難であった。)

(149) *Schnelle* und harte Ballwechsel [...] prägen ihr Spiel. (=133) <*schnell*, 付加語的、活動>

(速く激しい球の打ち合いが [...] 彼らの試合を特徴づけた。)

(150) Es wird mit einer *schnellen* Entscheidung des Vatikan gerechnet.⁶⁷ (Süddeutsche Zeitung, 17.06.1998) <*schnell*, 付加語的、到達>

(即座の教皇庁の決定が計算に入れられている。)

(151) Sollte Marini sich aber durchsetzen, wäre der Weg zu einer *schnellen* Regierungsbildung frei. (die tageszeitung, 29.04.2006) <*schnell*, 付加語的、達成>

(万が一マリーニが意志を押し通すのなら、速い組閣への道が開いているだろう。⁶⁸)

このように、付加語的用法で被修飾語が事象を表示する語句である場合、その事象は状態、活動、到達、達成のどのタイプもありうる。ただし、活動及び達成タイプと、状態及び到達タイプの事象では、*schnell* がその性質をどのように付与しているのかが、それぞれ異なるように思える。活動及び達成タイプでは、*schnell* は事象を内部から見て、その性質を表しているように思える。すなわち、(149) の *schnell* は「球の打ち合い」が、(151) の *schnell* は「組閣」が、一定の時間幅の中で速く展開することを表している。一方、状態及び到達タイプの事象に関しては、*schnell* は事象を内部から見た性質を表しているようには考えにくい。例えば、(148) の「0 対 3 の劣勢」とはすなわち、「相手に 3 点の先制をされている状態」を指すが、その状態そのものが「速く」持続しているとは解釈できない。ここで表されているのは、その状態に至るまでの時間の経過の速さ、転

⁶⁶ なお、脚注 64 の述語形容詞文における述語対象語 *einer* [=ein Rhythmus] は、分類するのであれば、活動タイプに属する事象である。

⁶⁷ 文法的には „des Vatikan“ とすべきだが、原文のまま挙げている。

⁶⁸ Franco Marini はイタリアの政治家である。

じて必要な時間の短さだと思われる。到達タイプでも同様で、例えば (150) の「教皇庁の決定」そのものは一瞬で終了する事象であり、それが「速い」とは考え難い。ここで「速い」が示しているのは、決定しているという状態に至るまでの時間の経過の速さ、時間の短さであろう。

さらに *schnell* の事例を確認すると、236 例の副詞的用法の事例の中で、(152) の „die Beamten sind vor Ort“（警察官たちは現場にいる）のような状態タイプは 18 例、(153) の „der junge Mann ist gefahren“（その若い男は運転をした）のような活動タイプは 61 例、(154) の „er [=Der Beifall] hört auf“（拍手が止む）のような到達タイプが最も多く 131 例、(155) の „Sie bringen das Tier in eine kühlere Umgebung“（彼らは動物をより涼しい環境へと連れて行く）のような達成タイプは 26 例であった。

(152) [...], waren die Beamten am Sonnabendmorgen gegen 1 Uhr *schnell* vor Ort und konnten die Übeltäter festnehmen. (Nordkurier, 20.09.2010) < *schnell*, 副詞的、状態 >

(警察官たちは土曜の朝の 1 時ごろにすぐに現場に来て、犯罪人たちを逮捕できた。)

(153) Nach Angaben von Zeugen ist der junge Mann nicht zu *schnell* gefahren. (= (134)) < *schnell*, 副詞的、活動 >

(証人の説明によれば、その若い男はスピードを出しすぎてはいなかった。)

(154) Er [= Der Beifall] hörte aber auch *schnell* auf. (Nordkurier, 13.05.2014) < *schnell*, 副詞的、到達 >

(それ [=拍手] はしかしまたすぐに止んだ。)

(155) Wenn Sie glauben, daß dies Ursache für das Keuchen ist, bringen Sie das Tier *schnell* in eine kühlere Umgebung, [...] (Neue Kronen-Zeitung, 20.01) < *schnell*, 副詞的、達成 >

(それがあえいでいる理由だと思うのであれば、あなたがたはその動物を速くより涼しい環境へと連れて行きなさい。)

このように、*schnell* が副詞的用法で用いられる場合、動詞句が中心となり表示される事象は状態、活動、到達、達成のどれでもありうるようである。ただし、付加語的用法の場合と同様に、*schnell* が共起する事象が状態タイプである場合、形容詞はその状態の様態を表しているのではなく、その状態に至るまでの時間の経過の速さ、転じて必要な時間の短さを示しているのだと思われる。例えば (152) では、*schnell* は「現場にいる」という状態が速く進むのではなく、現場にいるという状態を終了点とし、その状態になるまでの時間が短いことを表しているのだと考えられる。つまり、3.2.2 で取り上げた Maierborn (2003) の説明にもあるように、状態を表す述語文が、「現場にいる」ではなく「現場に来る（着く）」という起動相的な意味で再解釈される。さらに、*schnell* が到達タイプの事象と共起する場合も、同様のことが当てはまるように思える。例えば、(154) では、「拍手が止む」のは一瞬で終わる事象であるが、*schnell* はその時点の事象そのも

のの性質を表すのではなく、拍手がやんでいるという状態に至るまでの時間幅を想定し、その間の時間の経過が速い、転じて必要な時間が短いということを表していると考えられる。

一方 *langsam* では、述語対象語が事象を表示する語句である事例は 300 例中 4 例であり、それらはすべて、(156) の *der Fortschritt* (進歩) のような活動タイプの事象である。(157) の *die Reaktionen* (反応) は、その語単独では到達タイプの事象であるようにも思えるが、単数形ではなく複数形であることから、何度も繰り返される反復相の事象を表していると解釈できる。Leiss (1992, 2000) から、反復相は無界的な動詞に属すると考えられるため、ここでは同じく無界的で、かつ時間幅に応じた展開がある活動の一種として分類した。いずれにせよ、これらの述語的に用いられる *langsam* は、時間幅のある事象と結びつき、その事象の時間幅で起こる継続的な事象に「時間がかかる」という性質を当てはめていると考えられる。

(156) *Darum ist der Fortschritt auch relativ langsam.* (=144) <*langsam*, 述語的、活動>
(そのために進歩もまた比較的遅いのである。)

(157) *Sind die Schleimhäute blass, die Herzaktion schwach und die Reaktionen langsam, hat das Tier massive Kreislaufprobleme.* (Nordkurier, 05.07.2014) <*langsam*, 述語的、反復(活動に分類) >
(粘膜が青白く、心機能が弱く、反応が遅いのであれば、その動物は激しい血液循環の問題を抱えている。)

次に付加語的用法では、事象を表す語句を被修飾語に取る例が 22 例確認された。そのうち 17 例は (158) の *Fahrt* (走行) のような活動、3 例は (159) の *Sterben* (死) のような到達、2 例は (160) の *Datenübermittlung* (データ通信) のような達成タイプの事象を表している。状態タイプの事象を表す名詞句が被修飾語になる事例は見られなかった。付加語的用法の事例でも述語的用法の場合と同様に、活動及び達成タイプの事象では、*langsam* はその事象の時間幅で起こる継続的な事象に「遅い速度で」という性質を当てはめていると考えられる。一方、到達タイプで *langsam* が性質を当てはめるのは、その事象が成立する一時点ではない。例えば (159) において「死」そのものは一瞬で終わる事象であるが、*langsam* はその時点までの時間幅において人が死に向かっていくという状態の推移を想定し、その時間幅全体に「時間がかかる」という性質を付与していると解釈できる。

(158) *Doch das war glücklicherweise bei langsamer Fahrt.* (=136) <*langsam*, 付加語的、活動>
(しかしそれは幸運なことに遅い走行の際であった。)

(159) Der gebürtige Bayer [...] sah seinem bewunderten Vorgänger beim *langsamen Sterben* zu. (NEWS, 17.04.2014) <langsam, 付加語的、到達>

(そのバイエルン生まれの人は [...] 称賛された彼の前任者がゆっくりと死んでいくのを見守った。)

(160) Die *langsame Datenübermittlung* in überlasteten Funk- und Telegrafennetzen hatte zur Folge, dass [...] (Zeit Geschichte, 21.08.2012) <langsam, 付加語的、達成>

(混雑状態のラジオ・電信網における遅いデータ通信は [...] という結果になる)

さらに *langsam* が副詞的用法の事例は 250 例あり、その中の、111 例は (161) の „Sie sprechen“ (あなたは話す) のような活動タイプ、126 例は (162) の „er wacht wieder auf“ (彼が再び目覚める) のような到達タイプ、13 例は (163) の „die Straßen werden repariert“ (道が修理される) のような達成タイプである。状態タイプの事象を共起する事例は見られなかった。

(161) „Sprechen Sie *langsam* und deutlich.“ (=137)) <langsam, 副詞的、活動>

(「ゆっくりそして明瞭に話してください。」)

(162) Neun Wochen lang lag er im Koma, wachte dann *langsam* wieder auf. (Rhein-Zeitung, 04.06.2002) <langsam, 副詞的、到達>

(9 週間、彼は昏睡状態にあり、それから徐々に再び意識を回復していった。)

(163) Das heißt zum Beispiel, dass die [...] Straßen – wenn überhaupt – weitaus *langsamer* repariert werden. (Nordkurier, 25.03.2003) <langsam, 副詞的、達成>

(それは例えば、道が一たとえあったとしても一はるかに遅く修理されることを意味する。)

このように、*langsam* は副詞的用法では活動、到達、達成タイプの事象と共起するが、*schnell* とは異なり、状態タイプの事象と共起する例は見られなかった。これは、3.2.2 で取り上げた Maierborn (2003) の説明にもあるように、*langsam* では状態を表す述語文が起動相的に再解釈されえないということに合致する。また、*langsam* は、活動及び達成タイプの事象に関しては、その事象がもともと備えている時間幅における動作や行為の展開に対して「遅い」という性質を当てはめている。一方、*langsam* が到達タイプの事象と共起する場合には、形容詞が表しているのは、到達タイプの事象が起こる時点の性質ではない。例えば (162) では、*langsam* は本来一瞬で終わるはずの「目覚める」という行為に時間幅を想定し、その状態の推移に時間がかかっているということの意味していると解釈できる。

4.2.4 形容詞 I の出現傾向のまとめ

4.2.1 から 4.2.3 までに確認された、形容詞 I (*schnell*, *langsam*) の主な出現傾向は以下のとおりである。

<統語的環境>

- ① 副詞的に用いられることが多く、述語的に用いられることは少ない。
- ② 述語的用法で、主語のほかにもう一つの文成分を伴う構文では用いられない。

<意味的環境>

- ① 述語的・付加語的に、モノと事象のどちらを表示する語句とも共起する。
- ② ①でモノを表示する語句は、何らかの事象に主体として参与する。
- ③ 様々な種類の事象と結びつくが、どの事象に対しても時間幅と、その中で展開する継続的な事象を想定する。

なお、意味的環境の③に関して、もともと時間幅を有し、その中で展開する事象である活動と達成に関しては、形容詞 I の意味の解釈に際して、追加で時間幅を想定する必要はない。しかし、時間幅を持たない到達タイプの事象に関しては、形容詞 I がどのような対象に性質を当てはめているのかを解釈するにあたって、その事象が終了した状態に至るまでの時間幅を想定する必要がある。さらに、もともと時間幅を有している状態に関しても、形容詞の意味を解釈するためには、追加でその状態に至るまでの時間幅を想定する必要がある。このことから、形容詞 I は事象に時間幅だけでなく、その経過に伴う継続的な展開があること、つまり「活動」的な事象を求めているのだと考えられる。そのため、「活動」及び活動を事象内部に含む「達成」タイプの事象と結びつく際には、形容詞はそのままその事象の性質を表しているように見え、時間幅はあるが展開のない「状態」や、時間幅はないが展開がある「到達」タイプの事象と結びつく際には、その事象に時間幅や展開が追加で読み込まれるのではないかと考えられる。

さらに、Maienborn (2003), Schäfer (2013) が指摘したように、*schnell* は事象を外側の視点から捉えることができるが、*langsam* は事象を内側の視点からしか捉えられないという違いがあるようである。例えば *schnell* は (154) の „er [=Der Beifall] hört auf“ (拍手が止む) のような到達タイプの事象と結びつく場合、その終了状態に至るまでの時間幅を全体的に捉え、それが「短い時間で、すぐに」行われることを意味していると解釈できる。この場合、本来一瞬で終わるはずの「拍手が止む」という事象そのものが展開する時間幅を拡張して捉え、それを内側から見て「速い速度で」行われているとは解釈し難い。一方、*langsam* は (162) の „er wacht wieder auf“ (彼が再び目覚める) のような到達タイプの事象と結びつく場合、目覚めた状態に至るまでの時間幅を全体的に捉え、それが「時間をかけて」成立することを意味しているというよりも、目覚めるという行為

が「遅い速度で」行われていると解釈したほうが自然である。つまり、*langsam* は本来一瞬で終わるはずの事象が展開する時間幅を拡張して内側の視点から捉え、少しずつ目が覚めていくという変化の段階にその性質を付与していると考えられる。

このように事象を外側の視点から捉えられる *schnell* は、(152) の „die Beamten sind vor Ort“ (警察官たちは現場にいる) のような状態タイプの事象と結びつく場合、「いる」という状態に至るまでの時間幅を外側から全体的に捉え、すぐにその状態になる、すなわちすぐに「来る」という事象のアスペクトの再解釈が可能になる。一方、事象を外側の視点から捉える事例が見られなかった *langsam* には、状態タイプの事象と結びつく事例がない。

これらのことから、*schnell, langsam* は、無界的な「活動」タイプの事象と結びつくと、その事象を内側から捉え、その継続的な展開に「速い」「遅い」という性質を当てはめているといえる。しかし、有界的な「到達」と結びつくと、*schnell* はその事象を外側から捉え、その事象の開始や終了の状態に至るまでの「時間の長さ」を表していると解釈できる一方、*langsam* はその事象の時間幅を拡張して内側から捉え、その展開に「遅い」という性質を当てはめているといえる。また、活動と同じく無界的な「状態」は、内側の視点から見られる事象である。ただし、状態は活動とは異なり、時間幅における展開がなく、*schnell, langsam* が示す「動的な出来事の性質」を当てはめることができない。しかし *schnell* はその状態を外側の視点から捉え、その状態に至るまでの時間幅に対して、「時間の長さ」を表し、そこから Maienborn (2003) の指摘するような、起動相への再解釈が可能になると考えられる。

このように、*schnell, langsam* は事象を内側からだけでなく外側の視点からも捉えられるかという点では異なる。しかし、事象に時間幅だけでなく、その経過に伴う継続的な展開があること、つまり「活動」的な事象を求めているという点では共通している。

4.3 調査結果 2: 形容詞 II (*leicht, schwer*)

本節では、難易を表す形容詞 *leicht* (容易い) と *schwer* (難しい) の調査結果をまとめる。

4.3.1 統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布)

まず、形容詞が統語的にどのような用法で出現するのか、事例を概観する。

leicht に関しては、(164) のように述語的用法で用いられているものが 43 例である。*schnell, langsam* とは異なり、述語的用法の述語対象語となる語句は、(164) の *Skifahren* (スキーする(こと)) のような名詞句だけではなく、(165) の *Melody Gardot zu verstehen* (メロディ・ガルドーを理解する(こと)) のような *zu* 不定詞句も見られる。43 例中 19 例が名詞句の例、24 例が *zu* 不定詞句の例であった。そのほか、(166) のような付加語的用法が 41 例、(167) のような副詞的用法が 216 例である。

- (164) Der hat immer behauptet, Skifahren sei *leichter* als zu Fuss gehen. (NZZ am Sonntag, 30.08.2009) <leicht, 述語的、述語対象語が名詞句>
(その男はいつも、スキーするのは徒歩で行くよりも簡単だと主張した。)
- (165) *Leicht ist es nicht, Melody Gardot zu verstehen*. (Sonntagsblick, 21.06.2009) <leicht, 述語的、述語対象語が zu 不定詞句>
(メロディ・ガルドーを理解するのは簡単ではない。⁶⁹)
- (166) Der Mittelfeldregisseur steigt diese Woche mit *leichtem Lauftraining* wieder ein. (Burgenländische Volkszeitung, 11.10.2012) <leicht, 付加語的>
(そのミッドフィールドの司令塔は今週、簡単なランニング練習に再び参加する。)
- (167) Mit nur drei Haupttasten ist der „Walkman“ *leicht* zu bedienen. (Hamburger Morgenpost, 27.09.2005) <leicht, 副詞的>
(たった三つのボタンだけなので「ウォークマン」は簡単に操作できる。)

次に *schwer* に関しては、(168) のように述語的用法で用いられているものが 70 例である。*leicht* と同じく、述語的用法の述語対象語となる語句は、(168) の *die Auswahl* (選択) のような名詞句だけでなく、(169) の *zu erklären ...* (…を説明する (こと)) のような *zu* 不定詞句も見られる。70 例中 13 が名詞句の例、57 例が *zu* 不定詞句の例であった。そのほか、(170) のような付加語的用法が 43 例、(171) のような副詞的用法が 187 例である。

- (168) „Die Auswahl war *schwer*, weil es bei uns so viele schöne Sachen gibt.“ (Nordkurier, 19.06.2010) <schwer, 述語的、述語対象語が名詞句>
(「私たちにはたくさんの素晴らしいものがあつたので、その選択は難しかった。」)
- (169) *Es ist so schwer, zu erklären, was hier passiert ist*. (Mannheimer Morgen, 28.01.2005)
<schwer, 述語的、述語対象語が *zu* 不定詞句>
(ここで何が起こったのかを説明するのはとても難しい。)
- (170) Der Weltbürger aus Argentinien hat sich diese *schwere Prüfung* selbst auferlegt. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 21.03.2002) <schwer, 付加語的>
(そのアルゼンチン出身の世界市民は、この難しい試練を自らに課した。)
- (171) Das ist *schwer* zu erklären. (Neue Zürcher Zeitung, 03.06.2005) <schwer, 副詞的>
(それは説明し難い。)

このような形容詞 II の統語的な分布は、以下の表 5 にまとめられる。形容詞 *leicht*,

⁶⁹ Melody Gardot はアメリカの歌手である。

schwer はともに、副詞的に用いられることが最も多い。ただし、*schwer* は *leicht* に比べると比較的述語的にも用いられやすいようである。また、*leicht, schwer* が述語的に用いられる際、その述語対象語は名詞句だけでなく *zu* 不定詞句でもありうる。

		leicht		schwer	
述語的	述語対象語が名詞句	43	19	70	13
	<i>zu</i> 不定詞句		24		57
付加語的		41		43	
副詞的		216		187	
合計		300		300	

表 5 形容詞 II の統語的分布

さらに述語的用法では、調査前に想定していた (172) のような、主語のほかにもう一つの文成分を伴う、2 価の形容詞としての事例は見られなかった。

(172) Das Problem ist *leicht* zum Lösen. (この問題は解決に関して容易である。) (=14)

4.3.2 意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的、副詞的に用いられる際に、どのような個体名詞と共起しているのかを確認する。

まず、*leicht* が述語的用法で用いられる 43 例のうち、(173) の *Zeiten* (時代) のようなモノが述語対象語である例は 1 例のみ、大半の 40 例は (174) の *Skifahren* (スキーすること) や (175) の *Melody Gardot zu verstehen* (メロディ・ガルドーを理解すること) のような事象を述語対象語とする例であった。また、(176) の *alles* (すべて) のように、述語対象語が具体的に何を指し示しているのかが明確でなく、モノと事象のどちらにも分類できない例も 2 例あった。⁷⁰ なお、(173) の *Zeiten* (時代) は時間の流れを内部に持つことからモノとは異なるように思える。しかし、事象は時間の内部に存在し、時間そのものではないので、事象に分類するのも適切とは言い難い。ここでは、「時代が簡単である」というのは、「誰かが時代を「切り抜ける」のが簡単である」などと捉え、「時代」は何らかの事象に客体として参与しているモノと考えた。「時代」がどのような事象に客体として参与しているかは、あくまで文脈やモノそのものの意味から推測

⁷⁰ ここで分類不可としている述語対象語は、(176) の *alles* と、(i) のように後続する補文のない *es* の 2 例である。

(i) „Am Anfang war es nicht sehr *leicht*, aber jetzt kennen wir alle unsere Stärken und Schwächen.“ (Mannheimer Morgen, 28.05.2003)
(最初、それはそれほど簡単ではなかったが、しかし今、私たちは自らのすべての得意と不得意を知っている。)

されるのであり、文中で明示されてはいない。そのため、「時代」がどのような事象にどのような役割で参与するのかは確定できない。ただし、「時代」は主体性のある人や移動の推進力を持つ物ではないことから、これが何らかの事象に主体的に関わるとは考え難い。

(173) Ich würde sagen, Zeiten sind nicht per se schwierig oder leicht. (Rhein-Zeitung, 06.11.2014) <leicht, 述語対象語がモノ (主体以外) >

(私が言いたいのは、時代とはそれ自体が難しかったり簡単だったりするのではないということだ。)

(174) Der hat immer behauptet, Skifahren sei leichter als zu Fuss gehen. (=164)) <leicht, 述語対象語が事象 (名詞句) >

(その男はいつも、スキーするのは徒歩で行くよりも簡単だと主張した。)

(175) Leicht ist es nicht, Melody Gardot zu verstehen. (=165)) <leicht, 述語対象語が事象 (zu 不定詞句) >

(メロディ・ガルドーを理解するのは簡単ではない。)

(176) Alles sah so leicht aus, bist du je am Limit gefahren? (Neue Kronen-Zeitung, 16.06.1996) <leicht, 述語的、述語対象語の分類ができない>

(すべてはとても簡単であるように見えた、君は極限の状態で運転したことがあるのかい?)

次に、leicht が付加語的に用いられる 41 例では、26 例が (177) の Aufgabe (課題) のようなモノ、15 例が (178) の Lauftraining (ランニング練習) のような事象である。なお、モノのほとんどは何らかの事象に主体以外として参与するものである。例えば、(177) では課題は客体であり、誰かがそれを「解決する」のが簡単ではないことを表していると考えられる。leicht の被修飾語はある程度語彙が限られているようで、(177) のような Aufgabe が 8 例見られるほか、Spiel (試合) が 7 例、Beute (獲物) が 3 例と、複数の事例に現れる単語がある。なお、これらが客体として参与する事象は、「課題」を「解決する」、「試合」に「勝つ」、「獲物」を「手に入れる」などではないかと思われる。さらに、被修飾語のモノが事象に主体や客体として参与するのではないと思われる事例として、„mit leichter Hand (容易に) “ の Hand (手) が挙げられる。

(177) Den Richtern und Geschworenen fällt keine leichte Aufgabe zu. (Niederösterreichische Nachrichten, 19.05.2008) <leicht, 被修飾語がモノ (主体以外) >

(裁判官たちと陪審員たちに簡単な課題は与えられない。)

(178) Der Mittelfeldregisseur steigt diese Woche mit leichtem Lauftraining wieder ein. (=166)) <leicht, 被修飾語が事象 >

(そのミッドフィールドの司令塔は今週、簡単なランニング練習に再び参加する。)

一方、*schwer* が述語的用法で用いられる 70 例のうち、(179) の *die Aufgabe* (課題) のようなモノが述語対象語である例は 4 例のみ、大半の 66 例は (180) の *die Auswahl* (選択) や (181) の *zu erklären...* (…を説明する (こと)) のような事象を述語対象語とする例であった。述語対象語がモノである場合、それは (179) の *die Aufgabe* のように、何らかの事象に主体以外として参与すると考えられる。(179) であれば、課題は客体であり、それを誰かが例えば「解決する」のが難しいということを示しているのだと考えられる。このような事象は、文中で明示されてはいないため、述語対象語のモノがどのような事象にどのような役割で参与するのかわかることは確定できない。ただし、述語対象語のモノに主体性のある人や移動の推進力を持つ物が見られないことから、これらが何らかの事象に主体として参与しているとは考え難い。

(179) „Die Aufgabe ist *schwer*, aber schön“, ist er sicher. (Nordkurier, 02.09.2008) < *schwer*, 述語対象語がモノ (主体以外) >

(「この課題は難しいが、素晴らしい」と彼は確信している。)

(180) „Die Auswahl war *schwer*, weil es bei uns so viele schöne Sachen gibt.“ (=168) < *schwer*, 述語対象語が事象 (名詞句) >

(「私たちにはたくさんの素晴らしいものがあったので、その選択は難しかった。」)

(181) Es ist so schwer, zu erklären, was hier passiert ist. (=169) < *schwer*, 述語対象語が事象 (zu 不定冠詞) >

(ここで何が起こったのかを説明するのはとても難しい。)

次に、*schwer* が付加語的に用いられる 43 例のうち、34 例が (182) の *Prüfung* (試験) のようなモノ、9 例が (183) の *Entscheidung* (決定) のような事象である。被修飾語としてのモノはどれも何らかの事象に主体以外として参与すると考えられる。例えば (182) では試験は客体であり、誰かがそれに「耐える」のが難しいことを表していると考えられる。*leicht* と同様に、*schwer* の被修飾語もある程度語彙が限られているようで、*Prüfung* のような「課題」に類する語が 8 例見られるほか、*Zeiten* など「時」に類する語句も 15 例と、多くの事例で似たような語句が見られた。(173) の事例で確認したように、「時」を表す語句は何らかの事象に客体として参与しているものと考え、*Prüfung* などと同じくモノとして分類している。

(182) Der Weltbürger aus Argentinien hat sich diese *schwere Prüfung* selbst auferlegt. (=170) < *schwer*, 被修飾語がモノ (主体以外) >

(そのアルゼンチン出身の世界市民は、この難しい試験を自らに課した。)

- (183) Für mich als Tierarzt ist das eine *schwere* Entscheidung. (St. Galler Tagblatt, 08.07.1998) <schwer, 被修飾語が事象>
(獣医としての私にとってこれは難しい決定だ。)

以上の結果は表 6 のようにまとめられる。II の形容詞 *leicht*, *schwer* はともに、述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語にモノや事象を表示する語句を取る事例が認められた。この際のモノは基本的に客体として、そうでなくとも主体以外として何らかの事象に参加していると考えられる。ただし、その語彙はある程度限られているようである。なお、これらの形容詞が共起するモノは述語的用法には表れにくいように思われるが、事例数が少ないので明言は出来ない。

		leicht		schwer	
述語的	モノ (主体)	41	0	70	0
	モノ (主体以外)		1		4
	事象		40		66
付加語的	モノ (主体)	41	0	43	0
	モノ (主体以外)		26		34
	事象		15		9

表 6 形容詞 II が共起する個体の種類⁷¹

4.3.3 意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的・付加語的・副詞的に用いられ、事象を表す語句と共起する際に、それが状態、活動、到達、達成のどのタイプに属するかを観察する。

まず、*leicht* は収集した 300 例の中で、述語的用法で事象を表す語句を述語対象語に取る事例が 40 例である。その中で、(184) の *das Jethosen-Set-Leben* (世界を飛び回るスキーヤー生活) や (185) の *die einzige Türkin an der Schule zu sein* (学校で唯一のトルコ人である (こと)) のような状態タイプが 5 例、(186) の *Skifahren* (スキーする (こと)) や (187) の *über sich selbst zu sprechen* (自分自身について話す (こと)) のような活動タイプが 13 例、(188) の *die Wahl eines Lieblings-Objektes* (好きな物の選択) や (189) の *Melody Gardot zu verstehen* (メロディ・ガルドーを理解する (こと)) のような到達タイプが 15 例、(190) の *das Make-up* (化粧) や (191) の *eine Pumpe ... nachzubauen* (ポンプを…模造する (こと)) のような達成タイプは 7 例であった。このように、*leicht* が述語的用法で用いられるとき、共起する述語対象語は、それが名詞句であれ、*zu* 不定詞句であれ、4 種類すべての事象タイプの例が見られた。

⁷¹ *leicht* が述語的に用いられる事例は 300 例中 43 例であるが、(176) の *alles* のように個体の分類ができなかった 2 例を表 6 では省いている。

- (184) Auch das Jethosen-Set-Leben ist nicht immer *leicht*. (profil, 13.02.2006)⁷² <leicht, 述語的、状態 (名詞句) >
(世界を飛び回るスキーヤー生活も常に簡単ではないのだ。)
- (185) Es war nicht leicht, die einzige Türkin an der Schule zu sein. (Süddeutsche Zeitung, 13.08.2016) <leicht, 述語的、状態 (zu 不定詞句) >
(学校で唯一のトルコ人であるのは簡単ではない。)
- (186) Der hat immer behauptet, Skifahren sei *leichter* als zu Fuss gehen. (=164)) <leicht, 述語的、活動 (名詞句) >
(その男はいつも、スキーするのは徒歩で行くよりも簡単だと主張した。)
- (187) Es ist nicht leicht, über sich selbst zu sprechen. (Der Spiegel, 22.11.1993) <leicht, 述語的、活動 (zu 不定詞句) >
(自分自身について話すのは簡単ではない。)
- (188) Die Wahl eines Lieblings-Objektes wird jedoch in jedem Fall nicht *leicht* sein. (Nürnberger Nachrichten, 25.05.1992) <leicht, 述語的、到達 (名詞句) >
(好きな物の選択はしかし、いずれにせよ簡単ではないだろう。)
- (189) *Leicht* ist es nicht, Melody Gardot zu verstehen. (=165)) <leicht, 述語的、到達 (zu 不定詞句) >
(メロディ・ガルドーを理解するのは簡単ではない。)
- (190) Aber das Make-up sollte *leicht* sein und die Haut nicht abdichten. (Luxemburger Tageblatt, 27.06.2014) <leicht, 述語的、達成 (名詞句) >
(しかし化粧は簡単であり肌を密閉しないのが望ましい。)
- (191) [...], es müsse doch *leicht* und billig sein, eine Pumpe wie das menschliche Herz nachzubauen. (Süddeutsche Zeitung, 11.10.1996) <leicht, 述語的、達成 (zu 不定詞句) >
(ポンプを人の心臓のように模造するのはしかし簡単で安くなければならない。)

次に付加語的用法では、事象を表示する名詞句を被修飾語に取る例が 15 例確認された。そのうち状態タイプは (192) の *Leben* (生活) 1 例のみである。その他、11 例は (193) の *Lauftraining* (ランニング練習) のような活動、(194) の *Entscheidung* (決定) のような到達タイプが 2 例、(195) の *Passieren der Grenzen* (国境の通過) という達成タイプが 1 例見られた。このように、*leicht* が付加語的用法で用いられるときに共起する被修飾語には、4 種類すべての事象タイプの例が見られた。

⁷² (184) はメキシコ国籍を持ち、ドイツ貴族の血を引くスキー選手 Hubertus von Hohenlohe に関する記事である。Jethosen-Set は、Jethosen (スキーズボン) と Jet-Set (ジェット機で世界を飛び回る上流階級) を合わせた単語だと思われる。

- (192) Nun, Propheten haben kein *leichtes* Leben in der Heimat. (Neue Zürcher Zeitung, 17.12.2012) <leicht, 付加語的、状態>
(さて、預言者は故郷で楽な生活をしているのではない。)
- (193) Der Mittelfeldregisseur steigt diese Woche mit *leichtem* Lauftraining wieder ein. (=166) <leicht, 付加語的、活動>
(そのミッドフィールドの司令塔は今週、簡単なランニング練習に再び参加する。)
- (194) Dabei hatte die Fed keine *leichte* Entscheidung zu treffen. (Die ZEIT, 17.12.2015) <leicht, 付加語的、到達>
(その際、連邦準備制度理事会は簡単な決定をするべきではない。)
- (195) Damit sollen die Terroristen am „*leichten* und unkontrollierten Passieren“ der Grenzen gehindert werden [...] (Mannheimer Morgen, 06.09.1995) <leicht, 付加語的、達成>
(それによりテロリストたちは国境の「簡単かつ監視されない通過」を阻まれるとのことだ。)

さらに *leicht* が副詞的に用いられる例は 216 例である。その中で、(196) の „Sie behalten die Übersicht“ (あなたは全体を把握している) のような状態タイプが 7 例、(197) の „der Walkman ist zu bedienen“ (ウォークマンは操作できる) のような活動タイプが 57 例、(198) の „andere Beispiele lässt sich finden“ (ほかの例が見つけれられる) のような到達タイプが 141 例、(199) の „er [=der Mensch] erlernt das Rechnen mit natürlichen Zahlen“ (人間は自然数の計算を習得する) のような達成タイプが 11 例であった。

- (196) [...], so dass Sie *leicht* die Übersicht behalten. (Nordkurier, 07.01.2011) <leicht, 副詞的、状態>
(その結果あなたは簡単に全体を把握しておけます。)
- (197) Mit nur drei Haupttasten ist der „Walkman“ *leicht* zu bedienen. (=167) <leicht, 副詞的、活動>
(たった三つのボタンだけなので「ウォークマン」は簡単に操作できる。)
- (198) Da sich ebenso *leicht* andere Beispiele aus anderen Zeitungen ([...]) finden ließen, [...] (Die Zeit (Online-Ausgabe), 06.06.2001) <leicht, 副詞的、到達>
(同じくらい簡単にほかの例がほかの新聞 ([...]) から見つけれられるので [...])
- (199) [...], weshalb er [=der Mensch] das Rechnen mit natürlichen Zahlen *leicht* erlernt. (Die Zeit, 03.03.1995) <leicht, 副詞的、達成>
(そのため人間は自然数の計算を簡単に習得する。)

このように、*leicht* は統語的な用法を問わず、4 つのどのアスペクトの事象とも共起

できるようである。ただし、形容詞が事象に性質を当てはめる際、事象のアスペクトの種類に関係なく、事象のある一時点に特に焦点が当てられるように思われる。例えば(198)の「ほかの例を見つける」のような一瞬の事象(到達)では、まさにその時点の事象に形容詞が「容易い」という性質を当てはめていると考えられる。事象に明示的な終了点を持つ(199)の「計算を習得する」のような達成タイプも同様で、計算を習っている段階ではまだ「容易い」という性質は必ずしも当てはめられず、それを身につけた時点で初めて明確に、「習得する」ことが「容易い」といえる。つまり、「活動」と「到達」の二つの事象からなる「達成」において、*leicht* は終了点の「到達」的な事象に焦点を当てているのである。

それでは、明示的な終了点を持たない(197)の「ボタンを操作する」という活動、さらには時間的な展開がなく、ただ持続しうるだけの(196)の「全体を把握している」という状態に関してはどうだろうか。確かに*leicht* は、「ボタンを操作する」という行為や「全体を把握している」という状態が続く時間幅全体にその性質を当てはめているとも考えられる。しかし、その行為が展開する、あるいは状態が持続する時間幅を考えずとも、形容詞の性質は、その行為ないし状態が成立した時点ですでに当てはめられるのではないだろうか。つまり、「操作する」こと自体はやめなければいつまでも続けられるが、(197)で*leicht* が表しているのは、ボタンを操作する間ずっと、それが容易であるというよりも、そもそも「操作する」という行為が実現することが容易であるということではないだろうか。「把握している」に関しても同様で、その状態が続くことよりもむしろ、そもそも「把握している」という状態に至ることが簡単であると考えられるのではないか。このように、*leicht* が活動や状態と結びつくとき、*leicht* は必ずしもその時間幅全体に性質を当てはめるのではなく、むしろその事象が成立する時点を想定し、その時点の事象に性質を当てはめると考えられる。

一方、*schwer* は収集した300例の中で、述語的用法で事象を表す語句を述語対象語に取る事例が66例である。その中で、(200)の *das Leben in Russland* (ロシアでの生活) や(201)の *psychisch stabil zu bleiben* (精神的に安定し続ける(こと))のような状態タイプは6例、(202)の *zu erklären ...* (...を説明する(こと))のような活動タイプは14例、(203)の *die Auswahl* (選択) や(204)の *in Königslutter etwas zu finden* (ケーニヒスルターで何かを見つける(こと))のような到達タイプは42例、(205)の *bestimmte Varianten einzustudieren* (特定のバリエーションを覚え込むこと)のような達成タイプは4例であった。なお、今回の調査では、名詞句で活動及び達成タイプの事象を表す事例は見られなかった。また、*leicht*, *schwer* とともに、名詞句の述語対象語が状態タイプの事象を表している例は、(192) や(200)のような *das Leben* (生活) という語句でしか確認されなかった。

(200) Das Leben in Russland ist *schwer* und gefährlich. (Die Zeit (Online-Ausgabe),

30.04.2009) <schwer, 述語的、状態 (名詞句) >

(ロシアでの生活は厳しく危険だ。)

(201) „Es ist verdammt *schwer*, aber wichtig, psychisch stabil zu bleiben“, sagt sie. (Frankfurter Rundschau, 21.08.1999) <schwer, 述語的、状態 (zu 不定詞句) >

(「精神的に安定し続けるのは非常に難しいが、重要だ」と彼女は言う。)

(202) Es ist so *schwer*, zu erklären, was hier passiert ist. (=169)) <schwer, 活動 (zu 不定冠詞) >

(ここで何が起こったのかを説明するのはとても難しい。)

(203) „Die Auswahl war *schwer*, weil es bei uns so viele schöne Sachen gibt.“ (=168)) <schwer, 述語的、到達 (名詞句) >

(「私たちにはたくさんの素晴らしいものがあったので、その選択は難しかった。」)

(204) Es ist *schwer*, in Königslutter etwas zu finden. (Braunschweiger Zeitung, 16.09.2005) <schwer, 述語的、到達 (zu 不定詞句) >

(ケーニヒスルターで何かを見つけるのは難しい。⁷³)

(205) Da ist es natürlich *schwer*, bestimmte Varianten einzustudieren. (Rhein-Zeitung, 20.11.2004) <schwer, 述語的、達成 (zu 不定詞句) >

(そこで当然、特定のバリエーションを覚え込むのは難しい。)

次に付加語的用法では、事象を表示する名詞句を被修飾語に取る例が 9 例確認された。そのうち 4 例は (206) の Heilungsprozess (治療過程) のような活動タイプであり、(207) の Entscheidung (決定) のような到達タイプは 5 例である。状態タイプ、達成タイプの事象を表示する名詞句の事例は、今回の調査では確認されなかった。

(206) Es ist der erste Schritt in einem langen, *schweren* Heilungsprozess. (Süddeutsche Zeitung, 10.10.2008, S. 4) <schwer, 付加語的、活動 >

(これは長く難しい治療過程の第一歩である。)

(207) Für mich als Tierarzt ist das eine *schwere* Entscheidung. (=183)) <schwer, 付加語的、到達 >

(獣医としての私にとってこれは難しい決定だ。)

さらに *schwer* が副詞的に用いられる例は 187 例である。その中で、(208) の „die Viecher können stehen“ (家畜たちは立ってられる) のような状態タイプが 3 例、(209) の „das ist zu erklären“ (それは説明できる) のような活動タイプが 79 例、(210) の „die Sardine ist zu fangen“ (イワシは捕まえられる) のような到達タイプが 95 例、(211) の

⁷³ Königslutter はドイツの町名である。

„ihr Vorrat ist auszuschöpfen“ (彼らの蓄えは出し尽くされうる) のような達成タイプが 10 例であった。

- (208) Die Viecher [=die Hühner] können ganz *schwer* noch stehen. (Süddeutsche Zeitung, 14.10.2014) <schwer, 副詞的、状態>
(家畜たち [=鶏] は立っているのがかなり難しい。)
- (209) Das ist *schwer* zu erklären. (=171)) <schwer, 副詞的、活動>
(それは説明し難い。)
- (210) Die Sardine ist *schwer* zu fangen, sie kann den Weg in die Freiheit finden, so lange das Netz noch offen ist. (Mannheimer Morgen, 16.02.2006) <schwer, 副詞的、到達>
(イワシは捕まえ難く、網がまだ開いているうちは逃げ道を見つけてしまう。)
- (211) Ihr Vorrat an Ideenreichtum [...] ist an einem Abend *schwer* auszuschöpfen. (Nordkurier, 20.09.2012) <schwer, 副詞的、達成>
(彼らの独創性や [...] の蓄えは一晩では出し尽くし難い。)

このように、*schwer* も *leicht* と同じく、基本的には統語的な用法を問わず、様々なアスペクトの種類的事象と結びつきうるようである。さらに *leicht* と同じく、形容詞が事象に性質を当てはめる際、状態以外的事象に関しては、事象のある一時点に特に焦点が当てられるように思われる。例えば (210) の「イワシが捕まる」のような瞬間的事象 (到達) では、まさにその時点の事象に形容詞が「難しい」という性質を当てはめると考えられる。事象に明示的な終了点を持つ (211) の「蓄えを出し尽くす」のような達成タイプも同様で、蓄えを出している段階では、それが難しいとは考えにくい。(211) で *schwer* が表しているのは、それを最後まで出し切ることが難しいということである。つまり、「活動」と「到達」の二つの事象からなる「達成」では、*schwer* は「到達」に焦点を当てていると考えられる。

それでは、明示的な終了点を持たない (209) の「それを説明する」という活動、さらには、時間的な展開がなく、ただ持続しうるだけの (208) の「立っている」という状態に関してはどうだろうか。このように時間幅を持つ事象ないし時間軸に沿って持続しうる状態の場合、*schwer* は「説明する」という行為の展開や、「立っている」という状態の持続が「難しく続く」とも考えられる。しかしそれよりもまず、その行為や状態が実現することに対して、難しいという性質を当てはめられていると考えるほうが意味を捉えやすい。つまり、*schwer* が表す性質が当てはめられるのは、活動なり状態なりの事象がまだ成立していない状態から成立している状態へ変化する時点であり、その点で到達的である。

ところで、*leicht*, *schwer* の副詞的用法の事例 ((196)~(199) 及び (208)~(211)) を観察すると、「~できる」という可能のモダリティを含む文が多いことに気づく。この点

に関しては、形容詞 I (schnell, langsam) とも対比させて、4.4 で詳しく確認する。

4.3.4 形容詞 II の出現傾向のまとめ

4.3.1 から 4.3.3 までに確認された、形容詞 II (leicht, schwer) の主な出現傾向は以下のとおりである。

<統語的環境>

- ① 副詞的に用いられることが多く、述語的に用いられることは少ない。
- ② 述語的用法で、主語のほかにもう一つの文成分を伴う構文では用いられない。

<意味的環境>

- ① 述語的・付加語的に、モノと事象のどちらを表示する語句とも共起する。
- ② ①でモノを表示する語句は、何らかの事象に主体以外(主に客体)として参与する。
- ③ 様々な種類の事象と結びつくが、どの事象に対しても変化の局面を想定する。

なお、意味的環境の③に関して、もともと終了点を有し、その時点で変化が生じる事象である到達と達成に関しては、形容詞 II の意味の解釈に際して、別途変化の局面を想定する必要はない。しかし、明示的な終了点を持たない状態と活動タイプの事象に関しては、形容詞 II がどのような対象に性質を当てはめているのかを解釈するにあたって、その事象が実現する時点を想定することが望ましいように思われる。つまり、何かが「容易い」「難しい」というときに、状態や活動が続いていくことよりも、まず、その状態や活動が続くことに至ることのほうが、「容易い」「難しい」という性質が当てはめられる対象として捉えやすい。そこで、これらの形容詞が明示的な終了点を持たない「状態」「活動」タイプの事象と結びつく際には、その事象の開始点が追加で読み込まれるのだと思われる。状態や活動の開始は一時点で起こる事象であることから、形容詞 II は事象の一時点にとりわけ焦点を当てる、つまり「到達」的な事象を求めているのだと考えられる。

4.4 形容詞 I と形容詞 II の比較

ここでは、形容詞 I (schnell, langsam) と形容詞 II (leicht, schwer) の統語的・意味的な出現傾向を対比して、それぞれの形容詞の共通点、相違点をまとめる。

4.4.1 形容詞が副詞的に用いられる際のモダリティ

4.3.3 で言及したように、形容詞 II (leicht, schwer) の副詞的用法の事例を見ると、「～できる」という可能のモダリティを含む文が目立つようである。そこで、形容詞 I (schnell, langsam) と比較して、形容詞 II がそのようなモダリティを含む文にどれほど現れやす

いのかを調査する。

まず、*schnell*, *langsam* が話法の助動詞を含む文に出現する際、その助動詞は様々でありうる。*schnell* が副詞的に用いられる 236 例の中で、*dürfen* (～してもよい) を含む文への出現が 1 例、*müssen* (～せねばならない) が 11 例、*sollen* (～すべきだ) が 6 例、*wollen* (～するつもりだ) が 4 例、そして *können* (～できる) を含む文への出現が比較的多く、38 例である ((212)~(216) 参照)。⁷⁴ また、*langsam* が副詞的に用いられる 250 例の中で、*dürfen* を含む文への出現が 1 例、*sollen* が 4 例、*können* を含む文への出現が 2 例である ((217)~(219) 参照)。

(212) Der 150 Kilo schwere Sänger und Harmonikspieler, [...], **dürfte** die Fangemeinde [...] *schnell* in beste Stimmung versetzen. (Rhein-Zeitung, 14.10.2005) < *schnell*, *dürfen* を含む文に出現 >

(その体重 150 キロの歌手兼ハーモニカ奏者は [...], ファン集団を [...] すぐ最高に元気づけるだろう。)

(213) Ich war nämlich diejenige, die in solchen Zeiten ganz *schnell* eine Lösung finden **musste**, [...] (Protokoll der Sitzung des Parlaments Landtag Mecklenburg-Vorpommern am 31.01.2001) < *schnell*, *müssen* を含む文に出現 >

(私こそが、そのような時とても速く解決策を見つけねばならなかったのであり [...])

(214) Auf keinen Fall **sollte** man *schnell* durchfahren. (Nordkurier, 09.07.2013) < *schnell*, *sollen* を含む文に出現 >

(いかなる場合にも人は速く通過するべきではない。)

(215) [...] er **will** Paris so *schnell* wie möglich verlassen. (Frankfurter Rundschau, 31.07.1999) < *schnell*, *wollen* を含む文に出現 >

(彼はパリを可能な限り速く離れるつもりだ。)

(216) Wenn aber ein Tier infiziert ist, **kann** sich die Krankheit viel *schneller* ausbreiten, [...] (die tageszeitung, 01.03.2001) < *schnell*, *können* を含む文に出現 >

(しかし 1 匹の動物が感染していれば、病気はずっと速く広がりうるし、 [...])

(217) Das Investoreninteresse an Gewerbeimmobilien **dürfte** dagegen *langsam* wieder steigen: (Die Presse, 27.06.2009) < *langsam*, *dürfen* を含む文に出現 >

(商業用不動産への投資家の興味は、それに反してゆっくりと再び上昇するだろう。)

(218) „Das Aufwärmen **sollte** ganz, ganz *langsam* erfolgen.“ (Rhein-Zeitung, 08.08.1997) < *langsam*, *sollen* を含む文に出現 >

⁷⁴ なお、許可を表す話法の助動詞 *dürfen* (～してもよい) は、(212) では接続法第 II 式 *dürfte* の形で「たぶん～だろう」という話し手の推定を示している。*dürfen* は *schnell*, *langsam*, *leicht*, *schwer* の 4 つのどの形容詞が現れる事例でも、この用法のみで用いられていた ((212), (217), (220), (224) 参照)。

(「温め直すことはとても、とてもゆっくり行われるのが望ましい。)」

- (219) Der Segen einer funktionierenden Konsumgesellschaft **kann** die schrecklichen Wunden *langsam* heilen. (Süddeutsche Zeitung, 31.03.1994) < langsam, können を含む文に出現 >
(機能する消費社会の恩恵はひどい傷をゆっくりと癒すことができる。)

一方、*leicht*, *schwer* が語法の助動詞を含む文に出現する際、それはほとんど **können** である。*leicht* が副詞的に用いられる 216 例の中では、**dürfen** を含む文への出現が 1 例、**mögen** (〜かもしれない) が 1 例、**sollen** が 2 例、それに対して **können** を含む文への出現は 52 例である ((220)~(223) 参照)。また、*schwer* が副詞的に用いられる 187 例の中で、**dürfen** を含む文への出現が 1 例、**müssen** が 1 例なのに対し、**können** を含む文への出現は 19 例である ((224)~(226) 参照)。

- (220) Für viele Betriebe im Osten **dürfte** diese Hürde noch *leicht* zu nehmen sein, [...] (Nordkurier, 14.02.2001) < leicht, dürfen を含む文に出現 >
(東側の多くの企業にとって、この障害物はまだ簡単に突破できるだろう。)
- (221) Ein Satz, der nicht immer *leicht* zu realisieren sein **mag**, [...] (Rhein-Zeitung, 19.09.2000) < leicht, mögen を含む文に出現 >
(常に簡単に実現できるわけではないかもしれない一文が、[...])
- (222) Auch die anderen Möbel **sollten** sich *leicht* an neue Wohn- und Familiensituationen anpassen. (Nordkurier, 08.09.2003) < leicht, sollen を含む文に出現 >
(またほかの家具は簡単に新しい住まいと家族の状況に合わせられるのが望ましい。)
- (223) Personen **können** *leicht* ausgeschaltet werden. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 20.04.2006) < leicht, können を含む文に出現 >
(個人個人は排除されやすい。)
- (224) Die griechische Zusage [...] **dürfte** trotz der neuen Anstrengungen nur *schwer* einzuhalten sein. (Rhein-Zeitung, 22.09.2011) < schwer, dürfen を含む文に出現 >
(ギリシャの約束は新たな努力にもかかわらず、なかなか遵守され難いだろう。)
- (225) Nachdem Richter Manfred Kretschmann aber die Zeugen gehört hatte, **musste** die Angeklagte doch einmal *schwer* schlucken. (Rhein-Zeitung, 06.07.2001) < schwer, müssen を含む文に出現 >
(裁判官マンフレッド・クレッチュマンが証人の話を聞いた後、被告人はしかしまず、難しくも気を落ち着けなければならなかった。)
- (226) „Man **kann** *schwer* abschätzen, was in einem Jahr los ist.“ (Die Zeit, 24.01.1997) < schwer, können を含む文に出現 >
(「1 年の間に何が起きているのかということの評価し難い。)」

さらに、können が表す可能のモダリティは、話法の助動詞のみならず、zu 不定詞+sein や zu+現在分詞、sich+不定詞+lassen といった構文や、動詞語幹-bar/-lich という派生語でも表現されうる。schwer, langsam に比べて、leicht, schwer はこれらの構文に現れることも多い。schnell では sich+不定詞+lassen 構文に出現する例が 2 例、派生語-bar/-lich と共起する例が 3 例と、すべてを合わせても副詞的用法 236 例中 5 例のみである ((227) ~ (228) 参照)。langsam に至っては、副詞的用法の 250 事例中、これらの構文に出現する例は 1 例も見られない。⁷⁵

(227) [...] das Ärgernis ließe sich mit ein paar Telefonaten *schnell* aus der Welt schaffen. (Rhein-Zeitung, 23.06.2004) < schnell, sich+不定詞+lassen >

(腹立ちは電話での会話をいくつかすることですぐに取り除くことができた。)

(228) Immer komplexere und *schnell* veränderliche Produkte erschweren die Messung des BIPs. (profil, 21.05.2010) < schnell, -bar/-lich >

(常に複雑になり速く変わりうる製品が、国内総生産の測定を困難にする。)

一方、leicht は zu 不定詞+sein 構文に出現する例が 30 例、zu+現在分詞構文に出現する例が 2 例、sich+不定詞+lassen 構文に出現する例が 19 例、派生語-bar/-lich と共起する例が 44 例と、これらの構文に leicht が現れる事例数は副詞的用法 216 例中 95 例である ((229) ~ (232) 参照)。また、schwer は zu 不定詞+sein 構文に出現する例が 78 例、zu+現在分詞構文に出現する例が 10 例、sich+不定詞+lassen 構文に出現する例が 20 例、派生語-bar/-lich と共起する例が 51 例と、副詞的用法 187 例中合わせて 159 例で schwer はこれらの構文に現れていた ((233) ~ (236) 参照)。

(229) Mit nur drei Haupttasten ist der „Walkman“ *leicht* zu bedienen. (= (167)) < leicht, zu 不定詞+sein >

(たった三つのボタンだけなので「ウォークマン」は簡単に操作できる。)

(230) Der zweite am Abendhimmel *leicht* zu findende Planet ist Mars. (Nürnberger Nachrichten, 10.07.1999) < leicht, zu+現在分詞 >

(夕空で二番目に簡単に見つけられる惑星が火星だ。)

(231) Da sich ebenso *leicht* andere Beispiele aus anderen Zeitungen ([...]) finden ließen, [...] (= (198)) < leicht, sich+不定詞+lassen >

(同じくらい簡単にほかの例がほかの新聞 ([...]) から見つけれられるので [...])

⁷⁵ なお、Nobukuni (2013a) で収集した schnell の事例 100 例と、さらに追加で DWDS の事例を 100 例集めた結果を見ても、langsam がこれらの構文に出現する例は 1 例も見られなかった。

- (232) [...], sind die kurzen Artikel *leichter* **lesbar**. (St. Galler Tagblatt, 10.04.1999) <leicht, -bar/-lich>
 (この短い記事は簡単に読める。)
- (233) Das **ist schwer zu erklären**. (=171) <schwer, zu 不定詞+sein>
 (それは説明し難い。)
- (234) „Humor ist wie ein *schwer* **aufzufindendes** Reich“ (Nürnberger Nachrichten, 03.12.2014) <schwer, zu+現在分詞>
 (「ユーモアはまるで発見し難い王国だ。」)
- (235) Nur *schwer* **lassen sich** in diesen Fällen neue Besitzer **finden**. (Nordkurier, 14.07.2009)
 <schwer, sich+不定詞+lassen>
 (これらの場合に新しい所有者はなかなか見つけ難い。)
- (236) Es ist *schwer* **durchschaubar** [...] (Nürnberger Nachrichten, 06.06.2002) <schwer, -bar/-lich>
 (これは見破り難い。)

このように、形容詞 I (*schnell, langsam*) に比べて、形容詞 II (*leicht, schwer*) は können やそれに類する構文により表される「可能」のモダリティと共起しやすい。⁷⁶ さらに、これらの事例における「可能」という話者の判断はすべて、現実世界の状況に即して下される、いわゆる状況的モダリティである。(237) のように、命題内容に関して話者の知識や意志により「可能」と判断するような、いわゆる認識的モダリティとして解釈される例は、*leicht, schwer* に関しては、収集した事例の中には見られなかった。⁷⁷

- (237) Er kann krank sein. (彼は病気かもしれない。)

一方、*schnell, langsam* に関しては、(238) のような認識的モダリティの例も見られる。これは、形容詞 I, II が命題ではなく事象を評価するものであり、命題全体に作用域を及ぼす認識的モダリティとは共起しにくいということを表しているのではないかと思われる。⁷⁸

⁷⁶ そもそも「可能」のモダリティを表す語句と共起していなくても、形容詞 II が現れる文は「可能」の意味を含んでいると考えたほうが自然な場合がある。例えば前述の (196) [...] *so dass Sie leicht die Übersicht behalten* は、「その結果あなたは簡単に全体を把握しています」ではなく「把握しておけます」と、可能の意味を含めて解釈するのが自然である。

⁷⁷ このような、法の談話背景 (Redehintergründe) の違いによる状況的 (zirkumstanziell) モダリティと認識的 (epistemisch) モダリティの対立に関しては、Zifonun/Hoffmann/Strecker (1997) や Reis (2001) を参照のこと。

⁷⁸ ただし、これは形容詞 I, II が認識的モダリティと共起できないことを意味するわけではない。(212), (217), (220), (224) に見られるように、話者の確信度合いが高い推量を表す

(238) Wenn aber ein Tier infiziert ist, **kann** sich die Krankheit viel *schneller* ausbreiten, [...]
 (=216)

(しかし 1 匹の動物が感染していれば、病気はずっと速く広がりうるし、[...])

形容詞 I, II が副詞的に用いられる際の文のモダリティに関しては、以下の表 7 にまとめられる。

モダリティ			形容詞 I				形容詞 II			
			schnell		langsam		leicht		schwer	
表示あり	状況的 可能	können	26	21	1	1	147	52	178	19
		zu 不定詞+sein など		5		0		95		159
	その他の話法の助動詞			39		6		4		2
モダリティの表示なし				171		243		66		8
合計				236		250		217		188

表 7 形容詞 I, II が副詞的に用いられる際の文のモダリティ⁷⁹

4.4.2 形容詞が副詞的に用いられる際の態

形容詞 II と共起することが多い、zu 不定詞+sein や zu+現在分詞、sich+不定詞+lassen といった構文や、動詞語幹-bar/-lich という派生語は、「可能」の意味だけでなく、「受動」の意味も同時に表す (Helbig/Buscha 2001: 165-166)。つまり、これらの構文と共に現れることが多い leicht, schwer は、受動的な文に現れることが多い。そこで、4 つの形容詞 schnell, langsam, leicht, schwer に関して、これらが副詞的用法で用いられる際の文の態が能動的か受動的かという観点でさらに分類する。

まず、schnell は 236 例中 198 例、langsam は 250 例中 237 例が能動的な文に現れ、受動的な文に現れる事例はそれぞれ 38 例、13 例と少ない ((239)~(242) 参照)。

(239) Nach Angaben von Zeugen ist der junge Mann nicht zu *schnell* gefahren. (=134) < schnell, 能動的 >

(証人の説明によれば、その若い男はスピードを出しすぎてはいなかった。)

(240) Die Besitzerin konnte *schnell* ermittelt werden. (Rhein-Zeitung, 03.11.2015) < schnell, 受動的 >

dürfte (〜だろう) と形容詞 I, II が共起する例も存在する。

⁷⁹ (220) の „diese Hürde dürfte noch *leicht* zu nehmen sein“ (この障害物はまだ簡単に突破できるだろう) のように、können 以外の話法の助動詞が、状況的可能のモダリティを表示する構文内に出現している文がある。そのため、それぞれの事例の合計が、leicht, schwer に関しては表 5 の副詞的用法の事例数と一致していない。(leicht が副詞的用法の例は 300 例中 216 例、schwer が副詞的用法の例は 300 例中 187 例である。)

(その所有者はすぐに突き止められることができた。)

(241) „Sprechen Sie *langsam* und deutlich.“ (=137) <*langsam*, 能動的>

(「ゆっくりそして明瞭に話してください。」)

(242) In Deutschland wird dies erst *langsam* wahrgenommen. (Süddeutsche Zeitung, 26.02.2007) <*langsam*, 受動的>

(ドイツでは、そのことはようやく少しずつ認識されつつある。)

一方で、*leicht*, *schwer* は受動的な文に現れることが多い。*leicht* では 216 例中 94 例が能動的な文であるのに対して受動的な文が 122 例、*schwer* では能動的な文が 187 例中 19 例に対して受動的な文が 168 例と、いずれも受動的な文で用いられることが多い ((243)~(246) 参照)。

(243) [...] weshalb er [=der Mensch] das Rechnen mit natürlichen Zahlen *leicht* erlernt. (=199) <*leicht*, 能動的>

(そのため人間は自然数の計算を簡単に習得する。)

(244) Personen können *leicht* ausgeschaltet werden. (=223) <*leicht*, 受動的>

(個人個人は排除されやすい。)

(245) In diesen Markt kommt man aber *schwerer* hinein, denn [...] (FOCUS, 03.03.2008) <*schwer*, 能動的>

(この市場にはしかし入って行き難い、というのも [...])

(246) Im Zeitalter der Spitzenmedizin wird nur *schwer* akzeptiert, dass [...] (St. Galler Tagblatt, 01.11.2014) <*schwer*, 受動的>

(先端医療の時代には [...]) ということがなかなか受け入れられ難い。)

上述の結果をまとめた表 8 から、形容詞 I (*schnell*, *langsam*) に比べて、形容詞 II (*leicht*, *schwer*) は受動的な文に現れやすいといえる。これは、Vendler (1968) の指摘するとおりである。なお、図 7, 8 を見比べると分かるとおり、形容詞 II では、werden+過去分詞という受動態の事例よりも、zu 不定詞+sein などの構文による、可能の意味を含んだ受動的な文の事例のほうが多く見られた。このことから、形容詞 II では、「状況的可能」のモダリティと「受動」的な態が、両方とも必要とされているのだと思われる。

	形容詞 I		形容詞 II	
	<i>schnell</i>	<i>langsam</i>	<i>leicht</i>	<i>schwer</i>
能動的	198	237	94	19
受動的	38	13	122	168
合計	236	250	216	187

表 8 形容詞 I, II が副詞的に用いられる際の文の態

4.4.3 形容詞と事象のアスペクト、形容詞が出現する環境の関係

これまでに見た 4.2 の調査結果 (形容詞 I)、4.3 の調査結果 (形容詞 II) 及び 4.4.1 (形容詞 I, II とモダリティ) と 4.4.2 (形容詞 I, II と態) は、次のようにまとめられる。

まず、形容詞 I, II は、統語的には副詞的用法に現れやすいという点で共通している。また、述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語に、モノと事象のどちらも取りうるが、状態と結びつくのは稀である、という点も一致している。さらにこれらの形容詞は、述語的に用いられる際に、主語にモノを表す名詞句を取り、事象を表す文成分を伴うような、2 価の使用例が見られないという点でも共通している。

一方で、形容詞 I, II には、異なる点も多くある。両者の違いをまとめると、表 9 のようになる。

	形容詞 I (schnell, langsam)	形容詞 II (leicht, schwer)
述語的用法で事象を表す 述語対象語の統語的形式	名詞句のみ	名詞句あるいは zu 不定詞句
述語的・付加語的用法で統語的に 結びつくモノの主客	主に事象の主体	事象の主体以外 (主に客体)
副詞的用法の際の態の傾向	能動的	受動的
副詞的用法の際のモダリティの 傾向	モダリティ表示の 制限なし	状況的可能のモダリティ の表示
用法を問わず、形容詞が性質 を表す事象のアスペクト解釈	活動	到達

表 9 形容詞 I, II が出現する統語的、意味的環境の相違

ドイツ語の形容詞 I, II に関して、最初の 3 点「述語的用法で事象を表す述語対象語の統語形式」「述語的・付加語的用法で統語的に結びつくモノの主客」「副詞的用法の際の態の傾向」の違いは、Vendler (1968) の英語形容詞 A₃, A₄ の違いと、ほぼ相当する。残りの 2 点「副詞的用法の際のモダリティの傾向」「用法を問わず、形容詞が性質を表す事象のアスペクト解釈」は、今回の調査で明らかになったことである。

ところで、これらの違いは、何に起因するのだろうか。本稿では、それぞれの形容詞が事象の性質を述べるにあたって、想定される事象が「活動」か「到達」かという違いに起因するのではないかと考える。

形容詞 I (schnell, langsam) は、ある程度の時間幅と、その中における動作の展開がある「活動」的な事象を想定した形容詞であると考えられる。そのため、展開はあるが時間幅がなく瞬間的な事象である「到達」や、時間幅はあっても展開がない「状態」のような事象と結びつく際には、その事象が成立する以前に、時間幅と何らかの展開を想定

したような読みがなされるのだと思われる。⁸⁰

また事象が「活動」である、すなわちある程度の時間幅と展開があり、かつその終了点があらかじめ決定されていないということは、その事象は誰かが制御しやすいものであると考えられる。そこから、述語的・付加語的用法で形容詞が事象ではなくその参与者のモノと関係するときには、それは事象の主体であることが多くなるのではないか。さらに、これらの形容詞が副詞的用法で用いられる際、能動的な文で用いられることが多いのも、能動的な文では主体が事態を制御していることが表せるからであると思われる。

一方、形容詞 II (*leicht, schwer*) は、時間幅がなく、瞬間的に終了する「到達」的な事象を想定した形容詞であると考えられる。そのため、時間幅があり、かつ明示的な終了点を持たない「活動」や「状態」という事象と結びつく際には、それが開始あるいは終了する一時点を想定したような読みがなされるのだと思われる。

また、「到達」という一瞬の事象は、「活動」ほどにその事象を人が制御しやすいものではない。そのため、述語的・付加語的用法で事象の参与者と関係するときには、それが事象の主体ではないことが多くなるのではないか。さらに、副詞的用法で用いられる際にも、事象の主体が必ずしも明確ではない受動態で用いられることが多くなるのではないか。

ところで、*leicht, schwer* が想定する「到達」は一瞬の事象であり、形容詞がその性質を付与している時点で、ちょうど事象が「実現」しているとは限らない。言い換えれば、これらの事象はその「実現」を前提とはしておらず、ただそれが見込まれているのだと考えられる。このことは、形容詞 II において形容詞 I とは異なり、事象を表す述語対象語が未遂の行為を表現する *zu* 不定詞句で表しうることからも明らかである。⁸¹ *leicht, schwer* では事象の実現を前提とはしていないので、あくまでその実現が「可能である」というモダリティの表示が求められることが多いのではないだろうか。一方、ある程度の時間幅や展開がある事象の性質を表す *schnell, langsam* では、その事象はすでに実現していると考えられる。目の前で事象が展開していないと、「速い」「遅い」とは評価し難い。そのため、*schnell, langsam* では、もし事象がその時点で実現していなくても、少なくとも実現することが前提となっていると考えられる。そのため、副詞的用法でも可能性に言及するモダリティの表示がとりたてて必要とされないのではないか。

このように、形容詞 I と形容詞 II の統語的・意味的出現形式の様々な違いは、形容詞が事象に優先的に求めるアスペクトが異なる（形容詞 I では活動（事象の継続）、形容詞 II では到達（状態変化の局面））ということから説明づけられる。

⁸⁰ 形容詞 I のうち、*langsam* は状態タイプの事象と共起する事例がなかったため、*langsam* はそもそも状態タイプの事象とは共起しえないという可能性もある。

⁸¹ 例えば細谷／山下／内堀 [編] (2016: 52) によれば、*dass* で言い換えることが困難、あるいは不可能な *zu* 不定詞句の特性は、未遂の行為を表現することにある。

4.5 調査結果 3: 形容詞 III (*vorsichtig, leichtsinnig*)

本節では、慎重さを表す形容詞 *vorsichtig* (慎重な) と *leichtsinnig* (軽率な) の調査結果をまとめる。

4.5.1 統語的な出現環境 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布)

まず、形容詞が統語的にどのような用法で出現するのか、事例を概観する。

vorsichtig に関しては、(247) のように述語的用法で用いられているものが 82 例、(248) のような付加語的用法が 68 例、(249) のような副詞的用法が 150 例である。なお、述語的用法で *zu* 不定詞句が述語対象語となる事例は見られなかった。

(247) „Ich war immer *vorsichtig* und werde es auch in Zukunft sein“, sagt sie. (die tageszeitung, 09.01.2013) <*vorsichtig*, 述語的>

(「私は常に慎重であったし、今後もまたそうだろう」と彼女は言う。)

(248) „Wölfe sind *vorsichtige Tiere*, die Menschen aus dem Weg gehen“, erklärt Höfken. (Rhein-Zeitung, 12.05.2016) <*vorsichtig*, 付加語的>

(「狼は慎重な動物で、人間を回避する」とホフケンは説明する。⁸²⁾

(249) Andrea Büchler spricht *vorsichtig*, wählt ihre Worte mit Bedacht. (Neue Zürcher Zeitung, 09.06.2016) <*vorsichtig*, 副詞的>

(アンドレア・ビューヒュラーは注意深く話し、自分の言葉を慎重に選ぶ。⁸³⁾

一方、*leichtsinnig* では、87 例が述語的用法で用いられている。*vorsichtig* とは異なり、述語対象語が (250) の *Menschen* (人間) のような名詞句の例だけでなく、(251) の *sie als Familienhunde zu vermitteln* (それらを飼い犬として仲介する (こと)) のような *zu* 不定詞句も見られる。87 例の述語的用法の事例の中で、75 例が (250) のように述語対象語が名詞句で表される例、12 例が (251) のように *zu* 不定詞句で表される例である。またそのほか、(252) のような付加語的用法が 107 例、(253) のような副詞的用法が 106 例であった。

(250) Menschen sind so *leichtsinnig*. (Hamburger Morgenpost, 09.03.2015) <*leichtsinnig*, 述語的、述語対象語が名詞句>

(人間はとても軽率である。)

(251) Sie [=die Tiere] hier als Familienhunde zu vermitteln, sei *leichtsinnig* und könne nicht funktionieren. (Nürnberger Nachrichten, 15.03.2014) <*leichtsinnig*, 述語的、述語対象語

⁸² Ulrike Höfken はドイツの環境大臣である。

⁸³ Andrea Büchler はスイスの人間医学分野における国家倫理委員会委員長である。

が zu 不定詞句>

(それら [=動物たち] をここで飼い犬として仲介するのは軽率で機能しえないという。)

(252) Mohammed Raschid ist kein *leichtsinniger* Mann. (die tageszeitung, 31.08.2004) < *leichtsinnig*, 付加語的 >

(ムハンマド・ラシドは軽率な男ではない。⁸⁴)

(253) Viele Studenten nehmen den Rat jedoch *leichtsinnig* an [...] (Die Zeit (Online-Ausgabe), 18.02.1999) < *leichtsinnig*, 副詞的 >

(多くの学生はその助言をしかしながら軽率に受け入れる。)

形容詞 III の統語的な出現環境は表 10 のようにまとめられる。まず、これらの形容詞が述語的に用いられる際、*vorsichtig* では述語対象語に名詞句のみが現れうる一方、対義語の *leichtsinnig* では名詞句だけでなく、zu 不定詞句も述語対象語として現れうる。⁸⁵ また、*vorsichtig* は副詞的用法の事例が全体の半数を占め、比較的用いられやすいといえる一方、*leichtsinnig* は 3 用法の分布から、突出して多く用いられる用法は認められない。このように、形容詞 III の統語的分布には、両者に共通した特徴は無いようである。

		vorsichtig		leichtsinnig	
述語的	述語対象語が名詞句	82	82	87	75
	zu 不定詞句		0		12
付加語的		68		107	
副詞的		150		106	
合計		300		300	

表 10 形容詞 III の統語的分布

ただし *vorsichtig*, *leichtsinnig* はどちらも述語的用法で、(254)~(257) のように主語のほかにもう一つの文成分を伴う事例が見られたという点では共通している。*vorsichtig* が述語的に用いられる事例は 82 例で、そのうち 14 例は (254) の beim Essen (食事の際に) のような前置詞 bei+名詞句を、12 例は (255) の mit vorschnellen Urteilen (性急な判断に関して) のような前置詞 mit+名詞句を伴う。一方、*leichtsinnig* が述語的に用いられ

⁸⁴ (252) はイラクの生活に関する記事であり、Mohammed Raschid は機械工である。

⁸⁵ なお、*vorsichtig* の対義語の述語対象語に zu 不定詞句が認められるというのは、*leichtsinnig* だけでなく、*vorsichtig* の対義語であることが語の成り立ちから明確な *unvorsichtig* の場合でも同様である。*unvorsichtig* が述語的に用いられる際、例えば以下のような zu 不定詞句を述語対象語とする事例が確認された。

(i) Vor allem war es *unvorsichtig*, in der Nähe dieses prinzipiell gefährlichen Geländes Wohnungen zu bauen [...] (Neue Zürcher Zeitung, 31.03.2016)

(とりわけ、この根本的に危険な土地の近くに住宅を建てるのは軽率だった。)

る事例は 87 例で、そのうち 4 例は (256) の *bei der Vermietung ihrer Immobilien* (彼らの不動産の賃貸の際に) のような前置詞 *bei*+名詞句を、2 例は (257) の *im Umgang mit Mail-Adressen* (メールアドレスの扱いの上で) のような前置詞 *in*+名詞句を伴っている。なお (254) 以降、形容詞が述語対象語のほかにも伴うもう一つの文成分には二重下線を引いている。

- (254) Auch beim Essen sollte man *vorsichtig* sein und [...] (Neue Zürcher Zeitung, 23.06.2000) <*vorsichtig*, 述語的、主語以外にも文成分を伴う (*bei*+名詞句) >
(食事の際にも人は慎重であるのが望ましく [...])
- (255) Aber mit vorschnellen Urteilen muss man in diesem Fall *vorsichtig* sein [...] (profil, 06.09.2010) <*vorsichtig*, 述語的、主語以外にも文成分を伴う (*mit*+名詞句) >
(しかし性急な判断に関して、人はこの場合は慎重でなければならない。)
- (256) Viele Hausbesitzer seien bei der Vermietung ihrer Immobilien höchst *leichtsinnig*. (Süddeutsche Zeitung, 02.12.1995) <*leichtsinnig*, 述語的、主語以外にも文成分を伴う (*bei*+名詞句) >
(多くの家主は、自分たちの不動産の賃貸の際にきわめて軽率である。)
- (257) Wir sind alle zu *leichtsinnig* im Umgang mit Mail-Adressen. (Hamburger Morgenpost, 08.04.2014) <*leichtsinnig*, 述語的、主語以外にも文成分を伴う (*in*+名詞句) >
(我々は皆メールアドレスの扱いの上であまりにも軽率だ。)

このように、形容詞 III の *vorsichtig*, *leichtsinnig* には統語的な分布で目立った共通点はないものの、主語のほかにもう一つの文成分を伴いうるという点では共通している。

	<i>vorsichtig</i>	<i>leichtsinnig</i>
述語対象語のみ	56	81
追加の文成分を伴う	26	6
合計	82	87

表 11 形容詞 III が述語的に用いられる際の文成分

4.5.2 意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的、副詞的に用いられる際に、どのような個体名詞と共起しているのかを確認する。

まず、*vorsichtig* が述語的用法で用いられる 82 例すべてにおいて、(258) の *ich* (私は) のようにモノが述語対象語であり、事象を述語対象語とする例は見られない。⁸⁶ また、

⁸⁶ ただし、別途 DWDS の Kernkorpus の事例を 100 例集めた際には、以下のような事象を表示する語句を述語対象語とする事例が 1 例見られたため、このような構文が不可能とは

これらはほぼすべて、人や動物、そして (259) の *die Banken* (銀行) のような人が属する機関である。このような人、物、機関は、意志があり、何らかの事象に主体として参与するという点で共通している。82 例中 1 例のみ、(260) の *der Bericht über die Untersuchung* (調査に関する報告書) という、主体性がないモノの例が見られた。ただし、ここでのモノの背後には、意志を持つ人が主体的に参与する事象があることが予想される。(260) の述語対象語である「報告書」の背後には「人が報告書を書く」という事象があることが想定される。報告書そのものが慎重なのではなく、その作成者が慎重に報告しているから、その結果としてできた報告書もまた慎重であるという解釈になるのだと思われる。

(258) Was bleibt, ist die Angst von Frauen, überhaupt auf die Straße zu gehen. Drei Wochen zögerte Sharma. „Ich war immer *vorsichtig* und werde es auch in Zukunft sein“, sagt sie. (*die tageszeitung*, 09.01.2013) <*vorsichtig*, 述語対象語がモノ (主体) >

(残っているのは、女性たちの、特に通りに出ていくことの不安である。3 週間シャルマは躊躇した。「私は常に慎重だったし、今後もそうだろう」と彼女は言う。)

(259) Allerdings seien die Banken *vorsichtiger* geworden und verlangten nun mehr Sicherheiten als früher einmal. (*Die Presse*, 26.04.2003) <*vorsichtig*, 述語対象語がモノ (主体) >

(もっとも銀行はより慎重になり、以前よりも多くの担保を要求した。)

(260) Der Bericht über die Untersuchung ist *vorsichtig*, macht mit seinen Informationen allerdings bewusst, dass Alternativen bestehen. (*Neue Zürcher Zeitung*, 20.02.2014) <*vorsichtig*, 述語対象語がモノ (主体以外) >

(調査に関する報告書は慎重である、ただ、その情報により別の可能性があることを理解させる。)

上で確認したように、*vorsichtig* が述語的に用いられる際の述語対象語は、ほぼすべてが人のような主体性のあるモノである。これらのモノは、何らかの事象に主体として参与しうるが、具体的にどのような事象に参与していると考えられるか、文脈や述語対象語が表示するモノの種類そのものからは必ずしも判断できない。例えば (259) では、述語対象語の「銀行」が参与する事象は「融資」であることが文脈から推測できる。一方、(258) の述語対象語「私」には「通りに出ていく」以外にも「買い物をする」「誰かと話

いえない。

(i) Dann schob er sich [...] zur Dachrinne. Viel *vorsichtiger* und zögernder waren seine Bewegungen geworden, als wäre der Schlafwandler erwacht. (Schulze, Ingo: *Simple Storys*, Berlin: Berlin-Verl. 1998)

(それから彼は [...] 軒樋へ移動した。まるで夢遊病者が目覚めたかのように、彼の動きははるかに慎重でためらいがちになった。)

をする」など、様々な行為をする可能性があり、そのうちのどれか、あるいはそのすべてにおいて慎重だったのかもしれない。

4.5.1 で確認したように、*vorsichtig* が述語的に用いられる際、主語のほかにもう一つの文成分を伴う事例がある。これらの事例では、主語が表示するモノが主体として参与する事象が推測しやすい。例えば、(261) では *das Essen* が表示する「食事」という事象において、主語が表示する人が慎重であることを表しているのだと推測できる。なお、*vorsichtig* が述語的に用いられる 82 例中、主語以外の文成分を伴う事例は 26 例であり、そのうち 23 例の文成分で表示されるのは (261) の *das Essen* (食事) のような事象である。3 例のみ、(262) の *Opiate* (アヘン剤) のようなモノの例が見られた。この場合も、モノの背後に、それが主体以外として参与する事象が容易に推測される。例えば (262) では、医者がアヘン剤を「使用する」ことに関して慎重なのだと思う。

(261) Auch beim Essen sollte man *vorsichtig* sein und [...] (=254) <*vorsichtig*, 述語対象語がモノ (主体)、もう一つの文成分が事象>
(食事の際にも人は慎重であるのが望ましく [...])

(262) Doch viele Ärzte sind [...] *viel zu vorsichtig mit Opiaten*. (Rhein-Zeitung, 14.07.2005)
<*vorsichtig*, 述語対象語がモノ (主体)、もう一つの文成分がモノ (主体以外)>
(しかし多くの医者は [...] あまりにもアヘン剤に関して慎重すぎる。)

次に、*vorsichtig* が付加語的に用いられる例は 68 例あり、そのうち 8 例では、被修飾語が (263) の *Tiere* (動物) のような主体性のある人や動物、人が所属する機関である。なお、被修飾語が (264) の *Fahrer* (運転手) のような動詞の派生語 (動詞語幹+*-er/-or*) である事例もあり、この場合、当該の人が主体的に行う事象が明示されているといえる。一方で、このように事象が明示されていないと、モノの背後にある事象は必ずしも容易には推測されない。例えば (263) の *Tiere* (動物) は「人を回避する」という事象でのみ慎重であるというよりは、あらゆる事象において慎重であり、だからこそ人間を回避すると考えられる。また、68 例中 8 例では、被修飾語は (265) の *Worte* (言葉) のような主体性のないモノである。これらは、人が行う事象に主体以外として参与するのであることが、文脈から推測される。例えば (265) では言葉そのものが慎重なのではなく、市長が慎重に言葉を選んだため、その選ばれた言葉もまた慎重だといえるのではないか。最後に、*vorsichtig* が付加語的に用いられる際、最も多い被修飾語は (266) の *Bedenken* (懸念) のような事象を表す語句で、このような事例は 52 例ある。

(263) „Wölfe sind *vorsichtige Tiere*, die Menschen aus dem Weg gehen“, erklärt Höfken.
(=248) <*vorsichtig*, 被修飾語がモノ (主体)>
(「狼は慎重な動物で、人間を回避する」とホフケンは説明する。)

- (264) Wer schnell fährt [...] ist schlechter rangiert als der *vorsichtige Fahrer* mit einer längeren Zeit, aber ohne Fehler. (St. Galler Tagblatt, 02.10.2001) <vorsichtig, 被修飾語がモノ (主体) >
(速く運転する者は [...] より長い時間をかけるが失敗をしない慎重な運転手よりも悪く位置付けられている。)
- (265) Deshalb wählte der Rathauschef *vorsichtige Worte*, als [...] (Nordkurier, 22.01.2015)
<vorsichtig, 被修飾語がモノ (主体以外) >
(そのため市長は [...] の際に、慎重な言葉を選んだ。)
- (266) Auch das Umweltministerium kündigte *vorsichtige Bedenken* an. (Berliner Morgenpost, 31.10.1998) <vorsichtig, 被修飾語が事象 >
(環境省もまた慎重な懸念を知らせた。)

一方、*leichtsinnig* が述語的に用いられる事例は 87 例である。その中の 59 例では (267) の *Menschen* (人間) のようなモノが述語対象語であり、これらはすべて、意志を持ち、何らかの事象に主体として参与しうる人や動物、人が属する機関である。さらに *vorsichtig* とは異なり、*leichtsinnig* には (268) の *Bushs Politik* (ブッシュの政治) や (269) の *sie als Familienhunde zu vermitteln* (それらを飼い犬として仲介する (こと)) のように事象を表示する語句が述語対象語となる例も 24 例見られた。また、(270) の *etwas* (何か) のように、述語対象語が具体的に何を指示しているのかが明確でなく、モノと事象のどちらにも分類できない例も 4 例あった。

- (267) *Menschen* sind so *leichtsinnig*. (=250) <leichtsinnig, 述語対象語がモノ (主体) >
>
(人間はとても軽率である。)
- (268) Die Senatoren Daschle und Byrd bezeichneten *Bushs Politik* als *leichtsinnig*. (Neue Zürcher Zeitung, 23.08.2001) <leichtsinnig, 述語対象語が事象 (名詞句) >
(上院議員のダシュルとバードはブッシュの政治を軽率だと言った。)
- (269) *Sie [=die Tiere] hier als Familienhunde zu vermitteln*, sei *leichtsinnig* und könne nicht funktionieren. (=251) <leichtsinnig, 述語対象語が事象 (zu 不定詞句) >
(それら [=動物たち] をここで飼い犬として仲介するのは軽率で機能しえないという。)
- (270) „Sie [=die Chihuahuhündin] hat plötzlich unglaublich viel Energie, die irgendwie raus muss – egal, wie *leichtsinnig*, gefährlich oder verboten *etwas* ist.“ (Rhein-Zeitung, 26.10.2013) <leichtsinnig, 述語対象語の分類ができない >
(「それ [=チワワ] は突然、どうにかして外へ出さなければならない、信じられないほどたくさんさんの活力を得た。 — どれほど何かが軽率で、危険で、禁じられてい

るかは関係ない。）」

上で確認したように、*leichtsinnig* が述語的に用いられる際の述語対象語がモノであれば、それは必ず「人」のように主体性を持つ。これらのモノは、何らかの事象に主体として参与しうるが、具体的にどのような事象に参与していると考えられるか、文脈や述語対象語が表示するモノの種類そのものからは必ずしも判断できない。例えば (267) の述語対象語 *Menschen* (人間) には様々な行為をする可能性があり、人間がどのような事象の際に軽率であるのかは判断できない。しかし、同じ述語的用法でも、*leichtsinnig* が特定の事象に関して軽率であると、文脈や述語対象語が表示するモノの種類から推測できる場合もある。例えば (271) の *Kraftfahrer* (自動車運転手) は動詞の派生語 (動詞語幹+*-er/-or*) で、*leichtsinnig* は運転手が「運転」に際して軽率であることを指しているのだと推測できる。さらに、4.5.1 で確認されたように、*leichtsinnig* が述語的に用いられる際、主語のほかにもう一つの文成分を伴う事例がある。これらの事例でも、主語が表示するモノが主体として参与する事象を推測しやすい。例えば、(272) では、家主が不動産賃貸の際の「決定」「契約」などの事象に関して軽率であるのだらうと、参与する事象が推測できる。なお、*leichtsinnig* が述語的に用いられる 87 例中、主語以外の文成分を伴う事例は 6 例であり、そのすべてで (272) の *die Vermietung ihrer Immobilien* (彼らの不動産の売買) のような事象を表す語句が用いられている。

(271) *Kraftfahrer* sollten heute nicht *leichtsinnig* werden. (Nordkurier, 12.08.2011)

(自動車運転手は今日軽率になるべきではない。)

(272) *Viele Hausbesitzer* seien bei der *Vermietung ihrer Immobilien* höchst *leichtsinnig*.

(=(256)) <*leichtsinnig*, 述語的、主語以外にも文成分を伴う (bei+名詞句) >

(多くの家主は、自分たちの不動産の賃貸の際にきわめて軽率である。)

最後に、*leichtsinnig* が付加語的に用いられる例は 107 例あり、そのうち 52 例では被修飾語が (273) の *Mann* のような主体性のあるモノである。なお、被修飾語が (274) の *Fahrer* (運転手) のような動詞の派生語 (動詞語幹+*-er/-or*) である事例もあり、この場合、当該の人が主体的に行う事象が明示されているといえる。一方で、このように事象が明示されていない (273) の *Mann* などでは、そのモノの背後にある事象は必ずしも容易には推測されない。また、107 例中 2 例では、被修飾語は (275) の *Spruch* (標語) のような主体性のないモノである。これらは、人が行う事象に主体以外として参与するのであることが、文脈から推測される。例えば (275) では標語そのものが軽率なのではなく、その標語を彼が軽率に「使用する」「選ぶ」ことから、その事象に客体として参与

する標語もまた軽率だといえるのではないか。⁸⁷ 最後に、*leichtsinnig* が付加語的に用いられる際、53 例では被修飾語が (276) の *Umgang mit Öfen* (ストーブの扱い) のような事象を表す語句であった。

(273) *Mohammed Raschid ist kein leichtsinniger Mann.* (=252) <*leichtsinnig*, 被修飾語がモノ (主体) >

(ムハンマド・ラシドは軽率な男ではない。)

(274) *Das Motorrad ist gefährlich, gefährlich für leichtsinnige Fahrer wegen der ungeheuren Kraft.* (Braunschweiger Zeitung, 01.10.2005) <*leichtsinnig*, 被修飾語がモノ (主体) >

(オートバイは危険、とてつもない力のために軽率な運転手にとって危険である。)

(275) *Sein leichtsinniger Spruch, [...] soll nun mit werblicher Gewalt ins Positive gekehrt werden.* (Der Spiegel, 14.09.1998) <*leichtsinnig*, 被修飾語がモノ (主体以外) >

(彼の軽率な標語は[...]今や宣伝の力により肯定的なものに転じたとのことである。)

(276) *Falsches Heizen und ein leichtsinniger Umgang mit Öfen führen [...] zu schweren Bränden.* (Rhein-Zeitung, 03.02.2007) <*leichtsinnig*, 被修飾語が事象>

(間違った暖房と軽率なストーブの扱いは [...] 重大な火災につながる。)

このように、形容詞 III の *vorsichtig* と *leichtsinnig* はどちらも、述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語にモノや事象を表示する語句を取る事例が認められた。この際のモノは基本的に意志を持ち、何らかの事象に主体として参与できる。ただし、そのモノが参与する具体的な事象は、文脈から推測できる場合もあれば、できない場合もある。

また、これらの形容詞が主語以外の文成分を伴う場合、その文成分では主語が表示するモノが主体として参与する事象が表示されることが多い。この場合、形容詞はその事象に関して主語のモノの性質を表していると考えられやすいが、(272) のように、その事象から連想される、他の事象に関連して、モノの性質を表していると思われる場合もある。いずれにせよ、*vorsichtig* や *leichtsinnig* はこの場合、あくまでも何かをする際の主語の「人」の性質を表していると考えられ、事象そのものが慎重だったり、軽率だったりするとは考え難い。

一方で、*vorsichtig* と *leichtsinnig* には異なる点もある。*vorsichtig* が述語的用法で用いられる際の述語対象語はモノを表す語句に限られるのに対し、*leichtsinnig* の場合はモノだけでなく事象を表す語句も述語対象語として現れうる。⁸⁸ このことは、4.5.1 (形容詞

⁸⁷ なお、(275) は政治に関する記事であり、「彼」は当時の連邦首相であるヘルムート・コールを、「標語」は „Blühende Landschaften wählen!“ (花咲く風景を選ぶ!) を指す。「花咲く風景」とは、コールによる東西ドイツ再統一後の新しいドイツのイメージである。

⁸⁸ なお、脚注 86 の述語形容詞文における述語対象語 *seine Bewegungen* (彼の動き) は事象

の統語的な出現環境)で確認された、形容詞が述語的に用いられる際に、*vorsichtig* では *zu* 不定詞句が述語対象語として現れることがない一方、*leichtsinnig* では *zu* 不定詞句が述語対象語として現れうることと関連しているのではないかと思われる。さらに付加語的用法では、*vorsichtig* の被修飾語は事象を表すことが多いのに対し、*leichtsinnig* の被修飾語は事象と、事象に主体として参与するモノのどちらとも結びつきやすいようである。

		<i>vorsichtig</i>		<i>leichtsinnig</i>	
述語的	モノ (主体)	82	81	83	59
	モノ (主体以外)		1		0
	事象		0		24
付加語的	モノ (主体)	68	8	107	52
	モノ (主体以外)		8		2
	事象		52		53

表 12 形容詞 III が共起する個体の種類⁸⁹

	<i>vorsichtig</i>	<i>leichtsinnig</i>
モノ (主体以外)	3	0
事象	23	6
合計	26	6

表 13 形容詞 III が述語文で伴う主語以外の文成分が表す個体の種類

4.5.3 意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的・付加語的・副詞的に用いられ、事象を表す語句と共起する際に、それが状態、活動、到達、達成のどのタイプに属するかを観察する。

まず、*vorsichtig* は収集した 300 例の中で、述語的用法で事象を表示する語句を述語対象語に取る事例はない。⁹⁰

次に、付加語的用法で事象を表示する語句を被修飾語に取る例は 52 例見られた。そのうち 26 例は (277) の *Kritik* (批判) のような活動タイプ、24 例が (278) の *Beginn* (開始) のような到達タイプ、残り 2 例が (279) の *Reform des Europäischen Stabilitätspakts*

を表す語句であるが、*seine* (彼の) という所有冠詞により動作の主体も表示されており、事象だけを表してはいない。一方、*leichtsinnig* が述語的に用いられる際に、その述語対象語が事象を表す名詞句や *zu* 不定詞句である事例 24 例において、このように動作の主体が表されている例は 1 例のみである。このことから、*vorsichtig* が述語的に用いられる際には、*leichtsinnig* と比べて、動作の主体となるようなモノがその述語対象語に求められているといえる。

⁸⁹ *leichtsinnig* が述語的に用いられる事例は 300 例中 87 例であるが、(270) のように個体の種類の分類ができなかった 4 例を表 12 では省いている。

⁹⁰ なお、脚注 86 の形容詞述語文における述語対象語 *seine Bewegungen* (彼の動き) は、分類するのであれば、活動タイプに属する。

(ヨーロッパの財政安定成長協定の改正)のような達成タイプである。状態タイプの事象が被修飾語になる事例は見られなかった。

- (277) Da sollte man *vorsichtige* und vor allem objektive Kritik üben. (Rhein-Zeitung, 26.08.1997) <*vorsichtig*, 付加語的、活動>
(そこで注意深く、とりわけ客観的な批判を行うべきだ。)
- (278) Nach *vorsichtigem Beginn* arbeitete sich die Gymnasiastin [...] bis auf den siebten Platz vor. (Rhein-Zeitung, 22.12.2001) <*vorsichtig*, 付加語的、到達>
(注意深い開始の後、そのギムナジウムの女子生徒は[...]7位にまで順位を上げた。)
- (279) Der luxemburgische Ministerpräsident Jean-Claude Juncker hat [...] versucht, Widerstände gegen eine *vorsichtige Reform des Europäischen Stabilitätspakts* abzubauen. (Neue Zürcher Zeitung, 17.09.2004) <*vorsichtig*, 付加語的、達成>
(ルクセンブルク首相ジャン＝クロード・ユンケルは、ヨーロッパの財政安定成長協定の注意深い改正への抵抗を減じようと試みた。)

また、副詞的に *vorsichtig* が用いられる事例は 150 例である。その中で状態タイプは (280) の „ein paar Stangen stecken die Köpfe aus der Erde“ (2、3 本がその頭を土から出している) の 1 例のみ、(281) の „Andrea Büchler spricht“ (アンドレア・ビューヒュラーは話す) のような活動タイプは 67 例、さらに (282) の „ich fange an“ (私は始める) のような到達タイプが 51 例、(283) の „Gerhard Seitz befördert das Vogelkind ins Nest“ (ゲアハルト・ザイツは小鳥を巣に運ぶ) のような達成タイプが 31 例である。

- (280) Ein paar Stangen des „weißen Goldes“ stecken schon seit einigen Tagen *vorsichtig* die Köpfe aus der Erde. (Nordkurier, 21.04.2005) <*vorsichtig*, 副詞的、状態>
(「ホワイトゴールド」の 2、3 本はすでに何日か前から慎重にその頭を土から出している。⁹¹⁾)
- (281) Andrea Büchler spricht *vorsichtig*, wählt ihre Worte mit Bedacht. (=249)) <*vorsichtig*, 副詞的、活動>
(アンドレア・ビューヒュラーは注意深く話し、自分の言葉を選ぶ。)
- (282) Oder soll ich ganz *vorsichtig* anfangen? (Die Zeit (Online-Ausgabe), 06.03.2003) <*vorsichtig*, 副詞的、到達>
(それとも私は完全に慎重に始めるべき?)
- (283) Sofort holt Gerhard Seitz eine Leiter und befördert mittels eines Stückes Pappe das Vogelkind *vorsichtig* wieder ins Nest. (Mannheimer Morgen, 03.07.2002) <*vorsichtig*, 副

⁹¹⁾ ホワイトゴールドは、ここではホワイトアスパラガスのことを指す。

詞的、達成>

(すぐにゲーアハルト・ザイツは梯子を取ってきて、ボール紙で小鳥を慎重に再び巣に運ぶ。⁹²⁾)

このように *vorsichtig* は様々な事象を表示する語句と結びつく。ただし、そのアスペクトの解釈に関して、時間幅とその内部での展開がある「活動」的な読みが優先されるように思われる。例えば (281) の「話す」は活動タイプの事象であり、*vorsichtig* の表す性質はその事象が展開する間ずっと当てはめられると考えられる。一方、(282) の「始める」は到達タイプの事象であるが、*vorsichtig* はその一瞬の状態変化に性質を当てはめているのではなく、一瞬で終わるはずのその状態変化を、時間をかけて行い、その状態変化が成立するまでに続けられる行為に当てはめていると解釈できる。何かを慎重に行うためには、ある程度の時間が必要であると見込まれるのだ。また (283) の「小鳥を巣に運ぶ」は、時間幅における展開とその終了点の両方を含む達成タイプの事象である。この場合も、小鳥を運ぶという事象が展開している間ずっと、その様態が慎重であると考えられる。最後に、(280) の「頭を出している」は状態で、必ずしも時間の経過を前提とせず、ある時点に当てはまる状態を指しうる。しかし、ここでは「すでに何日か前から」という言葉があることから、その状態が持続しているということに焦点が当てられているように思われる。(280) には展開こそないが、時間の経過が認識されているところが、「活動」的である。

一方、*leichtsinnig* は収集した 300 例の中で、述語的用法で事象を表示する語句を述語対象語に取る例が 24 例である。そのうち 23 例は (284) の *der Umgang mit den Gefahren eines Wassereintritts* (浸水の危険への対処) や (285) の *sie als Familienhunde zu vermitteln* (それらを飼い犬として仲介すること) のような活動タイプである。(286) の 1 例のみ、*dieser Zugang* (この歩み寄り) という到達タイプである。ここでの「歩み寄り」は、具体的には前文の「保険の解約の事前通知をしたこと」を指しており、*leichtsinnig* は、そのような方法をとったことが軽率であるということの意味している。なお、状態タイプと達成タイプの事例は見られなかった。

(284) [...] *so leichtsinnig war der Umgang mit den Gefahren eines Wassereintritts*. (Der Spiegel, 23.04.2007) <*leichtsinnig*, 述語的、活動 (名詞句) >

(とても軽率だったのは浸水の危険への対処である。)

(285) *Sie [=die Tiere] hier als Familienhunde zu vermitteln*, sei *leichtsinnig* und könne nicht funktionieren. (=251)) <*leichtsinnig*, 述語的、活動 (反復相) (zu 不定詞句) >

(それら [=動物たち] をここで飼い犬として仲介するのは軽率で機能しえないとい

⁹² (283) は地域情報の記事で、Gerhard Seitz は農園での展示会の開催者である。

う。)

(286) Auf die leichte Schulter darf man es nicht nehmen, dass die Rettungsorganisationen den Vertrag mit der NÖ Gebietskrankenkasse gekündigt haben. Nach dem Motto: Das ist eben ein Warnschuss von Rotem Kreuz und Arbeitersamariterbund und am Ende des Tages wird man sich ohnehin einigen. Dieser Zugang ist zu *leichtsinnig*. (Niederösterreichische Nachrichten, 07.11.2013) <leichtsinnig, 述語的、到達 (名詞句) >

(救助組織がニーダーオーストライヒの地域健康保険の解約の事前通知をしたことを軽く考えてはいけない。スローガンによると：これは赤十字社と救助団体 ASB からの警告のための発砲で、一日の終わりには人はいずれにせよ合意しているだろう。この歩み寄りには軽率すぎる。)

次に、*leichtsinnig* が付加語的に用いられ、被修飾語が事象を表している例は 53 例である。その中で、33 例は (287) の *Umgang mit Öfen* (ストーブの扱い) のような活動タイプ、18 例は (288) の *Überqueren der Gleise* (線路の横切り) のような到達タイプである。述語的用法の場合と同じく、付加語的用法でも、状態タイプと達成タイプの事象は見られなかった。なお、残りの 2 例は (289) のように *Taten* (行為) が被修飾語になっている例で、この「行為」が具体的にはどのような種類の事象を指すのかは判断できない。

(287) Falsches Heizen und ein *leichtsinniger Umgang mit Öfen* führen [...] zu schweren Bränden. (=276) <leichtsinnig, 付加語的、活動>

(間違った暖房と軽率なストーブの扱いは [...] 重大な火災につながる。)

(288) Unfälle beim *leichtsinnigen Überqueren der Gleise* sind dabei in der Minderheit. (Neue Zürcher Zeitung, 17.01.2012) <leichtsinnig, 付加語的、到達>

(軽率な線路の横切りの際の事故は、それにもかかわらず少数である。)

(289) Dass die Berge in der heutigen Gesellschaft ihren Schrecken etwas verloren hätten, verleite die Menschen zu Übermut, waghalsigen und *leichtsinnigen Taten*. <leichtsinnig, 付加語的、事象の種類を分類できない>

(山々が今日の社会で自らの恐怖をいくらか失ったことが、人々を思い上がりへと命知らずで軽率な行為へとそそのかす。)

最後に、*leichtsinnig* が副詞的に用いられる事例は 106 例である。その中で 51 例は (290) の „man fährt“ (人は運転する) のような活動タイプである。また、106 例中 55 例は (291) の „viele Studenten nehmen den Rat an“ (多くの学生はその助言を受け入れる) のような到達タイプである。述語的用法や付加語的用法の場合と同じく、副詞的用法でも、状態タイプと達成タイプの事象は見られなかった。

(290) Gerade dadurch überschätzt man sich und fährt *leichtsinniger* als gewöhnlich.
(Nürnberger Nachrichten, 06.07.1996) <leichtsinnig, 副詞的、活動>

(まさにそれが原因で人は自分を過大評価し、普段よりも軽率に運転する。)

(291) Viele Studenten nehmen den Rat jedoch *leichtsinnig* an [...] (=253) <leichtsinnig, 副詞的、到達>

(多くの学生はその助言をしかしながら軽率に受け入れる。)

このように *leichtsinnig* は *vorsichtig* ほどには、様々な事象を表示する語句とは結びつかない。どの用法でも、状態タイプと達成タイプの事象を表す語句は見られなかった。また、事象のアスペクトの解釈に関しても、*vorsichtig* とは異なり、「活動」と「到達」のどちらを優先するというものもないようである。例えば (290) の「運転する」は活動タイプの事象で、*leichtsinnig* の表す性質はその事象が展開する間ずっと当てはめられると解釈できる。つまり、運転中の振る舞いが軽率なのである。一方、(291) の「助言を受け入れる」は到達タイプの事象であり、その事象が成立する一瞬に *leichtsinnig* が表す性質が当てはめられると考えられる。*vorsichtig* との共通点は、どちらの事象も、人が行うことが前提であり、活動的であれ、到達的であれ、その事象を動作主がコントロールできる点にある。

4.5.4 形容詞 III の出現傾向のまとめ

4.5.1 から 4.5.3 までに確認された、形容詞 III (*vorsichtig, leichtsinnig*) の主な出現傾向は以下のとおりである。

<統語的環境>

- ① 述語的、付加語的、副詞的用法の中で、極端に現れにくい用法はない。
- ② 述語的には、主語のほかにもう一つの文成分を伴う構文で用いられる。

<意味的環境>

- ① 述語的・付加語的に、モノと事象のどちらを表示する語句とも共起する。
- ② ①でモノを表示する語句は、もっぱら主体性のある人である。
- ③ 述語的用法で、述語対象語のモノが主体として参与する事象を前置詞句で明示できる。
- ④ 動作主がコントロールできる出来事と結びつき、基本的に状態とは結びつかない。

このように、形容詞 III には様々な共通点がある一方、相違点もある。まず、*vorsichtig* が述語的に用いられる際に述語対象語になるのが名詞句のみであるのに対し、

leichtsinnig では名詞句だけでなく zu 不定詞句も述語対象語になりうる。これは、それぞれの形容詞と結びつく出来事が実際に成立することの望ましきの差にあるのではないと思われる。ある人が「慎重に」行う行為は、その人の意志で行われるのに対し、ある人が「軽率に」行う行為は、その人の意志で行われるとは限らない。その人が軽率であるがために、つい「行ってしまう」、本来ならば望まれない出来事であるとも考えられる。そのため、潜在的な相で捉えられ、zu 不定詞句でも表しうるのではないか。

さらに、形容詞の統語的な用法を問わず、形容詞が結びつく事象のアスペクトに関して、vorsichtig では「活動」的な読みが優先される一方、leichtsinnig では「活動」、「到達」のどちらの読みもありうるという違いもある。この差は、それぞれの形容詞の意味から導かれるのではないか。「慎重に」行われる出来事は時間がかかることが自然だが、「軽率に」行われる出来事はすぐに終わっても不自然ではないのである。

4.6 形容詞 I, II と形容詞 III の比較

本節では、形容詞 I (schnell, langsam) と形容詞 II (leicht, schwer)、そして形容詞 III (vorsichtig, leichtsinnig) の統語的・意味的な出現傾向を比べ、形容詞 III がどのような特徴を持つのかを考察する。特に、Vendler (1968) では同じグループに属するとされていた形容詞 I と III にどれほどの違いがあるのかに注目する。

4.6.1 述語対象語として現れるモノの種類

形容詞 I, II, III はどれも、述語的に用いられる際の述語対象語にモノが現れうる。ただし、表 4、6、12 で、それぞれの形容詞が述語的に用いられ、かつ述語対象語がモノである場合を比べてみると、形容詞 I, II にはそのような事例があまりないが、形容詞 III はそれに比べると、述語対象語にモノを取る述語的用法で用いられやすい。⁹³ また、本稿でいう「モノ」は人や物の総称であるが、形容詞 III の述語対象語はもっぱら意志を持つ「人」に限られるという点が、形容詞 I, II とは異なっている。形容詞 I の述語対象語には意志を持つ「人」も意志を持たない「物」も出現し、形容詞 II では基本的に意志を持たない「物」が出現する。またこれらは事象との関係性の点から見ると、形容詞 I と III の述語対象語は何らかの事象に主体として参与し、形容詞 II の述語対象語は主体以外（主に客体）として参与するのが基本的な用いられ方である。

- (292) Fernando ist schneller als du. (=132) <形容詞 I (schnell), 述語対象語の「人」は事象に「主体」として参与しうる>
(フェルナンドは君よりも速い。)

⁹³ 正確な内訳は次の通り：各 300 事例中、形容詞が述語的に用いられ、その述語対象語がモノである事例は、形容詞 I の schnell で 11 例、langsam で 16 例、形容詞 II の leicht で 1 例、schwer で 4 例に対し、形容詞 III の vorsichtig で 82 例、leichtsinnig で 59 例である。

(293) Noch nie war ein Schienenfahrzeug auf dieser Strecke so *schnell*. (Der Spiegel, 14.12.1998) <形容詞 I (schnell), 述語対象語の「物」は事象に「主体」として参与しうる>

(いまだかつて鉄道車両がこの区間でこんなに速いことはなかった。)

(294) Ich würde sagen, Zeiten sind nicht per se schwierig oder *leicht*. (=173) <形容詞 II (leicht), 述語対象語の「物」は事象に「主体以外 (客体)」として参与しうる>

(私が言いたいのは、時代とはそれ自体が難しかったり簡単だったりするのではないということだ。)

(295) „Ich war immer *vorsichtig* und werde es auch in Zukunft sein“, sagt sie. (=247) <形容詞 III (vorsichtig), 述語対象語の「人」は事象に「主体」として参与しうる>

(「私は常に慎重であったし、今後もまたそうだろう」と彼女は言う。)

さらに、述語対象語に意志を持つ「人」を取りうる形容詞 I, III を比べると、形容詞 I が述語対象語に「人」を取る場合、その「人」が主体として参与する事象が文脈から容易に推測できるのに対し、形容詞 III はその限りではない。例えば、形容詞 I が用いられている (292) はレース中の発言で、フェルナンドは「車で走る」という事象に主体として参与し、それが「速い」ということは文脈から明らかである。一方、形容詞 III が用いられている (295) は日常生活の話題であり、これまでの自分の行動で発言者が「慎重であった」のはどのような事象に際してなのかは、具体的ではない。また、これに関連して、形容詞 III の性質が「特定の行為をするときに」述語対象語の「人」に当てはまると捉えられる場合、その事象が (296) のように文成分として明示されることがある。このような例は、形容詞 I, II では確認されなかった。つまり、形容詞 I, II では、文成分としてわざわざ明示しなくても、モノが参与する事象がどのようなものかは読み取れるため、(296) のように事象が明示されることはないのだろう。

(296) Auch beim Essen sollte man *vorsichtig* sein und [...] (=254) <形容詞 III (vorsichtig), 述語対象語の「人」が「主体」として参与する事象が文成分で明示される>

(食事の際にも人は慎重であるのが望ましく [...])

また、形容詞 I は意志を持つ人ではない、いわゆる「物」を述語対象語とすることもできる。「物」が述語対象語となるという点で形容詞 I と II は共通している。さらに、形容詞 I, II が「物」を述語対象語とする場合、それがどのような事象に参与するか、その「物」を表す語彙そのものから推測できる。言い換えれば、形容詞 I, II が「物」を述語対象語とする場合、それが参与する事象は想定しやすいものでなければならない。より正確に言えば、形容詞 I では、モノが主体として参与する事象の、形容詞 II では、モノが主体以外として参与する事象の想定が必要とされる。「モノ」が主体以外として参

与する事象は想定が難しく、そのため形容詞 II とともに現れる「モノ」は、「課題」や「時間」など、語彙が限られているのだと思われる。

これらのことから、形容詞 I, II と形容詞 III で、形容詞が表す性質が第一に事象とモノのどちらに当てはめられるのかが異なっていると考えられる。形容詞 I, II がモノを表示する語句と結びつく際には、その背後にある事象が明らかであることが前提とされる。むしろ、事象の性質を表すことが形容詞の本質であり、„Das Auto fährt *schnell*.“（その車の走りは速い）→ „Das Auto ist *schnell*.“（その車は速い）のように、事象からその参与者であるモノに形容詞の性質が付与される対象が拡張されるのではないか。一方で、形容詞 III がモノを表示する語句と結びつく際には、その背後にある事象が明らかであることは前提とされていない。むしろ、形容詞が結びつくモノが「人」かそれに類する意志を持つモノものであることが、形容詞 III で一番求められていることではないか。ただし、形容詞そのものの意味から、述語対象語の「人」が関与する事象があることも同時に想定されているものと思われる。⁹⁴ そして、その事象を明らかにする方法として、文脈や、「人」を表す語彙そのもの（例えば行為を表す動詞から派生した名詞 *Fahrer*: 運転手など）とならび、前置詞 *bei*+事象名詞などの文成分が用いられうるのだろう。形容詞 I, II では、述語対象語のモノが参与する事象は明らかであることが前提なので、事象を表す語句をさらに別の文成分で追加することはないのだと思われる。

	形容詞 I <i>schnell, langsam</i>	形容詞 II <i>leicht, schwer</i>	形容詞 III <i>vorsichtig, leichtsinnig</i>
述語対象語のモノの種類	人・物	物	人
述語対象語の主客	主体	主体以外 (主に客体)	主体
モノが参与する事象の特定	特定できる	特定できる	特定できる場合も できない場合もある
主語以外の文成分の可能性	なし	なし	あり

表 14 形容詞 I, II, III が述語的に用いられる際の相違

4.6.2 形容詞と事象のアスペクト、形容詞が出現する環境の関係

形容詞 I, II, III の出現傾向のまとめから、これらの形容詞はどれも、アスペクト的に様々な種類の事象と共起するといえる。ただし、結びつくのは基本的に出来事で、状態とは結びつきにくい。

なお、全体的には形容詞 I は共起する事象に「活動」の読みを、形容詞 II は「到達」

⁹⁴ 例えば Duden Online-Wörterbuch では、*vorsichtig* の意味は *mit Vorsicht [handelnd, vorgehend]* (注意を払って [行動する、振る舞う]) とされている。

の読みを優先させるのに対し、形容詞 III では、vorsichtig と leichtsinnig が共通して、どちらかのアスペクトの読みを優先するという事はない。形容詞 III では、vorsichtig が「活動」の読みを優先させる一方、leichtsinnig では「活動」「到達」のどちらの読みもありうる。また、形容詞 I が述語的に用いられる際の述語対象語は名詞句のみ、形容詞 II では名詞句と zu 不定詞句が現れるのに対し、形容詞 III ではこのような共通項もない。形容詞 III では、vorsichtig は述語対象語に名詞句のみを認め、leichtsinnig では名詞句と zu 不定詞句の両方が認められる。これらの点で、表 15 に見られるように、形容詞 I vs. 形容詞 II という対立と、形容詞 III における vorsichtig vs. leichtsinnig の対立は似ているように思われる。

	形容詞 I	形容詞 II	形容詞 III	
	schnell, langsam	leicht, schwer	vorsichtig	leichtsinnig
形容詞が共起する事象のアスペクト解釈	活動	到達	活動	活動・到達
述語対象語の品詞の種類	名詞句のみ	名詞句 zu 不定詞句	名詞句のみ	名詞句 zu 不定詞句

表 15 形容詞 I, II, III が事象を表示する語句と結びつく際の相違

形容詞 II で事象が zu 不定詞句で表されうるのは、形容詞が「到達」というアスペクトを優先することに基づくものだと思われる。「到達」は時間幅がなく一瞬の展開だけがある事象である。この事象の性質を表す際、その事象の実現は必ずしも前提とされない。つまり「これから実現する（かもしれない）」ことに対して、それが「簡単だ・難しい（形容詞 II）」ということを表すために、未遂の行為を表す zu 不定詞句が現れうるのではないか。一方、「活動」は時間幅と展開がある事象で、その性質を述べるためには、事象が目の前で実現していることが望ましい。その場で展開している出来事があるからこそ、例えば「その時点での車の走行が速い・遅い（形容詞 I）」という性質を当てはめることができる。しかし、実現していない「活動」に対して、その性質を述べるのは難しい。「これから車の走行を実現するのは速い・遅い（形容詞 I）」とは考えにくいから、形容詞 I では zu 不定詞句が現れないのだろう。

しかし、形容詞 III で leichtsinnig が zu 不定詞句を取りうるのは、leichtsinnig が到達的な事象と結びつくことと、直接的には関係しないと思われる。leichtsinnig の「軽率な」という性質が当てはめられる事象が、本来ならば望まれない、起きてほしくない事象であることから、zu 不定詞句で表されるのであり、「到達」のアスペクトとは関係がない。

このような違いは、一見同じように述語対象語に zu 不定詞句を取る形容詞 II (leicht, schwer) と形容詞 III (leichtsinnig) の、その他の点での様々な違いと関連すると考えられる。まず、形容詞 II は述語対象語に主に客体的な物を取る一方、形容詞 III は述語対

象語に主に主体的な人を取る。形容詞 II が事象に求めるアスペクトが「到達」であるということは、事象が瞬間的で制御し難いことから、事象の主体を表示しにくいということにつながると考えられる。主体を表示しにくいということは、客体が表示されやすいことだと言い換えられる。そのため、(297) のような zu 不定詞句を述語対象語とする述語文を、(298) のように zu 不定詞句の意味上の目的語を主語とした文に書き換えることができる。一方、*leichtsinnig* では (300) が示すように、このような書き換えはできない。*leichtsinnig* は述語的であれ副詞的であれ、何らかの事象に主体として参与する人を求めるのである。*leichtsinnig* が事象を zu 不定詞句で表すことを許容するのは、参与者の客体性とは関係がない。

- (297) Es ist leicht, das Problem zu lösen. (この問題を解くのは簡単だ。)
- (298) a. Das Problem ist leicht. (この問題は簡単だ。) <述語的>
 b. Das Problem ist leicht zu lösen. (この問題は簡単に解ける。) <副詞的>
- (299) Es ist leichtsinnig, das Problem zu lösen. (この問題を解くのは軽率だ。)
- (300) a. *Das Problem ist leichtsinnig. (*この問題は軽率だ。) <述語的>
 b. *Das Problem ist leichtsinnig zu lösen. (*この問題は軽率に解ける。) <副詞的>

さらに形容詞 II は副詞的に用いられる際、(298b) のように状況的可能のモダリティの表示や受動的な文への出現が多く見られた。一方で、形容詞 III では表 16、17 に見られるように、モダリティや態に関するこのような制限がない。これは、形容詞 III が何らかの事象に主体として参与する「人」を求めるためであると思われる。形容詞がモノを表す語句と結びつく際に、モノに主体性を求めるという点で、形容詞 III は形容詞 I と似ている。事象の主体に焦点が当たるということは、その事象が人により制御しやすいことを示し、そのため可能であるというモダリティの表示や、主体を排除した受動的な文に現れることが不要になるのではないか。

モダリティ			vorsichtig		leichtsinnig	
表示あり	状況的可能	können	2	2	0	0
		zu 不定詞+sein など		0		0
	その他の話法の助動詞		24		16	
モダリティの表示なし			124		90	
合計			150		106	

表 16 形容詞 III が副詞的に用いられる際の文のモダリティ

	vorsichtig	leichtsinnig
能動的	135	88
受動的	15	18
合計	150	106

表 17 形容詞 III が副詞的に用いられる際の文の態

4.7 調査結果 4: 形容詞 IV (überdrüssig, müde, satt)

本節では、嫌気を表す 2 価の形容詞 überdrüssig, müde, satt (うんざりしている) の調査結果をまとめる。

4.7.1 統語的な出現環境 1 (述語的、付加語的、副詞的用法の分布)

まず、形容詞が統語的にどのような用法で出現するのか、事例を概観する。

überdrüssig は、300 例中 286 例が (301) ~ (304) のように述語的用法で用いられている。なお、述語的用法で述語対象語となるのは (301) の *das Volk* (大衆) のような名詞句のみで、*zu* 不定詞句が述語対象語となる事例は見られなかった。一方、補足成分は、286 例中 283 例では (301) の *der Helden* (英雄たち) のような属格名詞句で表されており、(302) の *Zweiter zu werden* (2 位になる (こと)) のような *zu* 不定詞句は 2 例であった。(303) の *Thailand* (タイ) は無冠詞であり、名詞の形からは与格、対格のどちらであるかは判別できない。⁹⁵ しかし少なくとも、*Thailands* のように *-s* が付いていないため、属格ではない。さらに、300 例中残りの 14 例は、(305) のような付加語的用法の事例であり、副詞的用法の事例は見られなかった。付加語的用法でも、被修飾語のほかに補足成分が伴っているが、14 例とも (305) の *der üblichen Musikvideos* (よくあるミュージックビデオ) のような属格名詞句である。

なお、überdrüssig の述語的な事例には、(304) の *der ständigen Reiserei überdrüssig* (絶え間ない旅行にうんざりして) のような述語対象語以外の補足成分のみを伴い、コンマで区切られ、独立して用いられているものも含む。これらは意味の面では、述語動詞を中心とした事象の性質ではなく、主語の状態を表していると解釈できる。例えば、(304) では「彼女」が絶え間ない旅行にうんざりしているのであり、「サバティカルを取り方」がうんざりしているとは考えられない。そのため、この場合の überdrüssig は、二次的な述語的用法であると考えられる。このような二次的な述語的用法は、述語的用法の 286 例中、31 例を占めている。

(301) Ist das Volk der Helden überdrüssig? (St. Galler Tagblatt, 28.10.2000) <überdrüssig, 述語的、補足成分が属格名詞句>

⁹⁵ 中性名詞は単独では主格と与格と対格が同型であるため、単語の形だけを見れば、(303) の *Thailand* は主格の可能性もある。

(大衆は英雄たちにうんざりしているのか?)

- (302) Cuche seinerseits hatte auf die Frage, ob er es nicht allmählich überdrüssig sei, ständig nur Zweiter zu werden, die einzig richtige Antwort zur Hand. (Neue Zürcher Zeitung, 04.02.2002) <überdrüssig, 述語的、補足成分が zu 不定詞句>

(キュシュとしては、彼が徐々に、常に2位にしかならないのにうんざりしているのではないかという質問に対する、唯一の正しい答えを用意していた。⁹⁶)

- (303) Ein Tipp für alle, die Thailand überdrüssig sind und die drei zusätzliche Flugstunden nicht scheuen.⁹⁷ (Hamburger Morgenpost, 02.01.2010) <überdrüssig, 述語的、補足成分が名詞句(格不明)>

(タイにうんざりし、3時間の飛行時間の追加を嫌がらないすべての人々へのヒント)

- (304) Der ständigen Reiserei überdrüssig, nahm sie ein Sabbatical. (Süddeutsche Zeitung, 12.01.2015) <überdrüssig, 述語的(二次的)、補足成分が属格名詞句>

(絶え間ない旅行にうんざりして、彼女はサバティカルを取った。)

- (305) Es geht darum, den der üblichen Musikvideos überdrüssigen Kids neues Material zu liefern, [...] (Süddeutsche Zeitung, 21.01.1997) <überdrüssig, 付加語的、補足成分が属格名詞句>

(問題となっているのは、よくあるミュージックビデオにうんざりしている子供たちに新しい題材を供給することだ。)

次に müde は 300 例すべてが (306) ~ (308) のように述語的に用いられており、付加語的用法や副詞的用法の事例は見られなかった。müde の述語対象語となるのは、(306), (307) の er (彼) のような名詞句のみで、zu 不定詞句が述語対象語となる例は見られない。また、述語対象語以外の補足成分は、(306) の des Amtes (役職) のような属格名詞句が 41 例、対格名詞句の事例はなく、(307) の es zu sagen (それを言う(こと)) のような zu 不定詞句が 259 例であった。なお、(307) は nicht müde werden の構文で「飽きもせず~する」を意味している。補足成分が zu 不定詞句で表される事例の多くが、この構文に現れている。

また、müde にも überdrüssig と同じく (308) の des ewigen Streitens müde (終わりのない争いにうんざりして) のように独立した、二次的な述語的用法の事例が 300 例中 7 例見られた。(308) で müde が表しているのは、「政党」がうんざりしている、ということであり、「見積もりの処理の仕方」がうんざりしているとは考えられない。

- (306) Er steht fast seit Beginn an der Spitze des Schwimmvereins - und ist mittlerweile des

⁹⁶ Didier Cuche はスイスのアルペンスキー選手である。

⁹⁷ 文法的には „die drei zusätzlichen Flugstunden“ とすべきだが、原文のまま挙げている。

Amtes müde. (Mannheimer Morgen, 19.06.2004) <müde, 述語的、補足成分が属格名詞句>

(彼はほとんど最初から水泳連盟のトップに立っており — そして時が経つうちに、その役職にうんざりしている。)

(307) Und er wird nicht müde, es wieder und wieder zu sagen. (Mannheimer Morgen, 09.07.2002) <müde, 述語的、補足成分が zu 不定詞句>

(そして彼は飽きもせず、それを繰り返す。)

(308) Des ewigen Streitens müde, haben die Parteien diese Taxierung vor Jahren unter sich ausgemacht. (St. Galler Tagblatt, 23.02.1998) <müde, 述語的 (二次的)、補足成分が属格名詞句>

(終わりのない争いにうんざりして、政党はこの見積もりを何年も前に仲間内で処理した。)

最後に *satt* に関してだが、この形容詞は *sein* や *werden* といったコプラと共起する例が非常に少ない。予備調査で *satt* を含む事例を収集した際には、コプラと共起する事例はおおよそ 250 事例中に 1 例程度の割合でしか見つからなかった。また、予備調査で *satt* がコプラと共起する事例を 10 例のみ集めたところ、10 例とも (309) のような述語的用法であり、付加語的、副詞的に用いられる用例は見られなかった。*satt* の述語対象語は (309) の *ich* (私は) のような名詞句のみで、*zu* 不定詞句が述語対象語となる事例は見られなかった。一方、補足成分は、(310) の *die Ausreden der Generaldirektoren* (理事会の言い逃れ) のような対格名詞句が 1 例、(316) の *einigen Spielern ständig hinterher zu laufen* (何人もの選手を常に後ろから追いかける (こと)) のような *zu* 不定詞句であり、属格名詞句は見られなかった。なお、Nobukuni (2013b: 6) では、*satt* がコプラ述語文に現れ、補足成分に名詞句を伴う文を IDS の書き言葉コーパス COSMAS II の DeReKo から 13 例集めたが、そのうち 10 例では補足成分が対格名詞句、3 例では属格名詞句であった。このことから、*satt* は補足成分に対格名詞句を伴いやすいのだと思われる。

(309) „Ich bin die Ausreden der Generaldirektoren satt“ (Salzburger Nachrichten, 01.03.2000) <*satt*, 述語的、補足成分が対格名詞句>

(「私は理事会の言い逃れにうんざりしている。」)

(310) „Aber ich bin es einfach satt, einigen Spielern ständig hinterher zu laufen.“ (Rhein-Zeitung, 17.03.2003) <*satt*, 述語的、補足成分が *zu* 不定詞句>

(「でも私は、何人もの選手を常に後ろから追いかけるのにうんざりしている。」)

上記の予備調査では事例の収集対象としていなかったが、*satt* は「うんざりしている」という意味では、たいていコプラではなく *haben* とともに用いられる。„etwas⁴ *satt*

haben“ は „etwas² satt sein“ と意味が同じであり、ここでの *satt* は *haben* を中心とする「～を持っている」という事象の様態を表しているのではなく、述語対象語で表される人の性質を表していると考えられる。そのため、本稿では *haben* と共起する *satt* は述語的用法であるとみなし、*haben* と共起する場合を含めて、300 例を集めた。⁹⁸

その結果、付加語的、副詞的用法の事例は見られなかった。また、*satt* の述語対象語となるのはやはり名詞句のみで、*haben* と共起する場合でも、*zu* 不定詞句が述語対象語となる事例は見られなかった。一方、述語対象語以外の補足成分は、(311) の *meine Briefe* (私の手紙) や (312) の *Labour* (労働党) のような名詞句が 211 例、(313) の *über ... zu sprechen* (…について話す (こと)) のような *zu* 不定詞句が 82 例、(314) の *dass man den Betrügern ... hinterherrennt* (人が詐欺師を…後追いすること) のような *dass* に導かれる副文が 7 例である。補足成分が名詞句である事例 211 例の中で、194 例は (311) の *meine Briefe* (私の手紙) のような対格名詞を補足成分としている。一方、16 例では (312) の *Labour* のような属格と対格が同型の女性名詞ないし複数名詞で無冠詞の名詞句が補足成分となり、格の判別が不可能であった。また、*satt* には (315) の 1 例のみ、*des Stundenzählens satt* (時間勘定にうんざりして) のように独立した、二次的な述語的用法の事例が見られた。そしてこの事例でのみ、補足成分は対格ではなく属格で表されている。

(311) „Er hatte meine Briefe satt“ (Mannheimer Morgen, 24.01.2008) <*satt*, 述語的、補足成分が対格名詞句>

(「彼は私の手紙にうんざりしていた。」)

(312) Die Briten haben Labour satt, aber den Konservativen vertrauen sie nicht. (Süddeutsche Zeitung, 07.04.2010) <*satt*, 述語的、補足成分が名詞句 (格不明)>

(イギリス人たちは労働党にうんざりしているが、保守党員を信用していない。)

(313) [...] weil ich es satt habe, über blasse Möglichkeiten oder Vermutungen zu sprechen. (NZZ am Sonntag, 05.06.2005) <*satt*, 述語的、補足成分が *zu* 不定詞句>

(私はただの可能性や推測について話すのにうんざりしているので [...])

(314) Die [=Leute, die in der Dopingbekämpfung arbeiten] haben es satt, dass man den Betrügern meist hilflos hinterherrennt. (Der Spiegel, 17.09.2005) <*satt*, 述語的、補足成分が副文>

⁹⁸ なお、2004/2006 年の正書法改定により、*satt haben* は分離動詞とみなされ、不定詞などでは *satthaben* と一語で書くことになっている。事例の収集は „*satt*“ 単独で行ったため、*satthaben* の形で用いられる事例は、今回収集した中には含まれていない。ただし、収集した事例には、2007 年以降の記事であっても、以下のように „*satt haben*“ と分かち書きしている例が散見された (<http://www.rechtschreibrat.com/regeln-und-woerterverzeichnis/> 参照)。

(i) [...] weil sie die strengen US-Einwanderungsregeln satt haben [...] (Süddeutsche Zeitung, 06.05.2014)

([...] 彼らは厳しいアメリカの移民規定にうんざりしているので [...])

(彼ら [=ドーピングと戦う人々] は、詐欺師 [=ドーピングの違反者] をたいてい甲斐なく後追いするということうんざりしている。)

(315) 1797 bis 1800 schrieb Friedrich Hölderlin [...] über „den großen Sicilianer, der, einst des Stundenzählens satt, [...] sich da (gemeint ist der Ätna) hinabwarf in die herrlichen Flammen“. (Rhein-Zeitung, 30.09.2013) <satt, 述語的 (二次的)、補足成分が属格名詞句>

(1797年から1800年にフリードリヒ・ヘルダーリンは [...] 「かつて時間勘定にうんざりして、[...] 自らをそこで (エトナ山を指す) 素晴らしい火の中に投げ打った偉大なシチリア人」について書いた。⁹⁹⁾

以上の結果は、表 18~19 のようにまとめられる。表 18 が示すように、形容詞 IV (müde, satt, überdrüssig) はどれも、もっぱら述語的用法で用いられる。特に、müde と satt では付加語的用法と副詞的用法の事例が 1 例も見られない。また、述語対象語はすべて当該文の主語であり、目的語が述語対象語となる事例は見られない。さらに、主語は名詞句のみで表され、zu 不定詞句が述語対象語となる例はない。

一方、表 19 が示すように、補足成分は主に名詞句または zu 不定詞句で表されるが、satt と überdrüssig では名詞句が多く、müde では zu 不定詞句が多い。さらに、表 20 が示すように、補足成分が名詞句の場合、überdrüssig と müde はそれが属格で、satt では対格で示されていることがほとんどである。

ただし、形容詞を問わず、付加語的に形容詞が用いられる際あるいは二次的な述語的用法で形容詞が用いられる際、補足成分には属格名詞句しか現れず、対格名詞句は現れない。このことは、動詞があると、補足成分が対格になりやすいということを示しているのではないと思われる。これらの形容詞は、本来どれも、属格名詞句を補足成分にとるとされている。しかし、他動詞である haben だけでなく、自動詞の sein であっても、動詞と結びつくと、補足成分が直接目的語としての対格の形を取りやすくなるのではないだろうか。

		überdrüssig		müde		satt	
述語的	主語が名詞句	286	286	300	300	300	300
	zu 不定詞句		0		0		0
	その他		0		0		0
付加語的		14		0		0	
副詞的		0		0		0	
合計		300		300		300	

表 18 形容詞 IV の統語的分布

⁹⁹⁾ Friedrich Hölderlin はドイツの詩人、思想家である。

		überdrüssig		müde		satt	
述語的	補足成分が名詞句	286	284	300	41	300	211
	zu 不定詞句		2		259		82
	その他		0		0		7

表 19 形容詞 IV の補足成分の種類

		überdrüssig		müde		satt	
述語的 (名詞句)	属格	283	283	41	41	195	1
	対格		0		0		194
付加語的	属格	14	14	0	0	0	0
	対格		0		0		0

表 20 形容詞 IV の補足成分の格¹⁰⁰

4.7.2 統語的な出現環境 2 (述語動詞と相関詞)

4.7.1 で言及したように、形容詞 IV はどれも述語的用法で用いられることが多い。ただし、müde は nicht müde werden (飽きずに～する) の構文で用いられることが多く、satt は haben と共起することが多い。形容詞ごとに、述語動詞がどのように異なっているのかを調べる。

まず、überdrüssig は多くの場合、(316) のように sein を述語動詞とする。überdrüssig が述語的に用いられる 286 例のうち、独立して用いられる二次的な述語的用法の 31 例を除いた 255 例の中で、170 例はこのように sein と共起している。さらに、(317) のように werden と共起する事例は 82 例で、残り 3 例は (318) の scheinen (～のようだ) のような、sein, werden 以外で主語あるいは目的語が表す対象の性質や状態を表す機能を持つ動詞であった。

(316) Ist das Volk der Helden überdrüssig? (=301) <überdrüssig, 述語的、sein と共起>
(大衆は英雄たちにうんざりしているのか?)

(317) Die Besitzer waren des Vierbeiners überdrüssig geworden, [...] (Salzburger Nachrichten, 23.08.2000) <überdrüssig, 述語的、werden と共起>
(所有者たちは、四つ足の動物たちにうんざりしてしまっていた。)

(318) Des Themas „Wegetausch“ mittlerweile überdrüssig scheinen die Friesenhagener. (Der Spiegel, 05.01.2015) <überdrüssig, 述語的、その他の動詞と共起>

¹⁰⁰ 格の判断ができない名詞は除外してある。述語的用法で名詞句を補足成分に取る事例は überdrüssig が 284 例、satt が 211 例だが、überdrüssig の 1 例、satt の 16 例は (303), (312) のように格の判断ができないため、それぞれの総数はこれらを除いた 283 例と 195 例にしてある。

(テーマ「道路の交換」にその間にフリーゼンハーゲンの人々はうんざりしているようである。¹⁰¹⁾

次に *müde* が述語的に用いられる 300 例のうち、独立して用いられる二次的な述語的用法の 7 例を除いた 293 の中で、258 例は (319), (320) のように *werden* と共起する。また、前述のとおり、*werden* と結びつく事例の多くは、(319) のような *nicht müde werden* の構文で「飽きもせず～する」を意味する。*müde* が *werden* と共起する 258 例の中で、(320) のようにこの構文で用いられていない事例は 8 例のみである。また、(321) のように *sein* と共起する例は 34 例で、1 例のみ、(322) の *sich zeigen* (～という態度を取る) のように、*sein, werden* 以外で主語が表す対象の性質や状態を表す機能を持つ動詞の例が見られた。

なお、表 19 で確認されたように、*müde* の述語文では、主語以外の補足成分は *zu* 不定詞句で表される事例が多かったが、これはほとんど (319) のような *nicht müde werden* という構文において見られる。属格名詞句が補足成分となる事例では、*müde* は (320)~(322) のような、*nicht müde werden* の構文以外の環境に現れている。

- (319) Und er wird nicht müde, es wieder und wieder zu sagen. (= (307)) <*müde*, 述語的、*werden* と共起 (*nicht müde werden* の構文に出現) >
(そして彼は飽きもせず、それを繰り返す。)
- (320) Wer hingegen des Singens müde wurde, konnte [...] am Glücksrad tolle Sachpreise gewinnen. (Rhein-Zeitung, 07.10.2004) <*müde*, 述語的、*werden* と共起 >
(それに反して歌うことにうんざりした者は、抽選器で素敵な商品を手に入れられた。)
- (321) Er steht fast seit Beginn an der Spitze des Schwimmvereins - und ist mittlerweile des Amtes müde. (= (306)) <*müde*, 述語的、*sein* と共起 >
(彼はほとんど最初から水泳連盟のトップに立っており — そして時が経つうちに、その役職にうんざりしている。)
- (322) [...], zeigt sich der Vater zweier Töchter im Teenager-Alter des ständigen Übersiedelns müde. (Die Presse, 21.10.1995) <*müde*, 述語的、その他の動詞と共起 >
(ティーンエイジャーの次女の父親は恒常的な転居にうんざりという態度を見せる。)

また、*satt* が述語的に用いられる 300 例のうち、独立して用いられる二次的な述語的用法の 1 例を除いた 299 例の中の大半を占める 286 例は、前述のとおり、(323) のように *haben* と共起している。残りの事例は、(324) のように *sein* と共起する例が 10 例、(325) のように *werden* と結びつく事例が 3 例である。

¹⁰¹ Friesenhagen はドイツの町名である。

- (323) „Er **hatte** meine Briefe **satt**“ (=311) <satt, 述語的、haben と共起>
 (「彼は私の手紙にうんざりしていた。」)
- (324) [...] weil **es** Korda **satt** **war**, **ständig mit Schmerzen zu leben**, [...] (Salzburger Nachrichten, 02.02.1998) <satt, 述語的、sein と共起>
 (コルダは、常に痛みと共に生きるのにうんざりしていたので [...] ¹⁰²)
- (325) „Mach dich rar im Haus deines Nächsten, sonst **wird** er **dich** **satt** und verabscheut dich.“ (Rhein-Zeitung, 24.10.2012) <satt, 述語的、werden と共起>
 (「君の隣人の家を滅多に訪れるな、さもなければ彼は君にうんざりし嫌悪するだろう。」)

このように、形容詞 IV は共起しやすい述語動詞が形容詞ごとに異なる。überdrüssig は sein と、müde は werden と、そして satt は haben と共起する事例が多い。なお、müde は werden と共起する際、さらに nicht を伴い、zu 不定詞句を補足成分として、nicht müde werden の構文で「飽きもせず～する」を意味することがほとんどである。また、satt がコプラ述語文の場合だけを比較すると、13 例中 10 例が sein、3 例が werden と結びついている。同種の調査をした Nobukuni (2013b: 12) では、satt がコプラ述語文で用いられている事例を 21 例収集し、18 例が sein、3 例が werden と結びつくという結果を得ている。このことから、satt は haben と結びつく特殊な構文を除くと、どちらかと言えば sein と結びつきやすいものと思われる。

	überdrüssig	müde	satt
sein	170	34	10
werden	82	258	3
haben	0	0	286
その他	3	1	0
合計	255	293	299

表 21 形容詞 IV が述語的に用いられる際の述語動詞 (二次的な述語的用法を除く)

また、これらの形容詞の補足成分が zu 不定詞 (あるいは副文) である場合、相関詞を伴うか否かという点でも、3 者は異なっている。

überdrüssig はそもそも、表 19 に見られるとおり、名詞句以外を補足成分に取ることが稀である。überdrüssig が補足成分に zu 不定詞句を取る 2 例の事例では、どちらも (326) のように相関詞 es を伴う。なお、überdrüssig は補足成分が名詞句の場合には属格名詞と結びつくことが多いが、属格名詞句に対応する相関詞 dessen を伴う事例は確認できなかった。

¹⁰² Petr Korda はチェコのテニス選手である。

- (326) Cuche seinerseits hatte auf die Frage, ob er es nicht allmählich überdrüssig sei, ständig nur Zweiter zu werden, die einzig richtige Antwort zur Hand. (=302) <überdrüssig, 述語的、相関詞 es あり>
 (キュシュとしては、彼が徐々に、常に2位にしかならないのにうんざりしているのではないかという質問に対する、唯一の正しい答えを用意していた。)

表 19 に見られるように、müde は 259 例で zu 不定詞句の補足成分を伴う。そのうち 254 例は、(327) のように相関詞なしで用いられている。なお、相関詞がある場合、それは (328) のような es である。überdrüssig と同じく、müde は補足成分が名詞句の場合には属格名詞と結びつくことが多いが、相関詞 dessen を伴う事例は見られなかった。さらに、相関詞を伴う事例では、5 例とも sein を述語動詞とし、(328) のように nicht müde werden の構文以外の環境で用いられている。

- (327) Und er wird nicht müde, es wieder und wieder zu sagen. (=307) <müde, 述語的、相関詞なし>
 (そして彼は飽きもせず、それを繰り返し言う。)
- (328) [...] obwohl er sagte, er sei es müde, über Sklaven zu herrschen. (Neue Zürcher Zeitung, 21.01.2012) <müde, 述語的、相関詞 es あり>
 (彼は、自分が奴隷を支配するのにうんざりしていると言ったにもかかわらず [...])

さらに表 19 のとおり、satt は 82 の事例で補足成分が zu 不定詞句であり、さらに 7 の事例で補足成分が dass に導かれる副文である。補足成分がそのどちらであっても、(329)、(330) のように、satt は相関詞 es を伴う事例が多い。相関詞を伴わない事例は (331) の 1 例のみ見られた。

- (329) [...] weil ich es satt habe, über blosse Möglichkeiten oder Vermutungen zu sprechen. (=313) <satt, 述語的、相関詞 es あり (補足成分は zu 不定詞句) >
 (私はただの可能性や推測について話すのにうんざりしているので [...])
- (330) Die [=Leute, die in der Dopingbekämpfung arbeiten] haben es satt, dass man den Betrügern meist hilflos hinterherrennt. (=314) <satt, 述語的、相関詞 es あり (補足成分は副文) >
 (彼ら [=ドーピングと戦う人々] は、詐欺師 [=ドーピングの違反者] をたいてい甲斐なく後追いするということにうんざりしている。)
- (331) Greminger sagte, dass er satt habe, immer gegen die gleichen verbandsinternen Hindernisse angehen zu müssen. (St. Galler Tagblatt, 03.04.2012) <satt, 述語的、相関詞

なし>

(いつも同じ連盟内の障害に立ち向かわなければならないのにうんざりしていると、グレミンガーは言った。¹⁰³⁾

このように、補足成分が **zu** 不定詞句や副文である際、**überdrüssig** と **satt** は相関詞 **es** を伴うことが多いが、**müde** は相関詞を伴わないことが多い。**überdrüssig** と **satt** は、**müde** と比べて **zu** 不定詞句や副文が補足成分となる例がそもそも少ないことから、補足成分に名詞句を求めることが多い形容詞は、補足成分が名詞句以外になると、相関詞を求めることが多いといえるかもしれない。

なお、**satt** が相関詞を伴うのは、コプラではなく **haben** と共起する事例が多いためのようにも思える。しかし、Nobukuni (2013b: 7) では、**satt** がコプラ述語文に現れ、**zu** 不定詞句を補足成分とする事例を 8 例収集し、8 例とも相関詞 **es** を伴うという結果を得た。そのため、**satt** は動詞を問わず、相関詞 **es** を取るのだと思われる。

	überdrüssig	müde	satt
相関詞 es あり	2	5	88
相関詞なし	0	254	1
合計	2	259	89

表 22 形容詞 IV が述語的に用いられ、補足成分に **zu** 不定詞句や副文を取る際の相関詞の有無

4.7.3 意味的な出現環境 1 (どのような個体と共起するか)

ここでは、形容詞が述語的、副詞的に用いられる際に、どのような個体名詞と共起しているのかを確認する。

まず、形容詞 IV (**überdrüssig**, **müde**, **satt**) はどれも、述語的に用いられる際の主語や、付加語的に用いられる際の被修飾語に、モノを表示する語句を取る。主語や被修飾語に事象を表示する語句は現れない。さらにこのモノはすべて、(332) の **das Volk** (大衆) のように意志を持つ人ないしその人が所属する組織などである。

一方、主語や被修飾語以外の補足成分には、モノが現れる事例もあれば、事象が現れる事例もある。まず、**überdrüssig** が述語的用法の事例は 286 例であるが、その中で補足成分が (332) の **der Helden** (英雄たち) や (333) の **einer Ehefrau** (妻) のようなモノを表す事例は 144 例である。一方、(334) の **der Diskussionen** (議論) や (335) の **Zweiter zu werden** (2 位になること) や (336) の **der ständigen Reiserei** (絶え間ない旅行) のような事象を表示する語句が補足成分となる事例は 142 例である。さらに、付加語的用法では、4 例が (337) の **der üblichen Musikvideos** (よくあるミュージックビデオ) のような

¹⁰³ Erwin Greminger はスイスの射撃協会の後援者連盟の会長である。

モノを、10 例が (338) の *des Lebens* (人生) のような事象を表している。

- (332) Ist das Volk der Helden *überdrüssig*? (=301) <*überdrüssig*, 述語的、補足成分がモノ>
(大衆は英雄たちにうんざりしているのか?)
- (333) So soll Lamborghini, einer Ehefrau *überdrüssig*, das gemeinsame Wohnhaus mit der Abrissbirne beseitigt haben [...] (Der Spiegel, 19.05.2008) <*überdrüssig*, 述語的 (二次的)、補足成分がモノ>
(それでランボルギーニは、妻にうんざりして、二人の住まいを住宅解体用の鉄球を使って処分したとのことだ。¹⁰⁴)
- (334) Aber die Schweizer sind der Diskussionen *überdrüssig*. (Die Presse, 10.12.1999) <*überdrüssig*, 述語的、補足成分が事象 (名詞句) >
(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)
- (335) Cuche seinerseits hatte auf die Frage, ob er es nicht allmählich *überdrüssig* sei, ständig nur Zweiter zu werden, die einzig richtige Antwort zur Hand. (=302) <*überdrüssig*, 述語的、補足成分が事象 (zu 不定詞句) >
(キュシュとしては、彼が徐々に、常に2位にしかならないのにうんざりしているのではないかという質問に対する、唯一の正しい答えを用意していた。)
- (336) Der ständigen Reiserei *überdrüssig*, nahm sie ein Sabbatical. (=304) <*überdrüssig*, 述語的 (二次的)、補足成分が事象>
(絶え間ない旅行にうんざりして、彼女はサバティカルを取った。)
- (337) Es geht darum, den der üblichen Musikvideos *überdrüssigen Kids* neues Material zu liefern, [...] (=305) <*überdrüssig*, 付加語的、補足成分がモノ>
(問題となっているのは、よくあるミュージックビデオにうんざりしている子供たちに新しい題材を供給することだ。)
- (338) Bei Exit wird anscheinend mehr nicht tödlich Erkrankten, sondern alten, des Lebens *überdrüssigen Menschen* Suizidhilfe gewährt. (St. Galler Tagblatt, 05.11.2008) <*überdrüssig*, 付加語的、補足成分が事象>
(エグジットでは、死に至る病気を抱えた人々ではなく、年老いて、人生にうんざりしている人々により多く自殺幫助が与えられているようである。¹⁰⁵)

なお、形容詞 *überdrüssig* の補足成分にモノが現れる場合、そのモノと主語や被修飾語の「人」の背後に具体的な事象を想定しづらい。例えば (333) で主語が表す「ランボル

¹⁰⁴ Ferruccio Lamborghini はイタリアの自動車メーカーの創立者である。Ehefrau (妻) につく冠詞が所有冠詞ではなく不定冠詞なのは、原文のまま挙げている。

¹⁰⁵ Exit はスイスの自殺幫助機関である。なお、スイスでは自殺幫助が合法化されている。

ギーニ」は、何らかの事象に主体となって、補足成分が表す「妻」に対して「何かすること」にうんざりしているのかもしれないし、「ランボルギーニ」が客体、「妻」が主体となり「何かされること」にうんざりしているのかもしれない。しかしそのどちらでもなく、「妻」そのものにうんざりしているのだとも考えられる。このような場合、人は、補足成分が表すモノが「存在すること」にうんざりしているとはいえるかもしれない。いずれにせよ、主語ないし被修飾語が表す「人」と、補足成分が表す「モノ」との関係がどのようなもので、それらが関わる事象があるのか否か、あるとすればどのような事象であるか、ということは容易には判断できない。¹⁰⁶

一方、形容詞 *überdrüssig* の補足成分として現れる事象は、主語や被修飾語が表す人が主体として関わる事象であることが多い。例えば、上記 (338) では、被修飾語 *Menschen* (人々) が表す人は、補足成分である *Leben* (人生) という事象の主体である。ただし、(339) の *der Kritik der Opposition* (反対派の批判) のような、人が主体以外として関与する事象の事例も見られる。(339) の主語が表す人 *er* (彼) は、批判という事象の主体ではなく、客体である。

(339) Der Kritik der Opposition ist er längst überdrüssig geworden: (Niederösterreichische Nachrichten, 23.12.2016) <*überdrüssig*, 述語的、補足成分は主語が主体として参与しない事象>
(反対派の批判に彼はとうとううんざりしていた。)

次に *müde* では、300 例すべてが述語的用法の事例であるが、その中で補足成分が (340) の *des Amtes* (役職) のようなモノを表す事例は 9 例のみである。それ以外の 291 例はすべて、(341) の *der endlosen Diskussion um ...* (...を巡る終わりのない議論)、(342) の *es zu sagen* (それを言う)、(343) の *des ewigen Streitens* (終わりのない争い) のような事象である。なお、*überdrüssig* と同様、*müde* の補足成分にモノが現れる場合、主語の「人」と「モノ」の間にどのような事象が成り立つか想定しづらいこともあるが、補足成分に事象が現れる場合、それは主語や被修飾語が表す「人」が主体となって参与する事象であると考えられる。

(340) Er steht fast seit Beginn an der Spitze des Schwimmvereins - und ist mittlerweile des Amtes müde. (=306)) <*müde*, 述語的、補足成分がモノ>
(彼はほとんど最初から水泳連盟のトップに立っており — そして時が経つうちに、その役職にうんざりしている。)

¹⁰⁶ 事例によっては、背後にある事象を想像しやすいものもある。例えば (337) であれば、被修飾語が表す「子どもたち」は、補足成分が表す「よくあるミュージックビデオ」というモノを「見る」ことなどにうんざりしているのだろうと、事象を想定することができる。

- (341) Auch der endlosen Diskussion um Motive der zunehmende Zerstörungswut unter Jugendlichen sind die Mitarbeiter müde:¹⁰⁷ (Nordkurier, 06.09.2000) <müde, 述語的、補足成分が事象 (名詞句) >
(若者間の増大する破壊欲の動機を巡る終わりのない議論にも、従業員はうんざりしている。)
- (342) Und er wird nicht müde, es wieder und wieder zu sagen. (=307) <müde, 述語的、補足成分が事象 (zu 不定詞句) >
(そして彼は飽きもせず、それを繰り返し言う。)
- (343) Des ewigen Streitens müde, haben die Parteien diese Taxierung vor Jahren unter sich ausgemacht. (=308) <müde, 述語的 (二次的)、補足成分が事象 >
(終わりのない争いとうんざりして、政党はこの見積もりを何年も前に仲間内で処理した。)

最後に *satt* では、300 例すべてが述語的に用いられるが、(344) の *meine Briefe* (私の手紙) のようなモノが補足成分として現れる事例は 102 例である。一方、(345) の *den ewigen Streit mit ihren Müttern* (彼らの母親との長期にわたる争い)、(346) の *über ... zu sprechen* (...について話す (こと))、(347) の *des Stundenzählens* (時間勘定) のような事象が補足成分に現れる事例は 175 例である。*satt* の補足成分に現れる事象の多くは、当該文の主語が表す人が主体として関与する事象である。ただし、(348) の *seine persönlichen Angriffe* (彼の個人攻撃) のような、主語が表す人が主体として関与するのではない事象の事例も見られる。さらに、*satt* は (349) のように述語的用法で *dass* に導かれる副文を補足成分に取ることがある。このような副文内では、主文の主語とは異なるモノが主語となっている。つまり、副文内で表される事象は、主文の主語が表す人が主体として関与するものではない。これらのことから、*satt* が事象を補足成分に取る際、必ずしもそれは、主語が表示する人が主体となってしまうことに限定されないものと思われる。なお、事例の残り 23 例は (350) の *alles* (すべて) のように、モノと事象のどちらを表しているのか判断ができない事例である。

- (344) „Er hatte meine Briefe satt“ (=311) <*satt*, 述語的、補足成分がモノ >
(「彼は私の手紙にうんざりしていた。」)
- (345) Den ewigen Streit mit ihren Müttern haben sie gründlich satt. (St. Galler Tagblatt, 17.11.2007) <*satt*, 述語的、補足成分が事象 (名詞句) >
(彼らの母親との長期にわたる争いに、彼らは根本的にうんざりしている。)
- (346) [...] weil ich es satt habe, über blosse Möglichkeiten oder Vermutungen zu sprechen.

¹⁰⁷ 文法的には „zunehmenden“ とすべきだが、原文のまま挙げている。

(=(313)) <satt, 述語的、補足成分が事象 (zu 不定詞句) >

(私はただの可能性や推測について話すのにうんざりしているので [...])

(347) 1797 bis 1800 schrieb Friedrich Hölderlin [...] über „den großen Sicilianer, der, einst des Stundenzählens satt, [...] sich da (gemeint ist der Ätna) hinabwarf in die herrlichen Flammen“. (=(315)) <satt, 述語的 (二次的)、補足成分が事象 >

(1797年から1800年にフリードリヒ・ヘルダーリンは [...]) 「かつて時間勘定にうんざりして、[...] 自らをそこで (エトナ山を指す) 素晴らしい火の中に投げ打った偉大なシチリア人」について書いた。

(348) „Ich habe seine persönlichen Angriffe satt“, wetterte der CDU-Mann [...] (Mannheimer Morgen, 12.12.1997) <satt, 述語的、補足成分は主語が主体として参与しない事象 > (「私は彼の個人攻撃にうんざりしている」とキリスト教民主同盟の男性は罵った。)

(349) Der 41-Jährige aus Groß Borstel hatte es satt, dass an Tausenden Bäumen Obst verfault. (Mannheimer Morgen, 12.09.2005) <satt, 述語的、補足成分が命題 (副文) >

(グロース・ボルステル出身のその41歳の男性は、何千もの木で果物が腐ることにうんざりしていた。¹⁰⁸)

(350) Der kauzige Rentner Carl hat alles satt. (Hamburger Morgenpost, 26.01.2010) <satt, 述語的、補足成分の分類ができない >

(変わり者の年金生活者カールはすべてにうんざりしている。¹⁰⁹)

このように、形容詞 IV はどれも補足成分を伴って用いられる。その補足成分の語句は、モノを表す場合も事象を表す場合もある。überdrüssig, satt はそのどちらもよく見られるが、müde の補足成分は多くの場合、事象を表している。

補足成分としてモノが現れる場合、そのモノと主語が表示する人という両者の背後に具体的な事象を想定し難い。主語が表示する人は、補足成分が表すモノに対して「主体となって何かをすること」あるいは「客体となって何かをされること」にうんざりしているというよりもむしろ、そのモノそのものにうんざりしているのだとも考えられる。もしくは、そのようなモノが「存在すること」にうんざりしているのだとはいえるかもしれない。

一方、補足成分として事象が現れる場合、主語が表示する人はたいてい、その事象に主体として関与するものだと考えられる。ただし、überdrüssig と satt に関しては、主語が表す人が主体として関与していないような事象が補足成分として現れる事例もわずかながら見られた。überdrüssig では補足成分が事象である事例 152 例中 32 例が、satt では補足成分が事象である事例 175 例中 15 例が、主語が表す人が補足成分が表す事象に主体として参与するとはいえない事例である。

¹⁰⁸ Groß Borstel はドイツのハンブルクの地区名である。

¹⁰⁹ (350) は映画に関する記事であり、Carl Fredricksen は映画の主人公である。

		überdrüssig		müde		satt	
述語的	モノ	286	144	300	9	300	102
	事象		142		291		175
	その他		0		0		23
付加語的	モノ	14	4	0	0	0	0
	事象		10		0		0
合計			300		300		300

表 23 形容詞 IV の補足成分として現れる個体の種類

4.7.4 意味的な出現環境 2 (どのような事象と共起するか)

ここでは、形容詞 IV が共起する事象の種類を確認する。なお、前述のとおり、形容詞 IV が述語的に用いられる際の主語や、付加語的に用いられる際の被修飾語には、意志を持つ人やそれに類する機関などを表す語句しか現れない。ここで確認するのは、補足成分が事象を表している際の、その事象の種類である。

まず、形容詞 *überdrüssig* が述語的に用いられ、事象を表す語句を補足成分に取る 142 例において、(351) の *der Diskussionen* (議論) や (352) の *der ständigen Reiserei* (絶え間ない旅行) のような「活動」タイプの事例が最も多く 97 例、次いで (353) の *des Lebens* (人生) や (354) の *des langen Friedens* (長い平和) のような「状態」タイプが 36 例である。(355) の *der ständigen Niederlagen* (絶え間ない敗北) や (356) の *ständig nur Zweiter zu werden* (常に 2 位にしかならないこと) のような「到達」タイプの事例は 5 例見られたが、どれも *ständig* (絶え間ない) や *viel* (多くの) という語句を伴っており、このような事象は一回限りではなく、何度も繰り返されることがわかる。つまり、全体としては無界的な反復相であると捉えられる。さらに、*ständig*, *viel* などの語句は、(352) の *Reiserei* (旅行) など、「到達」以外の事象ともよく表れている。「達成」タイプの事象が現れる事例は見られなかった。その他の 4 例は、(357) の *der Sache* (物事) のような、具体的にどのような事象であるかが明らかでなく、事象がどのタイプに属するのか判断できない事例である。

また、付加語的用法で事象を表す語句を補足成分に取る 10 例において、(358) の *des Sammelns* (収集) のような「活動」タイプは 4 例、(359) の *des Lebens* (人生) のような「状態」タイプは 6 例である。

(351) *Aber die Schweizer sind der Diskussionen überdrüssig.* (= (334)) < *überdrüssig*, 述語的、補足成分が活動 (名詞句) >

(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)

(352) *Der ständigen Reiserei überdrüssig, nahm sie ein Sabbatical.* (= (304)) < *überdrüssig*, 述語的 (二次的)、補足成分が活動 (名詞句) >

- (絶え間ない旅行にうんざりして、彼女はサバティカルを取った。)
- (353) Sie sind des Lebens überdrüssig und wollen gemeinsam in den Tod springen. (Nordkurier, 25.11.2010) <überdrüssig, 述語的、補足成分が状態 (名詞句) >
(彼らは人生にうんざりしており、一緒に死ぬつもりである。)
- (354) Doch stellt sich die Frage, ob die Seestreitkräfte, des langen Friedens überdrüssig, nach einem Gegner gesucht und endlich einen gefunden haben. (Der Spiegel, 28.01.2008) <überdrüssig, 述語的 (二次的)、補足成分が状態 (名詞句) >
(しかし、海軍が、長い平和にうんざりして、敵を探してついに見つけたのではないかという疑問がある。)
- (355) Firmenchef Luca di Montezemolo ist der ständigen Niederlagen längst überdrüssig. (Mannheimer Morgen, 16.03.2013) <überdrüssig, 述語的、補足成分が到達 (名詞句) >
(会社の会長ルカ・ディ・モンテゼーモロは絶え間ない敗北にとっくにうんざりしている。¹¹⁰)
- (356) Cuche seinerseits hatte auf die Frage, ob er es nicht allmählich überdrüssig sei, ständig nur Zweiter zu werden, die einzig richtige Antwort zur Hand. (=302)) <überdrüssig, 述語的、補足成分が到達 (zu 不定詞句) >
(キュシュとしては、彼が徐々に、常に2位にしかならないのにうんざりしているのではないかという質問に対する、唯一の正しい答えを用意していた。)
- (357) Waren Sie manchmal der Sache überdrüssig und hätten sie lieber an den Nagel gehängt, [...]?(St. Galler Tagblatt, 30.12.1997) <überdrüssig, 述語的、事象の種類を分類できない >
(あなたは時に物事にうんざりし、途中で放棄したほうがいいのではと思いましたか?)
- (358) [...] eine Strickmaschine von Omas Speicher fand sich neben der Comicsammlung eines des Sammelns überdrüssigen Enkels wieder. (Mannheimer Morgen, 06.12.1999) <überdrüssig, 付加語的、補足成分が活動 (名詞句) >
(おばあちゃんの倉庫の編み機が、収集にうんざりした孫の漫画コレクションの横で再び見つかった。)
- (359) Bei Exit wird anscheinend mehr nicht tödlich Erkrankten, sondern alten, des Lebens überdrüssigen Menschen Suizidhilfe gewährt. (=338)) <überdrüssig, 付加語的、補足成分が状態 (名詞句) >
(エグジットでは、死に至る病気を抱えた人々ではなく、年老いて、人生にうんざりしている人々により多く自殺幫助が与えられているようである。)

¹¹⁰ Luca di Montezemolo はイタリアの自動車メーカーの会長 (当時) である。

次に、*müde* が述語的に用いられ、事象を表す語句を補足成分に取る 291 例において、(360) の *des Singens* (歌う (こと))、(361) の *es wieder und wieder zu sagen* (それを繰り返し言う (こと))、(362) の *des ewigen Streitens* (終わりのない争い) のような「活動」タイプの事例が最も多く 233 例である。そのほか、(363) の *des Lebens* (人生)、(364) の *die höchste Politikerin zu sein* (最高位の政治家である (こと))、(365) の *des Alleinseins* (一人でいる (こと)) のような「状態」が 9 例、(366) の *des Durchhaltens* (耐え抜く (こと)) や (367) の *jene Kulturkritiker zu ärgern* (あの文化批評家たちを怒らせる (こと)) のような「到達」が 34 例、(368) の *des Tötens* (殺す (こと)) や (369) の *diese Gelegenheit voll auszunützen* (この機会を完全に利用しつくすこと) のような「達成」が 14 例である。残りの 1 例は (370) で、*all der Affären und des Rummels* (すべての出来事と騒ぎ) は、具体的にどのような出来事であるかが明らかでなく、どのタイプの事象に属するのか判断できない。

なお、*müde* が到達や達成といった有界的な事象と結びついているとき、その事象は、無界的な反復相として捉えられる。例えば、(367) では彼女は評論家たちを「何度も」怒らせるのだし、(368) でもアルフォンソ・クバンダは「何回も」殺すからこそうんざりしているのだと思われる。

(360) Wer hingegen *des Singens müde* wurde, konnte [...] am Glücksrad tolle Sachpreise gewinnen. (=320) <*müde*, 述語的、補足成分が活動 (名詞句) >

(それに反して歌うことにうんざりした者は、抽選器で素敵な商品を手に入れられた。)

(361) Und *er* wird nicht *müde*, *es wieder und wieder zu sagen*. (=307) <*müde*, 述語的、補足成分が活動 (zu 不定詞句) >

(そして彼は飽きもせず、それを繰り返し言う。)

(362) *Des ewigen Streitens müde*, haben die Parteien diese Taxierung vor Jahren unter sich ausgemacht. (=308) <*müde*, 述語的 (二次的)、補足成分が活動 (名詞句) >

(終わりのない争いにうんざりして、政党はこの見積もりを何年も前に仲間内で処理した。)

(363) [...] ob sie so weiterleben wollen, oder ob *sie*, da sie das Essen verweigern, *des Lebens müde* sind. (Süddeutsche Zeitung, 26.06.2008) <*müde*, 述語的、補足成分が状態 (名詞句) >

(彼らは生き続けたいのか否か、もしくは彼らは、食事を拒んでいるのだから、人生にうんざりしているのかどうか。)

(364) Ist *sie* manchmal *müde*, *die höchste Politikerin der Flüchtlingsinsel zu sein*? (Die ZEIT, 18.06.2015) <*müde*, 述語的、補足成分が状態 (zu 不定詞句) >

- (彼女は時に、難民の島で最高位の政治家であることにうんざりするのだろうか？¹¹¹)
- (365) Lediger Schneider, des Alleinseins müde, sucht auf diesem Wege eine Lebensgefährtin. (St. Galler Tagblatt, 05.07.2012) <müde, 述語的 (二次的)、補足成分が状態 (名詞句) >
>
(未婚の仕立屋が、一人でいることに嫌気がさして、この方法で人生の伴侶を探しています。)
- (366) [...] nach etlichen Jahren der Krise sind viele von ihnen des Durchhaltens müde. (Die ZEIT, 04.02.2016) <müde, 述語的、補足成分が到達 (名詞句) >
(危機の数年後に、彼らの多くは耐え抜くことにうんざりしている。)
- (367) Und sie wird nicht müde, mit dieser Tatsache jene Kulturkritiker zu ärgern [...] (Der Spiegel, 11.06.2001) <müde, 述語的、補足成分が到達 (zu 不定詞句) >
(そして彼女は飽きもせず、この事実である文化批評家たちを怒らせる。)
- (368) Alphonso Kpanda war des Tötens müde. (Süddeutsche Zeitung, 29.06.1995) <müde, 述語的、補足成分が達成 (名詞句) >
(アルフォンソ・クパンダは殺すのにうんざりしていた。¹¹²)
- (369) Sie wurden auch nicht müde, diese Gelegenheit voll auszunützen. (St. Galler Tagblatt, 18.11.2000) <müde, 述語的、補足成分が達成 (zu 不定詞句) >
(彼らは飽きもせずこの機会を完全に利用しつくした。)
- (370) Bis sie, all der Affären und des Rummels müde, mit ihrem Leben abschließt. (Nürnberger Nachrichten, 21.10.2014) <müde, 述語的 (二次的)、事象の種類を分類できない >
(彼女が、すべての出来事と騒ぎにうんざりして、自分の人生を清算するまで。)

最後に、satt が述語的に用いられ、事象を表す語句を補足成分に取る 175 例において、(371) の den ewigen Streit mit ihren Müttern (彼らの母親との長期にわたる争い)、(372) の über ... zu sprechen (…について話す (こと))、(373) の des Stundenzählens (時間勘定) のような「活動」タイプの事例が最も多く 103 例である。そのほか、(374) の das Einzelkämpfer-Dasein (唯一の戦士である (こと)) や (375) の nur zu leben (ただ生きる (こと)) のような「状態」は 51 例、(376) の das Siegen (勝利) や (377) の immer nur Liebe zu geben und keine zu kriegen (常に愛だけを与えて何も得ない (こと)) のような「到達」は 21 例見られた。「達成」タイプの事例は見られなかった。

また、satt は事象を表す語句だけでなく、dass に導かれる副文が表す命題を補足成分に取る事例も 7 例見られた。その命題内で表される事象には、(378) の dass man den

¹¹¹ (364) の「難民の島」はイタリアのランペドゥーザ島を、「彼女」は当時の町長 Giusi Nicolini を指す。

¹¹² Alphonso Kpanda はリベリアでかつて自由の戦士であった人である。

Betrü gern hinterherrennt (人が詐欺師を後追いすること) のような「活動」が 2 例、(379) の dass meine Leistung von ... abhängig war (私の成果が…に依存していたこと) という「状態」が 1 例、(380) の dass an Tausenden Bäumen Obst verfault (何千もの木で果物が腐ること) のような「到達」が 3 例、(381) の daß Patienten und Zahnärzte die Dummheiten ständig ausbaden müssen (患者と歯医者、バカなことの後始末をいつもつけなければならないこと) という「達成」が 1 例である。

satt の場合も、überdrüssig, müde と同じく、「到達」「達成」という事象と結びつくと、それは無界的な反復相として解釈される。例えば (376) では、ロドリゴ・ペソアは何度も勝利していて、しかしなおうんざりしていないということを意味していると思われる。satt においても、immer (常に)、ewig (長期にわたる) などの語句と共起することが多い。(377) のような到達、達成といった有界的な事象に限らず、(371) のような無界的な事象とも、これらの語句は結びつく。

(371) Den ewigen Streit mit ihren Müttern haben sie gründlich satt. (=345) <satt, 述語的、補足成分が活動 (名詞句) >

(彼らの母親との長期にわたる争いに、彼らは根本的にうんざりしている。)

(372) [...] weil ich es satt habe, über bloss e Möglichkeiten oder Vermutungen zu sprechen. (=313) <satt, 述語的、補足成分が活動 (zu 不定詞句) >

(私はただの可能性や推測について話すのにうんざりしているので [...])

(373) 1797 bis 1800 schrieb Friedrich Hölderlin [...] über „den großen Sicilianer, der, einst des Stundenzählens satt, [...] sich da (gemeint ist der Ätna) hinabwarf in die herrlichen Flammen“. (=315) <satt, 述語的 (二次的)、補足成分が活動 (名詞句) >

(1797 年から 1800 年にフリードリヒ・ヘルダーリンは [...]) 「かつて時間勘定にうんざりして、[...] 自らをそこで (エトナ山を指す) 素晴らしい火の中に投げ打った偉大なシチリア人」について書いた。)

(374) FDP hat das Einzelkämpfer-Dasein satt. (Mannheimer Morgen, 13.09.2003) <satt, 述語的、補足成分が状態 (名詞句) >

(自由民主党は唯一の戦士であることにうんざりしている。)

(375) Die Menschen haben es satt, nur zu leben, weil sie geboren sind. (Rhein-Zeitung, 20.06.1998) <satt, 述語的、補足成分が状態 (zu 不定詞句) >

(人々は、生まれたからという理由でただ生きるのにうんざりしている。)

(376) Rodrigo Pessoa [...] hat das Siegen längst nicht satt. (St. Galler Tagblatt, 28.05.1999) <satt, 述語的、補足成分が到達 (名詞句) >

(ロドリゴ・ペソアは [...]) 勝利におよそうんざりしていない。¹¹³⁾

¹¹³ Rodrigo Pessoa はブラジル出身の馬術選手である。

- (377) [...] alle haben es satt, immer nur Liebe zu geben und keine zu kriegen - das ist das Thema. (Nürnberger Nachrichten, 29.09.1990) < satt, 述語的、補足成分が到達 (zu 不定詞句) >
 (すべての人は、常に愛を与えるだけで愛を得ないのにうんざりしている。)
- (378) Die [=Leute, die in der Dopingbekämpfung arbeiten] haben es satt, dass man den Betrügern meist hilflos hinterherrennt. (=314) < satt, 述語的、補足成分が活動 (副文) >
 >
 (彼ら [=ドーピングと戦う人々] は、詐欺師 [=ドーピングの違反者] をたいてい甲斐なく後追いするというにうんざりしている。)
- (379) Aber ich hatte es auch schnell satt, dass meine Leistung von manchmal unverständlichen Schiedsrichter-Entscheiden abhängig war. (Sonntagsblick, 06.08.2006) < satt, 述語的、補足成分が状態 (副文) >
 (しかし私はまたすぐに、私の成果が時に理解できない審判の決定に依存していたということにうんざりした。)
- (380) Der 41-Jährige aus Groß Borstel hatte es satt, dass an Tausenden Bäumen Obst verfault. (=349) < satt, 述語的、補足成分が到達 (副文) >
 (グロース・ボルステル出身のその 41 歳の男性は、何千もの木で果物が腐ることにうんざりしていた。)
- (381) Langsam habe ich es satt, daß Patienten und Zahnärzte die Dummheiten [...] ständig ausbaden müssen. (Der Spiegel, 01.03.1993) < satt, 述語的、補足成分が達成 (副文) >
 >
 (やがて私は、患者と歯医者が、[...] バカなことの後始末をいつもつけなければならぬということにうんざりする。)

以上の結果は、表 24 のようにまとめられる。

		überdrüssig		müde		satt	
活動	述語的	101	97	233	233	103	103
	付加語的		4		0		0
状態	述語的	42	36	9	9	51	51
	付加語的		6		0		0
到達	述語的	5	5	34	34	21	21
	付加語的		0		0		0
達成	述語的	0	0	14	14	0	0
	付加語的		0		0		0
合計			148		290		175

表 24 形容詞 IV の補足成分として現れる事象の種類¹¹⁴

このように、形容詞 IV はどれも、活動タイプの事象と結びつくことが多い。また、事象のアスペクトにかかわらず、immer (いつも)、immer wieder (繰り返し)、ständig (絶え間なく) などの語句と共起する例も目立つ。これらの語句は、「活動」や「状態」という無界的な事象だけでなく、「到達」や「達成」という、有界的な事象とも結びつく。その結果、「到達」「達成」は一度切りのこととしてではなく、反復的に解釈される。例えば、(355)、(356) では、「到達」タイプの出来事 Niederlagen や Zweiter zu werden が ständig とともに用いられていることで、その「敗北」や「二位になること」が何度も繰り返され、そのことに主語が表す人がうんざりしているのだと考えられる。また、このような語句がなくても、有界的な事象は、反復的に解釈される。例えば (368) の des Tötens は一度切りの事象を表しているのではなく、「何回も」殺すからこそうんざりしているのだと解釈できる。これらのことから、形容詞 IV は、継続的ないし反復的な事象を念頭に、それに飽きる、嫌気がさすということを表しているようである。

4.7.5 形容詞 IV の出現傾向のまとめ

4.7.1 から 4.7.3 までに確認された、形容詞 IV (überdrüssig, müde, satt) の主な出現傾向は以下のとおりである。

<統語的環境>

- ① もっぱら述語的用法で用いられる。
- ② 述語的用法では、主語と、それ以外にもう一つの補足成分を伴って用いられる。
- ③ 述語的用法の主語には名詞句のみが現れる。
- ④ 述語的用法の補足成分には、名詞句と zu 不定詞句が現れうる。

¹¹⁴ (357), (370) のような、事象の種類が判断できない事例は除外してある。また、(378) ~ (381) のような、satt の補足成分が命題である事例もここでは除外してある。

<意味的環境>

- ① 述語的用法での主語や付加語的用法での被修飾語は、意志を持つ人を表す。
- ② 補足成分はモノを表す場合と事象を表す場合がある。
- ③ 補足成分には、無界的な事象（とりわけ、その中での展開がある「活動」）が現れることが多い。
- ④ 補足成分に現れる事象は、その種類を問わず、継続ないし反復的に解釈される

このように、形容詞 IV には様々な共通点がある一方、相違点も多い。まず、それぞれの形容詞が共起しやすい述語動詞が異なる。**überdrüssig** では **sein** が用いられることが多い一方、**müde** は **werden** と、**satt** は **haben** と用いられることが多い。ただし、**satt** はコプラである **sein** と **werden** の中では、**sein** と用いられることが多いようである。さらに、**müde** は **nicht** を伴い、**nicht müde werden** の構文で「飽きもせず～する」という意味で用いられることが多く、「うんざりしている」という意味で用いられる事例は少ない。

また、補足成分として現れる語句は、**überdrüssig** ではもっぱら名詞句である一方、**müde** ではもっぱら **zu** 不定詞句である。**satt** の補足成分には名詞句が現れることが多いが、**zu** 不定詞句も少なくなく、さらにわずかではあるが副文と用いられる事例も見られる。意味的には、**überdrüssig** の取る補足成分はもっぱらモノを、**müde** ではもっぱら事象を表しており、**satt** の補足成分としてはモノと事象が同程度の割合で現れ、わずかではあるが命題の事例も見られる。

補足成分が名詞句である場合、**überdrüssig** と **müde** では、それが属格で表れる一方、**satt** では対格で表れる。なお、4.7.1 でも言及したように、**satt** は **haben** と結びつかずにコプラ述語文に現れていても、やはり対格名詞句と結びつくことが多いようである。

さらに、補足成分が **zu** 不定詞句や副文である場合、**überdrüssig** と **satt** では相関詞 **es** が表示される一方、**müde** では相関詞が表示されない場合が多い。また、補足成分が事象を表している際に、その事象に主体として参与する人が、述語文の主語と一致するか否かという点に関しては、**müde** ではそのような一致が見られる一方、**überdrüssig** と **satt** では必ずしも一致しない。**satt** では、補足成分が事象ではなく命題を表している場合もあるが、その際も、命題内における事象の主体は、主文の主語が表す人と必ずしも一致しない。

	überdrüssig	müde	satt
述語動詞	sein	werden + nicht	haben
補足成分の統語的な種類	名詞句が多い (zu 不定詞句も可)	zu 不定詞句が多い (名詞句も可)	名詞句が多い(zu 不定詞句・副文も可)
補足成分の意味的な種類	モノが多い (事象も可)	事象が多い (モノも可)	モノと事象 (命題も可)
補足成分の名詞句の格	属格	属格	対格
相関詞	あり	なし	あり
主語の人と補足成分の事象の関係	主語の人が事象の主体であるとは限らない	主語の人は事象の主体である	主語の人が事象の主体であるとは限らない

表 25 形容詞 IV の現れる統語的・意味的環境の相違点

4.7.6 müde と überdrüssig, satt の比較

前節で確認されたように、形容詞 IV の 3 語は、それぞれに使われ方が異なっている。特に、müde は überdrüssig, satt との相違点が多い。ここでは、müde と überdrüssig, satt を対比し、それぞれの特徴を確認する。比較にあたっては、müde の使用例で多く見られる、nicht と共起し、補足成分が事象を表示し、かつ zu 不定詞句で表されている場合に注目する。

まず、überdrüssig, satt が (382), (383) のように「～にうんざりしている」という 2 価の形容詞としての本来の意味で用いられることが多いのに対し、müde は (384) のように nicht müde werden という構文で「飽きもせず～する」という意味で用いられることが多い。

(382) Cuche seinerseits hatte auf die Frage, ob er es nicht allmählich *überdrüssig* sei, *ständig nur Zweiter zu werden*, die einzig richtige Antwort zur Hand. (=302) <überdrüssig, 相関詞 es あり>

(キュシュとしては、彼が徐々に、常に 2 位にしかならないのにうんざりしているのではないかという質問に対する、唯一の正しい答えを用意していた。)

(383) [...] weil *ich* es *satt* habe, über blosse Möglichkeiten oder Vermutungen zu sprechen. (=313) <satt, 相関詞 es あり>

(私はただの可能性や推測について話すのにうんざりしているので [...])

(384) Und er wird nicht *müde*, es wieder und wieder zu sagen. (=307) <müde, 相関詞なし>

(そして彼は飽きもせず、それを繰り返す言う。)

また、überdrüssig, satt が (382), (383) のように zu 不定詞句の補足成分を取る文で相関

詞 *es* を伴うのに対し、*müde* では (384) のように相関詞は出現しない。しかし、*müde* の述語文であっても、*nicht müde werden* という構文で用いられず、*überdrüssig, satt* と同じように「～にうんざりしている」という意味で用いられている場合には、(385) に見られるように、相関詞 *es* を伴う。

(385) [...] obwohl er sagte, er sei *es müde*, über Sklaven zu herrschen. (=328) <*müde*, 相関詞 *es* あり >

(彼は、自分が奴隷を支配するのにうんざりしていると言ったにもかかわらず [...])

このことから、「～にうんざりしている」と「飽きもせず～する」という意味の違いが、相関詞の有無と関係していると考えられる。この両者の意味の違いは、当該の事象が、形容詞が性質を当てはめる時点（少なくとも一時的な）終了点とすると捉えられるか、その時点以降も続く事象であると捉えられるかにあるのではないか。つまり、「～にうんざりしている」を意味する *überdrüssig, satt*（そして *sein* と共起する *müde*）は、その時点までに続いている、ないし繰り返される事象に言及する語で、その後それがさらに続くかどうかという点には焦点を当てていない。これらの形容詞は、当該の事象を有界的に捉え、その時点までを一区切りとする事象に対する人の感情を表している。一方、「飽きもせず～する」を意味する *nicht müde werden* はその時点以降に行われる事象に言及する語で、当該の事象を、性質を当てはめた時点では区切らない。つまり、事象を無界的に捉えている。このように、*überdrüssig, satt*（そして *sein* と共起する *müde*）のように、事象を有界的なものとして捉えている場合には、それを具体的に指示する相関詞の *es* が現れるが、*nicht müde werden* のように、事象の終了点を想定せず、無界的に捉えている場合には、相関詞が現れないのではないだろうか。

ところで、表 25 を見ると、*nicht müde werden* はほとんど *zu* 不定詞句とのみ共起するのに対し、*überdrüssig, satt*（そして *sein* と共起する *müde*）は、(386), (387) のように名詞句と共起することのほうが多い。この違いも、事象の捉え方の違いと関係していると思われる。*nicht müde werden* と共起する事象は、その時点以降にも続けられる、ないし繰り返されることが想定されており、その時点ではまだ行われていないかもしれない。そのため、未遂の行為を表現する *zu* 不定詞句で表しやすいと考えられる。一方で、*überdrüssig, satt*（そして *sein* と共起する *müde*）と共起する事象は、その時点までに行われている事象であり、その後それが続くかどうかという点には焦点を当てていない。そのため、事象が *zu* 不定詞句で表されにくくなるのではないか。

(386) Aber die Schweizer sind der Diskussionen überdrüssig. (=334) <*überdrüssig*, 補足成分が事象（名詞句） >

(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)

- (387) Den ewigen Streit mit ihren Müttern haben sie gründlich satt. (=345) < satt, 補足成分が事象 (名詞句) >
(彼らの母親との長期にわたる争いに、彼らは根本的にうんざりしている。)

さらに、表 25 を見ると、*nicht müde werden* と共起する事象は、その主体が形容詞述語の主語が表す人と一致するが、*überdrüssig*, *satt* に関しては (388), (389) の例に見られるように必ずしもそうとは限らない。このことも、当該の事象を有界的に捉えるか、無界的に捉えるかという、事象の捉え方の違いが関わっているのではないか。事象を有界的に、外の視点から捉えられるということは、主語が表す「人」からも切り離すことができることにつながる。そのため、*überdrüssig* や *satt* は、主語の「人」と、別の人が主体となる事象の関係性を捉え、その事象に対する「人」の感情を表しうるのだと考えられる。*überdrüssig* や *satt* は *nicht müde werden* と比べて補足成分にモノが現れやすく、そのモノと主語の「人」との背後に共通する事象を想像しにくいことから、*überdrüssig* や *satt* は、主語の「人」と補足成分の個体 (モノや事象) の間に、*nicht müde werden* ほど意味的に強固なつながりを求めないのだと考えられる。

- (388) Der Kritik der Opposition ist er längst überdrüssig geworden: (=339) < *überdrüssig*, 補足成分は主語の人が主体ではない事象 >
(反対派の批判に彼はとうとううんざりしていた。)
- (389) „Ich habe seine persönlichen Angriffe satt“, wettete der CDU-Mann [...] (=348) < *satt*, 補足成分は主語の人が主体ではない事象 >
(「私は彼の個人攻撃にうんざりしている」とキリスト教民主同盟の男性は罵った。)

4.8 形容詞 I, II, III と形容詞 IV の比較

4.7 では、形容詞 IV の 3 語 (*überdrüssig*, *müde*, *satt*) の相違点に注目したが、事例分析の最後に、形容詞 IV が、どのような特徴を持ち、その他の形容詞 I (*schnell*, *langsam*), II (*leicht*, *schwer*), III (*vorsichtig*, *leichtsinnig*) とどのように異なっているのかを確認する。

4.7.5 に挙げた、形容詞 IV の共通点である意味的環境①「述語的用法での主語や付加語的用法での被修飾語は、意志を持つ人を表す」から、形容詞 IV は形容詞 I, II, III とは異なり、常に「人」の性質を表すといえる。形容詞 I, II, III では、形容詞が述語的に用いられる際の述語対象語や、付加語的に用いられる際の被修飾語に、「人」を表示する語句と「事象」を表示する語句の両方が現れうる一方で、形容詞 IV ではそれらは常に「人」を表示する語句である。

また、形容詞 IV は必ず補足成分を伴うことから、形容詞 IV は「人」と何らかの対象との関係を明示し、それに関する「人」の性質を表すといえる。それに比べて、形容詞 I, II は、少なくとも見た目の上では「モノ」あるいは「事象」どちらか一方の性質しか

表せない。例えば形容詞 I では „Das Auto ist *schnell*.“（この車は速い。）とは言うことはあっても、„Das Auto ist *schnell bei der Fahrt*.“（この車は走行の際に速い。）とは基本的に言わない。「車」の背後には「走行」などの事象があることが想定されるが、それが明示はされないのである。

また、形容詞 III では、見た目の上では形容詞 IV と同じように「人」と何らかの対象の両方が明示されることがある。ただし、形容詞 IV とは異なり、形容詞 III は「人」と「対象」の関係を表しているのではなく、「人」に当てはめられる性質をより限定するために「対象」が表示されているといえる。例えば „Die Frau ist *vorsichtig beim Kauf*.“（その女性は買い物の際に慎重である。）は、「その女性が慎重である」という性質が「買い物の際に」当てはまることを示している。この文で、補足成分を表示せず、„Die Frau ist *vorsichtig*.“（その女性は慎重である。）としても、形容詞が「人」に「慎重である」という性質を当てはめることは変わらず、ただそれがどのような事象のもとで当てはめられるのかということが、限定されないだけである。一方、形容詞 IV では、補足成分を表示しなければ、文が成立しない、あるいは形容詞の表す意味が異なる。例えば、„Die Frau ist des Wartens *überdrüssig*.“（その女性は待つことにうんざりしている。）を „*Die Frau ist *überdrüssig*.“（*その女性はうんざりしている。）とは書き換えられないし、„Die Frau ist des Wartens *satt*.“（その女性は待つことにうんざりしている。）から補足成分を取り除くと、„Die Frau ist *satt*.“（その女性は満腹だ。）のように、形容詞の意味は異なって解釈されるのである。

なお、形容詞 IV は「人」と「何らかの対象」のどちらをも明示することから、「人」の性質を表すというより、その対象に対する「人」の感情を表していると考えられるほうが適切であると思われる。そして、ここでいう「何らかの対象」は、形容詞ごとに以下のように異なる。対象が事象である場合、それは継続的ないし反復的な事象であると解釈されるという点では、形容詞 IV の 3 語は共通している。

- *überdrüssig*: モノないし（その時点までに継続・反復される）事象
- *müde (nicht müde werden)*: 主に（その時点以降にも継続・反復される）事象
- *satt*: モノないし（その時点までに継続・反復される）事象ないし命題（事実）

5 考察

本章では、前章の調査結果をもとに、事象を項に取るドイツ語形容詞の全体像を考察する。4つのタイプの形容詞は意味的にどのように異なり、その違いは統語的な出現環境の違いに（どのように）反映されるのかということに焦点を当てる。

5.1 事象を項に取る形容詞が表す性質

本稿で調査対象とした、事象を項に取る形容詞は、以下の4タイプである。

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| I. schnell, langsam | II. leicht, schwer |
| III. vorsichtig, leichtsinnig | IV. überdrüssig, müde, satt |

これらの形容詞は、(390)~(393)のように、述語的用法で二つの文成分を伴って用いられるとき、その主語となるモノが、もう一つの文成分となる事象の参与者でありうるという点で共通している（(390)~(393)は(118)~(121)の再掲）。

- (390) Das Auto ist *schnell* bei der Fahrt. (この車は走行の際に速い。)
(391) Das Problem ist *leicht* zum Lösen. (この問題は解決のために容易である。)
(392) Die Frau ist *vorsichtig* beim Kauf. (その女性は買い物の際に慎重である。)
(393) Die Frau ist des Wartens *überdrüssig*. (その女性は待つことにうんざりしている。)

しかし実際には、4タイプすべての形容詞が、上記のような2価の形容詞として、よく用いられるわけではない。4種類の形容詞がどのように共通し、どのように相違するのか、調査結果を整理して分析する。

まず、4種類の形容詞はどれも、事象を項に取るものである。しかし、前章の調査結果から、これらの形容詞が本質的に性質を表す対象が、事象であるか、モノであるかという点で、形容詞I, IIとIII, IVでは異なっていることが見て取れる。

5.1.1 本質的に事象の性質を表す形容詞

前章の調査結果より、I. *schnell, langsam* と II. *leicht, schwer* の2タイプの形容詞に関しては、(390), (391)のような2価の述語的用法で形容詞が現れる事例は実際には見られなかった。それどころか、これらの形容詞はそもそもモノを表示する語句を主語とした述語的用法で用いられることが稀であることが確認された。I及びIIの形容詞は実例では大半が副詞的に用いられ、(394), (395)のように動詞句が中心となって表示する事象の性質を表している。

(394) Nach Angaben von Zeugen ist der junge Mann nicht zu *schnell* gefahren. (= (134)) <形容詞 I>

(証人の説明によれば、その若い男はスピードを出しすぎてはいなかった。)

(395) [...] dass dieses Problem *leicht* zu lösen sei. (Protokoll der Sitzung des Parlaments Landtag Brandenburg am 23.03.2011) <形容詞 II>

(この問題が簡単に解決できるということ [...])

また、I 及び II の形容詞が 1 価の述語的用法や付加語的用法で、モノを表示する語句と結びつく際に、これらの形容詞がそのモノそのものの性質を表しているとは考えにくい。I 及び II の形容詞がモノを表示する語句と結びつく場合、そのモノが参与者となるような事象が、文脈などから容易に読み取られ、形容詞はその事象の性質を表しているように解釈される。例えば (396) では、*schnell* (速い) は述語的にガトリンという人 (モノ) を表示する語句を主語に取っている。ここでは「ガトリンは速い」という述語文が表す意味が、「ガトリンの試合での走りが速い」であるということが、文脈から明らかである。そして、形容詞は意味的にはガトリンが主体として行う「走り」という事象の性質を表していると考えられる。また (397) では、*leicht* (容易い) が付加語的に *Beute* (獲物) というモノを被修飾語に取っている。ここで「容易い獲物」という名詞句は、「容易く手に入る獲物」を意味していると考えられ、形容詞は意味的には、獲物が客体として行われる「手に入れる」という事象の性質を表していると考えられる。

(396) In Brüssel lief der frühere Weltmeister in 9,77 Sekunden erneut eine Weltjahresbestzeit über 100 Meter. Gatlin ist mittlerweile wieder genauso *schnell* wie vor seiner Dopingsperre. (Die Presse, 08.09.2014) <形容詞 I>

(ブリュッセルではかつての世界記録保持者 [=ガトリン選手] が 9 秒 77 で新しく 100 メートルの今季世界最高記録で走った。ガトリンはこの間に再び、彼のドーピングによる出場停止期間以前と同じくらい速い [=速くなった] のである。)

(397) Freilaufende Hunde sind derweil eine *leichte* Beute für Wölfe, beim "Gassigehen" im Wald sollte jeder Hundebesitzer die Leinenpflicht berücksichtigen. (Luxemburger Tageblatt, 19.10.2015) <形容詞 II>

(リードを付けずに走り回る犬は、その間狼にとって容易い獲物であり、森の中で“犬を連れて出る”際には、飼い主はそれぞれ、犬のリード義務を考慮すべきである。)

一方で、これらの形容詞が 1 価の述語的用法や付加語的用法で、事象を表示する語句と結びつく際は、形容詞はその事象そのものの性質を表していると考えられる。例えば (398) では *langsam* (遅い) が付加語的に *Fahrt* (走行) という事象を被修飾語に取っているが、この時「遅い」はあくまでその行為が継続している間の「走行」の速さを表し

ているのであり、その事象の参与者である車や運転手の性質を表しているとは考えられない。(399)でも同様に、*schwer* (難しい) が表しているのは「説明する」という事象の難しさであり、その事象の参与者である説明者の性質とは考えられない。また、ここではそもそも事象の参与者が誰であるのか、つまり誰が説明をするのか、その主体となる人が具体的に想定されているかどうかも定かではない。

(398) [...] einen Parkguide, der bei *langsamer Fahrt* die Parklücken vermisst und anzeigt, ob ein Einparken möglich wäre. [...] (Niederösterreichische Nachrichten, 22.02.2011) <形容詞 I>

(遅い走行の際に駐車余地を測り、駐車が可能かどうかを示す駐車ガイド機能 [...])

(399) *Es ist so schwer, zu erklären, was hier passiert ist.* (=169) <形容詞 II>

(ここで何が起こったのかを説明するのはとても難しい。)

このように I, II の形容詞は、(396), (397) のように統語的にモノと結びつく際には、それが参与する事象に焦点が当てられる一方、(398), (399) のように統語的に事象と結びつく際には、その参与者には焦点が当てられない。このことから、I. *schnell, langsam* と II. *leicht, schwer* は、本質的に事象の性質を表す形容詞であると考えられる。統語的にモノを表示する語句と結びつくこともあるが、そのモノは事象の参与者であり、背後にある事象が読み手に無理なく想像できるものでなければならない。

なお、形容詞 I と II の違いは、事象の参与者として焦点を当てられるのが、主に主体であるか、客体であるかという点にある。前述の例では、形容詞 I の *schnell* が統語的に結びつくモノは、(396) の *Gatlin* (ガトリン: 人名) のように、事象 (ここでは「走る」) に主体として参与するものである。一方、形容詞 II の *leicht* が統語的に結びつくモノは、(397) の *Beute* (獲物) のように、事象 (ここでは「手に入れる」など) に客体として参与している。

この結果は、3.1.1 で取り上げた Vendler (1968) の英語形容詞の分類 A₃ (*fast* など)、A₄ (*easy* など) の特徴が、ドイツ語の形容詞 I (*schnell* など)、II (*leicht* など) という、同じような意味の形容詞にも当てはまることを示している。

5.1.2 本質的にはモノ (人) の性質を表す形容詞

一方で、III. *vorsichtig, leichtsinnig* と IV. *müde, satt, überdrüssig* は、I 及び II の形容詞とは異なる部分が多い。

まず、Vendler (1968) では形容詞 I の一種とされていた III に関して確認する。形容詞 I には、述語的用法で事象を表示する語句を主語以外の補足成分として取る、2 価の形容詞としての事例が見られなかった。一方、形容詞 III は (400) のような 2 価の述語的用法で形容詞が用いられる事例が見られた。また、形容詞 III も I と同様に副詞的にも

よく用いられるが、一方で、述語的に用いられることが稀であった I とは異なり、III は述語的用法での使用頻度も高い。さらに、1 価の述語的用法や付加語的用法でモノを表示する語句と結びつく際、I とは異なり、必ずしもそのモノが参与者となるような具体的な事象が文脈などから読み取れるとは限らない。例えば (401) では、形容詞 *vorsichtig* は *ich* (私は) という人 (モノ) を表示する語句を主語に取っている。ここで *vorsichtig* が表しているのはあくまで *ich* が指すシャルマという人の性質であり、その人が具体的に行う行為、例えば「通りに出ていく」を指して、それが慎重だということを意味しているとは解釈しづらい。その人が「何かを行う」ということは念頭に置いているかもしれないが、それは「通りに出ていく」以外にも「買い物をする」「誰かと話をする」など、いろいろな出来事が当てはまりうる。そして *vorsichtig* は、そのさまざまな事象に関わる際に常にその人が慎重だったということを表していると解釈できる。これらのことから、形容詞 III は形容詞 I, II とは異なり、何らかの事象を念頭に置くものの、それは必ずしも具体的である必要はなく、本質的にはモノの性質を表していると考えられる。さらに、これらが述語的に用いられる際の述語対象語は基本的に人に限られるため、より正確には、これらの形容詞は本質的に人の性質を表していると考えられる。

(400) [...] sind die Japaner vorsichtig bei grösseren Anschaffungen. (Neue Zürcher Zeitung, 23.06.2000) <形容詞 III>

(日本人は大きな買い物をする際に慎重だ。)

(401) Was bleibt, ist die Angst von Frauen, überhaupt auf die Straße zu gehen. Drei Wochen zögerte Sharma. „Ich war immer *vorsichtig* und werde es auch in Zukunft sein“, sagt sie. (=258) <形容詞 III>

(残っているのは、女性たち、特に通りに出ていくことの不安である。3 週間シャルマは躊躇した。「私は常に慎重だったし、今後もそうだろう」と彼女は言う。)

ただし、形容詞 III は、形容詞 I, II ほどではないものの、(402) のように副詞的に用いられることも少なくない。さらに、形容詞が付加語的に用いられる際には、(403) のように被修飾語に事象を表す語が現れることもある。

(402) Die Therapie hat sich in den letzten Jahren gewandelt, man geht *vorsichtiger* mit Medikamenten um. (Die Presse, 18.10.2003) <形容詞 III>

(治療法はここ数年変化しており、より注意深く薬が取り扱われる。)

(403) Da sollte man *vorsichtige* und vor allem objektive Kritik üben. (=277) <形容詞 III>

(そこで注意深く、とりわけ客観的な批判を行うべきだ。)

このような場合にも、形容詞 III は人の性質を表しているといえるのだろうか。つまり、本質的に事象の性質を表す形容詞 *schnell* が、モノ名詞と統語的に結びついて „*ein schnelles Auto*“ (速い車) というときに、*schnell* はあくまで *Auto* が参与する事象 (例えば *Fahrt* (走行)) の性質を表していると解釈されるように、本質的に人の性質を表す形容詞 *vorsichtig* が、事象名詞と統語的に結びついて „*ein vorsichtiges Fahren*“ (慎重な運転) というときに、*vorsichtig* はあくまで *Fahren* に参与する人 (例えば *Mann* (男性)) の性質を表していると解釈されるのだろうか。本稿では、付加語的ないし副詞的に事象を表す語句と結びつく形容詞であっても、形容詞 III は主体となる人の存在を念頭に置き、その人の性質を表していると解釈する。つまり、(402) は、「ある事象が存在し、それは人が薬を取り扱うという事象であり、その際にその人は慎重である」ことを意味していると捉える。これは、本質的に事象の性質を表すと考えられる形容詞 I, II でモノの背後に事象があることが、明示されていなくても読み取れるのと同様に、形容詞 III では、事象の背後に動作主がいることが読み取れるためである。というのも、形容詞 III が統語的に結びつく事象名詞は、(403) の *Kritik* (批判) など、人の行いを表すのである。

さらに、形容詞 III が現れる文では、(402), (403) のように、文の主語に代名詞 *man* が現れる例がしばしば見られる。この *man* は特定の間人を表すわけではなく、人間一般や、世間の人々を漠然と指す。つまりこのような文では、*vorsichtig* なのは誰か、と問われればあくまで「任意の誰か」に過ぎず、特定されていないが、それにもかかわらず、動作主が存在することを *man* によって明示するのが好ましいのである。このような代名詞 *man* が主語になる文は、形容詞 I, II の事例ではほとんど見られない。このようなことから、Vendler (1968) では A_3 として一つにまとめられていた *fast, careful* に関して、少なくともドイツ語では、*fast, careful* と同じような意味を持つ形容詞 *schnell, vorsichtig* は、*schnell* は事象の、*vorsichtig* は人の性質を本質的に表すという点で、異なる種類の形容詞と考えるべきだと思われる。

最後に、形容詞 IV は形容詞 I, II, III とは統語的な出現環境が大きく異なり、(404), (405) のように基本的に述語的にしか用いられない。さらに、その際の述語対象語は必ずモノ、正確には人であることから、形容詞 IV は本質的に人の性質を表していると考えられる。ただし、同じく本質的に人の性質を表している形容詞 III とは異なり、付加語的に事象名詞を修飾したり、副詞的に事象を表す動詞句と結びついたりしない。つまり、形容詞 IV は見た目の上でも、その性質を事象に当てはめることはできないようである。そもそも形容詞 III とは異なり、形容詞 IV は性質を当てはめる人が参与する事象を必ずしも念頭に置いていないのだと思われる。例えば (405) の *Helden* (英雄) のように、主語以外の補足成分は事象ではなくモノでもありうる。¹¹⁵ このことから、形容詞

¹¹⁵ ここでは形容詞 IV のすべての形容詞に共通してありうる補足成分としてモノを挙げている。*satt* については、さらに命題が主語以外の補足成分に現れうる。

IVは何らかの対象に対する人の性質（感情）を表す形容詞であり、その対象の一つとして事象がありうるのだと思われる。

(404) Aber die Schweizer sind der Diskussionen überdrüssig. (=334) <形容詞 IV>

(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)

(405) Ist das Volk der Helden überdrüssig? (=301) <形容詞 IV>

(大衆は英雄たちにうんざりしているのか?)

5.2 事象を項に取る形容詞の統語的分布

5.1に見られるように、形容詞 I, II と形容詞 III, IV は、本質的に事象の性質を表すか、人の性質を表すかという点で異なっている。さらに、形容詞 III は、本質的に人の性質を表すとしつつも、その人が動作主として参与する事象が存在することを念頭に置いて用いられる。一方で、形容詞 IV では、人が参与する事象があることは念頭に置かれていない。つまり、形容詞 III の意味機能は形容詞 I, II と IV の中間に位置する。この意味的な違いは、形容詞が現れる統語的な環境にも反映されているように思われる。

本質的に事象の性質を表す形容詞 I, II は、副詞的に用いられる事例が非常に多い。これは、事象が基本的に動詞で表されるためであると思われる。一方で、本質的に人の性質を表す形容詞 IV は、圧倒的に述語的に用いられる事例が多い。これは、人（を含むモノ）が基本的に名詞で表されるためだと思われる。そして、本質的に人の性質を表すが、その人が参与する事象の存在を常に念頭に置いていると思われる形容詞 III は、統語的な分布に極端な特徴はなく、述語的用法と副詞的用法のどちらでも比較的よく使われる。

	形容詞	述語的	付加語的	副詞的	合計
I	schnell	11	53	236	300
	langsam	20	30	250	300
II	leicht	43	41	216	300
	schwer	70	43	187	300
III	vorsichtig	82	68	150	300
	leichtsinig	87	107	106	300
IV	überdrüssig	286	14	0	300
	müde	300	0	0	300
	satt	300	0	0	300

表 26 事象を項に取る形容詞の統語的分布

もちろん、人（を含むモノ）が基本的に名詞で表されるということから考えれば、本質的に人の性質を表す形容詞 IV が統語的に人を表す名詞と結びつくのは、述語的用法の場合だけでなく、付加語的用法でもありうるはずである。しかし、それにもかかわら

ず形容詞 IV が圧倒的に述語的に用いられやすいということは、形容詞の述語的用法が主体的な人を表すのに適した用法であることを示していると思われる。

表 27 に見られるように、本質的に主体的な人の性質を表すと思われる形容詞 III, IV では、述語的用法の際の述語対象語はほぼ主体的な人に限定される。また、本質的に事象の性質を表すが、モノと結びつく場合はそれが事象に主体として参与することを求める形容詞 I でも、述語的用法の際の述語対象語は、ほぼ主体的なモノ（特に人）に限られる。形容詞 II のみ、述語的用法で主体的なモノが述語対象語になる事例がないが、これはそもそも、形容詞 II は本質的に事象の性質を表すが、モノと結びつく場合はそれが事象に客体として参与することを求めるためだと思われる。

さらに、述語的用法が主体的な人を表すのに適した用法であると思われるのと同時に、副詞的用法は事象を表すのに適した用法であると思われる。本質的に事象の性質を表す形容詞 I や、事象を念頭に人の性質を表す形容詞 III の *vorsichtig* では、副詞的に事象の性質を表す事例は多く見られる一方、述語的に述語対象語の事象の性質を表すような例はほとんど見られなかったからである。

形容詞	モノ		事象	合計
	主体	主体以外		
I	<i>schnell</i>	11	0	11
	<i>langsam</i>	16	0	20
II	<i>leicht</i>	0	1	40
	<i>schwer</i>	0	4	66
III	<i>vorsichtig</i>	81	1	0
	<i>leichtsinnig</i>	59	0	24
IV	<i>überdrüssig</i>	286	0	0
	<i>müde</i>	300	0	0
	<i>satt</i>	300	0	0

表 27 述語的用法で述語対象語になる個体の種類（モノか事象か）¹¹⁶

なお、表 27 を見ると、述語的用法は主体的な人の性質を、副詞的用法は事象の性質を表すのに適しているという考えに、形容詞 II (*leicht, schwer*) 及び形容詞 III の *leichtsinnig* はそぐわないように思われる。しかしこれは、当該の形容詞が述語的用法で事象を表す語句が述語対象語に現れやすいからであると思われる。これらの事象は共通して、*zu* 不定詞句で表されることが多い、未遂の行為である。前章の調査結果と分析が示すように、形容詞 II (*leicht, schwer*) 及び形容詞 III の *leichtsinnig* は、形容詞 I (*schnell, langsam*) 及び形容詞 III の *vorsichtig* と異なり、性質を表す事象が眼前で起こっている

¹¹⁶ *leicht* が述語的に用いられる事例は 300 例中 43 例、*leichtsinnig* が述語的に用いられる事例は 300 例中 87 例であるが、*alles* (すべて) のように個体の分類ができなかった事例 (*leicht* で 2 例、*leichtsinnig* で 4 例) を表 27 では省いている。

ことを前提とはしていない、あるいは、*leichtsinnig* に「軽率な」という性質を当てはめられる事象は、起こることが望ましくないとされるものである。そのため、事象に性質を付与する際、その時点でまさに行われている行為を表しやすい述語動詞では事象を表しにくく、述語的用法の述語対象語で事象を表しやすくなるのではないか。

一方、表 28 に見られるように、本質的に人の性質を表す形容詞 IV を除いて、形容詞が付加語的に用いられる際の被修飾語には、モノと事象のどちらも問題なく現れるようである。述語的用法と比べて、付加語的用法には、どの個体の性質を表すのに適しているという傾向はないのだと思われる。

形容詞		モノ		事象	合計
		主体	主体以外		
I	<i>schnell</i>	14	2	37	53
	<i>langsam</i>	7	1	22	30
II	<i>leicht</i>	0	26	15	41
	<i>schwer</i>	0	34	9	43
III	<i>vorsichtig</i>	8	8	52	68
	<i>leichtsinnig</i>	52	2	53	107
IV	<i>überdrüssig</i>	14	0	0	14
	<i>müde</i>	0	0	0	0
	<i>satt</i>	0	0	0	0

表 28 付加語的用法で被修飾語になる個体の種類（モノか事象か）

5.3 形容詞と事象の参与者

Vendler (1968) で指摘されているように、本質的に事象の性質を表すと考えられる形容詞 I は、(406) のように統語的に結びつく先を事象の参与者（主体）に拡大できることが、前章の調査結果で確認された。その際、形容詞が意味的に性質を表す事象は、読み手にとってある程度想像できるものである必要がある。例えば (406) ではフェルナンドが「走る」ことが速いのである。一方、形容詞 I は本来的に事象の性質を表すと考えられるが、述語的あるいは付加語的に参与者が排除された「事象」を表す語句のみを叙述あるいは修飾している事例は少ない。これらの形容詞は、大半が (407) のような副詞的用法で、すなわち参与者（主体）と事象の双方を明示する形で出現する。

(406) Fernando ist *schneller* als du. (=132) <形容詞 I>

(フェルナンドは君よりも速い。)

(407) Nach Angaben von Zeugen ist der junge Mann nicht zu *schnell* gefahren. (=134) <形容詞 I>

(証人の説明によれば、その若い男はスピードを出しすぎてはいなかった。)

このことは、形容詞 I が単に事象の性質のみを表すのではなく、事象の参与者（主体）を念頭に置いている形容詞であることを示しているのではないか。¹¹⁷ つまり、形容詞 I は「事象が速い／遅い」という意味ではなく、「主体が参与する事象に関して、その事象は速い／遅い」という意味を持つ形容詞である。事象だけ、あるいはモノだけを表す語句と統語的に結びつくこともできるが、モノ（事象の主体）と事象の両方と統語的に結びつくことが、すなわち副詞的に用いられることが望ましいのだと思われる。

もちろん事象には、参与者（主体）が含まれないものもある。しかし、形容詞 I が副詞的に用いられる際に、述語動詞が主体としての参与者の介在しない事象を表す事例は、ほぼ (408) のような „es/alles geht.“（物事が／すべてが進行する）に限られる。参与者がなく、かつ展開がある事象（例えば es regnet（雨が降る））と共起し、副詞的に性質を表す事例が見られなかったことから、形容詞 I は「主体としての参与者が存在する事象」の性質を表す形容詞であると考えられる。

(408) Plötzlich ging alles sehr *schnell*. (Der Spiegel, 10.07.2006) <形容詞 I>
(突然すべてが非常に速く進行した。)

一方、Vendler (1968) で指摘されているように、形容詞 II が (409) のように統語的に結びつく先を事象の参与者（客体）に拡大できることも、前章の調査結果で確認された。その際、形容詞が意味的に性質を表す事象は、形容詞 I と同様に、読み手にある程度想像できるものである必要がある。¹¹⁸ 例えば (409) では時代を「乗り越える」ことなどが簡単なのである。また、形容詞 II も形容詞 I と同様に、(410) のような副詞的用法で、すなわち参与者（客体）と事象の双方を明示する形で出現することが多い。

(409) Ich würde sagen, Zeiten sind nicht per se schwierig oder *leicht*. (=173) <形容詞 II>
>

(私が言いたいのは、時代とはそれ自体が難しかったり簡単だったりするのではないということだ。)

(410) Da sich ebenso *leicht* andere Beispiele aus anderen Zeitungen ([...]) finden ließen, [...]

¹¹⁷ なお、ここでいう「主体」は必ずしも動作主ではない。ここでいう主体とは、能動文の主格に立つ名詞が表示するモノであり、(i) の *Medikament*（薬）のような対象や経験主など、動作主以外も含まれる。

(i) Das *Medikament* wirkt dadurch *schneller* und *besser*. (Die Presse, 12.10.1994)
(その薬はそのためより速くかつより良く作用する。)

¹¹⁸ なお、形容詞 II は多義であり、参与する事象が単語自体、あるいは文脈などから想像されにくい場合、「容易な／難しい」という解釈よりも、「軽い／重い」という解釈のほうが優先されるものと思われる。

(i) Der Tisch ist *leicht*. (その机は軽い／？簡単だ。)

(=(198)) <形容詞 II>

(同じくらい簡単にほかの例がほかの新聞 ([…]) から見つけられるので […])

このことは、形容詞 II が形容詞 I と同様、ただ事象の性質のみを表すのではなく、事象の参与者（客体）を念頭に置いている形容詞であることを示しているのではないか。つまり、形容詞 II は「事象が容易だ／難しい」という意味ではなく、「あるモノが客体として参与する事象に関して、その事象は容易だ／難しい」という意味を持つ形容詞である。そして、事象だけ、モノだけを表す語と統語的に結びつくよりも、モノ（事象の客体）と事象の両方と統語的に結びつく副詞的用法で用いられることが望ましいのである。なおその際、事象の客体が主格で表されるよう、(410) のように受動的な文が用いられることが多い。

ただし、前掲の表 27 に見られるように、形容詞 II は形容詞 I と比べて、(411) のように事象を表示する語句だけを主語に取る述語的用法で用いられやすい。これは、形容詞 II が性質を表す対象として想定している事象には、主体があることが前提とされているということと関係があると思われる。主体があることを前提にしてはいるものの、形容詞 II が統語的に結びつく対象として共起しうるのは、事象に客体として参与するモノであり、形容詞 I とは異なり主体を表示にくい。そのため、形容詞 I が事象の性質を表す場合、その主体が必須である副詞的用法に現れやすいのに対し、形容詞 II は、客体に焦点を当てない事象や、そもそも客体のない事象の性質を表す場合には、(411) のように副詞的ではなく述語的に形容詞が用いられ、*zu* 不定詞の形で取り出された事象と結びつくのではないか。

(411) Es ist nicht leicht, über sich selbst zu sprechen. (=(187)) <形容詞 II>

(自分自身について話すのは簡単ではない。)

一方、本質的に人の性質を表すと思われる形容詞 III では、事象とその参与者の双方を明示する方法に (412) のような述語的用法と、(413) のような副詞的用法が見られる。(412) では形容詞は述語的に用いられ、主語の人が参与する事象が前置詞＋名詞句という文成分で示されている。(413) では形容詞は副詞的に用いられ、主語の人が参与する事象が述語動詞で示されている。これは、5.1、5.2 で考察したように、形容詞 III が何らかの事象を念頭に人の性質を表す形容詞であり、その事象が明らかであることもあれば、そうでないこともあるからだと思われる。つまり、形容詞 III は特に人の性質を表し、事象を具体的にしない場合には (414) のように 1 価の形容詞として述語的に用いられる。¹¹⁹ どのような事象に参与しているのかを明確に示す場合には、(412) のように補足

¹¹⁹ ただし、(414) のように形容詞 III が 1 価の形容詞として述語的に用いられている文が、必ずしも事象の具体性を排除しているとは限らない。文脈から、具体的な事象が読み取れ

成分を伴う述語的で用いられるか、(413) のように副詞的に用いられるのだろう。行為が行われているまさにその時点で「慎重である／軽率である」ことを表したいのであれば、形容詞 I のように、副詞的に用いられることが多くなるのではないか。

(412) [...] sind die Japaner vorsichtig bei grösseren Anschaffungen. (=400) <形容詞 III>
(日本人は大きな買い物の際に慎重だ。)

(413) Andrea Büchler spricht *vorsichtig*, wählt ihre Worte mit Bedacht. (=249) <形容詞 III>
(アンドレア・ビューヒュラーは注意深く話し、自分の言葉を選ぶ。)

(414) „Ich war immer *vorsichtig* und werde es auch in Zukunft sein“ (=247) <形容詞 III>
(「私は常に慎重だったし、今後もそうだろう」)

最後に、形容詞 IV は人の性質、具体的には何らかの対象に対する人の感情を表す形容詞である。この形容詞は 2 価の形容詞であり、人と、その人の感情の対象の両方を常に過不足なく表す必要があるようである。ここでの「感情の対象」は、必ずしも人が主体となって参与する事象とは限らないし、対象がモノである場合、その背後に必ずしも事象が読み込まれることもない。そもそも事象を念頭に置いていないという点で、形容詞 IV は形容詞 I, II, III とは決定的に違っている。

本稿で扱った形容詞と事象の参与者の関係について、以下の表 29 のようにまとめられる。また、これらの違いは、形容詞が副詞的に用いられる際の態の違いとなって確認される。事象に主体として参与するモノとの結びつきが強い形容詞 I, III は (415), (416) のように能動的な、客体との結びつきが強い形容詞 II は (417) のように受動的な文に現れることが多い。

(415) Plötzlich ging alles sehr *schnell*. (=408) <形容詞 I、能動文>
(突然すべてが非常に速く進行した。)

(416) Da sich ebenso *leicht* andere Beispiele aus anderen Zeitungen ([...]) finden ließen, [...] (=198) <形容詞 II、受動文>
(同じくらい簡単にほかの例がほかの新聞 ([...]) から見つけられるので [...])

(417) Andrea Büchler spricht *vorsichtig*, wählt ihre Worte mit Bedacht. (=249) <形容詞 III、能動文>
(アンドレア・ビューヒュラーは注意深く話し、自分の言葉を選ぶ。)

る場合もある。

	形容詞 I	形容詞 II	形容詞 III	形容詞 IV
形容詞が本質的に性質を表す対象	・事象	・事象	・人 (動作主)	・人 (経験者)
形容詞が表す性質の意味	・速度	・難易度	・人の内面的な状態	人の感情
形容詞が念頭に置く事象	・主体を含む事象	・主体 (と客体) を含む事象	・動作主としての主体を含む事象	—
述語対象語、被修飾語に現れる個体	・事象 ・事象に参与する主体	・事象 ・事象に参与する客体	・人 ・人が主体として参与する事象	—

表 29 形容詞と事象とその参与者の関係

5.4 形容詞と事象のアスペクト的解釈

本節では、前章の調査結果の中で、それぞれの形容詞がどのような事象と共起していたかという点についてまとめる。

形容詞と共起する事象を表示する語句の語彙的なアスペクトを確認すると、まず目立つのは、形容詞 IV が共起する事象の多くが (418) の *Diskussion* (議論) や (419) の *Leben* (人生) のような、活動ないし状態という、継続的・持続的な事象であることである。

(418) *Aber die Schweizer sind der Diskussionen überdrüssig.* (=334) <形容詞 IV、活動>

(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)

(419) *Sie sind des Lebens überdrüssig und wollen gemeinsam in den Tod springen.* (=353) <形容詞 IV、状態>

(彼らは人生にうんざりしており、一緒に死ぬつもりである。)

さらにこれらの形容詞が (420), (421) のように有界的な事象、すなわち到達あるいは達成タイプの事象を表す語句と共起すると、その事象は、反復的に解釈される。例えば (420) の *Niederlagen* (敗北) 自体は一瞬で終了する到達タイプの事象だが、(420) においては、一回限りのことではなく、何度も繰り返される事象であると解釈される。(421) の *Töten* (殺す (こと)) は時間幅と展開を持つ達成だが、殺すためにかかる時間が長くてもうんざりしているのではなく、その行為が何度も繰り返されてうんざりしているのだと解釈される。事象を表す語句と *ständig* (絶え間なく) や *immer* (いつも) が共起する事例が目立つことから、形容詞 IV は、主体が「うんざりしている」という感情を抱く対象が事象であるとき、その事象が持続的、継続的ないし反復的、すなわち無界的な事象であることを求めているのだと思われる。

(420) Firmenchef Luca di Montezemolo ist der ständigen Niederlagen längst überdrüssig.

(=(355)) <形容詞 IV、到達>

(会社の会長ルカ・ディ・モンテゼーモロは絶え間ない敗北にとっくにうんざりしている。)

(421) Alphonso Kpanda war des Tötens müde. (=(368)) <形容詞 IV、達成>

(アルフォンソ・クパンダは殺すのにうんざりしていた。)

形容詞 IV とは異なり、形容詞 I, II, III は、共起する事象を表す語句が、状態ではなく出来事（活動・到達・達成）を表すものであることが多いという点で一致している。すなわち、形容詞は事象が有界的（到達・達成）か、無界的か（活動・状態）ということよりもまず、事象に展開がある（出来事である）ということを探求している。ただし、形容詞 I, II, III が何らかの出来事を表す語句と共起する際、文全体で表される出来事がアスペクト的にどのように解釈されるかという点には、有界的相／無界的相の別が関係するようである。

まず、形容詞 I では、どのような語彙的アスペクトの語句と結びつくかを問わず、その出来事は時間幅があり、その中で事態が展開する「活動」タイプとして解釈される。例えば、*langsam* が (422) のように活動タイプの出来事と共起すると、*langsam* はそのまま「(あなたが) 話す」という出来事の動作の展開が「遅い」ことを表していると解釈される。しかし、*langsam* が (423) のように到達タイプの出来事と共起すると、*langsam* は「(彼が) 目覚める」という一瞬の状態変化に性質を当てはめているとは捉えられない。この場合の *langsam* は、その状態変化に至るまでの時間幅を想定し、そこで「(彼が) 目覚める」という出来事が「遅い速度で」展開していくことを表していると解釈される。*schnell* が到達タイプの出来事と結びつく場合にも、出来事の開始や終了という、状態が変化する局面を想定される。ただしこの場合は、出来事が「速い速度で」展開していくことを表すというより、状態が変化するまでの時間経過が「速い」ことを表し、そこから転じて「すぐに」という意味が引き出されるのではないだろうか。いずれにせよ、形容詞 I は根底では「活動」というアスペクトを優先しているのだと思われる。¹²⁰

(422) „Sprechen Sie *langsam* und deutlich.“ (=(137)) <形容詞 I、活動>

(「ゆっくりそして明瞭に話してください。」)

¹²⁰ なお、形容詞 I の *schnell* が「状態」と結びつく場合も、形容詞は「すぐに」という意味合いで解釈される。その際、状態は有界的な「到達」として再解釈される（例えば „die Beamten sind *schnell* vor Ort“ 「警察官たちは速く現場にいる」→「すぐにその場に到着」）。一方、*langsam* には状態と結びつく事例が見られなかった。この違いは、Maienborn (2003), Schäfer (2013) が指摘するように、*schnell* では事象を外側から有界的に捉えうる一方、*langsam* ではそのような解釈ができないということによるものと思われる。

(423) Neun Wochen lang lag er im Koma, wachte dann *langsam* wieder auf. (=162) <形容詞 I、到達→活動的に解釈される>

(9 週間、彼は昏睡状態にあり、それから徐々に再び意識を回復していった。)

一方、形容詞 II では、どのような語彙的アスペクトの語句と結びつくかを問わず、出来事のアスペクトは時間幅がなく事態の展開だけがある「到達」タイプとして解釈される。言い換えれば、「出来事が実現する」という点に焦点が当てられる。例えば、*schwer* が (424) のように到達タイプの出来事と共起すると、*schwer* はそのまま「(人が) イワシを捕まえる」という瞬間的な出来事の実現が「難しい」ことを表していると解釈される。しかし、*schwer* が (425) のように活動タイプの出来事と共起すると、*schwer* は「(誰かが) それを説明する」という活動の展開が「難しい」ことを表しているというよりも、そもそもその活動が成立することが「難しい」ことを表していると解釈される。つまり、*schwer* が表す性質が当てはめられるのは、「説明する」という活動が実現している状態へ変化する局面であり、その点で到達的である。

(424) Die Sardine ist *schwer* zu fangen, sie kann den Weg in die Freiheit finden, so lange das Netz noch offen ist. (=210) <形容詞 II、到達>

(イワシは捕まえ難く、網がまだ開いているうちは逃げ道を見つけてしまう。)

(425) Das ist *schwer* zu erklären. (=171) <形容詞 II、活動→到達的に解釈される>
(それは説明し難い。)

形容詞 I が「活動」の読みを、形容詞 II が「到達」の読みを優先させているのに対し、形容詞 III の 2 語には共通して優先させる読みがない。形容詞 III では *vorsichtig* が「活動」の読みを優先させている一方、*leichtsinnig* は「活動」「到達」のどちらの読みも可能であるようだ。

まず、*vorsichtig* は、状態を除いた 3 つの語彙的アスペクトの語句ともよく結びつく。しかしそれがどのような出来事の語句であれ、時間幅があり、その中で事態が展開する「活動」タイプとして解釈される。例えば、*vorsichtig* が (426) のように活動タイプの出来事と共起すると、*vorsichtig* はそのまま「(アンドレア・ビューヒラーが) 話す」という時間のかかる出来事が「慎重に」行われるという動作の方法を表していると解釈される。しかし、*vorsichtig* が (427) のように到達タイプの出来事と共起すると、*vorsichtig* は「(私が) 始める」という一瞬の状態変化に性質を当てはめているのではなく、一瞬で終わるはずのその状態変化を、時間をかけて「慎重に」行うという、動作の方法を表していると解釈できる。

(426) Andrea Büchler spricht *vorsichtig*, wählt ihre Worte mit Bedacht. (=249) <*vorsichtig*,

活動>

(アンドレア・ビューヒュラーは注意深く話し、自分の言葉を選ぶ。)

(427) *Oder soll ich ganz vorsichtig anfangen?* (=282) < *vorsichtig*, 副詞的、到達→活動的に解釈される>

(それとも私は完全に慎重に始めるべき?)

一方、*leichtsinnig* は基本的に、状態タイプと達成タイプの事象を表す語句とは結びつかない。また、出来事のアスペクトの解釈に関しても、*vorsichtig* とは異なり、「活動」と「到達」のどちらを優先するということもないようである。例えば (428) の「(人は) 運転する」は活動タイプの出来事で、*leichtsinnig* の表す性質はその出来事が展開する間ずっと当てはめられると解釈できる。つまり、運転中の振る舞いが軽率なのである。一方、(429) の「(学生が) 助言を受け入れる」は到達タイプの出来事であり、その出来事が成立する一瞬に *leichtsinnig* が表す性質が当てはめられると考えられる。「軽率に」何かを行うことは、継続的でも完結的でも、どちらもありうる。

(428) *Gerade dadurch überschätzt man sich und fährt leichtsinniger als gewöhnlich.* (=290) < *leichtsinnig*, 活動>

(まさにそれが原因で人は自分を過大評価し、普段よりも軽率に運転する。)

(429) *Viele Studenten nehmen den Rat jedoch leichtsinnig an [...]* (=253) < *leichtsinnig*, 到達>

(多くの学生はその助言をしかしながら軽率に受け入れる。)

このように、形容詞 I, II, III では、それぞれ形容詞ごとに事象（特に出来事）に優先的に求めるアスペクトが決まっており、それにより事象を表す語句の語彙的アスペクトを問わず、文全体で表される事象のアスペクト的な解釈が決定されるようである。

さらに、「うんざりした」という気持ちの対象として、共通して無界的な事象を求める形容詞 IV の 3 語にも、事象の解釈に関する対立が見られる。もっぱら „*nicht müde werden*“ (飽きずに～する) という構文で用いられる *müde* は、その時点以降も続く事象に言及する語で、その後いつまで続くのかという終了点を意識していない。例えば (430) では「(彼が) それを繰り返し言う」のは述語動詞が表す時点以降のことであり、それがいつまで続くのかは定かではない。その行為が続いている限り、主体の「彼」はそれに「うんざりしない」のである。反対に、*überdrüssig* と *satt* は述語動詞が表す時点までに続いている事象に言及する語で、それまで続いてきた事象を外から捉えている。そして、その後それが続くかという点に関しては焦点を当てていない。例えば、(431) や (432) では、*überdrüssig* や *satt* が表す感情の主体である「スイス人たち」や「彼ら」が、それまでに継続された「議論」や「争い」にうんざりしているのだと思われる。述語動

詞が表す時点での主体の感情を表し、その時点で事象は（少なくとも心理的には）区切りがつけられる。その後さらに同じ出来事が続くかどうかは、文脈によるのだと思われる。

(430) Und er wird nicht müde, es wieder und wieder zu sagen. (=307) <müde, (これから続けられる) 活動>

(そして彼は飽きもせず、それを繰り返す言う。)

(431) Aber die Schweizer sind der Diskussionen überdrüssig. (=334) <überdrüssig, (それまで続けられてきた) 活動>

(しかしスイス人たちは議論にうんざりしている。)

(432) Den ewigen Streit mit ihren Müttern haben sie gründlich satt. (=345) <satt, (それまで続けられてきた) 活動>

(彼らの母親との長期にわたる争いに、彼らは根本的にうんざりしている。)

形容詞 I~IV のそれぞれの事象の解釈に関する対立には、事象を区切りあるものとして外側の視点から捉えるか、あるいは事象の終了点を意識せず、出来事の内部の展開に目を向けるかという、「有界的／無界的」な対立が共通している。

なお、*leichtsinnig* は少々特殊な位置づけであり、事象に優先的に求めるアスペクトがはっきりしていない。ただ、*leichtsinnig* は *vorsichtig* と違い、(429) の「(学生が) 助言を受け入れる」のように到達的な事象と結びつくと、動作や行為の様態というより、それに対する評価を表しているように思える。形容詞 II (*leicht, schwer*) も同様であるが、何かを「軽率に／簡単に／難しく」行うというのは、主体が意識して行えることとは言い難い。むしろ、何らかの事象を成立させたとき、それが「軽率だった／簡単だった／難しかった」という評価を与えることができるのではないだろうか。この点で、形容詞 II と *leichtsinnig* は共通するものがある。

表 30 にあるような、形容詞が事象に求める有界性の違いと、表 29 で見た、形容詞が事象の参与者に求める主客の違いに応じて、前章の調査で確認された、表 31 のような形容詞ごとの統語的な出現環境の異なりが生じるのだと思われる。

	有界的	無界的
形容詞 I (schnell, langsam)		「活動」的な読みの優先
形容詞 II (leicht, schwer)	「到達」的な読みの優先 (評価)	
形容詞 III (vorsichtig)		「活動」的な読みの優先
形容詞 III (leichtsinnig)	「到達」的な読みの優先 (評価)	「活動」的な読みの優先
形容詞 IV (nicht müde werden)		その時点から継続する事象への言及
形容詞 IV (überdrüssig, satt)	その時点までに継続した事象への言及	

表 30 形容詞が事象に求めるアスペクト的解釈の対立

	有界的	無界的
形容詞 I (schnell, langsam)		<ul style="list-style-type: none"> 副詞的用法で用いられやすい (能動的な文、モダリティの制限なし) 述語対象語は名詞句のみ
形容詞 II (leicht, schwer)	<ul style="list-style-type: none"> 副詞的用法で用いられやすい (受動的な文、状況的可能のモダリティ) 述語対象語は名詞句と zu 不定詞句 	
形容詞 III (vorsichtig)		<ul style="list-style-type: none"> 述語対象語は名詞句のみ
形容詞 III (leichtsinnig)	<ul style="list-style-type: none"> 述語対象語は名詞句と zu 不定詞句 	
形容詞 IV (nicht müde werden)		<ul style="list-style-type: none"> 補足成分は zu 不定詞句が多い 相関詞を伴わない
形容詞 IV (überdrüssig, satt)	<ul style="list-style-type: none"> 補足成分は名詞句が多い 相関詞を伴う 	

表 31 形容詞ごとに特徴的な統語的出現環境

6 おわりに

本稿では、事象を項に取る4種類のドイツ語形容詞に関して、その統語的・意味的な出現環境をコーパス調査で確認した。そして、それぞれの形容詞の出現環境の共通点・相違点が何に起因するのかを考察した。

第1章で挙げていた、本稿の研究課題は以下のとおりである。

- ① 事象を項に取る形容詞の統語的用法（述語的、付加語的、副詞的用法）はどのように分布しているか
- ② 事象を項に取る形容詞は、事象以外の対象（事象の参与者としてのモノ）とは意味的にどのように関係するのか
- ③ 事象を項に取る形容詞は、どのようなアスペクトの事象と結びつくのか

この課題に対し、主に Vendler (1968) の英語形容詞の分類を参考に、ドイツ語で事象を項に取る形容詞として、以下の4種類を取り上げた。

I. schnell, langsam

II. leicht, schwer

III. vorsichtig, leichtsinnig

IV. überdrüssig, müde, satt

それぞれの形容詞を含む事例を大規模コーパスから収集し、上記研究課題に関して調査・分析を行った。その結果、Vendler (1968) の英語形容詞の分類が、ドイツ語形容詞にも同じように当てはまる場所が多いことが確認された。

さらに、本稿での考察結果は以下のようにまとめられる。

- ① 形容詞の統語的用法の分布に関連して

まず、形容詞 I, II は副詞的に、形容詞 IV は述語的に用いられやすい。また、形容詞 I, II が本質的には事象の性質を、形容詞 IV が本質的には人の性質を表すことから、形容詞の用法として、副詞的用法が事象の性質を表すのには適しており、述語的用法が人の性質を表すのに適していると考えられる。

- ② 事象と事象の参与者に関連して

形容詞 I, II, III は、基本的に事象とその事象に参与するモノの両方を念頭に置いており、そのどちらを表示する語句とも結びつく。ただし、形容詞 I, II は事象の性質を表すのが基本で、そこから、統語的に結びつく先を事象の参与者に拡大できるのに対し、形容詞 III では人の性質を表すのが基本で、そこから、統語的に結びつく先を事象に拡大できる。

③ 形容詞が優先する事象のアスペクトに関連して

形容詞 I は事象に「活動」的なアスペクト解釈を、形容詞 II は「到達」的なアスペクト解釈を優先させる。形容詞 III では、事象に「活動」的な解釈を求める点では共通しているが、*leichtsinnig* では「到達」的な解釈も問題なく行われる。形容詞 IV は継続的・反復的な事象を求める。形容詞 IV はさらに、述語動詞が表す時点までに継続した事象への言及をする有界的なもの (*überdrüssig, satt*) と、その時点から継続する事象への言及をする無界的なもの (*nicht müde werden*) に分かれる。

これらのことから、先行研究でも指摘されていた形容詞が現れる様々な統語的環境（例えば、形容詞 I は能動的な文に、形容詞 II は受動的な文に現れやすいなど）は、形容詞が事象に求めるアスペクトに起因するのだと考察した。

副詞的用法を含めて、事象を項に取るドイツ語形容詞の統語的な用法の分布を明らかにしたこと、また、従来、別個の研究としてそれぞれに論じられていた、Vendler (1968) による英語形容詞の分類と、Vendler (1967) による英語動詞の語彙的アスペクトを重ね合わせ、形容詞の統語的な出現環境の違いの要因を、事象のアスペクトという観点から説明したことが、本稿での主な成果である。

なお、本稿では事象を項に取る形容詞に調査対象を限ったが、*satt* には、事象だけでなく命題を項に取る用法があった。また、*gut* や *schön* など、モノ、事象、命題のどれにでも性質を当てはめるような形容詞は扱っていない。さらに、今回収集した事例には見当たらなかったが、*leichtsinnig* にも、*„Das zu glauben war sehr leichtsinnig von mir“*（それを信じたなんて私が軽率だった。）のように、事象ではなく命題を項に取るような表現が可能である。形容詞が事象を項に取ることと、命題を項に取ることの違いは、今後扱うべきであろう。

また、今回の分析では、状態の下位分類である、一時的な状態（場面レベル述語）と恒常的な属性（個体レベル述語）の違いには触れなかった。特に形容詞 III (*vorsichtig, leichtsinnig*) が述語的に用いられる際に、人が事象に動作主として関与する際の一時的な状態を表しているのか、それとも恒常的な属性を表しているのかは、どのように区別できるのだろうか。井口 (2018) によれば、形容詞構文に任意の与格が生起すると、文全体は個体レベル性が弱まり、より場面レベル的な解釈に移行する傾向にあるというが、事象を表す補足成分を任意で伴いうる形容詞 III においても、同じような傾向が見られるのかどうかなど、調査が望まれる。

参考文献

- Bach, Emmon (1981) On Time, Tense, and Aspect: An Essay in English Metaphysics. In: Cole, Peter (ed.), *Radical pragmatics*. New York: Academic Press, 63-81.
- Bickes, Gerhard (1984) *Das Adjektiv im Deutschen: Untersuchungen zur Syntax und Semantik einer Wortart*. Frankfurt am Main; New York: Peter Lang.
- Bolinger, Dwight (1967) Adjectives in English: Attribution and Predication. In: *Lingua* 18. Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1-34.
- Bolzano, Bernard (1837) *Wissenschaftslehre*. 4., Neudruck der 2. Auflage (1981). Aalen: Scientia Verlag.
- Carlson, Gregory (1977) *Reference to kinds in English*. Ph. D. dissertation. University of California, Irvine. Published 1980, New York: Garland.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. New York: Oxford University Press.
- Davidson, Donald (1967) The logical form of action sentences. In: Rescher, Nicholas (ed.), *The Logic of Decision and Action*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 81-95. Reprinted in Davidson, Donald (ed.) (1980), *Essays on Actions and Events*. Oxford: Clarendon Press, 105-122.
- Davidson, Donald (1969) The individuation of events. In: Rescher, Nicholas (ed.), *Essays in Honor of Carl G. Hempel*. Dordrecht: Reidel, 216-234. Reprinted in Davidson, Donald (ed.) (1980), *Essays on Actions and Events*. Oxford: Clarendon Press, 163-180.
- Demske-Neumann, Ulrike (1994) *Modales Passiv und tough movement: zur strukturellen Kausalität eines syntaktischen Wandels im Deutschen und Englischen*. Tübingen: Niemeyer.
- Dölling, Johannes (1999) Kopulasätze als Zustandsbeschreibungen. In: Lang, von Ewald / Geist, Ljudmila (Hrsg.) *Kopula-Prädikativ-Konstruktionen als Syntax/Semantik-Schnittstelle*. (ZAS Papers in Linguistics 14). Berlin: ZAS, 95-122.
- Duden (1988) *Duden, Stilwörterbuch*. 7., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Duden (2005) *Duden, die Grammatik: unentbehrlich für richtiges Deutsch*. 7., völlig neu erarbeitete und erweiterte Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Duden (2010) *Duden, das Stilwörterbuch*. 9., völlig neu bearbeitete Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Ehrich, Veronika (1991) Nominalisierungen. In: Stechow, Arnim von; Wunderlich, Dieter (Hrsg.), *Semantik: Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung*. Berlin: de Gruyter, 441-458.
- Eisenberg, Peter (1976) *Oberflächenstruktur und logische Struktur: Untersuchungen zur Syntax*

- und Semantik des deutschen Prädikatadjektivs*. Tübingen: Niemeyer.
- Givón, Talmy (1984) *Syntax*, Vol. I. Amsterdam: John Benjamins.
- Givón, Talmy (2001) *Syntax: a functional-typological introduction*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Geuder Wilhelm (2000) *Oriented adverbs: issues in the lexical semantics of event adverbs*. PhD thesis, Universität Tübingen.
- Haumann, Dagmar (2018) Active and passive tough-infinities: A case of long-term grammatical variation. In: Dammel, Antje / Eitelmann, Matthias / Schmuck, Mirjam (ed.), *Reorganising Grammatical Variation: Diachronic studies in the retention, redistribution and refunctionalisation of linguistic variants*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 269-296.
- Helbig, Gerhard / Buscha, Joachim (2001) *Deutsche Grammatik. ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin: Langenscheidt.
- Jackendoff, Ray (1991) Parts and boundaries. In: Levin, Beth / Pinker, Steven (ed.), *Lexical and conceptual semantics*. Cambridge, Mass: Blackwell, 9-45.
- Kim, Jaegwon (1969) Events and their descriptions: Some considerations. In: Rescher, Nicholas (ed.) *Essays in Honor of Carl G. Hempel*. Dordrecht: Reidel, 198-215.
- Kim, Jaegwon (1976) Events as property exemplifications. In: Brand, Myles / Walton, Douglas (ed.), *Action Theory. Proceedings of the Winnipeg Conference on Human Action*. Dordrecht; Boston: Reidel, 159-177.
- Kratzer, Angelika (1995) Stage-level and individual-level predicates. In: Carlson, Gregory / Pelletier, Francis (ed.), *The Generic Book*. Chicago; London: University of Chicago Press, 125-175.
- Langacker, Ronald (1991) *Concept, Image, and Symbol - The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin; New York: de Gruyter.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Larson, Richard (1998) Events and modification in nominals. In: Strolovitch, Devon / Lawson, Aaron (ed.), *Proceedings of SALT VIII*. Ithaca, NY: Cornell University, 145-168.
- Leiss, Elisabeth (1992) *Die Verbalkategorien des Deutschen*. Berlin; New York: de Gruyter.
- Leiss, Elisabeth (1994) Markiertheitszunahme als natürliches Prinzip grammatischer Organisation (am Beispiel der Verbalkategorien Aspekt, Tempus und Modus). In: Köpcke, Klaus-Michael (Hrsg.), *Funktionale Untersuchungen zur deutschen Nominal- und Verbalmorphologie*. Tübingen: Niemeyer, 149-160.
- Leiss, Elisabeth (2000) *Artikel und Aspekt*. Die grammatischen Muster von Definitheit. Berlin: de Gruyter.

- Maienborn, Claudia (2003) *Die logische Form von Kopula-Sätzen*. studia grammatica 56. Berlin: Akademie.
- Maienborn, Claudia (2007) On Davidsonian and Kimian states. In: Comorovski, Ileana, / von Heusinger, Klaus (ed.), *Existence: Semantics and Syntax*. Dordrecht: Kluwer: Springer, 107–130.
- Maienborn, Claudia (2011) 34. Event semantics. In: Maienborn, Claudia / von Heusinger, Klaus / Portner, Paul (ed.), *Semantics: an international handbook of natural language meaning*. Volume 1. Berlin; Boston: De Gruyter Mouton, 1201-1206.
- Milsark, Gary (1974) *Existential Sentences in English*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Milsark, Gary (1977) Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3, 1-29.
- Nobukuni, Moe (2013a) Adjektive, die über Ereignisse präzisieren: Eine Pilotuntersuchung zur Auswirkung von Ereignistypen auf diathetische und modale Verhältnisse anhand von Adjektiven im Deutschen. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hrsg.): *Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft: Akten des 38. Linguisten-Seminars, Hayama 2010, und des 39. Linguisten-Seminars, Kyoto 2011*. München: Iudicium, 118-133.
- Nobukuni, Moe (2013b) Zum syntaktischen Verhalten der den Genitiv oder den Akkusativ regierenden Adjektive im Deutschen – mit Fokus auf die Verwendung des Korrelats „es“ – In: *Energieia* 38, 1-16.
- Pörings, Ralf / Schmitz, Ulrich (2003) *Sprache und Sprachwissenschaft. Eine kognitiv orientierte Einführung*. 2. Auflage. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Quine, Willard van Orman (1960) *Word and Object*. Cambridge: MIT Press.
- Quirk, Randolph / Greenbaum, Sidney / Leech, Geoffrey / Svartvik, Jan (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London; Longman.
- Reis, Marga (2001) *Modalität und Modalverben im Deutschen*. Hamburg: Buske.
- Schäfer, Martin (2013) *Positions and Interpretations. German Adverbial Adjectives at the Syntax-Semantics Interface*. Berlin; Boston: de Gruyter.
- Smith, Carlota S. (1997) *The Parameter of Aspect*. Second edition. Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst (1971) Zur Valenz des Adjektivs. In: *Deutsch als Fremdsprache. Zeitschrift für Theorie und Praxis des Deutschunterrichts für Ausländer*. Nr. 2. Bd. 8, 113-117.
- Trost, Igor (2006) *Das deutsche Adjektiv. Untersuchungen zur Semantik, Komparation, Wortbildung und Syntax*. Hamburg: Helmut Buske Verlag.
- Vendler, Zeno (1967) Verbs and Times. In: Vendler, Zeno: *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press, 97-121.

- Vendler, Zeno (1968) *Adjectives and nominalizations*. The Hague; Paris: Mouton.
- Verkuyl, Henk (1993) *A theory of aspectuality: the interaction between temporal and atemporal structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Weinrich, Harald (1993) *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker (1997) *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 3. Berlin / New York: de Gruyter.
- 飯田隆 (2008) 「量化と受身」、『哲学雑誌 795』哲学会、19-43.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会.
- 井口真一 (2018) 「与格名詞句による形容詞構文の場面レベル化」、『日本独文学会叢書 131』、日本独文学会、51-62.
- 出隆 (1938) 「「もの」と「こと」によせて」、『出隆著作集 第4巻 パンセ』(1974) 勁草書房.
- 影山太郎 (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店.
- 柏端達也 (1993) 「“単なるケンブリッジ変化” と出来事の記述」、『科学哲学 26』日本科学哲学会、107-119 頁.
- 柏端達也 (1997) 『行為と出来事の存在論 デイヴィドソンの視点から』勁草書房.
- 工藤真由美 (1985) 「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」、『国文学解釈と鑑賞 3』至文堂、45-52 頁.
- 倉田剛 (2007) 「ブレンターノ学派における命題と事態」、『教養研究 14』九州国際大学、73-98 頁.
- 倉田剛 (2009) 「「現代存在論入門」のためのスケッチ (第一部)」、『教養研究 16』九州国際大学、119-171 頁.
- ドナルド・デイヴィドソン [著]、服部裕幸 / 柴田正良 [訳] (1990) 『行為と出来事』勁草書房.
- 信國萌 (2010) 「ドイツ語形容詞の意味的機能とその統語的実現」、東京外国語大学大学院修士論文 (未公刊).
- 橋本修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」、『国語学 163』、国語学会、101-112 頁.
- 廣松渉 (1979) 『もの・こと・ことば』勁草書房. / 『もの・こと・ことば』(2007) 筑摩書房.
- チャールズ・フィルモア [著]、田中春美 / 船城道雄 [訳] (1975) 『格文法の原理：言語の意味と構造』三省堂.
- 細谷行輝 / 山下仁 / 内堀大地 [編] (2016) 『冠詞の思想—関口存男著『冠詞』と意味論への招待—』三修社.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版.

吉田光演 (2001) 「第 3 章 語彙と文の意味分析」、吉田光演／保阪靖人／岡本順治／野村泰幸／小川暁夫『現代ドイツ言語学入門—生成・認知・類型のアプローチから』大修館書店、61-94 頁.

参照サイトおよびコーパス

Duden Online-Wörterbuch: <https://www.duden.de/>

IDS (Institut für Deutsche Sprache) の COSMAS II: <http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/>

DWDS (Das digitale Wörterbuch der deutschen Sprache) の Kernkorpus: <https://www.dwds.de/r>

謝辞

本論文は、東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程に在籍中ならびに、東京外国語大学大学院総合国際学研究院特別研究員としての筆者の研究成果をまとめたものです。この博士学位論文の執筆に際しては、多くの方々のご指導やご支援を賜りました。

何よりもまず、主任指導教員である東京外国語大学教授の藤縄康弘先生に心から感謝の意を表します。藤縄先生には研究活動の全般において、一方ならぬご指導ご鞭撻を賜りました。研究テーマについて、細部に至るまで丁寧かつ熱心なご指導を賜っただけでなく、研究活動が停滞していた時にも、変わらずご厚情をいただいたおかげで、本論文の完成に至りました。本当にありがとうございます。また、論文審査の主査であり、副指導教員でもある東京外国語大学教授の成田節先生には、学部時代からお世話になり、大学院で研究活動を始めてからも、研究方法や論文の書き方に関して数多くのご指導をいただきました。のみならず、本論文の提出直前にまで多大なるお力添えをいただき、感謝の念に堪えません。

論文審査委員であり、副指導教員でもある東京外国語大学教授の浦田和幸先生にも、折に触れてご指導・ご助言をいただきました。ここに深謝の意を表します。また、論文審査委員である慶應義塾大学教授の田中慎先生には、本学の院生向けのゼミナールにて多くのご指導をいただいたほか、本研究を進めるためにミュンヘンに留学した際には、殊のほかお世話になりました。同じく論文審査委員である東京外国語大学准教授の大谷直輝先生には、公開審査での質疑に加え、今後の研究に対するご助言もいただきました。論文審査委員の先生方に、改めて感謝いたします。

ドイツ留学中に多大なるご指導を賜ったミュンヘン大学教授の Elisabeth Leiss 先生と Werner Abraham 先生に深く感謝いたします。留学が実現したのは、ドイツ学術交流会 (DAAD) のおかげです。さらに、東京外国語大学のグローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」や、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム (短期派遣 EUROPA)」の支援を受けて、早くから国内外の学会で研究発表を行う機会を得られたことにも感謝しております。そして、これらの機会を通じて知り合い、論文執筆の際にはドイツ語ネイティブのインフォーマントとして協力してくれた友人たちに感謝いたします。

最後に、これまで研究発表の場や大学院のゼミナールにおいて、貴重なコメントやご助言をくださった先生方や先輩方、不甲斐ない私にいつも快く力を貸してくれた同輩や後輩の皆さんに心よりお礼申し上げます。そして、常に私を見守り、長期にわたり支えてくれた家族に、改めて感謝の意を表します。